

竜人がいるのは間違っ
ているだろうか？

Celtmyth

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その昔、平凡な女冒険者がいた。彼女はじぶんの出来る事を理解し、それでファミリーアの家族を支えてきた。戦う以外にも皆の役に立ってきた彼女。

——その彼女は竜人となって1人の小さな英雄を見守る。

かつては平凡。今は【財宝竜^{ファウゼニル}】と呼ばれる彼女の物語。

目次

かつての日々	1
第1章「白兔の叔母は竜」	
オラリオへの帰還	6
「ジャガ丸くんを3個」	17
豊穡の女主人	26
竜人の奏	38
駆け出す朝、嬉しい朝	48
彼女たちのティータイム(?)	59
15年ぶりのダンジョン	69
ならず者の街『リヴィア』	79
怪物祭	91
モンスターを追う竜	102
竜は白兔を見守る	111
第2章「竜とファミリア」	
悪戯神のホーム	124
【剣姫】との剣戟	134
「鍛冶屋へ行こう」	151
竜の剣。竜の友人。竜の、依頼相手。	163
白兔とサポーター+α	174
やっておく、知っておくは大事	184
口に込められる思い。	194

拳に込めた感情 | 205

空が見えない場所で | 218

【酒守】が遭遇したモノ | 234

時代違いの力 | 248

竜の居ぬ間に | 259

第3章 「異常事態」

【万能者】と【劍姫】、そして【財宝竜】 | 270

食糧庫へ | 282

敵は誰か？ | 294

竜の隠された力 | 308

ソレハ | 321

集う者たち | 329

二度目の。 | 347

あつけないほどの終わり方 | 363

波紋は広がる | 376

間幕
そして波紋は届く | 389

第4章 「成長の証明」

ただの、平凡な日 | 396

一週間の1日目 | 413

一週間の4日目 | 429

一週間の5日目 | 441

一週間の6日目 | 457

一週間の7日目、そして…… | 473

強敵への挑戦① | 491

強敵への挑戦②



504

強敵への挑戦③



519

強敵との決着



532

かつての日々

冒険者ってどんな人たちかって？ うーん、それなら私の昔話で説明しようかしら。

モンスターと戦い、それを乗り越えて手に入れる金銭、実力、名声。夢があると言えるがそこには危険が寄り添う。しかしそれを乗り越えるからこそ冒険と言うのだから間違いとは言えない。私もかつては冒険者としてパーティーの皆とダンジョンに臨んだわ。

えっ、私が強いかって？ その質問にはいいえとしか答えられないよ。その時の私はそれなりに実力はあったと言えるけど本当の強者にはなれなかった。

平凡、凡庸。それが私の冒険者としての評価だろうね。

それでも腐らなかつたし、ファミリアのみんなも優しかったから上にオラリオの生活も幸せだったしね。まあ主神の神様のセクハラには不満しかなかったけど。

そんな私は自分の出来る事を少しずつ伸ばして皆の役に立とうとした。冒険者とし

ては平凡だとは言ったけど実は他の面では働けたからね。そんな感じだったかパーティーの一員として重宝されたよ。まあ結局の所、器用貧乏だったわけね。でも私は満足してた。皆の役に立てて頼られて。ここまで来ると私は名声よりもファミリアの皆と一緒にいられる日々が代え難いものだったわ。

でもね、それもずっと続かなかった。

親しかったファミリアと共同で受けたあるモンスター討伐で失敗して、しかもその隙を対立していたファミリアに突かれて私のファミリアはなくなっちゃった。

強い人たちは皆死んじゃった。生き残った皆も対立していたファミリアに追い込まれて死んだか逃げちゃった。私はその時、クエストの現場にいたわ。あるとっておきを使つて生き残ったんだけど死に体だったからすぐには戻れなくてね。ようやくオラリオに帰った時にはもう帰るホームもなくなってた。

私は泣いた。泣いて、泣いて、憤った。憤つて暴れた。そりやあもう派手にね。普通はブラックリストに載る所かもしれないけど被害がギリギリグレーだったからお咎めなし。まあ暴れたらさっさとオラリオから去ったこともあるだろうけどね。

それから旅を続けたわ。傷心旅、とも言えるかもだけどね。親しいみんなはいなくなつたし、帰るホームもなくなつた。同じ場所に長くは居たくなかつたのよね。

それはともかく旅先には大きな所で魔法大国アルテナ、軍事国家ラキア王国、海洋国デイザラ、帝国、極東。一人旅にしては結構広くいろんな国々を見て回つたわ。傷心旅だつたけど色々な事を得たわ。でも今はこうしてこの村に留まつてるわけだけど。

おっと、ちよつとつまらない身の上話になつちやたわね。冒険者だつた時の話だけにすればよかつたのに。あら、心配してくれるの。でも安心して。私がこうして旅を終えたのは心の傷が癒えたから。だからそんな顔はしないで。

さて、こんな私だつたけど冒険者は多く、それ以上に冒険もある。それは誰一人として同じじゃない、その冒険者だけの物語がある。ただ、これだけは言える。

夢を抱きなさい。願いを望みなさい。頂上を目指しなさい。あなたのおじいさんが言つたように英雄にだつてなれる。覚悟があるなら行きなさい。ベル・クラネル。

私、カレン・デユラスが見守つてあげるから。

「ベルは冒険者になる為にオラリオへ向かいましたよ」

「そうかそうか」

「でも貴方が死んだと思って、と言う事を省みるなら騙した形になりますけどね」

「そう言うな。こちとて事情が事情じゃ。身を隠すしかないんじゃないよ」

「事情、ねえ」

一部はヤンデレなあの人がらつてのもあるでしょうに。まったく、この人は変わらず

なんだから。

「じゃがお前は一緒に行かなくて良かったのか？」

「私は一ヶ月後に行くことを伝えてます。この間に色々準備と用意をしようかと」

「そうか。まああつちに行つても元気にやるんじやよ。何かあればヘルメスに相談すれば良い。あやつなら力になってくれるじやろうて」

「わかりました。貴方の方も、ご無事に」

「なんか意味深な気遣いじやのう。寂しくないのか？」

「寂しい感情はありますけどセクハラがなくなる嬉しさもありますよ？」

「ぐっ……だつてしようがないじゃん。お前ぐらいしか笑つて許してくれるの」

「笑顔の私に叩かれてくれるなら許してあげますよ、今までどおり」

「すみません！」

満面の笑顔と、尻尾を見せびらかしたら極東名物・土下座をされる。懲りると思わないけどもつと節度を……と思つたけど無理な話よね。

「では私はもう行きます。また会えるその日まで」

背中の翼を広げ、そのまま羽ばたいて空へ飛ぶ。

さあ。私たちの最後の英雄の成長を見届けるために、頑張りますか。

第1章 「白兔の叔母は竜」

オラリオへの帰還

「よーやく到着ねえ」

あれから半月。伝手やなんやらを巡って思っていたより半分で準備が終わったので私は早速オラリオにやって来た。一ヶ月で来るって言った手前、ベルは驚くだろうなあ。それに。

「この街もそう変わらないんだなあ」

十五年ぶりのオラリオはデジャヴウを感じられるほどに変わり映えはない。変わっている所もあるだろうけど印象として『変わらない』と言える程度だ。

変わらないオラリオ。ここに昔馴染みがいると聞かれればいるだろうけど、今はそう積極的には会いたくないなあ。自棄になってたとは言え、派手にやったからなあ。絶対悪名が轟いてるよ。特にロキ神とフレイヤ神は……、逆に気に入られてる可能性もあるわね。

「挨拶ぐらいはしたほうがいいかしらね」

友好的な意味じゃなくて牽制的な意味で、ね。ここに住む以上は折り合いをハッキリ

させたほうがいいわね。ロキ神のところはともかく、フレイヤ神のところは下手すると彼が襲いかかってくるだろうし。そこは覚悟するしかないか。となるとギルドに顔を出したほうがいいかもね。ゼウス神の付き合いで数回顔を合わせたあの方に相談して……。

——ざわざわ……。

「ん？」

なにか騒がしいわね。事件か有名どころの冒険者が歩いてるのかしら。私、な感じじゃないわね。竜人は目立つから全身ローブで隠してるけどそれなりのデザインだから魔法使いか何かと勘違いしてるだろうし。

ざわめきが聞こえる方を見る。ちょうどどこっちに向かってくるみたいね。軽くフードをずらして様子を伺う。その先の人々が避けるように道が出来て、その中央を走る赤い影。

真つ赤に染まったベルだった。

「ブッ」

思わず吹き出た。何があったのよベル！　と云うか気づいてない。ああ、もう!!
「おわっ!!」

走り去ろうとしたベルの首根っこを掴んで足を止める。また走ると面倒だし、足は浮かせておく。あとこれ返り血？　いったい何があったのよ。

さて。

「なっ、なんですか急に」

「ベルこそ何やってるのよ」

「えっ？　その声……、カレン姉さん!？」

「姉さん呼ぶな。とにかくちよつと来なさい」

「ちよつ、ちよつと!？」

「動かないの。爪が当たるわよ」

「はい!」

急に大人しくなった。でも暴れちや爪で裂くかもしれないから都合はいいけどね。とにかく洗い流さないとね。

水でベルを洗いながら事情を聞いた。

なんでも第5階層まで潜ると中層のミノタウロスと遭遇。そいつから逃げて追い詰められた所でアイズ・ヴァレンシユタインに助けられたそうだ。間違ひなく返り血はその時に浴びたわね。で、彼女の事を担当のギルド職員に聞きに行こうとしていた途中だったと。

ベルの口から教えてもらったのはこのくらいだけ口ぶりと様子から間違ひなくそのアイズ・ヴァレンシユタインに惚れたみたいね。ああ、ベルも恋する歳なのねえ。

とりあえず血は全部洗い流したからギルドに行っても問題なし。

「よし、じゃあ一緒にギルドに行きましょうか」

「カレンおばさんも？」

「私もちよつとギルドで会っておきたい方がいるからね。ちよつと時間はかかるかもしれないけど」

「そうなの？ 終わったらカレンさんの事を神様に紹介したかったんだけど」

「ハスティア神のことね。んー、もしかしたら契約書か何かを書くかもしれないから今日中には無理ね」

「そっか……」

見るからに落ち込まないですよ。可愛いから。そんなベルを見てると慰めたくなった

から頭に手をおく。

「そんなに落ち込まないの。でも代わりにこの半月の話聞かせて」

「……うんっ！」

元気があつてよろしい。

そして私はベルと並んで半月の出来事を聞く。どこのファミリアにも入れて貰えなかった所に眷属のいなかったヘステイア神と出会い、「ヘステイア・ファミリア」を立ち上げた事。冒険者生活をスタートを始め、村では勝てなかったゴブリンを倒せて嬉しさのあまりホームに戻ってしまった事。担当アドバイザーのエイナというハーフエルフの女性からよく苦言を言われている事。

そんなベルの話の話を聞いていると私も昔の日々が蘇る。私は運良く「ゼウス・ファミリア」に入れたけど冒険者としては似たような事もあったものだ。

「とりあえず、今日第5階層に行ったことは怒られるわね」

「やつぱり、そうだよね……」

「Lv. 1の冒険者がソロで行くなら当たり前でしょ。と、言う訳で覚悟してギルドの扉を通りなさい」

「あつ、もう着いちやっただ……」

ギルドが目と鼻の先になるとベルの表情が沈む。これは、あれね。まだ話し足りない

かった顔ね。

「続きはまた今度。楽しみにしてるわよ」

「っ！ うんっ！」

「じゃあ行つてらっしゃい」

「うんっ！ 行つてきます！」

声をかけたらすぐに元気になつて。あの純粹さは変わらなくて良かったわ。オラリ才は良くも悪くも人を変える。もし悪質なファミアに入ってしまったらあの笑顔はなくなつてたかもしれないわね。その時は私が潰すけど。

おっと、あまり突っ立てるのも通行の邪魔ね。私も用を済ませないと。

ベルが通つた入口を通り、堂々と奥に進んでいく。あの方は奥に居るだろうしね。

「あの、そちらの方」

あ、やつと声をかけられた。もう少し早くかけなさいよ。

「失礼ですが冒険者の方ですか？」

「違うわよ。でもギルドに用事があるの」

「それでしたら受付の方で対応しますよ」

「受付嬢相手の用事じゃないのよ。でもちようどいいわね。ギルド組織長のロイマン氏をお願いしていいかしら。カレン・デュランって名前を伝えればいいから」

「はあ、わかりました」

キョトンとした顔だったけど報告してくれるみたいね。整った顔だったから受付嬢をしてる職員だったのかも。

とりあえず声をかけられた場所で待っていると、奥から足音が駆けて近づいて来る。

「カレン・デュラン氏ですか?!」

出てきたのは中年太りのエルフ。どうやらしつかり伝えてくれたみたいね。ならこつちも挨拶しましょうか。

「お久しぶりですロイマン・マルデイル氏」

「その声……、確かにカレン氏っ!」

「声が大きいですよ。とりあえずロイマン氏、用件をお伝えします」

「なっ、何用でしょうか?」

「私はオラリオでの私の立場を確立するため、ウラノス神への謁見を望みます」

「……はいっ!」

.....

.....

……

「久しいな。【助演者】パティスタ。今は【財宝竜】ファウニルだったな」

「そんな二つ名が新しく付けられていたのですね。いや、知りませんでした」

「ロキとフレイヤが出した名だそうだ」

「それは、光栄の至りです」

間違はなくあの二柱に気に入られたわね。気を付けよう。

ロイマン氏が拒絶していたけどウラノス神が許しを出したから問題なくこの祭壇に入ることを許された私。かつてはゼウス神、ヘラ神と共に来た場所だからちよつと懐かしいわね。そして目の前には玉座に座るウラノス神がいる。この時ばかりはフードを外し、頭の角と頬の鱗を晒して跪いている。顔を隠してちや失礼だしね。

「して、用は？」

「はい。私がこのオラリオで活動する際、その後ろ盾をウラノス神にお願いしたく参りました」

「理由は？」

「完全な中立を望まない為です」

自惚れている訳じゃないけど私は神々の好奇心の的だ。ロキ神、フレイヤ神に限らず。人間だった時も勧誘は絶えなかったから今はそれ以上の物が来るはずだ。自分を守る為には中立のギルド、その主神であるウラノス神の下にあったほうがいい。眷属になる意味じゃなく、ギルドという組織と言う名の盾が。ウラノス神は何を考えているかはわからない神だけど、全てはこの迷宮都市オラリオの平和。それだけは確か。余計な混乱を起こす事は望まない方だ。

「何が目的だ？」

「ラストヒーロー最後の英雄を見守る為」

嘘偽りのない本当の事だ。ただ【インデペンデンス・ファミリア孤 高 眷 属】は神の恩恵と違って嘘は見抜けない。だからウラノス神から見ればこの言葉が嘘か真なのか見てはわからないはず。ただ信じてもらうしかない。

「……わかった。お前の立場は私が保証しよう」

「ありがとうございます」

あつさり、じゃないわね。ここで予防線を張らないと。

「ではなにかありましたらお声をお掛けください。オラリオの危機でしたらお力をお貸しします」

つまり、それ以外の事には手を貸さない意味。でもウラノス神にとってはそれが最重

要だからそう別の事で呼ばれるなんてないでしょうけど、一応わね。

「ああ、わかった」

よし、言質取った。

「詳細はロイマンと話し合え」

「ありがとうございます。早速彼と話したいのでこの場から離れてもよろしいでしょうか？」

「かまわぬ」

「ではこれで失礼します」

頭を下げたまま立ち、背を向けて出口に向かう。結局、契約書を書く事になるだろうし今日中にベルの所に行くのは無理そうね。

「ところで」

これからの流れを組み立てると後ろのウラノス神の声が聞こえて足を止めた。

「ゼウスは息災か？」

……やっぱり確認しますか。ならこう返しましょう。

「さあ。ただ私にゼウス神の加護がないのは確かですよ」

「そうか。足を止めてしまったな。急ぐといい」

「はい」

再び足を動かし、これ以上の会話はなく祭壇から立ち去った。

「ジャガ丸くんを3個」

——「私はあなたの隣に。でも私はあなたとは違う。時も血も力もない私はあなたとは違う。今の私はあなたの隣にいられない。あなたと違う私は隣にいられない」

『この子はファミリアが遺した最後の英雄^{ラストヒーロー}じゃ。儂がやり残した使命を果たすにはこの子が必要なんじゃ』

『お姉さん、つて呼んじゃダメなの?』

——「なら今と違う私を。違う時を違う血を違う力を。今の私を捨てて違う私を。あなたの隣にいられる私になる」

『綺麗ね。紅く荒々しい色に変わったのに輝きは人を優しく包み込むように穏やか。欲しいほどに』

『許さぬウ!! この敗北、決して忘れぬ!! 何より我等が女神に無礼を働いたお前を決して許さぬウ!! 必ずお前を我等が女神の前に跪かせるぞオ!!』

——【時を捨てて命を歪める。針が狂い回り始めても私は時を捨てる。狂った時が私は欲しい】

『好きに持つていき。オモロいもん見せて貰った代金や』

『そうだよね。君は僕たちに家族を奪われたんだ。その怒り、僕が全身を持つて受け止めよう』

『その姿はどうしたんだっ！ いったいどうしてそうなった!?!』
『負けた……。だが、よき戦いであつた』

——【血を捨てて姿を歪める。親からの贈り物がなくなろうとも私は血を捨てる。親の贈り物をなくした血が私は欲しい】

『前線がやられた！ もう立て直しが利かねえ!!』

『ああ、あの人が……。』

『クソツ、これが隻眼の黒竜つて奴かよ!! 陸の王者や海の霸王なんかよりずっと力が

あるじゃねえかっ!!』

——【力を捨てて力を歪める。積み上げた全てが崩れようとも私は力を捨てる。積み上げた全てを崩してでも力が私は欲しい】

『お前が後ろにいてくれるから俺たちは安心して戦えるんだ』

『戦い以外でも色々な事でみんなを助けてくれてありがとうね』

『お前に出会えた事はこのファミリアにとってもかけがえのないことなんじゃ。じゃから誇りを持って』

『ありがと！ これお礼だよ！』

——【この三つの私を代償に、私を変えて。どうかあなたの隣にいられる私になれませうように】

『よく聞け。この魔法は強大じゃが一度きりの上に何が起こるかわからん代物じゃ。今のお前の全てが失われるかもしれん。決してこの魔法は使うではないぞ』

『あの神ヒトから聞いたぞ。私としてもその魔法は使うべきではないだろう。リスクが大きすぎる。弱くなるだけならまだよかろう。じゃが悪ければお前は怪クリリーチャー人の類になるかも

しれぬ。そうなればお前は家族を傷つけることになるだろう」

——【オヴィ・デイウズ】

.....

.....

.....

「んっ、んん……」

懐かしくて嫌な夢だった。あの魔法が発現してからベルと出会うまでの記憶を逆再生の走馬灯のように視ていた。あの一度つきりだった魔法の詠唱と共に。これって今のオラリオを知るためにロイマン氏から受け取った資料のせいかしらね。懐かしい人たちの事もあったからね。

結局、ギルドとの契約やらなんやらで昨日夜遅くまでやったら眠くなってこのギルドの一室で寝ちゃったわね。ただ寝る前に後片付けをしてハンモックを設置した辺り、さ

すが私ね。仕事部屋にハンモックは合わないけど翼と尻尾のせいでベッドやソファーじゃ眠れないし、仕方がないよね。

「起きるかあ……」

体を起こしてハンモックから降りる。寝て硬くなった体を動かしながら解していくと自分の姿を薄ら映した窓に目がいった。今はローブを脱ぎその下の防具も外したハンドメイド下着姿——よりも目立つ竜ドラゴニユート人の姿。頭の歪曲した角に背中の大きな翼、腰の尻尾から始まっていたるところにある鱗。何より、瞳孔が細くなった瞳は「変わった」と思わせた。

デミア・ヒューマン
人間とは違う、亜人。

「……後悔はしてないけどね」

後悔はしていない。でも、無力感があった。私はこの力を手に入れても帰るホームを失ったんだから。

起きて着替えや片付けしたらギルドでシャワーを借りた後で失礼した。ロイマン氏の腰が低かったのは、間違いなくウラノス神が後ろ盾になったのが原因でしょうね。で

も私が特定のファミリアに入ることでもオラリオ内の勢力図が変動する事はわかっていたようだし、逆にギルドが私を使いすぎれば余計な軋轢が生まれるしね。

それにしても太陽が西側にあるからもう昼なのね。さすがに寝すぎたわね。今ならばベルはダンジョンに言ってるだろうしホームに行ってもヘステイア神しかないでしょうね。いや待て。

「むしろ都合かしら……」

この際、一対一で話したほうがいいわね。ギルドの資料じゃまだ零細ファミリアではない。「ヘステイア・ファミリア」の情報は少なかつた。せいぜい主神のヘステイア神と唯一の眷属のベルの名前ぐらいだったし、無名ゆえの情報の少なさね。あ、なぜかヘステイア神の特徴には『ロリ巨乳』と『紐』ってあつたわね。

——きゆうう……

「……お腹すいた」

よく考えれば昨日の晩御飯以来、何も食べてなかつたわね。でもこの空き具合なら小腹に納めるぐらいでいいわね。晩御飯はしっかり食べるとして。なんか都合がいいことに屋台が並ぶ道を歩いていた訳だし、適当に見繕いましょうかね。

「すみませーん。この屋台は何を売ってますかー？」

「いらつしやーい！ませー」

声をかけると屋台の店員が返事をする。ツインテールのかわいい店員ね。やだ発育のいい所が自己主張してるけど。ん？

「お客さん、ジャガ丸くんを知らないとは外の人だね？」

「ええ、オラリオに到着したばかりよ。それでジャガ丸くんは美味しいかしら？」

「そりやあもちろん！ これ以上の言葉はいらさないよ」

「ならオリジナル味を3個よろしく。別の味は次の機会で」

「じゃあ90ヴァリス頂くよ」

「はいはい」

慣れた手で90ヴァリスを小銭入れから取り、差し出された商品と交換する。さて、次は。

「あともう一ついいかしら？」

「なんだい？」

「もしかしてだけど、あなたがベルのいるファミリアの主神、ヘステイア神？」

「えっ、もしかしてベル君の知り合い……」

あ、言葉を途中まで出して固まった。ベルが何か話したのかしら？ でもちようどよかったわね。

「私はカレン・デュラン。血の繋がりはないけどベルのおばさんみたいなものよ。それ

で時間を頂けるかしら？」

笑顔で伝えるとヘステイア神は黙って首を縦に振った。

これから話をしようと思ってヘステイア神と道から外れたわけだけど、

「どうかベル君を僕にください!!」

なんでかヘステイア神が婚約報告前のようなセリフで土下座した。最近、神々の間で土下座で頼み込むのが流行ってるのかしら？ まあそれはともかく。

「ダメ♪」

「グハッ!」

この一言でヘステイア神に大ダメージを与えた。うちのベルをそう簡単にあげないわよ。

「と、その話は別として。ヘステイア神、単刀直入にお聞きします」

「なっ、なんだい……?」

「貴女はベルの願いに力を貸してくれる?」

ヘステイア神が立ち直す前に聞いたけど彼女は聞いた途端に立ち直った。どうやら

ベルへの思いは本物みたいね。

「もちろんさ。あの子は僕の眷属こどもだ。あの子が願うなら僕はなんだってする」

そして短い言葉に強い思いを乗せてきた。ふむ、この方ならベルを預けても大丈夫そうね。まだ主神としては小さいかもしれないけど、眷属を思える女神だ。ゼウス神も眷属のためなら張り切る方だったから少し懐かしいわ。スケベだったけど。

「その言葉、信じます」

「っ！　ありがとう!!」

「でもベルをくれという話は別だからね♪」

「くっそおおおおおおおおおおっ!!!」

いやちよつと、期待してたのその反応。この女神様、ゼウス神とノリは一緒なのかし

らっ…

豊穰の女主人

「うーん、こんなものかしらね」

結局、ベルをくれと一点張りなヘステイア神は屋台のおばさんに手渡し（※文字通り）で返した。あとジャガ丸くんとやらは美味かった。次も買いに来ましよう。

そんな風に彼女と別れた私はこのオラリオでの寝床の確保に向かったわけだ。そろそろ住む場所を決めないといけなかったしね。ヘステイア神からホームの場所は聞いたからいつでもベルには会えるけど、あの子の近くに住むのはちよつと鼻屑していると見られるだろうから適度な場所にしないと。

北と西は冒険者が一番多い場所だから下手にバレると面倒ごとになるのは必至。繁華街で貴族なんかも来る南は論外。西はファミリアに加入していない人が住む住宅街だけど「ヘステイア・ファミリア」があるのもここだからここにしても離れなきやいけない。あれ、どこに行っても騒がしいんじゃない？　と思う私だった。

まあそれでも穴場は見つけられた訳だけ。

「15年前にこっさり作っておいた隠れ家が残っててよかったわ」

私がいるのはオラリオの下、地下水路の隅っこ。普通なら必要のない空き空間だっ

た。空き部屋というけど台所やシャワー室から鍛冶場や調合台とか設置してあつたし、加えて家具も出したから人が住む空間だ。こつそり私財でこの一画を購入して『製作』のアビリティイが建造に使えるか試したもののね。結局、作つてから今日まで使つたことはなかつたけど。あとは事後報告でウラノス神に伝えれば大丈夫でしょ。

それじゃ、ベルの所に行きましようかね。

「カレン姉さん！」

「誰が姉さんじゃ」

「あたっ！」

昨日ぶりの再会は教会に到着する前に果たした。ただまた姉さんと呼んだからチョップしてやった。私、あなたの倍は生きてるんだから。

「それで、どこに向かつてたの？」

「あつ、うん。豊穰の女主人つてところだよ。今朝、シルさんつて人にお弁当を買つたお返しにいくんだ」

「豊穰の女主人？」

確かミアの姐さん所だったかしら。でもあそこつて確かか。

「ベル、大丈夫なの?」

「えっ、なんで?」

「だってあそこ、多くの冒険者が来る程の人気がある酒場だし、パスタ一食にしても300ヴァリスはするわよ。店の雰囲気とベルの懐具合で心配したんだけど」

「えっ、ええ〜……」

知らなかったみたいね。まだ冒険者デビューしてから半月のベルには慣れてるはずもないし、ましてや主神が屋台のアルバイトをしているほどの零細ファミリアが気軽に来れる価格でもないしね。そしてベルはどうしようかと頭を抱えてる。仕方がないか。「私がついて行ってあげようか?」

「えっ、ほんと!」

「でないとベルが委縮しちゃうでしょ。それにあそこの料理を久々に味わいたいしね」
「やった!!」

「あつ、でもシルさんって女性みたいだからお邪魔かしら」

「えっ、いやいやいやいっ! ついてきてよカレン姉さん!」

「姉さん呼ぶな」

「あてっ!」

二度目のチョップで叩いてやった。まあ結局一緒に行くことになったわけだけど。

そしてベルと来た豊穡の女主人は昔と変わらない佇まいだった。中の喧騒も衰えることなく騒がしく、心の奥で懐かしさを感じていた。

「ベルさんっ！……と、そちらの方は？」

懐かしんでいるとベルが店員の一人に呼ばれ、そのまま私に目を向ける。この子がシルさん——年下みたいだからちゃん付でいいか——って子か。

「貴女がシルちゃんね。初めまして、ベルの知り合いです。女の子の初めての誘いが恥ずかしくて付き添いに来ました」

「って何言ってるの!？」

「あら、そうなんですか。ベルさんも可愛いですね」

「いや違いますっ！」

「はいはい」

「なんでそこは同調!？」

そんなノリのいい挨拶をした後、私たちはシルちゃんの案内でカウンター席に座る。席は運よく横並びに座れた。ここなら顔を会わせられるか。

「よお、あんたがシルのお客さんかい？ 冒険者の割には可愛い顔をしてるねえ」

「そっちは変わらず元気そうで」

「ん?」

カウンターから乗り出して女性、ミア姐さんがこちらに目を向け、そして陽気な笑顔が真面目な顔に変わった。

「あんた、帰ってきてたのかい」

「はい。この子の付き添いのついででミア姐さんの料理を久々に食べたくて」

「私の料理をついでとは言うようになったねえ」

「色々ありましたから」

「まあ食っていきな。そっちの坊やは私達に悲鳴を上げさせる程の大食漢って聞いてるからね」

「!?!」

なんか私も知らない事実にはベルが驚いてそのままシルちゃんに詰め寄った。ここから見る限り、あの子は魔性な所があるみたい。ベル、騙されないようにね。

それはともかく私は適当に注文(※1200ヴァリス)をし、その後でベルも注文(※300ヴァリス)を注文する。久々のこの味、これを食べるとオラリオにいるんだって1つの実感を得られた。ベルはまだここの雰囲気^{エール}に飲まれてるけどミア姐さんに醸造酒を出されたり、シルちゃんと話を始めたりしてたからフオローはいらなさそう

ね。

「で、だ。何しに帰ってきたんだい？」

食事中にまたミア姐さんがまた身を乗り出してきた。

「別にたいしたことはありませんよ。それに私、悪いことをしたわけじゃないですから戻ってきてても問題ないはずですよ？」

「何言ってるんだい。あれだけの事をしておいて。お前が帰ってくるなら神たちが騒がしくなるさ」

「ご安心を。先に中立の盾を手に入れましたので」

「中立……なるほど、あそこかい。確かにあそこならとりあえず安全だろうね」

中立だけでギルドの保護を得られたことを察してくれたみたい。ついでに「サービスだよ」と醸造酒エールを出された。私、嫌いなのに。酒は造れるけど。

『……おい、アレを見ろよ』

『なんだ？ おおつ、すっげえ上玉!!』

『バカ、そつちじゃねえ。エンブレムだよ』

『えっ？ げっ、【ロキ・ファミア】』

その時、私にとつては縁が深いファミアの名前が聞こえた。周囲の視線に混ざるように振り返れば懐かしい顔ぶれがいた。主神のロキ神、【勇者】フレイバーのフィン・デイルナ、

【九魔姫】^{ナイン・ヘル} のリヴェリア・リヨス・アールヴ、【重傑】^{エルガルドム} のガレス・ランドロツク……。胸の奥底の感情を押し殺し、眼差しに意思を込めず眺める。

そんな中でベルは何やらコロコロ表情を変えながら悶々としていた。確かベルを助けたアイズ・ヴァレンシュタインは【ロキ・ファミリア】だったわね。【劍姫】の二つ名で、あの金髪の子ね。確かにあんな子がベルの言つてたような出会い方だったなら惚れるのも無理はないわね。

「よっしやつ!! ダンジョン遠征お疲れさまや! みんな今日は宴やでえ!!」

陽気なロキ神が音頭を取ると同時に【ロキ・ファミリア】のメンバーは騒ぎはじめ、ジョツキとジョツキを当てる音を鳴らす。

……これ以上、眺めている理由もないわね。ここで顔を見せる必要もないんだし。私の事には気づいてみないしね。あつ、出された以上は醸造酒^{エール}飲まないと。

「そうだアイズ! あの話をしてやれよ!!」
ん、やけに大声を出すわね。

また振り返るとその持ち主は狼^{ウエアウルフ}人の青年だ。確か【凶狼】^{ヴァナルガンド}のベート・ローガね。そうとう酔いが回ってるのかしら? こんな場所だから1人2人が騒いでも気にしなくていいけど。

「アレだ! 5階層でミノタウロスに追われていたトマト野郎のことだ!」

続けて聞こえた言葉と同時にベルが震えた。それに伴って、それがベルが【剣姫】との出会いにいたのはミノタウロスだった事を思い出した。

「見ててわかるほどのひよろつちい駆け出しの冒険者^{ガキ}だったぜ!!」

そうね、ベルは駆け出し。ソロで誰にも教えられないこともなく、手探り状態の初心者^{ビギナー}。「兎みたいに身を縮めて震えてよお。顔を引きつらせて抱腹もんだったぜ!!」

笑える、か。そりゃあ上級冒険者が見れば滑稽に見えるでしょうね。

「その時にアイズがミノタウロスを細切れに倒したんだが逃げられちまってよお。返り血でトマトみてえな姿になってな!」

逃げたのは美しかった【剣姫】の姿に照れてでしょう。でも話だけなら今聞こえる笑い声のような反応なのは仕方がない。

「しっかしあんな情けねえ奴、久々に見たわ。あんな奴がいるから俺たちの品位が下がるから勘弁してほしいぜ」

「いい加減にしろベート。ミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ。謝罪はあれど酒の肴にする権利はない」

いつの間にかリヴェリアの声が聞こえた。どうやら無意識に向こうの話に集中していたみたい。ベルの様子は、まるで世界に隔絶されたかのような様子だった。

「アイズだったらそんな奴どう思う?」

「……あの状況じゃ、しようがなかったと思う」

「なんだよ、いい子ぶって。それじゃあな、俺とアイツだったらどつちをツガイにする？」

「……少なくとも、そんな事を言うベートさんはごめんです」

「んじゃアイツだったらいいのか？」

そこに【剣姫】にそんな話題をぶつけた。ただ、これは危ない。隣にいるベルのほうからガリガリと音が聞こえ始める。

「んまあありえねえよな。自分より弱くて、軟弱で救えない、気持ちだけが空振りしてる雑魚野郎なんて。そんな奴がお前の隣なんて、それこそお前が認めねえ」

ガリガリとした音がより小刻みに、そして大きく聞こえる。そろそろか。

「雑魚じゃ、アイズ・ヴァレンシユタインと釣り合うわけがねえ」

その言葉が聞こえたと同時にベルの頭に手を乗せた。感触からこれがなかったなら立って走り出してたでしょうね。

「……カレン、姉、さん」

「お代は私が立て替えておくわ。ただ店を出るときは静かにしてなさい。今の気持ち、店の外に出た時に吐き出しなさい。私はベルを諫めはしないから」

「……うん」

その返事を聞こえると私は手を放す。その後ベルは黙ってミア姐さんに頭を下げ、静かに出入り口に向かつていく。その後ろ姿に目を向けつつ、そして外に出た途端にそれは走って消えてしまった。

ベルが走り出した直後に「劍姫」がその存在に気づいたけど、もう遅かった。その間に飲んだ2人分の醸造酒は、嫌いだけど今日ほど嫌いと思える味だった。

「……追わないんですか?」

横から知らない声にかけられる。そこにはここの店員らしきエルフの少女が睨むように私を見ていた。咎めてる、のでしょよね。

「ここで気にするななんて、それこそ薄情よ。気持ちは抱えず吐き出した方がいいわ。——とところでミア姐さん」

「なんだい?」

「勝手だけど食べ残しはお持ち帰りするわ。皿は洗って返す。あと、理由を頂戴」

「ふん、それぐらいならいいさ。んじゃ、ガツンとやんな」

「ありがとう」

許可を貰えた私は静かに席を立ち、私とベルがいた席の間に手を置く。

「グニタヘイズの穴蔵、その奥底に宝物を置きましょう。ミュニアストレジャー」

詠唱し、魔法を發動するとそこにあつた食べ掛けの料理が異空間に収納される。残つたのは空になつたジョッキだけだった。

「消えた……?」

「魔法……?」

「収納しただけよ」

この様子を見ていたシルちゃんとエルフの少女。それにあつさり返答して代わりに少々の色を付けた代金を置いていく。そして歩き始め、向かつた先は「ロキ・ファミリア」の一団。その先で肩をたたいたのは、ヴァナルガンド「凶狼」。

「あ?」

彼が振り返つた瞬間、

遠慮のないピンタをその頬に当ててやった。

店に響いたパシンと言う音。それは一時の静寂を呼び寄せた。ある者は何が起こったのか頭で整理できず、ある者はとんでもない事をしたと震える。しかしそれを気にせず私は言う。

「あんたの下品な誘い文句で醸造酒エールが不味くなったお返し」

まず建前。この後に一度息を吸って言い放つ。

「それに自分たちの不手際に巻き込んだ子を笑うなんて、私が15年前に喧嘩を売った時と比べて「ロキ・ファミア」の冒険者も傲慢になったものね」

ここで顔を合わせる気はなかったのに、やっぱり私は家族に関わることは抑えられなかった。

竜人の奏

私の言葉で喧騒していた場が静寂に包まれる。でも言いたい事を言った私にとってそれは関係なく、そしてここにいる理由もない。すぐにこの場に背を向ける。

「——ッ！ おい、テメツ!!」

その背後から正気を取り戻した【凶^{ヴァナルガンド}狼^{ヴァナルガンド}】が立ち上がる気配を感じ、そこを私は彼の首筋に尾を突き立てた。この反撃で【凶^{ヴァナルガンド}狼^{ヴァナルガンド}】の動きが止まり、その隙に軽くその頬を撫でる。

ツツ……。

「ツ……!!」

「それ以上は動かないほうがいいわよ。私の鱗は鋭いから」

ま、これで絶対に動かないならもう少し紳士的なんでしょうけど。

「……カレン・デユラス」

そこで名前を呼ばれた。聞こえた方へ顔を向ければそこにはフィンがこつちを見ていた。懐かしい相手だけど、話す気はないわね。

名前を呟かれたに対し、私は返事はせずに今度こそ店を出ようとして、その出入り口

にロキ神と【剣姫】がいた。ちよつといい加減にしてほしい。でも、この方を無視するわけにもいかないわね。

「もう出るの、用件は手短にしてくださいロキ神」

「その態度、ホンマにカレンちゃんか。戻ってきてたんやな」

「昨日からです。今日は久しぶりここの味が食べたかったです。それも悪酔いした人がいたせいで気分を悪くしましたけど」

「そりゃあ悪いことしたなあ。おい、ベート縛つとけ」

ロキ神の言葉で何やら後ろが騒がしくなる。特にまだ若い女性二人分の声がノリノリだ。ついでになんか足蹴にする音も聞こえた。

「まあ後でもつとシメとくけどな」

「別にそこまで……と思いましたが私だけに対するものでもないですね」

そう言った私の目は【剣姫】を見ていた。確か彼のセクハラ的な発言は彼女に向けられたし、さつきは彼女と仲のいい娘が足蹴にしているのね。ま、彼女が一度店を出た理由に気づいた感じじゃないけど。

「相変わらず察しいいな」

「それが取り柄ですから」

「取り柄、か。——なあカレンちゃん、せっかく帰ってきたんやしウチのファミリアにこ

んか？」

「——どの口が言ってるのですか？ 私一人に半壊にさせられたくせに」

あつ、本音が出ちゃった。どうやらベルを侮辱された怒りがまだ胸の内では燃え上がってみたいね。思わずの事で口を手で覆い、周囲の様子を伺う。目を見開いて驚いている人たちが多数、苦汁を舐めたと言ってるような人たちが少数、縄で縛り縛られて固まってるのが三名だった。

「失礼。少し心が安定していません。口が過ぎました」

「いや、別に気にしとらんで。まあ寧ろホンネが聞けてよかったわ。カレンちゃんに限ってはウソかホントかわからんしな」

「その理由も気になっての勧誘ですか？」

「そりゃあそうやろ。ま、今回は諦めとくわ」

「次も受ける気はありませんよ」

「だが断る！」

そこで元気よく断られても。神様ってやっぱり个性的すぎる。でも、今はそれに呆れたせいでこっちも熱も冷めたみたい。

「とにかく、気分を変えたいのでそこを通してください」

「なんや、飲みなおしか？」

「違いますよ。でも興味があるなら喧騒が聞こえない場所にいるといいですよ」

「……ああ、なるほどな。ほな、行ってきな」

ようやくロキ神が道を開けてくれた。「劍姫」も一緒に、結局は私に何も言うことなく黙ったままだった。こつちが何者か知らないからどう対応すればいいかわからないところね。それはそれでありがたいけど。ただ他に呼び止めそうなのが1人。その彼に目を向ける。

「……………」

彼、フィンは明らかに反応を見せた。言葉を飲み込んでる。もしかしたら吐き出すかもしれない。でも、彼以上に話はしたくない。

「貴方は団長だ」

まっすぐに伝えよう。拒絶を。

「それだけよ。【勇者】」

【ロキ・ファミリア】、私の家族を奪ったファミリアの団長の貴方とはもう昔みたいなの付き合いは出来ないのよ。

その意図を込めて、私は豊穰の女主人から去った。

豊穰の女主人を出た私は摩パ天楼ベ施設ルにやって来た。この夜中、ダンジョンへ出入りする冒険者の姿はなく今は私一人だけだ。でもこの先へあの子、ベルは向かったはずだ。

あの子への侮辱は、あの子の未熟さを自覚させた。何をすべきかではなく何もかも必要だと思い知らせて、我武者羅にダンジョンへ足を走らせた。そして、強くなりたいと望む。

そんなバベルの前にある階段に腰を下ろす。

「グニタヘイズより贈り物を」

「ミニニアストレジャー」の解除式を唱えて収納していた物をここに出す。出したのは小瓶と豎琴キタラの2品。小瓶の方は酒だ。酒の神であるソーマ神の作った失敗作を味わった上で『製作』のアピリティで作り上げた、名前付けもしなかった無銘の酒。でも味は失敗作を超えた逸品だ。

そんな酒が満たされた小瓶の蓋を開け、その中身を一気に仰いだ。何度も味見をし、その上でソーマ神のような依存性を徹底的に排除した美味。今の私にとっては酔いながらも心穏やかにさせた。

「ヤッ」

一献終わると豎琴キタラーを手に取る。こっちも『製作』で作り、こっちは魔道具マジックアイテム。風の精霊の名前を賜った（シルフィード）。風を呼び、それに音色を乗せる作品だ。

「奏でるのは、叙事詩『夢見る青年』アルゴノットが丁度いいわね」

かつて「ゼウス・ファミリア」にいた私が好んでいた曲。この曲が流れれば私がいると認知されるほど有名になった。これを流せば神々や古参の冒険者と住人たちは私の存在を知るだろう。誰もが騒ぎ、だからこそ隠れて動かせないための牽制。そして、後ろのダンジョンを走るベルに送る曲。

フードを外し、シルフィードを持つ。軽く弦を撫でて調律を測り、問題がないことを確かめる。

それじゃ奏でよう。懐かしき人と神への挨拶を。最後の英雄が紡ぐ眷属の物語の開

幕を——。

「——やってやる」

そうだ、まだ足りない。あの人に追いつくにはまだ力が足りない。あの高みへと届くために、やってやる!!

|| || || || || || || ||

豊穰の女主人

|| || || || || || || ||

「……?」

喧騒を取り戻してきた店の中で私はそれを聞いた。ハープのような音色だった。誰が奏でてるのかとあたりを見渡すけど、それらしいことをしている人はいない。でもどこか懐かしさを感じさせる曲。

「ほお、懐かしい曲や。挨拶代わりか」

するとロキがそんなことを言った。ベートに足を乗せた状態で。

この曲を奏でてる人に心当たりがあるの? そう考えるとさつきまでいたあのローブの人を思い浮かべた。フードを被っていたから顔は見えない。でもあの人は見ない尻尾を持ってて、それ一本でベートを抑えていた。それだけであの人は強いとわかつ

れを払拭するにはあの女を、カレン・デユラスを打ち倒す以外に術はないのだ。

「でも、それだと貴方も落ち着かないでしょう。一度だけ、彼女とぶつかることを許すわ」

「わかりました」

機会は得た。覚悟しろ、カレン・デユラス。

駆け出す朝、嬉しい朝

シルフィードを弾き続けてすでに何度も曲を変え続けた。これで神たちがやって来ないのは風に乗る音色がどこかしこにと聞こえるようにしたからだ。でもかの女神さまは気づいた上で来ないのでしょく。

演奏は日が昇る数刻前に止めた。あまりタイミングが一緒過ぎると余計な事を勘繰られるでしょうし。その後は静かに待った。私の背後、ダンジョンの中から近づいてくる気配を。そして足音が耳に届く距離までになったところで腰を上げる。振り返り、その先の影から現れた少年——ベルにこう言った。

「お疲れさま。次も頑張りなさい」

「……うん」

その返事を口にした途端、ベルは糸が切れたように意識を落とす。つまり体の力が抜けて倒れようとした。

それを静かに受け止める。相変わらず軽い体。叩けば潰れてしまいそうな小ささ。それでも抱いた夢は純粹でまっすぐだ。この子には冒険者の素質はないのかもしれない。でも、英雄になれる可能性は大いに秘めている。

強くなりなさい。彼ら彼女らのように。

昨日の夜から一眠りをし、そして次の日を迎えた。

眠ってしまつたベルは前に教えて貰つた教会、「ヘステイア・ファミリア」のホームまで運んで上げたんだけど、外で待つていたヘステイア神には色々と質問攻めになつた。まあ唯一で愛したい眷属が血まみれで運ばれて来れば仕方がないでしょうけど。とりあえず事情を伝え、ベルを洗つたり（※ヘステイア神の介入は阻止）着替えさせたり（※同じく）してベッドに寝かせた。ただしこの後は失礼、と行くには無責任だから一泊させて貰うようにヘステイア神に伝え、承諾して貰つた。そうして一睡しようとハンモックを用意してローブを脱いだら今度は竜人の姿で質問攻めにあつた。確かヘステイア神は新参者だから知らないはずね。

それが寝る前の出来事で起きた今は地下室の台所を借りて朝食の準備中だ。もつとも、ヘステイア神と同衾していたことに驚いたベルの叫び声で起きたものだから若干寝起きは悪い。その間、ベルとヘステイア神は「ステイタス」の更新中だ。そして、私はそれを覗き見ている。

(熟練度上昇トータル381、アビリティ最高でF。まさかここまでは)

今の私は眼鏡を掛けている。これは魔道具マジックアイテム〈広目こうもく〉。この眼鏡とは別に小さなガラス玉がセットになっていて、そのガラス玉が映す光景をこの眼鏡のレンズに映し出す。そしてガラス玉はベッドの上の梁、ベルたちが「ステイタス」更新をしている場所に取り付けた。ヘステイア神の影を考えて他の場所にも設置しており、そのおかげで漏れなく覗き見れた。特に《スキル》に刻まれた言葉を。

〔憧憬リアリス・フレイゼ一途〕……〕

間違いなくレアスキル。一行目には「早熟する」とあり、他の誰よりも成長を促すスキルだと予想できる。

ただし、だからこそ面倒めんどうごとが寄ってくる。私ほどの珍奇な訳じゃないけどこれもこれで神々の好奇心を刺激されるだろうし、零細ファミリアのここじやあつという間に取られちゃうわね。私としてはどのファミリアで頑張ろうが構わないけど、神々の玩具にさせるのはいやね。でもヘステイア神もそれは十二分にわかってるはず。

広目こうもくから見る限り、今回の「ステイタス」は口頭で伝えている。私がいるせいかヒソヒソと話してる。確かに声は聞こえないけど、何を話してるのか大体察してるからね。あ、調理が終わった。その直後に広目こうもくを片付ける。

「朝食ができたわよー」

「あつ、うん！」

「おつ、おお!?」

ヘスティア神、動揺し過ぎ。でも私持参の材料で且つ無償で出した物だからガツガツ食べてくれたけど。ついでに豊穣の女主人から持ってきた食べ掛け料理も出してここで胃に納める。

「そう言えばカレンねえ——」

「(ギロリッ)」

「じゃなくて、カレンおばさんってどこに住んでるの?」

「おばさん?」

「もう三十路よ」

外見は10代のままだけど。ヘスティア神、固まったわね。

「ここでの住居は残ってた所を使ってるわ。ただ悪いけどベルには教えられないわよ」
「えつ、なんで?」

「色々と囲い込みになるから場所は秘密にした方がいいの。それにギルドで中立的な保証を貰えたから特定のファミリアや一介の店先とか住む訳にはいかないしね」

「キミ、そんなややこしいのかい?」

「確認してる限り、ドラゴニユニア竜人は私だけだし。それだけでお祭り騒ぎでしょうね」

「そっか……」

あからさまに落ち込むベル。こればかりはしょうがないからわかってね。

「ホントにキミって変わってるね。一体何があったんだい？」

「そちらも秘密です。ただ私に関する事を調べようものなら面倒ごとはやってくると思ってください」

「暗に秘密ってことだね」

「でもここで知り合つた以上、軽い付き合いはできますよ」

「そうかい。ならウチには遠慮なく来てくれ。ベル君も喜ぶからね」

「そう？」

「うんっ！」

元氣な返事。そんな純真無垢だからだから女の子はあなたに惹かれるのに。あ、ヤバい。余計な事を吹き込んだあの方を殴りたくなってきた。ん？ あっ、オーラ出た。2人が怯えてる。

「ごめんなさい。ちよつと殴りたい人の顔を思い出して」

「さっきの話でなんでそんな事をつ!？」

「色々あるんですよ。——それでベル、今日もダンジョンにはいけるかしら？」

「うん、大丈夫。僕は、強くなりたい」

こつちの方でも返事はいい返事ね。これなら大丈夫かしら。

「ならいいわ。でも今日はダンジョンに入る前に豊穰の女主人に立ち寄るわよ。食器の返却と昨日の謝罪があるしね」

「カレンおばさんも一緒？」

「そうね。そこまでは一緒にいるわ。その後は、その後で考えるわ」

「わかった。神様はどうします？」

「僕はしばらく留守にするよ」

「えっ、バイトが忙しいんですか？」

「いや、友神ゆうじんが開くパーティーに出席するのさ。久々にみんなの顔が見たくなつたからね」

「そうですか」

「へえ、小さなファミリアと言ってもドレスは持つてはいるんですね」

「いや、ないよ」

「え？ でもパーティーですよ」

「そこはしようがない。自前で何とかするよ」

……それはいかん。

私は黙って立ち、そしてヘステイア神の腕を掴んで引つ張る。

「ってなんだいっ!？」

「恥を掻きたくないならついて来てください」

「ちよっ、カレン——」

「女性の着替えに興味があるのベル？」

「いえ、問題ないです！」

「着替えてっ!？」

「それじゃ試着を始めますよ」

「試着ってなんの事だいっ!？」

その後は、ご想像にお任せします。

「昨日はご迷惑をお掛けしました!!」

騒がしい朝の教会地下室を後にしてただいま豊穡の女主人（準備中）。ただし私は入口の前で待機中である。同行してるだけでも甘いけど謝罪に関してはベル自身の問題。そばにいない方が一番だからこうしているわけだ。

ちなみに今の私は昨日のローブ姿と違って軽装の姿だ。昨日は昨日で目立ったからイメチェンね。大きな翼と尾を隠すためにマントを羽織り短パンの上に前開きのロン

グスカートを履いてるけどそれ以外は機動性を重視した戦士風だ。最も鱗があるところも見せるわけにはいかなから露出はほぼ無い。角に關しては兜を被つて角付きのデザインに誤魔化してる。加えて手ぶらじゃ怪しいからそれなりの武装も一緒だ。これで冒険者として見られるからしばらくは身を隠せる。

「カレンおばさん」

「あら、終わった？」

待つてからそう時間も経たない内にベルが店内から出てくる。あら、お弁当を貰つてるね。またシルちゃんかしら。

「うん。僕はこれからダンジョンに行くけどカレンおばさんは？」

「まだ決めてないわ。だから都市を見て回るわ。知り合い——のほとんどは会いたくないけど馴染みの店とかがどうなってるか気になるしね」

「そう。それでは夜には会える？」

「出来ないこともないけど、今朝も言ったようにそれだけで〔ヘステイア・ファミリア〕を優先して見るように見られるからダメね」

「どうしても？」

「ええ。でもベルは男の子でしょ。しばらく見ない内に成長した、そのくらい頑張りなさい」

「うんっ！ じゃあ行ってきますー！」

笑顔で私の前、豊穡の女主人の店先から走り出したベル。それを見送った私も出発、をする前に私も私で挨拶しないと。

「話は終わったかい？」

ベルと変わるように今度はミア姐さんが店内から出てきた。用件は、大体見当が付く。

「はい、ミア姐さん。それで昨日のあの後はどうなりましたか？」

「すぐにドンチャン騒ぎに戻ったさ。アンタがピンタしたあの男をダシにしてさ」

あの「凶^{ウエアナルガンド}狼」の事か。今更だけど狼^{ウエアウルフ}人だからあの傲慢さが際立ってたわね。でも、傲

慢とはいかず全体的にその気配は感じられた。おそらく、二大ファミアの団員って肩書が忘れさせてるのでしょね。

「それでロキ神は何か言い残しましたか？」

「察しがいいね。『諦める気はないからな。何が何でもお前を口説いたる』だそうだよ」

「セクハラされる未来しか浮かびませんね」

「まあ最終的に決めるのはアンタだ。ケジメは15年前で整理できてるはずだ」

ミア姐さんも大概察しがいいですよ。確かに15年前の襲撃で私は二大ファミアに対する憤怒を清算した。そのせいで向こうに未練や恨みを残したけどそれが煩わし

いとは思わない。煩わしいと思つてはいけない。

「わかりました。とりあえず当面の間は【ロキ・ファミリア】、そして【フレイヤ・ファミリア】と大きな接触は避けます」

「それだと小さいのはするつて事かい？」

「そうしないと満足しない人もいますし」

特に、この頂点に立つあの人がね。

「それがアンタが決めた事なら文句は言わないさ。ただ、無茶はもうするんじゃないよ。アンタはウチの常連なんだからね」

「……15年前の話ですよ」

「いや、アタシがそういうんだらそうさ。だから次に来る時はあの席に座るんだよ」

……ああ、なるほど。ミア姐さんなりに気を遣つてるのね。15年前でホームと眷属かぞくを失い、この力がほしい神々の中で、ここだけは安らぐ事が出来ると言つてる。

嬉しい言葉だった。

「じゃあ、次は久々にあの席で。時間はいつも通りで？」

「当たり前だろ」

「わかりました。それじゃ、また」

「ああ、行つてきな」

うん。この都市で見送ってくれる人がいるってというのは、本当に嬉しい。

彼女たちのティータイム(?)

ハツキリ言おう。ウザったい程に疲れた。

古馴染みの所に向かった訳だけど今回ばかりは自分の評価というのを忘れていた。行く先々で勧誘やら歓喜やら、そりやあもう大騒ぎ。普通に扱ってくれたのは「ゴブニユ・ファミア」ホーム本拠みつちこと三槌の鍛冶場とノームの万事屋ぐらいだった。ここ以外、足を運ぶのは控えとこう。それでも全部を見て回った私は自分で自分を褒めてやりた

い。
そんな私は気分を変えるため、生地店にいた。

「何をお探してでしょうか？」

「とりあえず手芸店に卸すのと同等の種類と量をよろしく」

「……はい？」

わかりやすい程に呆ける店員に仕入れと同等の金額を出してあげた事ですぐ動いてくれた。こつちがバトルクロス戦闘服だったからファミア規模での購入だと勘違いしてるみたいだけどその方が詮索されずにいいけどね。

私は自分が着る分は自分で繕ってる。理由は私が竜ドラゴニユート人だからの一言で済む。私以外

にいない種族だからそれ専用の服なんてあるはずもない。専用で発注する他はないけどこれまでの15年間、その大半は旅ばかりしていたもんだからそれは枷でしかない。幸い、人間の頃から裁縫もやっていたから自分自身のサイズだけを把握していればあとは自分で作る事が出来たから問題はなかった。つまり私の服は戦闘服バトルクロスを含めて自作で賄っている。たまに自分以外も作ったりするけどね。

「おつ、お待たせしました……。商品は倉庫の方に用意させました……」
「あらありがとう。じゃあこれお支払い」

出てきた店主にドサリ、ではなくドガツと音を立てる袋をカウンターに置く。あまりもの大きさに顔が引き攣っていた。その後、店員に倉庫へ案内されて商品と対面するとそりやあ山のようなようだった。普通に何人かで運び出す量だ。普通なら、だけど。

「グニタヘイズの穴蔵、その奥底に宝物を置きましょう。ミニニアストレジャー」

便利な収納魔法で商品全部を入れる。ただあまり魔法の事は広めなくなかったから案内してくれた店員には先に出てもらってから使用した。結果、私が手ぶらで出てきたのに商品が消えたもんだから大騒ぎ。そこはソクサク逃げたけど。

「うーん。買ったわねー」

あとはデザインを決めて何着か縫うだけね。ほとんどが2つ3つ前の流行だったからそろそろと思うってたしね。この際だからベルのも繕って上げようかしら？ 村を出

てそう替えの服なんてそう多くないだろうし。

「……なんだろう。ちよつと泣けてきた」

甥のような子が替えの服をあまり持つていない現実が辛い。ああは言ったけど顔見知りのよしみでもう少し構つてあげよう。そうなると他の目を上手く躲して――。

と、考え事をしたせいか周囲の気配りが疎かになっていた。この通りを走つてくる人を避けようと、背を向ける形で曲がった。ただそれは当たるか当たらないかのギリギリな距離。

スカート裾ごと尻尾を踏まれた。

「きゃんっ!!」

「うおつと!?!」

踏まれた私の悲鳴と踏んだ人の驚きの声と同時に響く。足はすぐに離れ、私はほぼ反射的に尻尾の踏まれた部分を優しく撫でる。よりもよつて先つちよ。ここつて結構敏感なのに。

「ぎ、ぎめん! 獣人の子だよね? 尻尾を……」

えっ? この声って……。

恐る恐ると後ろを振り返って見た顔は、「ロキ・ファミリア」の一級冒険者。【大切断】^{アマゾン}のテイオナ・ヒュリテ。

「あ……」

わざとらしい声を漏らしつつ視線を逸らす、フリをして周囲を確認する。そして彼女以外にも【怒蛇】^{ヨルムカンド} ティオネ・ヒュリテ、【千の妖精】^{サウザンド・エルフ} レフィーヤ・ウイリデイス、そして【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

うん、逃げよう。

「さよなら」

首を前に戻して私は一目散に走り出す。

「あつ、ちよつと待って!」

「お断り」

絶対に絡まれる。どういった理由で、までは候補があり過ぎて逆にわからない。早く遠くへ——。

「待ちやがれえ!!」

これまた粗暴な言葉が大きな声で、街路の一部と一緒に飛んできた。

さすがの私でも度肝を抜かれて足を止め、もう一度振り返る。この時、「ロキ・ファミ

リア」の少女たちは追ってくる様子はない。3人は【怒ヨルムガンド蛇】に目を向け、そしてその彼女の足元は引っぺがした街路がある。

これは、逃げたほうが面倒になるわね。

「お待たせしました」

「ええ、ありがと」

あれ以上の被害が出る前に今はカフェのテーブルに座っている。剥がした街路は大きな部分だけを戻した上で「立ち入り禁止」で区分けしておいた。こっちはあとでギルドに報告しないとイケないけど。でも本当に修繕費はどこから出すのかしら。私は勘弁よ。

「さて。お互い気分転換にあそこにしたから後腐れがないようにしましょう」

私の視線の先、円形のテーブルで私と挟むように座っているのは【怒ヨルムガンド蛇】の彼女。他の3人は先に帰っている。つまり本当に用があるのは彼女だけだ。そして今、その目は敵意に近い何かを含んでいる。

「……単刀直入に聞いわ。あなたと団長の関係は？」

「ただの顔見知り」

即答で正直に答えた。ただし今の私自身が見ている関係だけど。その結果、ヨルムガンド【怒蛇】の敵意が更に膨れ上がる。周囲の人たちが震える程に。

「ふざけてるの?」

「まさか。でも付け加えるなら『今は』って言葉ね。昔は友人の関係だった。……これ以上の事は野暮つてものだと思うけど?」

【勇者】フレイバーの個人的な事を聞いてなくても【ゼウス・ファミリア】の事は知っているはず。ただの一方的な認識だけどさすがに知ってるでしょう。

その認識は当たっていたみたいだった。この言葉に彼女は口を噤んだ。

ふむ、これじゃいけないか。

「肯定と受け取るわ。でもここで話を終わらせても後腐れになるわ。当たり障りがないものなら答えてあげるわ」

まったく、自分でも呆れるくらいにお人好しね。昔ばなしを教える義理もないのに。ただどんな感情であれ同じファミリアにいる人を心配するのは、私も一緒だからね。

「昨日、団長が思い詰めていた。いつもはそんな私たちの手前、そんな顔は見せなかった」

「そう」

「リヴェリアやガレス、他にも昔からいる団員たちに聞いたけど15年前の事以外は教えてくれなかった」

「そう」

「でもその話も他でも知ることのできる程度だった。アンタには同情はする。でもあの団長があそこまで思い詰めるアンタは、団長の何？」

「勇者」の何か、か。私にとつては元・友人の現・顔見知り。それ以上もそれ以下でもない。彼が私をどう思ってるなんては私を知るはずもない。いや、あえて知らないフリをしているのでしょね。

「勇者」^{ブレイバー}と初めて会ったのは彼がLv. 3、私がLv. 2の頃だったわ」

だから私は、彼との出会いを話す事にした。

「二級冒険者と言っても彼は小人族^{バルウム}。それを認められない連中は多かった。その時も同レベルの冒険者に絡まれてたわ」

「もしかして、助けたの？」

「まさか。寧ろ彼は上手くあしらってたわ。私はただその流れを見ていただけ。ただ縁つてものはあるものでね。最初の用事でポーションの箱買いに来たら彼も同じ用事でね。そして私たちが望む分の在庫がなかった。だからその場で交渉になったの」

血の気の多い冒険者同士にしては平和的だったわね。そう言う意味じゃ彼で良かった

たのかもね。

「その時の交渉は互いに最低限の線引きをした上で残りを平等に上乘せする形で終わってたわ。でもお互いに話しやすくね。それから会うことも増えていった。しかも冒険者として違う方向を進む同士でね。自分の成長の為に相談もしたわ。私は彼から戦い方を中心に、彼は私に仲間たちとの付き合い方とかをね」

最後の言葉で【怒蛇】^{ヨルムカンド}は驚いて目が大きくなる。気付いたみたいね。当時の私との都合が今の【勇者】^{フレイバー}が团长として必要な能力を持つに至った事を。

「その日々がどうだったかと聞かれたなら私は充実して楽しかったと答えるでしょう。でも今はどうかかって聞かれたなら、会いたくないと答えるわ」

「……ッ。どうして」

「彼は【ロキ・ファミア】の一員として私がいたファミアを潰し、私は【ゼウス・ファミア】の一員として彼がいたファミアを襲撃した。私はその日に怒りや怨みにケリを付けた。でも彼は違う」

「違うって、何がよ」

「残念だけどそれを私が口に出来ないわ。彼が思い詰めている原因の私でここで断言するのは、個人としての彼の為にはならないわ」

「……彼って!」

パンツ！ と【怒蛇】ヨルムガンドはテーブルを叩いた。片手の拳で、それで真つ二つに割つてしまふ。でも私は動じなかつた。

「それだけ団長の事を知つてるクセに、なんでそんな態度を——」
「嫉妬を当たり散らすんじゃないわよ」

「ッ！」

「同じ女だから貴女が彼にどんな感情を抱いてるのか見てればわかるわ」

彼女が彼に恋慕していることはわかる。その事について言えることはあるけど、そしてたらどうなるかしらね？ 後腐れなくつて言つたけどそれは叶わないようだから言つた方がいいか。

「私を認められないならそれでもいい。でも彼の気持ちを癒したいならその行動をしなさい。不満があるなら受け止めるわ。会わせたいなら力づくでも引つ張りなさい。考え抜いて彼に出来ることを貴女がしなさい」

これはお節介じやない。ただ辛辣に、そして乱暴に背中を押そうとしてるだけだ。これで転び倒れたつて気にしない。でも、彼を想いながら止まる女性なら諦めた方がいい。真つすぐな道を進む彼に僅かの寄り道をさせるくらいに。

この私の思い通りに彼女が受け取つたかはわからない。でもこの言葉で一触即発の雰囲気静寂の物に変わっていく。

「……私は団長を元気にしたい。その気持ちは誰よりもあるわ」

「そう」

「その為ならアンタを引き摺り出す事だってやるわ。覚悟しておきなさい」

「ええ、その時は逃げずに迎えるわ」

「……ありがと」

「お礼を言われる事なんてしてないわ」

と、言ってもその時は素直に会ってあげると言ってるようなものだしね。

ヨルムガント
【怒蛇】はそれ以上は何も言わず、背を向けて行ってしまった。

「……ここぐらいは私が払って置くか」

割れたテーブルとティーカップを見下ろして、すぐに空を見上げる。

まったく、【おうじや猛者】以外に引つ張り出そうとする人が増えちゃったわね。

15年ぶりのダンジョン

ホント、オラリオは出会いの街ね。私の場合は再会の街が濃厚かしら？
【怒蛇】ヨルムガンドとはこれから色々付き合う羽目になるでしょうね。それが【勇者】ブレイバーと繋がる、か。

「でも……」

彼が私に近づこうとしても私はその距離を取る。私の中じゃ彼が最も遠ざけたい存在だ。【勇者】ブレイバーが、なぜ私が彼を遠ざけたいかその理由に気付かない内は。

「こういうのを、女心は複雑と言うのかしら？」

自分にそんな繊細な物があつたのね。でもオラリオにいる以上、この問題もついて回るから覚悟はしておいた方がいい。背負うもの、また増えちやつたわね。

そんな気持ちだつたせいかな、私はダンジョンに足を踏み入れていた。

「グニタヘイズより贈り物を」

取り出したのは一本の剣。蛇腹剣（ヘガリア）。かつてゼウス神が『漢が夢見るロマン武器じゃあ！』と、【ゼウス・ファミリア】の男どもにせがまれて製作しちやつた剣だ。分離する刀身を細くも頑丈な鎖で繋ぎ、柄に巻き取りのギミックを付ける事で近・中距離に対応する武器。剣に戻す機能と頑丈さが難しかったけどこうして形になっている。

そして。

「ほいつ」

『グギャ!?!』

ダンジョンの影にいたコボルトを一閃。ガリアはその形状たる特性を存分に振って斬り裂く。そしてガリアを引つ張り剣の形に戻った直後、コボルトの魔石が飛んでくる。

「よつと」

それをキャッチしすぎさま「ミニニアストレジャー」に仕舞い込む。とりあえずこうした方が回収が楽だから便利よね。最も、私のように器用のアビリティが高いか熟練の腕がないと使えないけどね。

「ほいほいつと」

『ギャツ!』

『ギャグ!?!』

うーん。少し流れ作業だけどうした方が気分も変わるでしょう。それにダンジョンの空気を思い出すのにはいい機会だし、ちよつとした小遣い稼ぎにもなる。ついでに1日中は身を隠して落ち着きたい。

「久しぶりのダンジョン探検、スタートー」

テンション上がらないわね。

アイアム・ガネーシャ

『おい、あれってロリ神か？』

『いや、あのロリ巨乳はヘステイアだろ』

『でもロリ巨乳って貧乏ファミアリアだったろ。ジャガ丸くんの屋台でマスコットやってるくらい』

『ならあの格好の理由、わかるなら言ってみろよ』

『いや、理由って言ってもな……』

『ホントに、なんでドレスを着てるんだ？』

うん、ボクだってそれはよくわからないんだけど。でも今はそれよりも目の前の料理だ！　ここで食べとかなないと次なんて遠い日になる！

「何やってるのよあんな……」

「むぐっ」

「この声は……。」

「へファイトス！」

「元気そうで何より……なんだけど聞いていいかしら？」

「わかってるよ。この格好の事だろう？」

「まだどこからか借りたの？」

「違う！ そんなことに使うなら自前で何とかするさ！ このドレスは押し付けられたんだよ」

ボクが神の宴へ行くことを彼女、ドラゴニユート竜人くんはそのことを知るやドレスの試着や仕立てに付き合わされた。脱がされ計らわれ着せられ、それを何度も繰り返して今来ているドレスでここに来るように厳命された。ボク、神様だよな？ それにしても巻尺で測る時、遠慮なしに締めて来て苦しかったな。特に胸が。

と、目の前にいるへファイトスに教えた。

「彼女、本当に帰ってきていたのね」

「あれ、へファイトスはある子と知り合いかい？」

「知り合いでもあるけど彼女はかなりの有名なよ。本人から聞いてないの？」

「聞いてないよ。何かあるのかい？」

「あるにはあるけど……今はやめておくわ。話すなら後でしてあげる」

「そうかい。それは後で聞きたいけど、実は——」

「そろそろ私のことに気づいて欲しただけだね」

「えっ？ あつ、フレイヤ」

へファイトスの影から彼女が姿を現した。途端、周りの男神たちがざわつき始める。

相変わらずだなあ……。

「すぐそこで会ってね、一緒に回ってたのよ」

「そうかい。でもボク、君のことは苦手なんだよね」

「私はあなたのそう言うところは好きよ。ところでさつき興味深い話をしてみたいだ

けど」

ドラッグユニット
「竜 人くんのことかい。そのくらいならいいけど——」

「ファイターんっ！ フレイヤー！ んでドチビーツ!!」

フレイヤよりも大っ嫌いなロキキがいるわけだけど。ん、でもさつきの声、いつもより

不機嫌だった気が。

「なんでドレスなんぞ着て来てんのやつ！ せつかくそんなもん買えんようなドチビを

笑いに来たっつーのに！」

ウゼエえっ!! ろくな理由じゃねえ!!

「フンツ、それは残念だったね!! まあ不本意だけど最初はロキが予想した通りだったさ!! でもお節介な子がいたおかげでこの通りだよ!」

「マジかいっ! いったどこの子やねん! お前みたいな貧乏な神にそんな気前のいい事する子は!?!」

「カレン・デュラスだそうよロキ」

「なんやてっ!?! つーことはこれってカレンちゃんの力作!?!」

「ああ、そう言えば練習用に作っていたそうだよ。まあボクに合わせて手直ししてくれただけだね」

「畜生っ! 羨ましすぎやでドチビ!!」

ウゼエ!! ホントにウゼエ!!

結局、ヘファイトスに頼み事を伝えられたのはしばらくロキとの口論をした後だった。

||
||
||
||
||
||
||
||

ダンジョン内

|| || || || || || || ||

「くちゅつ」

くしやみ？　そこまで寒い場所じゃないはずなんだけど。噂されてるのかしら？

『ギヤウツ！』

『ブギヤツ！』

その間にもガリアでモンスターを倒していく。大きな巨体のミノタウロスだと一撃じゃ切り伏せられなかったけど切り刻んで刺したり魔石を抜き取ったりしたから問題なかった。ただアルミラージを殺すのはちよつと躊躇った。だってベルみたいだもん。そんな事があったけどしっかり魔石とドロップアイテムを回収する。普通に歩いていきながらも前に足を出し、奥へ奥へ、下へ下へ進んでいく。

そうして進んで既に16階層、つまり中層まで潜っていた。今更だけどここの姿になってから中層まで、と言うよりダンジョンに入ったのは初めてだった。外でも戦う事はあったけどモンスターは繁殖で弱体化してるし、そう争いごとと呼べるものは少なかった。もつとも、その『少なかった』は私の存在を知る出会いでもあったけど。

と、そうこうしている内に17階層まで降りて来ていた。

「『嘆きの大壁』のある階層ね」

懐かしい思い出が蘇る。初めての迷宮モンスター・レックスの孤王の挑戦。ソロで挑戦するかつての眷属かぞく。苦戦した苦い感触。倒した時の達成感。

「いや、懐かしんでもしょうがないわね」

かつてはソロで通ろうとは思わなかった階層。そもそも中層すらソロで通ろうとは15年前の私は思わなかった。私のスタイルもあつたしね。

でも、今はこの階層を進む。次の階層を目指して進む。これは挑戦ですらないでしょうね。自分の力を過小評価しているわけじゃないしね。モンスターがでなくなつた大通路を進んでいく。ソロだと広すぎる静かな空間に足音だけを響かせて。

そして大通路の出口に広い空間が見えてきた。そこへ一步を踏み出せばその広大さと長大さを目の当たりにする。この大きさはある一匹のモンスター主のための空間。なら客人として礼儀は示さないよ。

手に握つたガリアを「ミュニアストレジャー」にしまい、次の武器を取り出す。

刀身4M、柄1M。見た目に相応しい超重量。銘は「ヘルグム」。巨殺属性を持つ

特殊武装の大剣だ。竜ドラゴニユート人の私でも油断したら振り回される得物を肩に乗せた。

……バキリ。

けたたましい咆哮が産声の代わりだった。絶対的な存在である主張を持って周囲に畏怖を与える。お前たちとは違うと、本能に恐怖を与える声。その声には私は。

「……特に怖くないわね」

どうやら竜ドラゴニユート人の本能か、もしくは三大クエストの一角とやり合った経験か。どっちにしても私にとってゴライアスはそう強い存在とは思えなかった。少し残念なのかしら？

ならず者の街『リヴィア』

「フウ……、ハッ!!」

『ガアツ!』

ヒルグムの一刀がゴライアスの腕を始めて斬り落とす。この刀身、そして巨殺属性がなければ両断は可能だった。今の今までしなかったのは私がこの得物をまだ手足のように使いこなせてないからだ。もつとも、振り回すだけでも使える人は限られてしまうのだけれども。

振り下ろしたヒルグムの重量を上手く流しバランスを保つ。ただそれでも剣先は床を走り、削る。それでも勢いが衰えないのはこの武器の重さを表していた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

腕を斬り落とされたゴライアスの咆哮が響く。しかし威嚇ではなく怒りの声だ。倒され、しかし復活するとは言え剣で腕を斬り落とされるなんて今までにないでしょう。

そしてゴライアスはまだ残る片腕が迫る。向かってくる巨拳に対しヒルグムを盾にする。大剣が巨拳を、受け止める。

「ぐうっ!」

さすがに巨人の拳は重く、床の上の足が沈む。ただし、それでも体は悲鳴をあげる程でもない。確かに重いけど、この体が耐えられない程ではなかった。

「……ホント、変わったんだなあ」

ドラゴンユニット

竜人の凄まじさを直に感じさせた。その実感を抱いたまま、圧してくる巨拳を振り払う。

『オオツ!!』

ゴライアスの拳を振り払う。それは払えた技術はもちろん、それを可能とする怪力があつてだと向こうも気付いていた。

「悪いけど、トドメと行きましようか」

すぐに前を駆け、翼を広げて飛ぶ。ゴライアスの懐へ入り込み、顔の前で止まる。そして、

「首、頂戴する」

躊躇う事もなく、その首を両断した。

「カツ、カカカカ、カレンツ!!」

「そんなに驚かないでもらえるかしらポールス」

ゴライアスを討伐し、その先にあるのは安全階層の18階層。水晶と自然が満ちる『アンダーリゾート迷宮の楽園』。ここには冒険者たちが独自に作り上げた闇市『リヴィア』があり、そしてそれを実質でトップにいるのが目の前にいるボールスなんだけど……。

「いやだつてオメエ、15年間も音沙汰がなかったんだぜ。そんな奴が目の前に現れて、お久しぶりー、なんて挨拶かまされたらビックリするだろうが」

「それだけ？ やましい事はない？」

「……ちよつとお前の借りを返さなくていいかなつて思つてた」
「覚えているならまだいいわよ」

15年前まで色々と手を貸して上げたからね。鍛冶師を目指していた時しかり、このリヴィアしかりね。

「で、なんの用なんだ？」

「帰つてきたのはいいんだけど地上にいると懐かしい再会と一緒に面倒事がよく寄つて来るのよ。それを避けて潜つてきたの」

「そうかい。じゃあついでに色々と物資を分けてくれねえか？ 持つてる分でもいいから」

「いいわよ。大体冒険者50人分が遠征するくらいはあるわよ」

「十分すぎるぜえ……」

「それじゃあ交渉と行きましようか。どうせこつちで売る時はぼったくり価格なんだからある程度は色をつけなさいよ」

「わかっているよ。ならこつちでやろうぜ」

「ええ」

まあ、ホントは80人分ほどあるんだけど。

リヴィアの街中、ボールスの後ろに続いて進んでいく。前と町並みは変わってる、のは当たり前か。334代目になるそうだし。途中、ガラの悪い冒険者に絡まれたりしたけどボールスがシメてたから問題はなかったけど。でも絡みに来た全員が全員、ボールスに耳打ちされた直後顔を青くして逃げるように去っていったのは腑に落ちない。

そんな中で私はふと街の外に大きなカーゴがある事を見つけた。描かれてるエンブレムは「ガネーシャ・ファミリア」モンスターファイリアの象のマーク。

「ねえボールス、もしかして怪物祭の季節なの？」

「ああ。もうあと3日つてところだ。リヴィアの連中もその為に地上に行く予定だ」

「貴方も行くつもり？」

「行きてえのは山々なんだがここを空けるとモンスター共に荒らされちゃうからな。俺は留守番だ」

「賭けに負けたの？ それとも借金？」

「賭けだよ賭け。つーかなんで真っ先にそれなんだよ?」

「ならず者の街のトップがそうなるなんて、それぐらいでしょ
るせえ」

あらあら、これは大負けしたみたいね。

それにしても怪物祭か。行ってみようかしらね。

|| || || || || || || ||

Hφαしστo s
ヘイフアイトス

|| || || || || || || ||

「ヘステイア、一ついいかしら?」

「なんだい? あつ、今更やらないはなしだぞ!」

「そんな事は言わないわよ。聞きたいのはカレンの事よ」

ヘステイアの頼み事、彼女の眷属こどもの為に武器を作る事を受けた以上は鍛冶師スミスとして今更やめるなんて事はしないわよ。でもだからこそ彼女の事が気になるの。

と、思つて聞いてみたけどそう深く付き合つてる訳じゃないみたいね。ただ眷属の子

が顔見知りだったから自然とヘステイアとも知り合ったってことか。

「ところで貴方の事だから彼女の二つ名は知らないでしょう?」

「二つ名? つまり彼女はL.V. 2以上の冒険者って事かい」

「そう。今の二つ名は【ファヴニル財宝竜】、その前は【パーテイスタッフ助演者】だったの。前の二つ名は他の眷属ことどもたちを戦闘から生活面までサポートまで支えていた事で付いたのよ」

「それって、冒険者とサポーターを兼任したって事かい?」

「正解、と言いたいけど彼女はサポーターを兼任した訳じゃないの」

「はへ?」

なんともトボけた顔ね。いつものことか。

「ヘステイア。このファミリアに所属する鍛冶師スミスたちがどういった存在かは知ってるわね?」

「もちろんだよ。鍛冶師と発展アビリティ『鍛冶』を獲得した上級鍛冶師ハイ・スミスたちが所属するファミリアだよ」

「そう。そして『鍛冶』を取得した上級鍛冶師ハイ・スミスは武器・防具に属性を付与する事が可能。でも同時にそこまでと言う事よ」

「えっ?」

まあよく知らないならこの反応は当たり前か。でも彼女の凄さを知ったなら納得す

るでしょう。

「彼女はレア中のレア、『製作』の発展アビリティを唯一獲得した子なの」

「『製作』？ 何かを作り上げるアビリティかい？」

「その通りだけどその通りでもない。『製作』は製作なの」

「いやだから何かを作るアビリティだろ？」

「なんでも作るのよ。『鍛冶』の武器、『調合』の薬剤、『神秘』の魔道具。マジックアイテム 作ろうと思え

ばどんなものでもね」

「ええっ!? それってありえないか!?!」

「それが出来ちゃうのよ。その力があつたからこそ彼女は仲間たちのサポート、武器の整備や即席の薬剤の調合で支えていたのよ」

ただ私もかつてはヘスティアが今声に出したようにありえないと思っていた。でも彼女の作り上げた剣を見た時、『鍛冶』だけじゃありえないとひと目でわかった。あの時の剣はまさにあらゆる分野をまとめ上げた総合作品。武器としては私には及ばなかったけど私にも作れないでしょう。

「ヘファイトス、もしかして自分のファミリアに入って欲しいと思ってる？」

「え、なんで？」

「なんだかそんな顔をしていたよ」

あらやだ。そんな顔をしてたかしら？ でも。

「確かに欲しいと聞かれれば欲しいと答えるわ。恐らくけど彼女は私やここにいる鍛冶師には見えていない物が見えてるかもしれない。そんな彼女と話ができれば更なる高みに登れるでしょう」

「勧誘するのかい？」

「難しいでしょうね。彼女、ロキやフレイヤにも目を付けられてるから」

「うわっ、あの2柱にかい……」

「でもだからって彼女たちも強引には引き込めないの。なにせ15年前、カレン1人に自分たちのファミリアを襲撃されて一時期2大ファミリアとしての立場が危ぶまれたこともあったからね」

「ええっ!？」

あつ、そう言えばヘステイアこの事は知らなかったわね。なんかブツブツ呟き始めたけど彼女がどんな子なのか知って混乱してるってところかしら。ん、『ベル君がいるからちよつとは……』って聞こえたけど、なんのこと？

つと、ちよつと話込んだわね。

「ヘステイア、この話はここまでにして武器を作るわよ」

「おおっ、そうだったね。ボクもすっかり手伝うからよろしく頼むよ」

「はいはい」

さて、始めましょうか。

|||||

リヴァイア

|||||

「はい。これで取引は成立」

「クソツタレ！」

私とボールスの名前が書かれた証文を挟んでお互いに真逆の声をあげた。

「なによ、ちゃんとした交渉の結果よ。ちゃんとやったとおり色をつけて貰ったけど」

「その色がもう七色ぐらいじゃねえか！ お前の事だからどうせその物資もお手製なん
だろ!! もつと安くいいいだろうが」

確かに、全部私のお手製よ。その点じゃ価格も安上がりなのは正しい。でもね。

「品質は地上の一級品と遜色なし」

「うっ」

「しかも未使用で新品同様」

「ぐっ」

「しかもセツトにして価格は地上より割引」

「ぐうう……」

「そこに色を付けたわけだけど、その分は貴方に貸した金額に小鳥の餌代程度のはずだ
けど？」

「……すみません。俺のワガママでした。この温情に感謝します」

「うん、それでいいわよ」

頭を垂れるポールスに笑顔で応える私。まあ要するに、「これであんたの借金をチャ
ラに上げてあげるんよ？ しないなら、わかるわよね？」と言ったわけである。

「それじゃ物資は倉庫に置いていくわね」

「ああ。ただ門番がいるから俺も行く」

「そう、それならよろしく」

「ところでこの後はどうするんだ？ 地上に戻るのか？」

「この先の『大樹の迷宮』の19階層から24階層を回るつもりよ。物資がなくなつたか
らその穴を埋める素材を集めようと思うの。でも怪物祭には行こうと思ってるから
それまでには切り上げるつもりよ」

「即座に補給たあ、そこは相変わらずだな」

「まあ癪ね。昔は、1つないだけで命を落とすような状況もあつたからね」

でもそうならないように私は頑張つて動いていた。その甲斐あつてダンジョンに潜つた仲間たちが命を落としたことなんてなかつた。でも、やっぱりあの時はいくらあつても足りないとい何度も思つた。何度も後悔し、長く泣いて――。

「おい」

「えっ」

「何ボーツとしてんだ」

「あつ、ああゴメン」

いけないいけない。またやっちゃつた。

「それじゃあ行きましょう」

「そうしてくれ。――あとな」

「ん、なに？」

「俺はあんたが生きてくれた事、これでも嬉しかつたんだぜ。それだけは知つてくれ」

……あら、気を使つてくれたのかしら。そうよね。私は生きてる。そして生きてやる
ことがまだあるんだから悲しんでるわけにはいかないわよね。

「ありがとう」

「るせえ、さつさと行くぞ」

「はいはい」

再会するのもいいものね。

怪物祭

『大樹の迷宮』での素材集めはかなりの大成果となった。これでリヴィアに卸した分と生地店で使ったお金が回収出来た。その代わり三日ほどはソロでダンジョンに潜り続ける形になったけど。特に危険な事はなかったけど、顔を見せなかったからベルが心配してないかしら？ でもあの子もダンジョンに潜ってる事だから登っていくときに会うかも知れないわね。

「と、思ってた訳だけ……」

結局、遭遇する事なく地上に出てきた。と言うかこれに関しては私の失念ね。今日は怪物祭の当日だったことを忘れてたわ。いや、ベルの事だからそっちよりもダンジョンに潜ってくる可能性が高いはずよね。それで今日すれ違わないのはまだ入ってなかったか誰かに誘われてる可能性が。

「……探すか」

そうしよう。うん、そうしよう。あつ、なぜかダンジョンに潜ろうとしてた冒険者たちが道を開けてくれたから行きやすいわね。

|| || || || || || || ||

とある喫茶店

|| || || || || || || ||

「よおー、待たせたかフレイヤ?」

「少し前に来たばかりよ、ロキ」

その少しで店中の子供らを魅了しとる癖に。アイズは……、うん大丈夫やな。同性でも魅了するのが『美の女神』フレイヤや。ちよつと心配しとつたが、取り込まれる事がなくてよかつたわ。まあ『綺麗』だとか『美人』だとか、そう言った感情はあつたやろうな。

「それで隣の彼女はいつ紹介してくれるのかしら?」

「そーいや初対面やったな。ウチのアイズや。紹介ならこれぐらいでいいやろ。アイズ、挨拶したれ」

「……初めまして」

「可愛いわね。貴方が惚れ込むのもわかるわ」

「せやろ」

でもあげへんで。アイズたんは「ロキ・ファミリア」のアイズたんやからな。

「今日はせっかく怪物祭モンスターフェアや。この後にめいっばいアイズたんとラブラブデートを堪能するんじや。まあそーでもしとかんとダンジョンに潜つてしまふからな。誰かが気を抜いてやらんと休みもせん。——そんな訳やから素直に聞くで。何をやる気や？」

「あら、なんの事かしら？」

想定内の回答やな。素直に自分の口から言う気はない、と。

「とぼけるなや。珍しく神の宴に顔を出すわ、さりげなくウチから情報を聞き出そうとするわ。何かを企んでると思うやろ」

「まさか、企んでないわよ」

ここう返すか。どうせそれは嘘やろうが、コイツがここういった行動に出る理由は……。

「男か」

この言葉に、フレイヤは笑った。どうやら正解やな。相変わらず男癖の悪い女神やな。

「つまりどこぞのファミリアの子供を気に入ったわけか。ったくこの色ボケ女神め」

「それは心外ね。ちゃんと分別はあるわよ？」

「どの口が言うねん。で、その目に止まったのはどんなヤツや？ それくらい聞いてもいいやろ」

「そうね……。強くはないわ。貴方や私のファミリアの子と比べてもまだとても頼りない。少しの事でも傷ついて簡単に泣いてしまう、そんな子。でも綺麗だった。透き通っていた。あの子は私が今まで見たこともない色をしていたわ」

ほお、フレイヤでも見たことのない色なあ。

「見つけたのは本当に偶然。あの時もこんな風に……」

あん？ どないした。急に話を止めて？

「ごめんなさい、急用ができたわ」

「はあ!？」

なんや急に。言葉通り急に用が出来たのかい！

なんてツツコミが言える暇なんてなく、席から立ったフレイヤは店を出ようとする。ちよつと気に食わんな。ならウチからも一言。

「——ならカレンちゃんはウチがオトしとくけどいいんか？」

ウチがこう言うのと急ぎ足だったフレイヤの足が止まり、こつちに顔を向けた。

——ブルッ!

今、背筋に悪寒が。まるで狙われた……ああ、ロキ神とフレイヤ神が私の争奪で宣戦布告でもした所かしら。勘弁して欲しいけど。

さて、怪物祭の中心のここに来たけど、思った通りの熱気ね。あと相変わらずジャガ丸くんは美味しかった。昔なら血の気の多いのは闘技場へ、穏やかなのは屋台巡りをしたでしょうね。フィリア祭が始まったのは5年前。私も風の噂で聞いただけだった。それにしても、これって何か裏事情がある気がするわね。ギルドが、あのウラノス神のいるギルドが主催してる以上はね。

「……………え……………んって人……………してるん……………」

「うー……………ちよ……………」

あら、この声。

その声が聞こえた方に目を向ければベルとヘステイア神、そしてメガネのハーフエルフの少女がいた。最初の声はベルだったけど、次に聞こえた女性の声は彼女ね。せっかく見つけたんだし声を掛けておきましょうか。

ん？ ヘステイア神がハーフエルフの彼女の前に出てきた？

「アドバイザー君、君は自分の立場を利用してベル君に色目を使ってる、なんてしてないだろうね？」

「こ、公私の区別はつけているつもりですが……」

……うん、そう言うのね。

「——なーにを言ってるんですかー、ヘスティア神？」

「うへっ!?!」

急ぎ足忍び足でヘスティア神の後ろを取り、静かに両肩に手を置いて耳元で囁く。するとヘスティア神はビックリと驚いた。

「カカカカレンくんっ!」

「あつ、カレン姉さん」

「違う」

「あいたつ」

また姉さんって呼ぶベルにチョップしとく。全く、いつになったらおばさんが定着してくれるのかしら。

「貴女は？」

「初めまして。カレン・デュラスよ。ベルのおばさんみたいって思ってくれればいいわ」

「カレン・デュラス……」

ん、この反応……。私の事はギルド内じゃ聞いてるかもね。まあ彼女からその件を聞かれない限りは言わなくていいわね。

「初めまして。ベル君のアドバイザーをさせて頂いていますエイナ・チュールと言います」

「そうかしこまらなくていいわ。——それはそれとして、ヘスティア神。彼女になーにを言つてたんですか？」

もう一度聞きつつ、震えが止まらない肩から手を離すとヘスティア神はすぐに離れた。

「特に深い意味はないんだよ！ やつぱり主神として色々気を配りたいなあゝつて」

「そうですか。でも私の耳には何やら釘を刺したように聞こえました」

「えええつと、それは……。ベル君逃げるよ！」

「えつ、か、神様!？」

「それじゃアカレン君！ またね!!」

「ああつ、ちよつと——っ!!」

あつ、逃げた。でもまだ話は……。

「ん?」

逃げる2人の背中、ヘスティア神が背負つてる荷物が目に入った。かなり小さめで物が入つてるようには見えなかった。大きさから大体、ナイフが1本入つてるくらい

……。ああ、なるほど。

「ベルの力になってくれたのね」

「しょーがない、この件と今日のデートぐらいは許してあげましょうか。」

「あの……」

「ああ、ごめんなさいね。エイナちゃん、でいいかしら？」

「はい、構いません。それで貴方がベル君の叔母ということですけど……」

「見ての通り血の繋がりはないわ。でもエイナちゃんが聞きたいのはそこじゃないわね。私があの子に特別扱いしないかってことでしょ？」

「聞いてた通り、察しがよろしいですね」

「どんな話かしらね、それ」

でもエイナちゃんの懸念はわかるわね。私は一応、ウラノス神を後ろ盾にこの街にいるからギルドの一員って見方もある。そんな私が一個人を鼻負するのは中立の立場であるギルドとしては問題よね。

「その線引きはしつかりしてるつもり、とは言つてあげたいけどある程度の手助けはしたいと思ってるわ」

「そうですか」

「あら、なんだか嬉しそうね。エイナちゃんもベルの事が心配なのかしら？」

「はい。ベル君は色々危なっかしいので」

それはわかるわね。

「ならお互いに見守りましょう。私は私で、エイナちゃんはエイナちゃんで」

「はい」

「あつ、ついでに変な虫が来てないか教えて頂戴。ベルに近づいてくる子は一度、顔を会わせたいから」

「そ、そうですか……」

あれ、エイナちゃんが引いてる。ちよつと怖い顔でもしてたかしら？

「つたく、あいつらはなにやっつてんだ！」

「愚痴は後だ！ さっさと人を回すぞ！」

あら、何か騒がしいわね。あれは……【ガネーシャ・ファミリア】の団員かしら？

なんだか慌ててるけど。

「すみません、何かあったんですか？」

騒いでる彼らにエイナちゃんが聞きに行ったわね。ギルド員として異常があれば気になるわよね。そうね、私も横から聞いてみましょう。

「ああ、西ゲートにいた何人か腰を抜かしてへたり込んだようにぶつ倒れたらしい。あそこはモンスターの監視が必要だからな。何人かこっちから代わりを出すところだ」

「西ゲート……」

彼らの話を聞いた途端、エイナちゃんの顔に緊張の色が出てきた。これは、胸騒ぎがすると言う類の顔だ。

それにしても……。

「腰を抜かしたように、ね」

その胸騒ぎ、あながち間違いないわね。おそらく、あの女神が動いてる。これはちよっど行って見たほうがいいわね。

モンスターを追う竜

「ガネーシャ・ファミリア」の団員から話を聞いて気になった私は西ゲート付近へ向かい、地下へと侵入した。でもそれが間違이었다。

それからしばらくしてモンスターが脱走した事を知り、ここにいたせいであつてそれが遅れてしまった。ただここにいたおかげでこの事を知れたとも言えるけど。でもこの様子ならあの方はもういないでしょう。だったら……。

「失礼します」

「おう、俺がガネーシャだ!!」

「相変わらずですね」

「むっ? おおつ、お前はカレンではないか!! 入団希望か?」

「違います」

私はファミリアの団員たちの目を掻い潜り、地下から上階へ。最上部の観覧席にいたガネーシャ神の所にやって来た。この方の事だから借りを作つても他のファミリアの助けでモンスターの討伐を命じてる筈。でも私はあえてガネーシャ神に伺いを立てる事にした。

「私も手を貸します。が、地上からの救援に出なかったのはこれからの事を考えてです」
「ん、どういう事だ？」

「ガネーシャ神を信用してお答えします。私はスキルによって主神がなくなるとも「ステイタス」を維持しています。今回の件が解決したのち、協力してください。貸しを作る中で私だけは異例になるからです」

「なんと、そのようなスキルを……！」

「他言はしないで下さい」

「もちろんだ！ お前の信頼を裏切らないと誓おう！ そしてお前にも脱走したモンスター討伐を依頼する！ これはお前指名の緊急冒険者依頼だ！」

「私はもう冒険者ではないんですけど、とにかく受諾します。それでは」

「ああ、頼んだ!!」

ガネーシャ神の言葉を受け取ると同時に背中中の翼で上へ昇る。闘技場の内部とは言葉、観客の目は中央のショーに釘付けで私に気づいた気配はなかった。

高く飛び上がると脱走したモンスターの姿を探す。まずは耳を澄まし騒ぎが起きている方向を探し、

それが東であることを突き止める。すぐにそっちの方角へ移動する。するとその姿を見つけた。

「【劍姫】 じゃない」

「え？」

闘技場を囲む柱の1本に彼女がいた。ロキ神も討伐に協力したみたいね。

「まあいいわ。貴女は自分が届くところでもいいわね」

「何を——」

「お先に」

会話もほどほどに、翼を羽ばたかせて移動をする。その最中に両手に双剣を握り、目の前のモンスターを十字に斬った。

『ガアアアア……』

悲鳴と共に消滅し、魔石が出現する。折角だからこの魔石は回収しておく。このまま続けて2体目、3体目を倒す。それほど多くは脱走してないみたいだから【劍姫】と一緒になればすぐでしょう。

そう思っていたら地面に揺れを感じ、別の場所で大きな音が聞こえた。

「あれ……？」

この揺れと音が脱走したモンスターの仕業なら、ありえないと私は直感でそう思った。

目の前でその巨体を堂々と見せる顔のない蛇のモンスターは手ごわい相手だ。さつきテイオネさんに様子を見て詠唱を始めてとは言われたがテイオネさんとテイオナさんの打撃が通じない相手に少し気圧されてしまった。しかもモンスターは怒り狂ってお二人に襲いかかっている。それでいて軽やかに周囲を飛び回ってその攻撃を避けるお二人はすごい。

この状況の停滞が私にとっては詠唱の時間。すぐに口ずさむ。

「解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり」

使う魔法は「アルクス・レイ」。自動追尾の単射魔法。そしてすぐに出せる短文詠唱の魔法だ。出力は控えめだけどその分、高速戦闘に対応できる。それにモンスターはお二人の攻撃にかかりつきりでこっちに気づいていないから狙いも十分に定められる。

突き出した片手の先に山吹色の魔法円マジックサークルが展開しながら魔法が構築されていく。

「狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢」!!」

最後の韻が終わった。魔法名を唱える前に魔力が集まる。

その直後、モンスターが私を見た。

「——え」

思ってもみなかった反応に声が漏れると同時に、私の心臓は悪寒とともに打ち震えた。

なんで急に私を見たのか、退避をしているお二人が視界の隅に残る中で、『魔力』に反応したと直感した。

この間、私の思考は外の時間より遅く動いていた。いや、逆に早く動いていた。でなければここまで冷静に直感を得ることは出来なかった。ただそれが体を動かす力を、凍り付かせていた。後になって私に向かって黄緑の触手が伸びてきている事を。このままなら私を叩き付け貫いただろう。

でも、そうにはならなかった。

「グニタヘイズより贈り物を」

この言葉を聞いた直後、目の前に壁が降ってきて私を守ってくれた。その後に見たのは綺麗な紅い鱗を持つ尻尾だった。

間一髪っ！ ギリギリでタワーシールドを狙い通りに出せたわ。足りない速度は私
が上から押し付けてなんとかなったわね。途中、持っていた双剣をしまわず捨ててきた
けど後で回収するなり諦めるなりするしかないわね。

「千の妖精」ちゃん！

「はっ、はい!」

「無事ね。ならこの盾を壁代わりにしときなさい!!」

彼女が無事なのを確認すると目の前のモンスターを見上げる。すると先端部分をもたげるとその頭部からいくつもの線走らせ、そして咲いた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

モンスターの咆哮が轟く。何枚もの花卉の中心からさらに開く巨大な口は禍々しささえあつた。

「蛇じゃなくて花?」

「驚愕する【大切断】^{アマゾン}の言う通り、これは蛇のモンスターではなくて食人花のモンス

ター。そしてその口は真つ直ぐにこちらを向けていた。さつき【千の妖精】^{サウザンド・エルフ}ちゃん魔法を發動させようとした所で反応したところを見る限り、このモンスターは魔力に反応し、そして仕留め損なつた獲物を諦めてない。

「でも植物ならっ」

このモンスターに適しているであろう武器——一本の斧を手取る。ただし形状はバトルアックス、フエリグアックス戦斧よりも伐採斧そのものだ。属性なんてものはないが、それに目を瞑る程の物を持つ。それは。

「はっ!!」

迫ってきていたモンスターの首をこの斧で両断する。その一刀は手際のいい伐採のようだった。

この斧は「ビーンスターク・ブレイク」。草木に対して最高の切れ味を持つ武器だ。属性頼りに限らない武器開発の一環で製作し、樹木の構造を理解した上で作り上げた武器。ただしそれ以外のものに対しては普通の戦バトルアックス斧以下のナマクラでしかないけどね。

でも、この相手には十分すぎる。

「レファイアー!」

「アイズさん!」

そこに【剣姫】が現れた。この騒ぎじゃこつちを優先するのは当たり前か。でも。

「脱走したモンスターは?」

「それは、まだ……」

でしようね。こいつが今もつとも危険ですぐにでも討伐しなければならない相手だ。ただしここに戦力が集まるのは些か危ない。と思っっている内に更に三体!

「【ロキ・ファミア】の4人!! ここは任せて大丈夫!」

聞いた彼女たちは何を言ってるんだって思うでしょうね。でもここに私たちがいる限り、他で暴れまわるモンスターがいる。どれだけ討伐したのかもわからない。そんな情報不足の状態で一体に構っていても被害が大きくなるのは目に見えている。

非情だと思うでしょう。でも私は良くも悪くも、こここの4人を信じていた。

「……問題ないわよ！ 行くなら行きなさい!!」

「テイオネ!?!」

「バカつ、モンスターはこいつらだけじゃないんだから別れた方がいいわよ！ それに、あんたに頼らなくても私たちなら問題ない!!」

私の言葉に返事をしたのは「怒ヨルムンガン蛇」だった。拒絶する物言いだけど私の同じ事を考えていた。この戦いで血が昇つてるとは思っていたけど、意外と冷静だったわね。いや、私を見て何かあると考えると、その結論が出たのかもね。

「その言葉、信じるわ!」

「うっさい!! その内、団長の前に引き摺ってやるから覚悟しなさいっ!!」

「それは、覚悟しとくわ」

ひと振りしか使わなかったビーンスターク・ブレイクをしまうとすぐに飛び、残りのモンスターを探し始める。途中、食人花のモンスターを見下ろした。改めて見るけど新種のようにだし、しかも地下から出現している。そして私が斬った1体を合わせて計4体。このモンスターは「ガネーシャ・ファミリア」が捕まえてきたモンスターではない事は明らかだった。

この街には、ヤバい物が潜んでいる証拠でもあった。でも今はそれを頭の隅に置き、

モンスターの姿を捉えようとした。

竜は白兔を見守る

食人花のモンスターを「ロキ・ファミリア」の彼女たちに任せ、私は他のモンスターを探す。すでに私と「劍姫」で大体を討伐済だから残っているのは1体か2体ぐらい。ただこの広いオラリオでそのモンスターを見つけ出すのは困難。なので私は闇雲に飛び回らず、騒ぎが起きている場所を見つけ出そうとしていた。

そして破壊音を耳が拾い、その場所に目を向ける。

「……ダイダロス通り」

中央のバベルから東南東。東と南東のメインストリートに挟まれように広がる住宅街。その区画内から煙が上がってる。燃えてる、と言うより建物が倒壊して砂埃が舞い上がってる感じか。

他にモンスターらしき気配がないか探ってみたけどダイダロス通り以外にはない。どうやら残りはあるの1匹だけみたいね。ならさっさと片付けるか。

「よっ、っつ」

ダイダロス通りに向かうように翼を羽ばたかせる。一気に体が押されて真っ直ぐに飛ぶ。

今更だけど街の上で飛んでればかなり目立ってるはずよね。まあオラリオ、私を知っている神様や人たちが多いはずだからそんな騒ぎにはならないはず、よね？

「……問題になったら迅速に解決しておこう」

いや、むしろ騒ぎになるようだったら早いうちに対応したほうがいいでしょうね。うん、そうしとこう。それにこんな気持ちでいるのは不謹慎だしね。早く終わらせよう。

だいたい近づいてきたわね。ここらへんで最後のモンスターを確認しようか。

一旦止まって翼で空中に留まりつつ、望遠鏡（手作り）を取り出してダイダロス通りを覗く。適当に周りを見てみると動く影を見つけた。その影を追って鮮明に姿を捉えるとシルバーバックの姿が映った。1階層のモンスターだから討伐するのに手間は――。

そう思っていた直後、細い路地裏の隙間から見覚えの白髪、背格好——ベルの姿を捉えた。ヘステイア神も一緒に、しかもその後を追いかけるようにシルバーバックが移動していることに。

「ッ!？」

まさかの光景だったけど、私の行動は迅速だった。望遠鏡をしまい、すぐに飛行を再開する。狙撃の手も考えたがさすがの私でもこの距離からは必中を狙うのは難しい。出来ないことはないけど今回はダイダロス通りという事で間が悪い。これがなく、拓けた場所ならさつきまでいた場所での狙撃が出来たでしょうね。

おっと、ここで愚痴つてもしょうがない。遠いがシルバーバックの影はまだ捉えたまままだ。だけどダイダロス通りの中に入り込んでしまえばまた見つけるのに時間がかかる。ならここは一直線に飛び、確実に仕留められる距離になれば弓矢で射抜くか大剣や斧で一刀に伏せる。問題は一瞬でも目を離れたらシルバーバックの影を見失ってしまう。いそうな事だ。今か今かと地上に降りようとしているのが動きでわかる。もつと速くあの場所へ――。

「あら、もしかして貴女の知り合いだったのかしら？」

その時、下の方から聞こえた声に思わず顔を、向けてしまった。

しまったっ！ とそのミスを取り戻そうとして再び顔をダイダロス通りに向けたけどそこにシルバーバックの影はない。運悪く、さっきの瞬間で降りてしまったようだった。その事実には思わず自分の不甲斐なさに怒鳴りたかったが無意味だと飲み込む。ただしこの不満は、下にいる女神様に言う事にしよう。

翼を飛ばたかせつつその勢いは少しずつ弱めながら地上へ近づいていき、丁度いい高さになった所で落下の速度をひと飛ばたきで相殺して静かに着地する。

「——察する事はできませんが、出来ることなら貴女様の口でお答えください。この騒ぎの目的は何ですかフレイヤ神？」

真正面から、しかし近づきすぎない距離で私に声をかけたフレイヤ神に問う。ただ相手は美の女神。特殊な種族でも神々にとっては竜ドラゴン人も地上子供の人。わずかなら魅了されている。いや、無意識で『わずか』だから十分に特殊な種族ね。

「久しぶりにあったのにそれが最初の言葉は寂しいわあ」

「無礼であることは承知しています。ですがあそこにいるのは私にとって甥のような子です」

「まあ、やっぱりそうなのね。貴女があんなにも急いであるからそうじゃないかって思ったの」

「では私が何をしたいのか、何を言いたいのかお解りでしょうか？」

「ええ。でも私は見たいの。彼の事を」

「——気に入ったのですね」

「ええ、そうよ」

でしょうね。ベルならその可能性はあった。さすがに下級冒険者のままなら目にも留まらないと思っていたけど、どうやら偶然か何かでベルを見つけてしまったようね。それでこんな騒ぎを起こしたと。

「……はあ」

「ため息？　もしかして私とのお話はつまらないかしら」

「違います。ただこれからの甥は厳しい道——数多くの試練を呼び寄せると思っただけです」

「じゃあこれから助けに行く？」

「……いえ、それはもう止めておきましょう」

「あら」

フレイヤ神に気に入られただけでも数奇な星の下に生まれていると私は思った。そして同時に私の役目も思い出す。

私はあの最後の英雄^{ラストヒーロー}を見守る為^{ため}にここへ戻ってきた。確かに今のベルじゃシルバ―バックを倒すのは無理でしょう。でもそれを打ち破る物が2つ。

1つは覗き見た成長を促す【リアリス・フレゼ情懐一途】。懸想おもいの丈が高いほどにその効果を向上させるスキル。あの純粹なベルの事だ。私でも予想できない熟練度上昇になつてるでしよう。

もう1つはヘスティア神が背負っていた荷物の武器。恐らくは急成長するベルの為に用意した物。ギルドで調べた事だけどあの女神様はヘファイトス神と知己のようだからその方に武器を作ってもらつた可能性が高い。なら生半可な武器じゃないはずだ。「ただし、本当に危険だと判断したなら助けに行きます。あの子が倒せる可能性がある以上は見ていきましょう」

「なら一緒に見ない？」

「寄りかかりませんか？」

「それは約束できないわね」

「では代わりに見える場所まで運びましょう。軽く空の移動です」

「あら、いいわね。それならお願いするわ」

「はい」

「ここはこれで妥協するしかないと思う反面、【フレイヤ・ファミリア】の眷属たちにまた1つ恨み事を買ったかな? と思う私だった。」

り返して私は気付いたの。これが冒険なんだって』

ここに来た時、エイナさんは言った。『冒険者は冒険をしてはいけない』と。

『危険だった、無謀だった時もあったわ。でもそれを乗り越えた達成感はずきりだった。その先に得た報酬は感動した。でも何よりみんながいた。信じてくれた人の期待に答えられたんだって』

カレン姉さんも同じことを何度も言っていた。でも同時に冒険をした先の事を教えてくれた。ここでまた僕は疑問を持ってその矛盾を聞いた。

『冒険って言っても無闇に死地へ向かう事じゃないのよ。叶えたい願い、譲れない信念。それを阻む壁を越えることが冒険なの。だから私が冒険だって言える経験は片手で数えられるぐらいかしらね』

僕が思い出した言葉は残念なことにはここまでだった。でもこの時においてはそれだけで十分だった。

神様の言葉は信じられる。みじめで情けない自分を信じるよりも。

だから僕は、シルバーバックを倒します。カレン姉さん。僕も貴女のように信じてくれる人の為にここを超えます。

「さあ、行くんだ!!」

その声と、背中からの衝撃に僕は一步を踏み出した。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

その直後にシルバークの雄叫びが耳に届く。

行つてきます神様、カレン姉さん!!

袋小路にいたベルがシルバークに向かって行き、そして両者の決着はすぐに終わつた。

ベネトレイション
突撃槍。

自身を槍に見立てて突貫した攻撃は見事シルバーク胸の奥、弱点である魔石を武器で貫いた。シルバークは消え、ベルが勝利したのだ。

その後はこの住人たちの歓声を浴びながらも何故か倒れてしまったヘステイア神を抱えて走り去っていった。

「満足しましたかフレイヤ神」

「そうね。でもヘステイアには妬げちゃうわね」

あれ、拗ねてる？ 意外ね。このお方がそんな感情を見せるなんて。でもその視線がベルに注がれているとすぐに笑った。

「おめでとう。まだ少し情けないけど、格好良かったわ。——また遊びましょう、ベル」
その眼差しは熱を持って見続けていた。そしてこの言葉通りならまた何かを仕掛けるもの予想ができる。これは余計にあの子を放っておけなくなったわね。この女神の思惑を無視してたら、ベルは死んでしまう。やっぱりお節介は必要なようね。

「それではフレイヤ神、私はこれで失礼します」

「あら、もう？ これからお茶でもと思つてたのに」

「この騒ぎが終息したなら私も後始末をしなければならぬので。それにフレイヤ神とお茶など、貴女様の眷属が許さないでしょう」

「うーん、そうねえ。確かにお茶なら落ち着いてほしいわね。ならオツタルが貴女を連れてくるまで楽しみにしましょう」

「【おうじや猛者】ですか」

「ええ、あなたとぶつかる機会と一度だけ許したらいつも以上に鍛錬に励んでいたわ。——そう言えば私の首飾り、まだある？」

ああ、あれの事か。

フレイヤ神の言う首飾りを「ミュニアストレジャー」から取り出した。これはフレイヤ神が常に身に付けていた黄金と琥珀を使った首飾り〈ブリーシנגガメン〉。彼女が天界で身に付けていたオリジナルを模倣し、それでいて二つとない最高品質の首飾り。そ

して15年前、私がフレイヤ神から奪い取った品でもある。

フレイヤ神はそんな自分の首飾りを、愛おしそうに眺めていた。でも手を伸ばして触れたり奪い返そうとはしなかった。

「またこれを首から下げたいですか？」

「それはあるわね。でももしたら私が貴方に会う理由が減ってしまうわ。今は貴女が預かっていたほうがいいし、貴方も返す気はないんでしょ？」

「それは、確かに」

このブリーシנגアメンはいわゆる『落とし前』だ。主力メンバーを失った隙に「ゼウス・ファミリア」を壊滅させた「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」に對する正当なる、しかし自己満足を満たすための強奪品。「ゼウス・ファミリア」は決してお前たちに負けるファミリアではなかったと示したかった証。これを自分から手放すのはそれを否定し、壊滅は必然だと認めることに他ならなかった。

フレイヤ神の言う通り、これは自分から手放す事は出来なかった。

「ならこれはまだ私が所有しましょう。そして【おっじゃ猛者】の件も真正面から迎え撃ちましょう」

「オツタルに勝つつもり？」

「私にも譲れない物というものがありませんから」

「ふふつ、そう。ならオツタルに期待しましょう。それじゃ、またね」
「はい」

フレイヤ神は銀の髪を翻し、この場から去っていった。

その後ろ姿を見送った後、ブリーシンガメンをユニアストレジャーにしまふ。その後で私は既に見えないベルを、あの子が走っていったら先にも目を向けた。

「頑張ったわね、ベル」

本当はまだ姿が見える内に言いたかった言葉を、せめて伝わって欲しい気持ちに乗せて呟いた。

そして後始末の1つ、放っておいた武器を回収に来た時。

『カレンちゃんが置いていった双剣とおっきな盾、「ロキ・ファミリア」が回収したで。返して欲しかったらウチの拠^{ホーム}点まで来てーな。歓迎するで。b y ロキ』

こっちの女神は抜け目がないと、思い知らされたのだった。

第2章 「竜とファミリア」

悪戯神のホーム

「回収していった物を返してください」

「いや、つつたら？」

「そうですか。では大事にして下さい」

「いやいやいや冗談や!! こうバツサリ会話を切らんといて!」

モンスターフイヤー
怪物

祭より翌日。私は「ロキ・ファミリア」の拠点ホームこと黄昏の館、その応接室にい

た。要件はロキ神が回収していった武器を回収するためだ。もつとも、ここには現時点で会いたくない人がいるからここに来るまで、自覚できるほどに不機嫌だった。でもこの門番に怯えられた時点でそれは抑え込んだ。

「まったく、私と話がしたいなら冗談は控えてください。貴女様が良くてもここには私を歓迎できない人達が少なからずいるでしょう」

「それはウチが言い含めてやったから大丈夫やで。と言つてもカレンちゃんを嫌悪してる子はおらんで」

「え、それはなぜですか？」

「フィン、そしてリヴェアとガレスが諫めたんや。まあカレンちゃんが遠慮なくボコつたせいもあって敵意を超えて開き直った感じやな」

「そこまでやったかしら私？ いや、やったんでしょね間違いない。あの時の私って情緒不安定だったし。」

「では15年前の件に関しまして、「ロキ・ファミリア」の団員からは特に恨まれていないと認識してよろしいでしょうか？」

「おう、それでええで。まあカレンちゃんの言う通り15年前は、だけやけどな」
「やっばりですか」

「今でも感じる視線は複数。内2つは明確な敵意だ。そしてその2つには心当たりはあるし、無視するつもりはない。そして他のいくつかそれとは違う方向の視線だ。こっちの内、1つだけが気に食わない。」

「では話を戻し、もう改めて言います。私としてはあの双剣とタワーシールドはなくなっていればそこで諦めていた程度の品ですが、貴女様の下にあるなら別です。回収するにせよお渡しするにせよ、話だけはしておきたいのです」

「そうなん？ 諦めるには結構いい品やったと思うんやけど？」

「ただ振り回しやすい2本の剣と重いだけのおつきな盾ですよ。あの程度、作ろうと思えば作れますから」

「ほお、上級鍛冶師級の武具があこの程度か。『製作』のアビリティも結構な物になってるみたいやな」

「ロキ神、自然に話を変えようとしても騙されませんよ」

「そりやあ残念やな」

やつぱり。神様たちの中でも随一の悪戯者トリックスターのこの方の弁はよく自然に回る。こうして私の実力を探ろうとしているのがいい証拠よ。でもこの方が止めようとは思わないし、しょうがないか。

「では交換と行きませんか。武器を回収したお礼に私がお返しをするという事にしましょう」

「なんかくれるんか?」

「私の『ステイタス』の閲覧でどうですか?」

「ブフウツ!」

あ、吹いた。さすがに破格すぎたか。ロキ神にとつてはだけど。あと扉の向こう側も物音が聞こえたわね。

「ちよちよちよ待てや! なんでそんな貴重なもんを対象にすんねん!」

「そうですね。でも今回は相手がロキ神であるからでもあります。貴女様なら例え私の『ステイタス』を見たとしてもそれを吹聴することはしないでしょ」

「むっ、むう……」

私の言葉に言い淀むロキ神。ここで私の實力を見ておく事はこの方にとって価値ある情報になる。元々、探りを入れていたしね。そしてフレイヤ神フレイヤバルを意識してこの情報はロキ神自身で留めるはずでしょう。でなければ悪戯者トリックスターとは呼ばれてないでしょう。

「どうしますか？」

神相手に追い立てるような言葉が出るけど、この程度ならロキ神がどんな返事をするのかは簡単に予想出来ていた。

カレン・デュラス

Lv. 7

力：B734 耐久：B781 器用：S988 敏捷：B702 魔力：C679
製作：G 精癒：D 耐異常：G 再生：H

《魔法》

【ミユニアストレジャー】

・ 収納魔法

・ 出し入れは体の届く範囲限定。

・ 収納の容量は魔力に依存。

・ 収納中、内部の時間停止。

・ 詠唱式【グニタヘイズの穴蔵、その奥底に宝物を置きましょう】

・ 解除式【グニタヘイズより贈り物を】

《スキル》

マルチマスタ

【器用貧乏】

・ あらゆる製作系発展アビリティ能力の獲得。

・ 経験・知識・技術の忘却防止。

・ 能力限界の消失。

【孤高眷属】

インデペンデンス・ファミリア

・ 主神を失っても神ファルナの恩恵を維持する。

・ 【ステイタス】を更新する。

・ 主神を得た際は封印される。

これがカレンちゃんの【ステイタス】やった。まさか応接室で見るわけにもいかんかったからウチの部屋で見してもらってる。応接室から出る時、なぜかカレンちゃんが動かんかったけど扉の向こうにいたみんなを解散させるとこでようやく動いてくれ

たわ。ウチ以外には見せとうないって事やな。

それはともかくこれは凄まじい。レベルや発展アビリティも凄いモンやけど、何よりスキルや。インデペンデンス・ファミリア「孤高眷属」。これは事実上、どこのファミリアに所属しなくても神の恩恵を持ち続けられる。まるでゼウス以外の眷属子供にはならんって言ってるようなスキルやな。でもこのスキル、どっかのファミリアに入って封印されてもただ使えなくなるとは思えんな。

「もうよろしいですか?」

「あ、ああ。ええで」

十分に見たし、カレンは服を着て背中を隠す。

ってしもた! 折角のカレンちゃんの生肌にセクハラするの忘れとったあ!!

「しかしロキ神がセクハラしないのは意外でしたね。まあ実行しようものなら「ゼウス・ファミリア」名物、セクハラ主神制裁技の1つを繰り出しましたけど」

いやっ、やらなくてよかったわあ!

「それはともかく、これで武器は返していただけますね?」

「ああ、ええで。しかし確かにこの情報は流せんわ。そしたら他の神共が派手に動く事になるやろうしな」

「だからですよ。この情報はロキ神にとっては使わない劇薬です。危ないものは自分の

手の中に管理するのが一番、と言う事です」

「神相手にそんな手を使うとはなあ。立派になったな」

「お褒めの言葉と受け取りましょう。では早速受け取りを行いたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ん、そやな。じゃあついて来てえな」

手招きをしながら素直についていくカレンちゃんと部屋を出る。今度は誰も居らんかったな。多分、フィンカリヴィアが近づかせないようにしてくれたんやろうな。

廊下を進みながら軽く世間話をカレンちゃんとしたが、こつそりと入れた誘導には全く乗って込んかつちやな。でもカレンちゃんが言いたくない部類は大体わかった。

『オ・ラ・リ・オへの目的』『ゼウス・ヘラ両神の安否』『頑なな勧誘拒絶の理由』の3つ。最後の1つはウチのファミリア限定の事やけど。でもウチ相手にこれだけの情報でも十分なのは分かつとるやろうに。いや、いつか知られる前提か。つまり隠し続けるつもりはないつつちゆう事やな。なら、後はウチなりに調べるか。あの件も別に調べながらな。

「あら」

「ん？ あつ、アイズたーんっ」

ちょうど剣と盾を入れておいた倉庫の前にアイズたんがおったわ。ゴブニユン所の三鎚の鍛冶場から戻ってたんな。

「ロキ。それにその人は……」

「おう、カレンちゃんやで。何度が顔は合わせとるよな？」

「うん。あつ、昨日はありがとう」

「はい？」

「ああ、昨日のモンスターにカレンちゃんの剣を使わせて貰ったんや」

あん時はアイズさんの剣が折れてもうたからな。他にも剣はあつたけどカレンちゃんの方が良い剣やからな。ホントにちようどよかつたわ。

「あの時に役立つたなら幸いです」

「そうか。なら今、倉庫を開けるけん持って帰つてえな」

「え？」

「え？」

「ぬ？」

カレンちゃんに返そうとして聞こえた声はアイズさんのものやった。なんかそれを予想してなかった声や。これつてまさか。

「アイズたん、あの剣に愛着できたか？」

「……………うん」

メツサ溜めて肯定しよつた。いや、ここはあのアイズたんがあたの武器がカレンちゃん

のもんとわかってる上で肯定した。遠まわしに欲しいって言ったも同然。

「つまり、貴女は私の持つ武器が欲しいと」

そしてカレンちゃんもその事に気づかないわけがないんや。アイズたんも、正直に首を振った。

「なるほど。でも残念だけどあれの所有権は私に戻ってるわ。さつきロキ神と話が終わって今まさに回収する所よ」

「そうなんだ……」

あ、シユンとなった。まあアイズたんやからな。ここで返さないなんて強欲な所はないし。これは後で慰めてやるるか。

「……いいかもしれない」

「んっ、どうかしたかカレンちゃん？」

今度はボソツと聞こえたカレンちゃんの声。と思つて振り返ると。

ものすつごい、楽しそうな顔をしてた。カレンちゃん、そんな顔するんようになったんやなあ。

「【劍姫】ちゃん、でいいかな？」

「うっ、うん」

「ロキ・ファミリア」の次世代の冒険者である貴女の実力、私にぶつけてくれなかしら？ 私が納得できるものがあるなら私の剣を譲ってもいいわ」

あ、これは面白い展開やわ。

【劍姫】との劍戟

今の状況は、少しだけわからなかった。

今朝、「ゴブニユ・ファミア」の所へ壊れちやった借りた剣を返しに行つて4000万ヴアリスの返済の事実に打ちのめされた後、なぜだかあの剣を思い浮かべた。

ロキが持つてきてあの花のモンスターにトドメを刺したあの剣。世界で唯一の竜ドラゴニユート人だと言うあの人の落とした剣。私を使う剣より幅は広かったのに軽かった。今まで自分のスタイルに合わせてレイピアのように細い剣身しか使つてこなかったけど、見た目に反して私にも扱いやすかったあの剣をまた手に取りたくなった。

そう思つてあの剣が納めてある倉庫に向かったらそこでロキと、あの剣の持ち主の人と鉢合わせになった。それを見た時でもうあの剣に触れられないと知つて素直に返さうと思つた。

それなのに……。

「案の定、ギャラリ観客が出来たわね。【劍姫】ちゃん、この中でも構わない？」

「うん、大丈夫」

訓練場でその人と戦うことになった。なぜこうなったかは、私も少しわからない。で

もこれはチャンスだと思った。戦う理由になつてる剣を手に入れられる入れられないは別にして、あの人の実力を知りたいと思つた。この前の酒場の一件で気になり、15年前の事を聞いてその思いは強くなった。

「アイズー!! 遠慮なんてしないでいいわ! 死に体になるまでやりなさい!」

「いや、死に体は不味いんじゃない……」

「おいアイズツ! さっさと終わらせて俺に代われ! そのトカゲ女には借りがあるんだよ!」

「どつちも頑張れ!」

一番近い場所から観ているティオナ達の応援が聞こえた。でも私はそつちよりもふとフィン達の方に目を向けた。あの人と縁があるのはフィン達だと思つたから。

『……………』

でも3人ともただ黙つたままだつた。でもあの人を見ているのは視線でわかつた。

「ならルールを言うで!。内容はウチのアイズたんと絶対にモノにしたるカレンちゃんとの1対1の決闘。武器は愛用しとるもんでOK。どつちかが戦闘放棄するか、審判のウチが止めるかまでや。ただしカレンちゃんは かまへんか?」

「問題ありません」

「大丈夫」

そしてロキの言葉で周囲が一気に沈黙した。もうすぐ私とあの人が戦う光景、それを見逃さないと言う気迫が感じられた。

私も気を引き締めて修理が終わったばかりのデスペレートを抜く。

「ふーん、それが貴女の愛剣？」

「？ そうだけど」

「そう。なら私は対極で行きましょう」

私の剣を尋ねると何も無い所からその手に、1本の巨剣が出現した。ティオナのウルガみたいにも2本の大剣がある。でも剣先は広くなって扇みたいな形状になってる事と両剣の刃渡りを繋ぐ様な柄が付いている事、そして両先端に穴が開いてる特徴があった。

「銘は〈ヘンタング〉。属性はないけど見た目の期待を裏切らない威力を持つわ」

「でも……」

「相性的に私が不利？ いや、それは貴女かもしれないわよ？」

「？」

少し何を言っているのかわからなかった。あの巨剣は多分、大振りでも小回りが利かないから私の方が有利なはず。今でもどうやって懐に入るのかいくつもイメージが出来る。本当に戦う気があるんだろうか？

「準備はええかー？」

「はい」

あつ、そろそろ始まるみたいだ。私もロキに向かつて頷いておく。

「ほな、両者——」

合図が切つて落とされる前に私は一歩から急加速に移れる構えを取る。でもあの人はまだ構えない。あの巨剣は出した時のままだ。何を考えているのかわからない。でも、それなら勝つまで。

「——始めっ!!」

その声の直後、私は一直線に飛ぶ。懐に入り、首筋にデスペレートを添えて決め手を取る。でも警戒は怠らない。間合いに入ったなら避ける事も頭に——。

それが幸運だったと言えた。もし少しでもその考えが及ばなかったら、あの剣の最大の間合いから逃れることは出来なかった。

へえ、上手く避けたわね。でも驚いてる。

「よっ」

劍身の穴に入れた手を引き、縦に振り下ろしたノンタングを引つ張り中心部分の柄をまた握る。そして引いた勢いを殺さぬままにこの巨剣を回して【劍姫】ちゃんに向かう。「っ！」

私の接近を見て離れようと後ろへ跳んでいく。でもそれを追いつつ、ノンタングの回転数を上げていく。その最初の数回のステップは速く跳び、すぐに間合いまで距離を縮めた。そして開始する、回転切りの連続斬り。ただし片手だけじゃ回転の勢いに持つて行かれて大振りになる。そんな武器を器用の高さにものを言わせて持ち手の交換を続ける。それにより前方へ集中的に攻め込む。

キーン、キーン。と。劍戟が何度も甲高く聞こえる。巨剣と細剣、大きさも違う劍同士で普通はここまで何度も鳴らすことは難しい。それが実現しているのは【劍姫】ちゃんがりつつも攻め手を見つけ出そうとしている事と私が回転の勢いを落とさないために緻密な距離感を保っているからだ。

「——【目覚めよ】」

その中で聞こえたその言葉。そして予感する、【劍姫】の攻勢。

「【エアリアル】 ツ！」

そして風が生まれた。

それは強く、それでいて【劍姫】ちゃんを包み守るかのように流れる。その流れは私

の方にも、ノンタングまで及ぼして回転に乱れを与え、それを修正しようとする勢いを大幅に殺させた。同時に隙を生み出させたことも。

近づいていくる剣先。喉元を狙ったまっすぐな突きだ。反射的に体を後ろに下げるけど距離が足らず徐々に迫ってくる。でも足りない分は、外から持つてくる。

ノンタングの柄を放して後ろへ飛んで行く、その間際で剣先の穴に手をつ込んで掴む。いきなりのキャッチに回転は止まり、反動を生み出す。その反動は私の体を引っ張り、足りなかった距離を稼がせた。

「そい——」

そしてそのままもう片手も穴に手を入れ、

「やあっ!!」

残った反動を利用して横一文字に振るうっ!

大振りの一刀は凶悪な勢いで【剣姫】ちゃんに襲い、しかし彼女を包む風がその体を浮かせて空振りに終わらせる。

当たらなかつた一刀だったけど私は足の踏み込みを僅かに緩めてノンタングの勢いに乗つて回り、外へ引っ張られる力で【剣姫】ちゃんから離れる。

「ほいっ」

ある程度離れた所で再び踏み込みに力を入れて回転を止め、残る勢いは手を離して上

に打ち上げて落ちた所をキャッチする。この時点でこのノンタングの回転は止まったわね。その後で【劍姫】ちゃんを見てみると尻餅をついた姿の上、驚きの色をした目で私を見ていた。

「まるで予想外。そんな顔をしてるわね」

「普通、そうだと思う。あんな戦い方をしちゃ」

「残念。これはそんな戦い方をする為の武器よ。一度止めれば隙の出来る巨大な武器に防御を付けるにはどうすればいいか。これはその問いの一つの答え。先端を丸めて回転する際の引つ掛かりを失くし、穴を開けて間合いの延長と一撃必殺の威力を上げ、重いから体が動かされる。それだからこの巨劍は全長が劍身で柄でもある。だから中子無しなの」

劍身と柄を繋げる、劍本体にある柄を被せる部分と言うものがないからそんな銘にしたけど、我ながら安直ね。

「さて、こつちの戦い方はわかったはずよ。その上で貴女は、どう攻める？」

まだ驚いた顔をする【劍姫】ちゃんを煽るように呟く。すると彼女は立ち上がり、劍を構える。

「……もう一度、お願いします」

まるで指南を受けてるような言葉ね。でも、ある意味で合ってるのかもね。だって私

は彼女の対極——彼女が今まで戦った事の無いようなスタイルで、その上で圧して見せた。始めて見えた境地に深く踏み込みたい気概がある。

それでいい。この戦いも、貴女がベルの情愴もくひょうとしてどれだけの冒険者なのか見極める為に申し込んだもの。話の流れからちようどいいと思つたからね。

じゃ、もう少しじゃれ合ひましょうか。

「——見定めてる、と言つた所じゃな」

横にいたガレスが目の前の戦いに、ガレスはそう評した。そしてそれは僕も同じことを考えていた。彼女、カレンはアイズの実力を測つてる。あえて彼女と正反対の戦い方をし、その上で圧倒する事でその対応力を視ている。対応力はその者自身の技術や経験で現れる。現にアイズは自分が持ちうる全てをぶつけて来ている。

ただ、それでもカレンを圧しているようには見えなかつた。

「強くなつたな、カレンは。今のわしらでも勝てるかどうか」

「いや、間違いなく勝てないだろう。彼女の強みは今日の前で魅せている技量だけじゃない。その手で作り上げた武器武具の数。15年前とは比べ物にならない数と質に仕上がつてる筈だ」

確かに。彼女が今まさに振るっている巨劍は扱えない物だとしてもそれが名劍なのはわかる。離れた場所で観ているティオナなんて目を輝かせている。あれは絶対に欲しいと思っている目だ。

対し、僕はその名劍を——彼女の姿を見て思ったのは、後悔だった。

再会したあの日、彼女の明確な拒絶。その理由は、情けないことにわかつてはいる。ただ僕が恐れているだけだ。許されるのか。またかつての彼女と向き合えるのかと。

【勇者】^{フレイバー}の二つ名に恥ずかしい臆病さだと思う。そのせいでティオネにカレンへの敵意を持たせてしまったのは僕の落ち度だ。ここで諭させるのは難しいだろうし、何よりカレンが正面から受け止める宣言をしているからほぼ無理だろう。ただ、そう思うと。

「変わらないんだな、彼女は」

「そうじゃな。あやつはいつだつて自分の非力さを理解し、その上で真正面から臨む。勝利のないものだったとしても」

「それはあの姿になつても変わらないだろう。アイズを圧しているがそれでも慢心が無い。いや、慢心なんて物は持っていないんだろうし持つこともないんだろうな、あいつは」

そう、それが彼女だ。決して強いわけじゃない。そして弱いわけじゃない。常に凡庸の平凡。しかしなんでも試し、それを自身の力にする。ただし平均的で常にフォローで

しかなれない、主戦力になれない副戦力なのが彼女だ。

それは竜ドラゴン人になつても変わつてない。強くなつてもそれを『強さ』と思つていないのはリヴィアの言う通り慢心のなさでわかる。自分は決して『英雄』の器とは――。

『…………この嘘つき』

「ツ!？」

「ぬ、どうした？」

「あ、いや…………」

一瞬、心臓を掴まれた気分だった。カレンはアイズを見ていて、こつちに意識を向け
てはいない。

つまり、さっきのは僕が僕に言ったのか。確かに今の言葉は15年前に言われた言葉
だ。やれやれ、我ながらあの日のことは鮮明にも覚えてるみたいだ。

「それより終わりが近いみたいだぞ」

「ふむ。アイズの奴、ペースも考えず全力で行ったみたいだの。もう息が乱れておる」
「元々、カレンはアイズの実力を見たかったのだろう。あいつは私たちに続く実力者な上に若手の次世代だ。今後の「ロキ・ファミリア」を確かめたかった。そんな所じやろうて」

確かに、アイズは明確に息を乱している。ダンジョンに潜るときはもつと下の階層に備えてペース配分は出来る筈だ。それを無視して全力でカレンへ向かっている。

それを僕は、羨ましいと思っていた。

「——うん」

そう呟いてノンタングの回転を止め、地面の上に立てる。これ以上ない隙を見せた姿だけど、「劍姫」ちゃんはこの隙を突いてこない。なぜなら彼女の体力はもう限界だったから。表情は見た時とそんなに変わらない

「ハア……ハア……」

1時間も経たないうちにこの消耗は、それだけ全力でぶつかって来た。1回、大技を出そうとしたみたいだけどこっちは遠慮なく阻止させてもらった。理由は、まあこの子の純粋な技を見たかっただけだけ。その結果、彼女は体を動かせるだけの体力を消耗

し、立てないほどになった。それでもダンジョンに潜っていた経験が襲われても反撃出来るようにしてるわね。

「この勝負、カレンちゃんの勝ちや」

そこにロキ神の決着の宣言。そして周りはただ沈黙していた。圧倒された、と言う気配はない。私の実力が裏付けされた所かしら。【ロキ・ファミア】に所属している以上、誰もが15年前の事を知っているはずだ。当時いた古参然り、話しか知らない新参然り。特に新参はこの決闘でその話が事実だと、認識したでしょうね。

「で、カレンちゃん。アイズさんは武器をあげてもいいか？」

「はい。ただ渡すのはいいのですが、問題が1つ」

「問題？」

「それは本人に言います」

ノンタングを【ミニニアストレジャー】にしまって【剣姫】ちゃんに近づいていく。ロキ神が決着の宣言をした時点で気を抜いて剣も鞘に戻してる。ただたつて移動する程度の状態だけ。

「さて、【剣姫】ちゃん。ハッキリ言うけど、貴女はその腰に吊るしている愛剣以上に最適な剣はない」

「え？」

「あ、誤解しないで。貴女の実力に合いそうな武器が手元がないのよ。ぶっちゃけ、あるのはその第一等級特殊武装スベリオルスより劣るか、その逆か」

隠すようなことでもないからここはあっけらんに答えておく。私の『製作』スキルはほど周知の事実だ。隠しても逆に『何かある』と思われると、だったら『あるんだな!』と思われた方が楽だ。腹の探り合いはホントは嫌いだし。

「……デスペレートよりいい武器じゃダメ?」

「ダメ。こういうっちゃなんだけど貴女、身の丈に合わない武器を扱った経験はないでしょう?」

あとは、この子は高みを望んでいる。それも異常と言える想いで。なにが駆り立ててるのか知らないけどそんなこの子に身の丈に合わない武器を与えても死なせるだけ。だからここは……。

「ただし、与えたいものはあるわ。貴女の愛剣を超える剣を扱えるようになるための、持ち主を成長させる武器を」

説明をしながら彼女の前に鞆に納まった一振りの剣を取り出す。

鞆に小粋な感じのデザインを凝らし、その中に納まった剣の柄と鏢も鞆に合わせてデザインを拵えている。まあこの見た目は、楽しみみたいなものだけだ。

「抜いてみなさい」

「うっ、うん」

劍を受け取り、言われた通りに【劍姫】ちゃんは劍を抜こうとして——それができない。
い。

「あれ……?」

「大丈夫。今の貴女じゃそれが正しいわ。鞘、持つててね」

抜けなかった【劍姫】に代わって私が柄を持ち、そして難なく抜いた。

頭になった刀身は陽の光を浴びて輝く。と言うよりガラスのように透明で光などは通り過ぎてる。ただしこの刀身は刃もないナマクラだ。

「……綺麗」

「その感想は嬉しいわね。——【大切断】ちゃん！」

「え? 私?」

私は【大切断】ちゃんの二つ名を呼ぶと彼女に向かって手に持つ劍を投げた。

彼女は最初こそ慌てたけど余裕を取り戻すだけの距離だったみたいで器用に劍の柄を掴み、

そのまま後ろに倒れこみ、掲げるようにあつた劍はドオン、と言う音を立てて地面に

めり込んだ。

「……………え？」

「はい、呆けない。それと貴女にあげる劍なんだから取りに行くわよ」

「うっ、うん？」

なんで疑問形……ああ、なんであんな劍を持てたんだって思ってるわね。まあ回収した後に教えるから。

「ちよっ!? ティオネ、これ重いっ!」

「はあ? 何言ってるの。こんな劍なんて……………うわっ、本当に重い!」

「ちよっと貸せ! なっ、なんだこりゃあ!!」

L.V. 5の子達がめり込んだ劍を引き抜こうとするがビクともせず四苦八苦している。道中、『ティオナさんから重いなんて言葉が出るなんて!』と言う声が聞こえた。
どんだけパワー系で認識されてるのよ。

そして私は彼女たちの横を掻い潜って劍の柄を抜いた。難なく。

「はい、鞘」

「え?」

「それにも属性付加をしてね。それに納まつてる間は貴女が持つていた時の重さになるわ」

鞆に属性?　なんて顔をしてたけど素直に鞆を渡してくれたからすぐに剣を納め、そしてまた返す。

「それは『選定属性』の特性を与えた剣。銘はへカリヌス。早い話、私の至高を持つ遣い手を選ぶ剣ね」

「選ぶ?」

「そ。マイナー中のマイナーな属性だったからね。私が知ったのもオラリオを出てからだったわ。それで話は戻すけどまず、『選定属性』は持った人の「ステイタス」やら技量を讀み取って、それに見合うだけのものがないなら鞆から抜けない。そして抜けても技量が伴わないなら属性の効果できつきのような重さになる。でも普通の剣のように扱えるようになったなら私の至高をあげる。今は、これで強さを磨きなさい」

「……うん、わかった」

素直に納得してくれたわね。この子、結構可愛い。でもこの子ならいいでしょうね。ベルの情景として前へ進んで欲しいわね。

そしてこれでここでやることは終わった。

「ロキ神」

「あつ、なんや？」

「では私はこれで失礼します。これ以上は武器の催促とそれにかこつけての決闘をされ
そうですしね」

「そか。じゃあまたな」

「はい、では——」

マントの下に隠していた翼が広げる。私、飛んで帰ります。

『ま——』

「また」

飛ぶ直前に聞こえた声は、誰のものかわかつてはいたけどその上で無視した。

「鍛冶屋へ行こう」

「ロキ・ファミリア」を後にした私は人目のない場所で降り、さっさと地下の居住へ戻って来た。そろそろベルの方にも間接的に守る為の保険を用意しようと思ったからね。ただし、武器や防具はなしだ。武器はヘステイア神がすでに用意しているし、防具は自分で見繕って揃えたほうが冒険者としての目利きが鍛えられるからこれはなし。

なら何を用意するか？ ちよつと激励代わりな品を一つ、と言うのはナシなのよねえ。フレイヤ神に目を付けられちゃったから生半可なものだといざという時に役にたたなくなるだろうし。あの方ならヤバイのを持つてくるだろうし。それにこれからフレイヤ神以外にも厄介事に巻き込まれる可能性が高い。ちよつと言葉は悪いけど、ベルは見た目が見た目だから気に入られるかカモにされそうなのよね。すごく不安。

「……やつぱり私が一緒がいいかしら？」

と、独り言を呟く。そしてそれはありえないと否定する。

私の『見守る』スタンスは決定してる。冒険者なら多くを経験し、たくさんのお金を得て成長をしていく。懐かしいわね。下級冒険者時代の思い出が蘇るわね。

でも、それでもベルには死んで欲しくないからね。色々考えたけどやつぱり何かを持

たせるより目と耳と手足が付いてる方がいいわね。つまり、私とは別口で見守る存在。それも私よりより近くに入れる。それができるのは……。

「やっぱり、あの子に頼みましよう」

ならアレを用意しないとね。

すぐに部屋の一角にテーブルを出して更にその上に道具と取り出す。並んだのは透明の器やヤスリにランプがメインであとは小道具程度。まだ出していないものがないかを確認し、そしてないとわかると材料の魔石を山で取り出す。

「これを作るのは久々かしら？ もつとも、人には見せられない類なんだから当たり前なのかしら」

とりあえず作る分を考えるなら、今日は徹夜になるわね。さて、やるか。

.....

.....

.....

結果。完徹ギリギリでした。

流石に寝ないのは翌日、と言える時間帯でもなかったけど差し障るから少しくらいはと思つてなんとか時間を作つて睡眠を取った。短い時間で十分な睡眠を取るのは慣れるから目覚めはスツキリだわ。でも朝食を作る気力は尽きてたから外食と決め、少しおぼつかない足取りでカフェにやつて来た。

「このオムレツとトーストのセットで。ジュース付きで」

「畏まりました」

注文を終えたからあとは待つて頂くだけだ。

私で出来る準備は終わらせたから今日中に詳しいお願いをして、行動してもらうのは明日つて流れになるでしょうね。

でも問題はその後。あの子も私に匹敵する程の珍しい子だから神様たちに目を付けられちゃ騒ぎになるのは間違いない。しかも私みたいに後ろ盾を作るのは難しい——いや、無理かもしれないわね。ウラノス神を通してギルドに何らかの特例をお願いしたほうが安全ね。それでどんな扱いになるのかは、そこはなんとかするか。

他は、「ゴブミュ・ファミリア」と交渉ね。昨晚以外に消耗品になる物は出てくるし、かと言つて私一人で支えるのは無理がある。さすがにその辺のツテを利用しないかね。それにゴブニュ神やあの方の眷属なら余計な詮索はしないでしよう。

「え、カレン姉さんですか？」

「姉さんって、ベル君はそう呼んでるの？」

「アハハ……、カレン姉さんからはおばさんって呼べって言われてるんですけど、昔の名残が抜けなくて」

「つまり、昔はそう呼んでたの？」

「はい。僕の方が最初にそう呼んでたんです。だってカレン姉さんって、見た目が若いから」

「ああ、なるほど」

それはわかるなあ。見た目、30歳過ぎとは思えないからね。あの人に会う前にギルドからの資料に目を通してたけど、会ってみたら私とほぼ同年代だったから内心、ビツクリしたしね。

他にいない唯一の種族、ドラゴンユート竜人。

あの人しかいないから種族と特徴もわからないけど、お母さんのようなエルフみたいに不老のような物があるのは間違いないさそうだけど。それ以外はさすがに私が予想しても仕方がないわね。

考えるのはここまでにして、話を戻して。

「それでどんな人なの？ ベル君にとってカレンさんって？」

「はい。本当にお姉さんみたいな人です。おじいちゃんがない時は話し相手になって

くれたり、一緒に家事をやったりしました。たまに長く村を空ける事もありましたけど、長く一緒にいたと僕は思ってます」

「そっかー」

とりあえず聞く話だと本当に親戚の叔母さんかお姉さんって感じね。でも、そうなる とベル君って「ゼウス・ファミリア」の血縁者なのかもしれない。それはつまり、「ゼウス・ファミリア」の忘れ形見、そう言う事なのかもしれない。もちろん、ただカレンさん個人がベル君を甥っ子のように可愛がつてる可能性も捨てきれない。これは低い可能性、と考えた方がいいわね。

「じゃあベル君、それだけお世話になったんだからプレゼントの1つでもしたほうがいいわよ」

「プレゼント、ですか？」

「まあベル君の稼ぎだとすぐには無理だからいつかね。ちゃんとしなさいよ。世話してくれた女性になにもしてあげないのは男性として情けないわよ」

「アハハ……、頑張ります」

あから、落ち込んじゃったわね。今回が防具を買いに行くのが目的だからこの手の話はベル君にとって酷だったわね。でも言っておかないといけない事でもあったし、まあいいか。

が穏やかになる。私が鳴らしていた音とは違う、異なった信念で打ち込む音が。その音が好敵手であり、隣人の証だ。

そんな好敵手兼隣人たちが集うこの地帯で私が目指しているのは最大鍛冶派閥、「ヘアアイス・ファミリア」のホーム。その建物はもう目の前にあり、その扉の戸を叩く。

「うおーい」

中から野太い男性の声が応じた。そして扉が開いて出てきたのは煤まみれのヒューマンの男性だった。

「なんだい?」

「こんにちは。ダンジョンの素ドロップアイテム材を買い取って貰おうと来たわ。と言っても24階層までの素材しかないけど」

「中層のか。いや、それなら歓迎だ。ついてこい、受け取り口まで案内してやる」
「ありがとう」

好印象な対応だ。もしかしたら中層まで行ける実力者だと思ってこんな対応をしてくれているのかもしれないけど。

その男性に案内された受け取り口は無骨なカウンターだった。商品の受け渡しをすると言うよりも物を出し入れする場所に私のような売却人と対応するテーブルを取っ

てつけたような感じね。商品そのものは支店に置いてるからこんなスタイルになつて
いるのは当たり前かも知れないけど。

「おーい」

「あ、なんすか？」

「素材の買取だ。交渉頼むわ」

「なるほど。アニキー、買取ですつてよー」

「おー」

なんとまあ、職人の現場つて思う風景ね。

そうして案内してくれた男性は去り、カウンターの前で立っていたドワーフの青年は
呼んで出てきた同じくドワーフの壮年と交代するように奥へ引つ込んだ。

「改めていらつしやい。で、何を売ってくれるんで？」

「まあ色々ね。とりあえず総数は後回しにして一つ一つの単価を——」

「お主、カレンかあ!!」

交渉を始めようとした矢先、ホームの奥から嬉しそうな声が大きく響いて私と、目の
前のドワーフはビクリと肩を上げる。しかしそんなドツキリを与えてくれた人物はそ
んな事など気に止めず、足音を大きく鳴らしながらこつちに近づいてその持ち主はあつ
けらんと現れる。どうやら今回は鍛冶に打ち込んでなかつたようね。

「久しいなあ!!」

そう言いつつ、カウンター越しから私の肩をバシバシ叩くのは長身の女性。

彼女は椿^{ツバキ}・コルブランド。ここ「ヘファイストス・ファミリア」の頂点に君臨するオラリオの最高^{マスタースミス}の鍛冶師。同時に「単眼の巨師」の二つ名を賜った第一級冒険者並みの戦鬪力を持つハーフトワーフ。

私にとっては15年前までの付き合いのあつた、同業者であり友人だ。

「椿^{ツバキ}、痛いわよ。貴女、怪力なんだから」

「その返しはまさにカレンだのう! おい、こやつ相手は手前^{てまえ}がやる。お前は元の持ち場に戻ってくれ。代わりにお主の作品を主神様の意見を貰えるようにしておいてやるぞ」

「マジかつ! よし、あとは任せた!!」

椿の一言であつさり譲つたドワーフはさつさと奥へ戻つていった。まあ見た時からあの人も鍛冶師^{スミス}だつてわかつたし、そりやあへファイストス神の意見を貰える機会が与えられるならそつちに転ぶでしようね。ただそれでも、余りにも破格すぎでしょ。

「相変わらずね。そんなんじや貴女の主神、ヘファイストス神は頭を抱えてるんじやない?」

「そんな事はないぞ。いつ、とは言つておらんからな」

「意地悪ね。でもいつかはちゃんと叶えなさいよ」

「わかつとる。で、要件はなんじや？」

ドロップアイテム

「素材の買取よ。でも貴女が出てきたならちようど良かった。今からヘファイストス神との面会は叶う？」

「ん、そうだな。聞いてみぬとわからぬが、カレンが会いたいというのなら会ってくれるじゃろうてじゃろう。まあ条件が付くとしたら、わかるな？」

「私の、鍛冶師としての腕がどの程度なつたのか見てみたい？」

「おう、そしてそれは手前も知りたいたいのお」
てまえ

「わかつた。それで聞いてきて。ただし、作品を見るせるのはヘファイストス神がその条件もしくはそれに近いことを行つた時よ？」

「おう、承知した」

あつさり了承して椿は奥へツバキと戻つていき、そして数分もしない内に戻つて来た。

「会つてくれるそうだがぞ」

「ちよつとあつさりしてない？ 椿、ツバキもしかして貴方から条件を出したんじゃない？」

「ハツハツ、別に変わらんじやろ？」

「出したのね？」

「うむ！」

ウワー、堂々としてるワー。相変わらずダナー。

ヘフアイストス神と面会ができるのは好都合だけど、作品を見せたら見せたらで椿かツバキらの勧誘がききそうね。自惚れじゃなくて、確かな物だと言える作品を見せるからね。

竜の剣。 竜の友人。 竜の、依頼相手。

ヘファイトス神との面会が叶った私は、床の上に四つん這いになっていた。

「2億ヴァリスウ……」

理由はこの値段。これはヘステイア神がベルに与えたあのナイフの値段だ。ヘファイトス神自ら打ったナイフならこれは妥当だ。妥当だけど、零細ファミリアには現実的にとても返せる額じゃないでしょうっ!! 武器の性能とかは聞いてないけどベルの【リアリス・フレゼ情懐一途】に合った物なんでしょうけど、もつと考えて借金をしてよっ!! これが世間一般に知られたら入団なんて夢のまた夢でしょうに!!

「えつと、大丈夫?」

「大丈夫です。あの女神から甥を引き離したいと思っただくらいには」

「アハハハハッ!! それは大丈夫ではないなあ、お主がっ!!」

「ツバキこちら椿」

「いやだつてのお! こやつがここまで打ちのめされるなんて15年前さえなかったか
らのお! 特に武器購入に関しては高額でもほとんど一括払いでまとめていた姿を
知つとる手前としてはなあ!」

膝を叩くほど大笑いする事か椿^{ツバキ}。いや、そうかもしれない。彼女の言う通り、「ゼウス・ファミア」にいた時は借金なんてしてしまつてズルズル引き摺れば後々で面倒になるから交渉やらなんやらで一回の支払いで済ませたからね。ああ、ダンジョンの荒稼ぎで死屍累々になるかつての仲間たちが懐かしいわあ。

……よし、気持ちを切り替えよう。そうして私は立ち上がる。

「ヘファイトス神。あのナイフについて教えていただき、ありがとうございます」

「別にいいわ。ところでヘステイアの所にいる眷属^{こども}が貴女の義理の甥とは聞いたけど、もしかして——」

「ああヘファイトス神。その後の言葉は控えてください。わかっているなら尚更です。厄介事が増えるので」

「そうさな。特にお主を囲うなら外堀を狙う神など掃くほどにおるだろうしのお」

「……そうね。それは確かに。私もそれでヘステイアがまた放り出されるのは後味が悪いしね」

「ありがとうございます」

ヘステイア神が関わつたならヘファイトス神の耳に私とベルの関係は聞かれてると思つただけど

案の定だつたわね。でも知つたのがこの方という時点では幸運か。あの方は友神に

は恵まれてるようね。

「よし、話は終わったの。カレン、お前の今の腕を見せてくれ」

「椿、貴女つて子は……」

「だが主神様、貴女とてカレンがどのような作品を作り上げる職人になったのか、気になつとるのだろうか？ 手前が見せてもらえると口にした時、神でなくともわかりやすく視線が動いとつたぞ」

「見せる件は椿の独断でしょう。それと私は職人と言うには邪道でしょう」

「まあ確かに。お主の作品は本職がやるはずのない手法を使うからのお。だがそれは現在の認識いまというもの。時代が変われば正道が邪道になり、邪道が正道になるかもしれないからな。それにお主の邪道は複数の職人が結集した、言わば『寄り道が多い』だけじゃろう？」

「寄り道……言い得て妙ね。色んな分野の技術と知恵を集めて作る私はまさに『寄り道』かもしれない。」

「届け物せんもんぶんやを持って目的さくひん地向むかいながら目移ほかりしたお店の商品せうじゆつを手を取つてるんだから。椿たち本職ツバキのように『一本道』で目的さくひん地向むかいにたどり着くとは違うしね。」

「……あれ、まとめて見たけど言い得て妙より故事付け？ 後付け？ つほい。もしかして椿、適当に言ったの？」

「おい、どうした？ まさか渋ってるのか？」

「まさか」

思考の波の原因に急かされてしまった。そして目がこれ以上なく輝いてるわ。これ以上を時間をかけても余計に急かすだけね。

「ヘファイトス神、評定をお願いします」

そう言つて平行に上げた両手の上にひと振りの剣を出現させた。これを見てヘファイトス神と椿の目^{ツバキ}が変わつた。一介の鍛冶師として『製作』のアビリティを持つ私がどんな作品を仕上げたのか、高みの一つを見るために。

剣は目の前にいたヘファイトス神は手に取り、そして鞘から抜く。実際に出した剣は見た目だけはどこにでもある様な剣だ。質素でも豪華でもなく、ただただ普通な剣だ。そう、見た目は。

「……すごいわね。ここまでの域なんて」

「わかりますか」

「ええ。重量のバランスもほぼ黄金比だし持ち手もストレスはない。鞘と柄に使われてる革も地味だけど防具に使つてもいいくらいの上等よ。何よりこの剣身、より純粋な上に斬るためのものね。恐ろしいくらい」

「む？ 主神様よ、最後のはどういふことじゃ？」

「武器って言うのは作り手の技術が高ければ高いほどにそのクセつてのが無意識にできるわ。椿だつて知ってる鍛冶師の武器なら見ただけでわかるでしょ」

「まあそうじゃな」

「でもこの剣はそのクセがない。どんな作り手だつたのか読めない。そうなるの見習いなんだけどそれに反してこの剣身はダンジョンの下層にも通じる程の一級品。ホント、人がここのまでの物を作れるんだつて嬉しいくらいにね」

「ほおほお。主神様はそこまで褒めるか。いやいや、やはりカレンの作品は興味深いのお。見本に譲ってくれぬか？」

「手に取つてもないのにその決断は尊敬するわあ。別にいいけどタダで譲らないわよ。椿の鑑定眼で見た値段で」

「むむ、それは困った。かなりの額を支払わねば」

つまり、貴女はそれだけの価値がこの剣にあるってことね。それはそれで嬉しけどさっきの例えで思つたように、鍛冶師の分野じゃ納まらない技術が結構あるからなあ。あいや、貪欲な椿の事だからそつちの方もある程度は聞いてくるでしょうね。でも理解できるかしらねえ。

そんな友人にちよつとしたオマケを考えていると剣身が鞘に納まる音を聞く。へ
ファイトス神の評定が終わつたと思ひ、

「カレン、これだけかしら？」

その質問に、やはりこの方は鍛冶の女神なのだと改めてそう思った。ただし、それは今はダメだ。

「ええ、それだけです」

「そう。——椿、この剣を購入するならファミリアの予算から出していいわよ」

「おおつ、良いのか主神様！」

「ええ。ただしお金を管理している子に相談してからね」

「承知した。なら今すぐに行こうっ！」

「ちよつと待って。行くならこれを持って行きなさい」

走り出そうとする椿を呼び止め、そのままかささず紙切れを投げ渡す。

「なんじゃこれは？」

「ここに卸そうと思っていたドロップアイテムの種類と数。その中から必要な分だけ相談しておいてちょうだい」

「なるほど、ならば受け取ろう。では行ってくる」

あの長身とは反するような子供用な笑顔で走り去っていく。剣を買える事がそんなの嬉しい——というわけじゃない。ヘファイトス神は意図して席を外させたのだ。まあ実際、椿もそれを察して何も返さず行ってしまったんでしょうけど。

「さて、出来ることなら正直にお願い。貴女、世間には言えない技術を持つてるでしょう？」

「正解です」

「……やけにあつさり答えるのね」

「続けて否定しては何かあると言つてるようなものでしょう。それにヘファイトス神だけのお耳なら良しと判断しただけです。椿、いや彼女に限らずそれを鍛冶師の耳に入れるのは少々……」

「ええ、その判断は正しいと思うわ。まあさっきので椿もその辺りまで察しててでしょうけど」

「まあ勧誘するでしょうね。昔から変わらさず」

「ゼウスの紹介だったとは言え、貴女と椿は姉妹のように親しかったからね。あの子、15年前は貴女が消えて嘆くわロキの所に殴り込もうとするわで大変だったのよ」

それは、大変でしたね。

「私としても貴女が持つてる技術には興味があるけど、それはまたいい機会が来た時で「はい」

「カレーンツ！ この額で良いか目を通してくれえー！」

いい感じに話が終わったところで椿が声を挙げて戻ってきた。まったく。騒がしい

わね、あの子は。

結局、あの後でも椿がなかなか帰してくれなかったからヘファイトス神が彼女を取り押さえてようやく出ることが叶った。そのせいで体に疲労が残っていたけどそれでも【ゴブニユ・ファミリア】の三鎚の鍛冶場へ赴き、注文を任せてから帰路を歩いている。「疲れたあ……」

最近、と言うより間違はなくこの手で疲れてしまう事が多い。昨日は【ロキ・ファミリア】、今日は【ヘファイトス・ファミリア】の有名人に絡まれてね。【ゴブニユ・ファミリア】は、なぜだがほとんどの職人たちが死屍累々だったから静かに注文が出来た。うわ言のように『くたばれ……』と言つてたからどこかの冒険者が無茶な注文でもしたんでしょね。

そんな事を思いつつ今は地下水路の端を歩いている。入口に足を入れた直後、なんだか空気が緊迫していたけどその気配は遠かったし、別のところで何かあったのかしら。でも私が入った時にはもう落ち着いていたから解決もしたんでしよう。地下で心当たりは……あの花のモンスターぐらいしか思いつかないわ。そう言えばあれ、なんだった

んだろ？」

そうして他にも色々と考えていたらあつという間に隠れ家に到着、と。

「ただいまー」

「お帰りなさいませ、カレン」

普段なら返事のない隠れ家の奥から返事があつた。しかしそれは警戒するものでもなかつた。

「思ったより早かつたみたいね。気分はどう？」

扉を占めて奥へ進みながら尋ねるとそこに彼女はいた。

前後問わず腰まで届くであろう黒髪を下ろし、しかし前髪は髪留めで左右に開いて見える素顔は不自然なほどに整い、蛍光フオトルミネセンスに似た輝きを灯す紫の両眼は美しい。しかし反面、口元から足元までを一着のロングコートを着込んで不審な印象を与えていた。しかし彼女は私がよく知る相手だから不審者のレッテルを貼ることはない。

「特に変わらず、平常です。早速ですが御用件をお聞かせください」

「せっかちなね。もう少しゆっくりしていいわよ」

「ですがカレンからの頼みなど2年ぶりです。久々に動ける事もありますから」

「そう。ならその椅子に座りなさい。お茶でも出しながら話すわ、華」

「わかりました」

彼女——ラクジョウ・華はスムーズな動きで私が示した椅子に座り、見本のように整った姿勢で待機する。

そんな姿になった彼女を少し待たせつつ、最近このオラリオで見つけた茶葉でお茶を用意する。そして2つのカップの内、1つは華の前に差し出して私も向かい合うように椅子に座る。

「まず貴女のお願いだけど、私の甥を遠くから見守ってほしいの」

「甥……。もしかして、ベル・クラネルという名の少年ですか？ カレンが言っていました」

「そう。あの子は冒険者としてここ、オラリオにいるの」

「なるほど。しかしそれでしたらカレン自身がすれば？」

「そうなんだけど、あの子の成長を考えるとあまりお節介は焼きたくないし、開き直って構いすぎるとオラリオにいる神様たちが私を間接的に引き抜く為にあの子にちよつかい出すのは目に見えてるのよ。だから私自身ではなく、別の誰かに頼むしかない。それ

で信頼できる相手といえ、貴方だったわけ」

「なるほど。光栄です」

「そこまで持ち上げなくていいわよ、と言つても聞かないのがこの子なんだよね。そういう風に、できてるから。」

「ではこのお茶を飲みましたらすぐに？」

「だからせつかちだつて。今日ぐらいいはお茶と話し相手に付き合いなさい。ちよつと疲れたから気分を変えたいのよ」

「カレンがそんな言葉を零すとは、良き知り合いたちがいたようで」

「ええ、友人もいるわよ」

「でしたら私がいなかった間の話をお願いします。興味がありますので」

「いいわよ。貴女がいなくなつてからだから——」

華がいなかった2年間の出来事を私は語り、彼女は熱心にそれを聞いていた。本当に、この子はすごい子だ。

白兎とサポーター+α

最近、カレン姉さんと会ってないな。もし会えたら新しい防具の姿を見てもらおうと思つてたのに。なんて、子供みたいな事を考えてるな、僕。

昨日エイナさんで行つて見つけた防具、そしてエイナさんからもらつたプロテクターを装備した自分の姿は、ようやくくらしくなつたと思えた。だからこそカレン姉さんに見せたい気持ちが生まれたのは当然だと思う。でもあの人もこのオラリオに来てから何かと忙しそうだし、僕のワガママでそれを邪魔するのはいけない。でも昔から突然、ひよつこりと顔を出す人だ。時には誰かを連れてくる時もあった。こうして歩いていたら会えるんじゃないかって期待もあった。

でもそんな期待は叶わず、冒険者達の波に乗つてバベルに到着してしまつた。それを見て今日も頑張ろうと、憧れる少女の事を思い浮かべ――

「お兄さん、その白い髪のお兄さん」

後ろから僕を呼んでいる少女の声がそれを中断させた。

「え？」

後ろを振り返る。でもその先には自分を追い抜いていく冒険者達の姿だ。いない、と

思つて視点を下げるとそこには100Cセルチの小さな体と、思わずギョツとするような大きなバックパックを背負っていた。

でも同時に既視感があつて、そしてすぐに昨日の出来事を思い出して目が開く。

「君は、確か……」

「初めましてお兄さん。突然ですがサポーターを募集してはいませんか?」

僕の声を遮るかのように、目の前の少女は人差し指を僕のバックパックに向けた。この行動で彼女は僕がソロで活動している冒険者だと判断し、そしてソロだからこそその心中は簡単だ。

『サポーターがいてくれたらなあ、』、と言う心中を。だからこの少女は半ば確信して、サポーターはいりませんか? と尋ねたのだ。

「えつ、なんで?」

「混乱されるようですが、簡単な話ですよ。冒険者さんのおこぼれに預かりたい貧乏サポーターが、売り込みに来たのですよ」

「いや、そうじゃなくて。君、昨日会った子じゃない?」

「?」 お兄さんとリリは初対面ですよ?」

笑顔で売り込み言葉を口にしていたその頭が首を傾げる。でもこの格好は。

「いや、そのローブの格好。昨日の小人族バルツムの女の子でしょ?」

「……ああ、なるほど。冒険者さんはどなたかと勘違いされてるようですね。確かにこのローブは小人族バルウムですが、リリは犬シアンスローブ人ですよ。ほら」

僕が特徴を伝えると少女はフードの部分の軽く捲り上げ、するとその中に隠れていた獣耳が見えた。

「あれえ？」

「これでいいですか？ それでお兄さん、サポーターはいりませんか？」

「ええつと……。できるなら、いてほしいかな？」

「でしたらつ、どうかリリを連れていってくれませんかお兄さん！」

はしやぐ様に押しに出てくると少女の円らな瞳と目が合う。だた一瞬、その瞳は僕から離れた気がしたけど、気のせいだろう。

「ま、待つて。それはいいんだけど、キミの事はよく知らないし……」

「あつ、失敬しました。リリはまだ自己紹介もしていませんでしたね」

少女は後ろに下がり、朗らかな笑顔を僕に浮かべる。

「リリの名前はリリルカ・アーデです。どうかサポーターとして同行させてください」

そんな、僕を見上げるリリルカさんの瞳は、どこか輝きに暗みがあると、直感でそう思った。

色々と気になる事はあつたけどバベル二階の簡易食堂でリリルカさん——リリと話し合つて今日一日はパーティーを組む事になった。元々、サポーターの存在は欲しい存在だった。早く強くなりたい僕はダンジョンでは戦闘にのみ集中していた。

ただ契約するまでにリリのファミリアでの立場には軽く眩暈がするほどに動揺した。リリは別々のファミリアの構成員が繋がりを持つことがよくない事と考えていたと勘違いしていたけど。まあそれとは別に、まだ昨日の小人族だと疑っていた僕がリリの獣耳を弄りまわした罪悪感もあつただけだね。

そして僕らは、7階層にいる。

「フツ、たあ！」

『ギャシヤア!?!』

『ピャギユ?!』

同時に襲い掛かつてきたキラアアントとパール・モスをヘスティア・ナイフと短刀で倒す。どつちも一撃で打ち倒し、力なく死体が転げる。

「そっお!!」

続けて数歩先に離れたキラアアント二匹に向かって駆ける。口を大きく開けて牙を鳴らしながら威嚇する二匹を同時に——と見せかけて右の一匹を狙う。

『——ギ、』

僕の反応について来れず、絶叫を上げる暇もなく絶命する。続けて左のキラアアント、としたいが先に倒したキラアアントから突き刺したナイフがなかなか抜けない。その間に怒りに狂うキラアアントがその鋭い爪を僕に振り下ろす！

「ッ！ ツガア!!」

『ギイツ!!』

でも咄嗟に左腕を掲げ、キラアアントの鉤爪を弾いた。左腕に装着した緑玉色エメラルドのプロテクターが弾いたんだ。キラアアントの攻撃力でも傷一つつかない防具は僕の命を守ってくれている。そして相手が怯んだこの隙に刺さったままのヘスティア・ナイフを放し、短刀に持ち替えて甲殻の隙間を走らせる。

「ギイイ……」

この一撃は致命傷になり、キラアアントは紫の血飛沫を流しながら絶命した。

「次い！」

休む間のなく、モンスターの一群に飛び込む。

.....

.....

「お見事ですベル様」

「そんなことないよ。僕からすればリリの解体の技術がすごいよ」

「いえ、リリにはこれくらいしか取り柄がありません。これだけの数のモンスターを屠ったベル様がすごいですよ」

さっきの戦闘で倒した数がキラーアント4匹、パール・モス3匹、ニードルラビッツ五匹の計十二匹。いつもだったら1人でこの数を捌くのは骨が折れる。対しリリのそれは洗練したものだ。魔石を最小限の切り口だけで回収していた。

「しかしつかぬ事をお聞きしますが、ベル様は駆け出しの冒険者とお聞きしましたが、それは本当なのですか？」

「そうだけど、なんで？」

「ハッキリと申しますと普通の冒険者とは3人以上のパーティーでダンジョンに潜るものです。ベル様の様にソロで潜るなんて普通、誰もやりたがりませんよ」

「でも、それってやりたがらないだけでしょ？ Lv. 1で僕以上に強い冒険者なんていっぱいいるだろうし」

「それは……そうかも知れませんが」

僕の答えにリリは困ったような感じだった。僕はどこか変な事でも言ったのかな？

「まあ……ベル様の強さには武器によるところもあるのでしょうか」

「やつぱりそうだよ。僕もこのナイフには頼ってばかりだし、こんなんじや本当に強くはなれないかなあ」

「いえいえ、武器は頼られてこそ本懐ですよ。要はその力に翻弄されず御する事が出来ればそれはベル様の歴としたお力ですよ」

「そう、なのかな？」

指摘されたから手が腰のヘステイア・ナイフへ回り、そつとそれを撫でていた。

「ベル様」

「あ、終わった？」

「はい。ですが折角ですからあの壁に埋まつてるクリアアントの魔石も取っちゃいましょう」

「ああ、そうだね。でもどうやって取ろうか？」

「あの細い胴体を切り落とせばいいと思います。魔石は胸の中ですし、あとはリリがやっちゃいます」

「なるほど、じゃあ……」

「はい、ベル様。解体用のナイフです」

「え？ あつ、ありがと」

流れるようにリリからナイフを受け取ってしまった。ヘスティア・ナイフを使おうと思つてたけど、まあいいか。僕は下半身が埋もれたままのキラアントに歩み寄り、胴を切り落とすべく刃を沿わせる。

この一匹を最後にして今日の探索は終了となつた。この時、失くしものがあつた事にも気づかずに。

「――所有物の盗難を確認」

ダンジョン内の隙間でその現状を確認する。そして次に報告。懐から特殊なカットと複雑な文字列が刻まれた宝石の作品を取り出す。飾りの様に垂れ下がる金銀の鎖。その先にぶら下がる、対となる小さな宝石を耳の中にはめ込む。

「報告。返事をお願いします」

『――華？ 何かしら』

返事があり、通信に問題ないことを確認する。カレンが作った連絡用魔道具、カドケウス。ダンジョンを通して問題も内容だ。まだ上層と言う距離もあるでしょうが。

「ダンジョンに入る前にお伝えした、ベルに近寄ったサポーターの件です。先ほど、彼女はハスティア・ナイフを盗りました」

『鞆は?』

「ナイフ本体だけです」

『……そう、わかったわ。ならすぐに換金しようとするはずだからそのまま尾行して。最も売れるとは思えないけど』

「と、言いますと?」

『あれは真正正銘、ベル専用のナイフだからよ。ベルじゃないと刀身は死んじやって切れ味も包丁より劣る。ブランド名がある鞆と一緒に特殊武装スベリオルズの可能性が出るでしょうけど、本体だけじゃただのガラクタの値打ちしか出ないわよ』

「特別なのですね」

『そういう事。じゃあ華、よろしく』

「了解」

通信を切り、カドケウスを元の懐に戻す。そしてベルとサポーターに意識を戻す。

しかしあのベルと言う少年、ナイフを盗られたというのに気付かないとは。警戒心が未熟すぎる。いや、疑う事を知らないのだろう。純粹すぎる。ただ……。

「カレンが話していた、アルゴノウトの主人公のようですね」

だからこそカレンは見守りたいのですね。あの英雄を目指す小さな少年^{こども}を。なら私も精一杯に見守りましょう。もっとも、私はお願以上^{こども}の事はしませんかね。

やっておく、知っておくは大事

ガネーシヤ神の手伝いに区切りをつけた後、すぐのオラリオの空を羽ばたく。と言つても今回は目立ちたくないし、でもただ飛んでいれば目立つ事この上ないから姿を透明化する（天狗の面^{アマイヌ}）を使用している。正面の顔を覆う、両目以外を覆った面の魔道^{マジックアイテム}具だ。目指す場所、というものはない。ただ追跡している華はダンジョンから出てきた後は建物の屋根伝いに追いかけてると言っていた。つまり空から探すのが手っ取り早く見つけられる。とりあえず今はバベルを中心に東西南北をぐるぐる回っていた。

そうして北西のメインストリート近くの建物にその影を見つけ、そこへ降りていく。

「来たわよ」

「カレン？」

「ああ、こつちこつち」

天狗の面を外して透明化を解除する。私の姿を確認した華はあっさり視線を戻す。

「目標はあちらです」

華が指し示す先には路地裏の入口のような場所。そしてそこに報告で聞いていたローブ姿の少女がいた。しかもベルや、豊穰の女主人の制服をきた少女2人も一緒だ。

丁度今はベルがエルフの少女の手を包んでいた。何があつた？

「彼女は盗まれたナイフを取り返して、ベルは落としたと思つていたナイフが見つかつて感激しているところですよ」

「そう。まずサポーターを疑うことなく自分の失敗と思つたわけね」

「人を疑わないのですね。しかしそれでは危ういのでは？」

「そうですね。でも決めるのはあの子よ」

でも、あの子が何を選ぶのかは予想がつくけどね。あら、何か話してるわね。

「華、何を話してるか聞き取れる？」

「問題ありません。どうやら明日もサポーターとして一緒にダンジョンへ潜るようです」

「そう」

「あの少女に釘を刺しますか？」

「そうですね」

ベルから危険を遠ざけるならその方がいいのでしょうけど、なんだかあの子は匂う。

「華、あの子の所属ファミリアは？」

「【ソーマ・ファミリア】です」

「ソーマ神の所なのね」

ソーマ神の眷属が他のファミリアに売り込む、かつ盗みを働いてる……。

「——しばらくは様子見をしましょう。と言う訳で引き続きお願い」

「わかりました。しかし彼女の事は気になりますのでダンジョンの外では彼女の方を見
てます」

「わかったわ」

「はい、それでは」

すぐに行動へ移した華は屋根から降りて姿を消した。

「さてと、なら私は——」

「——【ソーマ・ファミリア】に探りを入れたい、か」

「はい。ファミリアに介入する際にはウラノス神の許可を頂きたいと思い、こちらに顔
を出しました」

私はあの後、すぐにギルド——ウラノス神の祭壇へやってきていた。ただし今回は天
狗の面で人目がなくなるまで姿を隠し、そしてこの場所に近づいた所で姿を現した。ウ
ラノス神にこの事を咎められていないので問題なく、次もこうして謁見に来ていいとい
う事だろう。

「それは以前、お前が語った最後の英雄ラストヒーローに關係する事か？」

「そうです。ただし、加えて個人的に「ソーマ・ファミリア」の現状に思うことがありますので」

「そうか」

「この反応だと知ってるけど聞せず、と言う事ね。中立たるギルドとしてはそれでいい。ただし、それで他のファミリアの情報を把握していないわけじゃない。そして聞わらないのはそれほどの事じゃないからね。」

「個人的、と言ったな。お前は何を思い、一介のファミリアの腹を探りたい？」

「簡単に言ってしまうえば、私の思っている内情なら気に入らないだけです」

「……珍しいな。お前の口からそんな言葉が出るとは」

「自分でもらしくないと思つています。ただ、パフォーマー「助演者」の二つ名を賜つた者としては許せない事もあると。そういう事にしてください」

「……そうか。いいだろう」

やっつていいことね。

「ギルドの力が必要となるなら言うがいい。ただし、お前の都合を聞く代わりにこちらの都合を聞いてもらいたい」

「わかりました」

と、言ったけどギルド規模で借りを作る事になるから冷や汗が出そう。覚悟はしていただけどこれはかなり危険な都合に振り回されるわね。しかも恐らく、ウラノス神自身が関わる案件ぐらいになるでしょうね。

「私の用は以上です。もし他に何かありましたら今お受けしますが?」

「ない。必要になれば使いを出す。人気のない場で姿を見せると思うが」

「なるほど。では不審と思える相手が現れても先手を打たずにおきましょう」

「それでいい。カレン、もう行っていい」

「はい」

静かに立ち上がり、静かに出口へ向かう。さて、何から手を付けましょうかね。

「——フェルズ」

ウラノスに呼ばれ、姿を示す。リヴィラの街の一件から翌日。その時にカレン・デュラスが来た。なら予想できるといふもの。

「例の異常事態イレギュラーに彼女を使うつもりか?」

「そうだ。ただし、深入りはさせるな」

ん? 彼女を使わないつもりか。彼女なら大きな戦力になると思うのだが。

「理由を聞いていいか？」

「確信はないが、アレは大きい」

「大きい？」

「カレン・デュラス——【財宝竜】ファツニルは我ら神の手にも余る存在であると、私は考えている」

神の手に余る、だと？

「……ウラノスでも冗談を言うのだな」

「冗談、か……。今はそれでいい。頭の隅に置いてもらえればいい」

「わかった」

「しばらくダンジョンからの情報を集めておけ。そっちは近々、大きな事が起きる予感がする」

「私もそう思つて目を光らせている。それと彼女が関わろうとしている【ソーマ・ファミリア】だが、ギルドでもその団員の行動が問題になってきている。それとなく探るようになしておこう」

「そうだな。任せる」

任された。異変が近く起こる故、確実に彼女の力が必要となるだろう。ならば彼女が追つてる問題をこちらで縮小化させた方がいいだろう。

しかし、冗談と終わらせた先ほどのウラノスの言葉。思えば彼女に関して神々はこう

呟いていたな。

——カレンちゃんの言葉って嘘か本当かわからないんだよね。

子供の虚実を見抜く神が見抜けぬ存在。それはまるで……。

「いや、まさかな」

さすがに、ない話だったな。

結局、一番大事な事を確認してなかった私はその場所へ向かった。途中、ちよつと質のいいお肉とかいい味を出す香辛料とか【デメテル・ファミリア】産の野菜とかを買い込んで。

それらを持って目的の場所に向かい、そして到着するやすぐに目の前の扉をノックする。

「ベールー、カレンおばさんよー」

叩いた扉は廃教会、その隠し部屋の扉だ。つまり、ベルに確認したいことがあるのだ。

そして扉の向こうで気配を感じて一步下がり、その直後に開いた。

「カレンねえ——おばさん！」

「おいしいからデコピン」

「あいたつ」

まったく。この子はいつになつたら直してくれるのかしらね。

「数日ぶりだけど大げがはしてない？ 食事経済はまだ低そうだから差し入れもあるん

だけど」

「失礼だな竜ドラゴンニユート 人くん。否定、出来ないけど……」

「ヘスティア神もお元気そうで。とりあえず冷蔵庫……はないですよね」

「失礼だな！ でもないよ！ 悪かったな！」

でしようね。でも買ってたら買つてたで説教したけど。

「なら生ものは今日中に使いましたよか。ベル、今日の夕食は？」

「えっと、ジャガ丸くんと野菜……？」

「ごめん、泣きそう」

「ジャガ丸くんをバカにするなあ!!」

いやヘスティア神。まだ賄い生活から脱出出来てないんですから泣きたくなりますよ。

「とにかく台所は借りますね」

「いや待った！ 食べ物はちゃんと受け取るけど、お客さんのキミの手を煩わせるわけには——」

「じゃあ代わりにします？ ただし、ジャガ丸くんが100個くらい買えるお肉がありますけど」

「お願いします!!」

ベルまで……。やだ、また泣けてくる。高めの食材を触るのすら恐れ多くなってるなんて。

「じゃあヘスティア神、ベルと一緒に待っていてください。準備してきますから。——あつ、さすがに口にしてくれますよね？」

「もちろん!」

よかった。さすがに食べるまでは及んでなかったわね。あと、ついでに。

「ベル。食事をしながらでいいから最近の活動を教えて頂戴。何かあったらアドバイスはできると思うから」

「えっ！ うん、わかった!」

嬉しそうな顔ね。話したいことがいっぱいあるって顔だわ。そんな顔を見ると、監視をお願いしている身としては心が痛いわね。

そんなベルだから、貴方の気持ちを確認しておきたいのよね。

口に込められる思い。

さて、ベルとヘステイア神に晩御飯を用意した訳だけど。

「美味しい、美味しいよお……」

「はい、神様あ……」

2人は感激しながら食事している。苦勞してるのねえ。最近の冒険活動に託けてあのサポーターの子について聞こうと思ったけどここでは聞かないでおきましょう。食事に舌鼓をさせてあげたいから。

「そういえばベル、最近の活動はどう？」

「あつ、うん。今日も7階層で頑張ったよ」

「へえ。7階層」

知ってたけど知らないフリをしておく。なので、意味深に手に持っていたコップをテーブルに置いた。

「つまり、「ステイタス」のアビリティにE以上がある事ね」

「え、わかるの？」

「私も元は冒険者よ。ダンジョン探索における推奨値ぐらいは把握しているわ。もっと

も、それに従う冒険者も少ないでしょうけどね」

ここでベルを睨みつけ、覚えがあるから目を逸らすベル。

「低い状態で潜っていないなら私からは何も言わないわ。でも7階層なら前に装備していた防具は心許なくなる筈だから、さすがに新調はしたんじゃない？」

「うん。エイナさんと一緒に「ヘファイトス・ファミリア」のお店で買ったんだ。クロツゾさんって人の作品でね、ピッタリだったんだ」

「いい買い物をしたのね」

でも、作者がクロツゾね。魔剣鍛冶師のクロツゾ家の息子が家出したって聞いてたけど、「ヘファイトス・ファミリア」に来てたのね。それにしても、ベルでも届く商品を出してるってことはまだ上級鍛冶師じゃないわけか。確か、魔剣を作るのを嫌がった筈ね。となると、「ヘファイトス・ファミリア」じゃ肩身の狭い思いしてるのかもね。それに魔剣、か。多分、巡りあうわね。

され、これ以上はサポーターの話に回っちゃうわね。このあたりが話題の替え時か。「となると、他の冒険者たちとか気を付ける頃ね」

「他の？」

「ベルにこれを伝えるのは心苦しいけど現実だからね」

知っているのと知らないのとじゃ生き残る確率が変わるからね。

「冒険者は千差万別の目的を持ってこのオラリオに来ていますが共通しているものは一つ。夢見る願いがあるから。ベルもそう言うものを持ってここに来た訳だし、ヘステイア神も聞いているでしょう?」

「もちろんだよ。ベル君が出会いを求めて来たって事は」

「あ、あはは……」

「私はいいと思うわよ。それも冒険者たちの側面だから。だから、別の面もある。この後が私が気を付けてほしい事よ」

気が抜けた状態で聞いて欲しくないからここで引き締めるようにと暗に伝える。すると2人ともこっちの言葉を聞く姿勢が出来た。いい感じね。

「まだ冒険者一カ月ぐらいのベルやファミリアを起ち上げたヘステイア神にとっては実感が無い事でしょうけど、この都市は夢と同時に野心が集まる場所。冒険者の中には真つ当にしない輩やそれに押し潰されて腐る子だっている。そう思うとベルを拾ってくれたのがヘステイア神だったのは感謝してるわ」

「そ、そう?」

「あとは生活面でしつかりしてくれれば。特にご友神に借金をしたとか、それが無いならいいんですが」

「だだよねえ! そうホホイホイホイお金を借りるのはいけないよねえ!!」

ヘステイア神、動揺し過ぎ。暗に釘を刺したただけだから。ほら、ベルが困惑してる。「それはそれとして。そんな連中は冒険者として形になって来た新米を狙ってくるの。駆け出しよりは懐具合がいいって感じにね。逆に甘い囁きでそっちに引き込まうとする事だつてある。悪意つてもものが近づいてくる」

「悪意……」

「ベルはそんなのは否定的だから引き込まれる事はないと思つてる。狙ってくる相手には逃げるか返り討ちにすればいいしね。あ、返り討ちはできる?」

「え? まあ、多分?」

「どっちでもいいけど。——その上で私からもう一つ、矛盾を伝えたいの」

真つすぐにベルの瞳を見て、この子の夢に言いたい。

「そんな悪意の中でも、助けたい物があるなら迷わず助けなさい。私は、ベルが自分の心を押して殺して苦しむのは望まないから、ね」

ああ、我ながら矛盾してる事を言つてる。悪意から逃げろと言つたのに悪意を助けてもいいと言つてるんだから。でもベルは助けたいと思つたなら助けるために動く。迷うことがあつても最後はその決断をする。でも時には早く決断をしなきゃならないことだつてある。

この言葉はその背中を押させるものだ。あとはベル自身で進むべきこと。

「と、小難しく言ったけど後悔するなつて事よ。迷つてちや掴める物がなくなるわけよ。ちやんと心に留めておきなさい」

「……うんっ！」

「ところで食後のデザートは？」

「頂きます!!」

とりあえず今はおいしい料理を食べておきなさい。

そして翌朝。食後は普通に隠れ家に帰った私。どこに神の目があるかわからないし、暗いうちに帰るのが一番だしね。あとハンモックを吊るせるにはボロそうだった事もあるけどね。重くない、と言えないのよねえ、尻尾や翼があるし、鱗も硬く鋭い分重し。女として複雑だわあ……。

そんな気持ちでハンモックに揺られた訳だけど、一睡もすれば気分も晴れた。結局は女共通の悩みは女一生の悩みだからね。

と言う訳で。

「——華」

「戻ってます」

ハンモックの上から戻ってきていた華を見下ろす。彼女はいつも通り姿勢正しく、直立していた。

「わかった事は？」

「リリルカ・アーデの居住と正体です。彼女は「ソーマ・ファミリア」の拠点ホームではなく人気がない小屋を住みかとしてます。加えて彼女は小人族バルウムでした。どうやら変身する魔法を発現しているようです」

「へえ」

変身魔法か。あの魔法とは違うだろうけど、なんだか懐かしいわね。

「他には」

「住み家に戻るまでは周囲を警戒していました。途中、声を拾いましたがどうやらファミリーアの冒険者から金銭を巻き上げられているようです」

「……ふうん」

「不快ですか？」

「少しは」

「これでも二大勢力の一翼だった【ゼウス・ファミリア】の冒険者だった私だ。そんな事をするなら冒険しろと言いたい。同情でも良心でもなく、ただの傲慢だけだね。もっとも、私が言っても説得力がない事か。」

.....

.....

.....

「これは、酷いわね」

私は〈天狗の面〉を被つて「ソーマ・ファミリア」の本拠地に堂々と足を踏み入れていた。そして音を立てず飛んで静かに降りて侵入した。

でもこつそり入ったけどここは人の気配がなかった。一応は探索系ファミリアみたいなものだけど本拠地に1人も残さないのは不用心過ぎる。資金や秘蔵品なんかは貸し金庫とかで保管できるから空き巣対策はできるけどこれはそんな問題じゃない。考えるにこれは眷属全員がダンジョンに出稼ぎに出ているという事。つまり、お金を手に入れようとしている。

もちろん誰かいる可能性も残して〈天狗の面〉は使用した状態で中を搜索する。でも内部を深く探しても手がかりと呼べるものはない。寧ろ生活感が薄い。もしかしたらここを住まいにしていけない可能性が出てきた。でも、ここにはいるはずだ。確実にいる存在が。そんな確信を抱いて搜索を続け、そして見つけた。

酒の神ソーマ。ここの主神である男神。そんな御方が庭で一人畑を耕していた。

「……お邪魔しています、ソーマ神」

「ん、いらつしやい」

挨拶と同時に〈天狗の面〉を外して虚を突いたつもりだったけどソーマ神は挨拶一つに作業を続けている。興味なし。15年前聞いていた神物像しんぶつざうと変わらず興味だけしか興味がない様子だ。いや、変わってるか。ファミリアがね。

でもソーマ神しん自神は変わらないはずだ。

「酒の材料を育ててるのですか？」

「ああ」

「それはもう日課に？」

「毎日だ」

「それ以外に時間を使うことは？」

「ない。あるとすれば酒を造ってる」

「変わらない、本当に15年前と変わってない。思わず拳に力が入る。」

「そういえばファミリアの運営は誰がやっています？」

「団長のザニスに任せてる」

ザニス。ギルドの資料じやフルネームがザニス・ルストラで確かLv. 2の【酒守】ガンダールウアの二つ名を持つ冒険者と記憶してるわね。つまりその男が今の現状を引き起こしてる張本人。つまりこの男を狙うべきか。

その後、他に知りたい事を質問して言った。ソーマ神の立ち位置、酒ソールを賞品にしてる事、これを餌に団員たちを煽っている事、そこに【酒守】が上手く手綱を操って掌握している事。これらの事で私は、頂点に達した。

「ソーマ神、無礼をいたします」

「あ——」

ソーマ神からの返事は、文字にすれば短すぎる声は最後まで聞かなかつた。

『無礼をする』と言った直後に、私の拳がソーマ神の横っ面を殴りつけたからだ。

拳に込めた感情

ソーマ神の体が宙に浮き、しかし情けで畑に落とさずにしてやった。ソーマ神の体は何もない平地に落ちて更に滑っていく。そして顔を上げた所で私の感情が噴いた。

「最低だよあんたは！ それでも一介のファミリアの主神!? 自分は趣味に没頭して眷属は放ったからし!? 酒が造ればそれでいいの!? だったらどこかのファミリアに頭を下げなさいよ!! 資金を出してもらえればそれぐらいできるでしょう!! それだけであんたは満足できるでしょう!!」

頭が真つ白だった。自分の言葉なのに何を言っているのか全くわからない。感情が私を支配していた。

「いつから眷属ことどもの顔を見てないのよ!! いつから眷属ことどもの声を聞いてないのよ!! そのせいであなたの眷属ことどもたちが暴走し、醜く愚かに走ってるか知ってる!? 日の下を歩けなくなっている眷属ことどもたちがいる事を知ってるの!? あんた、この「ソーマい・ファミリアえ」の主神ちちおやなんでしょうが!!」

しかし感情はわかる。どうしようもない怒りだ。私は「ゼウスい・ファミリアえ」が好き

だ。スケベなゼウス神を尊敬し、眷属なにかまを愛していた。

だからこそこの「ソーマ・ファミリア」の現状は許しがたかった。身勝手なのはわかってる。他のあり方に口答えするなんてお節介と片付けるよりも余計なお世話だろう。でも、我慢できない事もあるんだ。

でも言いたい事は言った。そのおかげで頭の熱は冷めた。ただ謝る気はない。神相手に何をしているのかと思われるけど、ある意味で問題は無い。

「……………」

殴ったソーマ神の声が聞こえる。弱々しくも意思を感じさせるものだった。でも無気力な感じは変わってないけど、それでも表に出てきたものが感じられた。

これは、失望感だ。

「簡単に、酒に溺れる子らなど……、薄っぺらい」

この言葉でソーマ神の心を私は知った。この神は幻滅しているのだ。自分の眷属を哀れみ、そして見切りをつけた。神酒ソーマの信者達に褒美をちらしつかせて利用するだけになっっている。悪意も害意もなく、無関心なだけ。ソーマ神は趣味神だ。つまり、趣味で培ったものしか与えてやれない。この神も最初は自分なりに眷属こどもと向き合おうとしたんだろう。しかしそれは彼の描いたことにはならなかった。そこに害意も悪意もなく、しかし興味もなく無関心。それでも、失望するほどのものだった。

でも、同情なんてしない。

「無礼は続けさせていただくので敬語は使いません。——あんたの気持ちは分かった。でも私は下界生まれだから見て見ぬフリは出来ないのが私の気持ちよ。ハッキリ言うど、あんたは変わってもらいたい。最低限、眷属こどもを見るくらいにはね」

「そんな……」

「今更、と思うのはわかってる。でも、変わるよりも動かないといけないのかもね」

「……なに？」

「あんた、このままならお酒造りが出来なくなるわよ」

この言葉にソーマ神がさっきの様子とは打って変わって機敏な反応を見せた。さすがにこの事は聞き流せない事の筈だからね。縫ぬう様に立ち上がってはこっちに走り、しかし混乱しているのかすぐ目の前で足を滑らせて膝を折った。それでも顔を上げる力はあった。

「どういう、ことだ？」

「少しは自分のファミリアの風評を聞いた方がいいわよ。今、【ソーマ・ファミリア】の冒険者たちは金策で強引な手を使って、それは魔石を換金するギルドにも及んでるわ。今までは必死過ぎるって思われる程度だけど、不審に思うには十分。もしこの現状がギルドに伝わったならその原因になる神酒ソーマの製造を止めるのは必然。そうは思わな

いっ。」

この予想を否定できないのか生気のなかったソーマ神の顔が青くなつた。ギルドが中立の立場を貫くならその体裁を保つには、問題行為を続けるファミリアにペナルティ罰則を下すだろう。

本当ならこんな情報なんて言わず、落ちるなら墜ちろと思つていた。思つていたけど、教えるあたり私も甘いわね。

「どうすれば、いいのだ？」

「冒険者の暴走を止める、と言つても無理でしょう。あんたは自分の眷属こどもに失望している。そんな相手にはやる気も出ないでしょう。ただね、その失望感を解消してくれる出合いが今起きてるの。これに賭けるなら手を貸してあげる」

「出合い……？」

「ただこの出合いがどう転ぶかは結果次第。良ければあんたは変わり、悪ければあんたが変わる事はないでしょう。その時は——」

私はソーマ神の口元を掴み、視線を強引に合わせて告げる。

「私があんたのファミリアを解体しに来ると思いなさい。でも最低限、お酒造りが出来るぐらいまでには留めておく。脅した上で聞くわ。あんたはこれに乗る？」

でもこの神は乗るだろう。脅えでも希望を見出したわけでもなく、神酒ソーマを作り続けた

いがために。

|| || || || || || || || || ||

ギルド本部・窓口

|| || || || || || || || || ||

「たったの12000ヴァリスだど!? 全然足りねえ! あんたの目は節穴か!!」

「馬鹿言ってるじゃねえぞこの野郎!! 俺が何年この仕事で食っていつてると思ってるんだ!! そんなに不満があるならドロップアイテムぐらい自分で売り付けに行きやがれ!!」

換金所スペースから聞こえるのは職員と冒険者の言い争いだった。それだけなら今までにもあるありふれたものだった。問題は、冒険者が「ソーマ・ファミリア」の団員だということだった。

「ほらエイナ、また【ソーマ・ファミリア】の冒険者だよ」

「……………」

同僚で友人のミイシャが嫌そうな顔をしつつも騒ぎの場所を見ていた。私も眉がひそめてるぐらいはしてるだろう。それほど「ソーマ・ファミリア」は異常だった。しばらくしても冒険者は鑑定職員に怒鳴り散らしている。対して職員も負けじと適正価格だと妥協しないのは同僚として立派だと思う。

だからこそ、ベルくんのアドバイザーとして一緒にいる「ソーマ・ファミリア」のサポーターの存在が気になった。改めて早まったかもしれないと思い始めていた。

「調べた方がいいわね……」

「ん、何か言った？」

「ううん、なんでもないよ」

声に出ちやっただわね。とりあえずギルドの資料から探った方がいいわね。それで情報を得られればいいんだけど。

「失礼。エイナ・チュールちゃん」

「え？」

「あれ、どなた？」

いつの間にか目の前に人が着ていた。全身を覆うようなマントを着ているけど、この人は……。

「あ、カレンさん」

「いや、その職員がいる場所だけ教えてもらえばいいから。実を言うところ以上関わると面倒だから」

「と、言いますと?」

「聞かない方がいいわよ。エイナちゃん、貴方はギルドに用事があつた元冒険者に聞かれた事だけを答えただけ。いいわね」

「は、はあ」

「じゃ、その職員がいる場所を教えてください」

腑に落ちない事はあるけど個人に対する詮索はダメだし、私は職員の居場所だけを教えた。カレンさんの忠告で深入りしなかつたのは、明日になって思い知るのだった。

|| || || || || || || ||

とある酒場

|| || || || || || || ||

「チクシヨウめえ!! もう一杯」

「これヘスティア、ペースが速いぞ」

やれやれ、ヘスティアに付き合わされたと思えばベルが浮気をしていたのだと叫ぶ始

末。もつともあのベルがそんな事をするような子ではないし、おそらくはヘステイアが早とちりをしているのだろう。今は聞く耳はないだろうが。

「くうう……、今日も頑張つて働いてベルくんに飛び付こうと思つてたのに……」

ああ、原因はこれであるな。慣れぬ事の疲労で思考が曖昧になつておるのだな。これなら一晩すればすつきりするだろう。ただ酒の量から二日酔いは確実だろう。

「くそう！ ただでさえあの子がいるつてのに、いるつてのに——！！」

「あの子とは誰だ、ヘステイア？」

「ベルくんの血の繋がつてない叔母さんだよ！ いつも僕の事を……、息子に近づく女を見定めるおかんの目をしてるんだよおおおお!!」

ほお、ベルの叔母がいるのだな。血が繋がらないという事は親戚と言う訳ではないのだろうが、このオラリオだと同じファミリアを家族である。おそらくだがベルの両親がその叔母と同じファミリアに所属していたと考えるべきだろう。ただこれ以上は考えるのをよそう。ベルがヘステイアの所にいるという事はそういう事なのだろうだから。

「うおおおおおおお!! どうかベルくんを僕に——！！」

「これヘステイア！ また——」

「何やつてるんですか」

「いぶつ!」

また叫ぼうとしたヘスティアを諫めようとすると、その背後で何者かが止めた。チヨップで。

その者は女性で、戦士のような戦闘服バトルスーツをまもっていたがその上にマントを羽織って全身を隠している。これではダンジョンでは動きづらそうであり、それはまるで姿を隠しているかのようだった。

その理由はヘスティアの一言で理解する。

「げえ!? 竜 人くん!」

「こちらヘスティア神」

ドラゴニユート
竜 人。

それはこの世界でたった一人の種族であり、同時に個人を占める名称。

カレン・デュラス、もしくはは「財宝竜」ファズニル。「ゼウス・ファミリア」の生き残りで「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」に単身で襲撃し、そして勝利した者。その彼女がヘスティアの頭をチヨップした。

「おい、竜 人って……」

「本人?」

「よく見りゃ羽や尻尾があるぞ」

【ファウニル財宝竜】「って確かすげえ武具や道具を持つてるんだよな？」

「うちの神様のめっちゃ噂してたぞ」

「15年前で二大ファミアを……」

「いかん、ここの冒険者たちが気づいてしまった。これを治めるのは……」

「——私が来たことを秘密にするならここを奢る上に高級のお酒をあげるけど、どうする？」

そこにカレン・デュラスの一声。その一気に静まり返る酒場。その直後に店主に向かって袋を投げつけ、更に酒瓶やら酒樽などを何も無い場所から出現する。沈黙は了承と受け取ったのだろう。しかしこれが噂に聞く収納魔法と言うものだろう。

「いいものは早い者勝ちよ！」

『『うおおおおおおおおおおおおおおおお!!』』』

そしてもう一声で冒険者たちが雄たけびを上げて彼女の出した酒に群がっていく。しかし早い者勝ちとは言うがこの数、十分すぎるのではないか？

「騒がせて申し訳ございません。確かミアハ神でしたか？」

「あ、ああ、ミアハだ。ヘスティアの友神ゆうじんでもある。【青の薬舗】でポーシオンなどを売ってる商業系のファミアだ」

「初めまして。ご存知でしょうかが私はカレン・デュラスです。好きにお呼びください」

丁寧な女性であるな。これで能力もあるのだから15年前以前からいる神たちが騒ぐのも無理はないことではあるな。

「ねえ竜人くんっ！ ボクにも一杯くれよ！」

「仕方がありませんね。これでもどうぞ」

「おおうつ、ありがとうございます！」

ヘステイアにせがまれ、また新たに酒を出現させた。今度は瓶に入った飾りつきの酒であった。

酔ったヘステイアは銘柄などは確認せずはすぐ開封し、コップに注がず一気に呷った。

「ぶっはあ！ なにコレ！ すっごく美味しい!!」

「そうでしょうね。これは奢りですので遠慮なく!!」

「ありがとうございます！」

さっきまでの落ち込みはどうしたのだ、と言いたいほどに上機嫌になったヘステイア。それだけあの酒が美酒なのだろうな。

「よい酒なのだな」

「それはそうですよ。なんとたって」

何気に聞いた事だったが、何故か耳元で答えた。

「ソーマ神をこっさり連れ出した時に頂いた神酒ソーマの失敗作ですから」

……酔いが冷めた気がした。

空が見えない場所で

私がソーマ神を連れ出したのは『追い込み』が目的だった。

今の「ソーマ・ファミリア」の中心にあるのは神酒だ。それを【酒守】ガンタルヴァの手により眷属たちを動かしてる。暴走しているのに動かしているのは誤りかもしれないけど、彼自身の目的が達成できている前提としておく。そう、前提だ。何事にも前提はあるもの。それは現状を支える柱にもなる。

だからこそ、神酒ソーマを【酒守】から奪うとどうなるか。眷属たちは【酒守】を支持しているわけではなく、神酒ソーマを信奉しているだけだ。そしてそれを得るために金策に走り、買取の値上げや他の冒険者やサポーターの恐喝にまで及んでいる。なら今、その神酒ソーマがないならどうなる？ 【酒守】は追い込まれて今の「ソーマ・ファミリア」は分裂するだろう。行き過ぎたら壊滅するから、その歯止めは重要だけどね。

正直、【酒守】に团长としての器が欠片でもあるならこんな状態でも上手くやる事だつてできるんだだけどね。元々、この一手は長期を見越しての手だ。神酒ソーマの酔いが冷めて、しかも神酒ソーマどころかそれを作り出せる主神もないその場所にい続けようとする者が、果たしてどれだけいるのでしょうか。

【酒守】に出来る最善の手は、主神不在を直に伝えて金策を凍結させる事。逆に最悪の手は、主神不在を伝えず問題を後回しにする事でしようね。

「ソーマ・ファミリア」
 拠点^{ホーム}

「クソツ!! ソーマめ、空けるなら酒ぐらいは置いていけばいいものをつ!!」

あの趣味神が書置きを残してから3日が経った。そして今日は「ファミリア」の団員から金を徴収する集会の日だった。だかしかし、お金は集まらなかった。理由は単純。ソーマの不在と酒がない事を知られたからだ。徴収し始めようとしたところでチャンドラが「酒の匂いがしない」と呟いたせいで疑われ、そして強引に中に押し掛けた下級冒険者どもでそれが事実だと知られた。結果、団員たちは金を渡さずに帰ってしまった。

「クソツ、クソツ!!」

力の限りで机を叩くとその悲鳴がわずかに聞こえる。集めた金で買った高級品だったが関係がない。それにソーマを連れ戻せばまた新品が買えるのだから。

「……そうだ、そうすれば元通りだ」

すぐに行動を始めなければならぬ。幸い私に近しき者たちには神酒ソーマを融通していたことで離れることはないし、去っていった冒険者共も見つけたのなら神酒ソーマも「ステイタス」の更新も好きに与えればいい。その間の徴収は止めておけば反発もないだろう。

まだ取り戻しは出来るのだ。焦る事は、ない。

アイツはもうダメだな。それが擦れ違いざまにみたザニスへの言葉だった。

あの時、いつもと違って酒の気配がなかったから出し惜しんでるんじゃないかと思つて呟いたが、まさか主神がいなくなつてゐるなんて思わなかったぜ。でもザニスの野郎が金を集める前だったから良かったけどな。何事もなく集会を進めてたあたりあいつ、金だけ集めて酒も更新もする気がなかったみてえだし、俺以外にもそう思つてゐる奴らは多いだろう。

「さて、俺はどうするかな」

神酒^{さけ}を求めて来て、そしてこのファミリアに入団したまでは良かったがザニスのせいでロクにありつけなかったからな。主神がいなくなつたなら今度はいつ飲めるかわからなくなる。俺も探してもいいが、結局はザニスに見つかつてこれまで通りになるだろうな。なら探さない、が最善だな。幸いなことに俺はザニスと同じLv. 2だからアイツは強く出てこない。そもそも実力だけならロクにダンジョンに入つてねえアイツより俺が上だ。ただファミリアの運営する頭がねえから団長を張つてねえだけだからな。しばらくここを離れた方がいいな。しばらく安酒を煽る日々になるだろうな。とりあえずは、馴染みの店にいくかな。

|||||

ギルド所有の倉庫・地下室

|||||

「——以上が【ソーマ・ファミリア】拠点^{ホーム}、その集会後の様子でした」

「そう、わかつたわ」

「【ソーマ・ファミリア】の集会に華を行かせ、その顛末をたつた今確認した。」

まさか悪手を使うなんて、ガンダルヴァ【酒守】は団長の器じやなかったわね。良し悪しあっても眷属、団員の手綱を操れていない。寧ろ握れてすらいないわね。これで【ソーマ・ファミリア】の内部はガタガタになるわね。それはそれで早く片が付くからこつちとしてはいいんだけど。

「はい。それでその方がソーマ様ですか？」

「そうよ」

入り口辺りにいる私達よりも部屋の奥、そこに僅かな光の中で黙々と作業を続けるソーマ神がいた。ここに来てても趣味を続け、いや没頭している。でも私にそこまで止める権利はない。あの方と私の間にある賭けとこの場での行動は関係ないから、止める事は出来ない。

「何と言いますか、職人と言う神様ですな」

「いや、純粋な趣味神よ。だから眷属ことどもが暴走してるのよ」

「なるほど。だからカレンは動いたのですね」

「さっきの言葉でその言葉が出る根拠は？」

「私はカレンほど、ファミリアと言うものを大事にする人を知りません」

「言うわねえ」

「浅い経験ですが、このくらいは言います」

この程度で私の評価を断言されるのはちよつとアレだけど、その評価は気分がいいから訂正はしたくなわね。

「次は何をしましょうか?」

「そうね。じゃあソーマ神のそばにいてもらおうかしら。万が一、私と一緒にいるところを見られたりしたら他の神々がちよつかい出すか、変に勘繰られるでしょうし。私はベルの所に行くわ」

「わかりました」

「よろしく。それと、ソーマ神」

あえて会話に誘わなかったソーマ神をここで声をかけた。反応してくるかは賭けだったけど、ソーマ神は反応して作業の手を止め、こちらに顔を向けてくれた。それを見て私は距離を近づけ膝を折る。

「もうしばらく付き合つて貰います。必要なものがあつたら華に伝えてください」
「わかった」

「それと、これは気分転換にでもどうぞ」

ソーマ神の手が届く位置に、1本の瓶を置いた。

「それでは、失礼します」

そして静かに、この場から去つていった。

「んん？」

地下を出てきたのはいいけど出てみれば結構な時間になっていた事に気付き、でも折角だから廃教会の所まで足を運んだ私だったけど、そこに真新しい足跡を見つけた。この辺りは瓦礫も多い事もあって整備されることなく、おかげで砂も所々に散っている。それは風が吹けば飛ぶくらいだから、足跡が出来たならそれは新しい足跡だ。それが廃教会から出ていた。しかもブーツの跡だ。ヘスティア神はサンダルだったからベルの足跡なのは間違いない。

「もしかしてダンジョンに？」

.....

.....

.....

まさかとは思ってるけど、ありえないとも考えられない。【リアリス・フレイゼ情懐一途】で成長しているのは知ってるけど、もしそれが更に大きな力を与えたなら興奮して行つた可能性がある。

なんでここまで確信が持てるかつて？ 『あまり夜更かしをしちゃダメよ』つて教え込んだから。

「行つてみるか」

アマイヌ天狗の面を取り出し、すぐに被るや空を飛ぶ。そろそろ明かりも減つてきた街並みをそこそこ見下ろしながらバベルへ到着した。最近、ここまでの距離まであつさり到着する自分に呆れるわね。昔は時間をかけて到着してたのにね。

この際だから地上に足を付けないままバベルの中へ、ひいてダンジョンへ通じる大穴へ飛び込む。人が少ないから今は飛びやすい。夜中だからできる事ね。姿を消してても移動する際に起こる風で存在は気付かれるからね。でもこの先に仮面はいらないだろうから外してしまう。

ベルの姿を探して1階層を飛び回り、見つからなかったらすぐに下の階層へ。そうして2、3、4階層まで確認して5階層へ。そこでようやく姿を捉えた。

「見っ——」

けた。とは続かず蛇腹剣ガリテを抜いた。狙うのは倒れたベルを狙うモンスター。一撃は

必殺の一刀を。十分な間合いと油断のない構え。

でもすぐにまた別の気配を察し、その先を視界に収めた。それを見て、攻撃の手順をすぐに変更。モンスタアの半分を譲った。私がモンスタアの半分を刻み、彼女もモンスタアの半分を切り伏せた。

蛇の様に刀身を伸ばすガリアを元に戻し、彼女と改めて向き合う。

「偶然ね【劍姫】ちゃん。探索の帰りかしら？」

「うん、そんなところ。貴女は？」

「ちよつと身内を探しに来ただけ【劍姫】ちゃんには手を借りちゃったわね」

「身内って、もしかして……」

「うん、あの子の事」

「【劍姫】ちゃんナイン・ヘルの視線の先、【九魔姫】の彼女がナイン・ヘルが看ているベルの事だ。

「私から聞くのはどうかと思うけど、その子の様子は？」

「外傷もなく治療や解毒の必要性もない。典型的な精神疲労マインド・ダウンだ。カレン、お前の知り合

いか？」

「義理の甥よ。それ以外なら【劍姫】ちゃんが知ってると思うけど」

「お前の甥だと。それにアイズ、お前もこの子を知ってるのか？」

「直接話したことはないけど、前に話したミノタウロスの時の……」

「……なるほど。あの馬鹿が謗った少年か。いや、それなら合点がいくな。あの日、わぎわぎカレンが手を出したのはこの子の為だな」

「確信が持てたなら質問はいらないわ。でも肯定よ。もつとも、ヴアナルガンド【凶狼】の態度も気に入らなかつたのも事実よ」

「耳が痛いな」

もちろんそういう風に言つたんだから。

そしてベルはマインド・ダウン精神疲労による気絶。つまり魔法が発現したって事か。流石にこれは上手く転がり過ぎてる。何よりリアリス・フレージェ【憧憬一途】は早熟する事で会って魔法発現はほぼ関係がないはず。誰かが横やり、いや心当たりがあり過ぎるわね。

「……あの」

「ん、何？」

「私、この子に償いがしたいです」

「償い……。アイズ、言いようがあるだろう」

「私もそう思うわね」

償いって、貴女が悪い事をした訳じゃないのだし。それに私がいる以上、このまま連れて帰るのもアリ、何だけど。

「……………」

この子、ちょっと鋭くなってるわね。よく見たら防具もボロボロだから激戦をしてきた筈ね。何より、器を超える気配が感じられる。

「わかった。【剣姫】ちゃんが満足するならしていいわ」

「うん、ありがとう」

「ならアイズ、アレをしてやるといいだろう。償いならそれで十分だろう」

「……そんな事でいいの？」

「ちよつと、アレって何よ」

「アレはアレだ。十分な償いになるだろうし、アイズなら喜ばない男はいないからな」

……なんとなく予想はつく。でもベルにそれはどうなんだろう？ いや、これは面白

そうだから黙ってよう。

「私も【剣姫】ちゃんが満足するなら、つて言ったからどうこうは出来ないわね。任せるわ」

「そうしてくれ。それと私は戻るが、一緒に行かないかカレン。少し話がしたいからな」

「あら、勧誘？」

「ロキが喜びそうだが違う。純粹に話がしたいだけだ」

「それなら安心ね。どう逃げようと考えてたわ」

「それはないはずだ。なんだかんだでお前はウチに親しくしてくれてるからな」

「あらそう?」

「そうじゃないならこの前の決闘の様にすぐ逃げてるはずだ」

あの時か。さすがにあからさま過ぎたみたいね。

まさかここでカレンと出会うとはな。しかも上手く話が出来た状況になったのも幸いだ。その彼女は地上に向かいつつ、蛇を思わせる剣で出てくるモンスターを倒し、且つ魔石やドロップアイテムを回収していく。

「それで私に話して?」

しばらく様子を見て黙っていたが向こうの方から話しかけられてしまった。タイミングを掴もうとしたがどうも失敗したようだ。ここは正直に答えるか。

「すまない。誘っておいてどう切り出そうか考えていたんだ。気を悪くしたなら謝る」
「気にしないわよ」

「そうか。焦らしてすまないが単刀直入に尋ねよう。カレン、お前はそれほど「ロキ・

「ファミリア」に悪感情はないはずだ。寧ろ入団してもいいと考えてないか」

何を聞いているんだと、自分でもそう思う。しかしこれまでの接触や彼女の振舞いを見ていてはそんな仮説を立てざるをえなかった。もし外れたなら笑われるだろう。そしてカレンは笑顔で、静かに手を止めた。

「思い切って聞いたわね。何がその考えに至らせたの?」

「お前は私たちのファミリアにプラスとなる影響を与えてるからさ。ベートはお前の言葉を訂正すべく鍛錬している。テイオネはお前を否定しながらも認めて自分を磨いている。アイズやテイオナはお前の武器を見てその為の実力を付けようとしている。レフィーヤはフィリア祭に助けられた事と、自分も数えて激励して貰った事で自信が付き始めて来ている。次世代の皆にはいい傾向だ」

「ふうん。でも私が入団しない理由はあるのかしら?」

「フィンの事だろう」

この名前を出すとカレンから笑顔が消えた。やはりフィンとの関係が鍵だったな。酒場の一件でフィンだけにあれだけ明確に拒絶するように言ったのだから。昔は名前ですんでいたのに、帰ってからは二つ名を呼ぶようになったのだからな。

「……彼にその事は言ったの?」

「言わなくてもあいつは自分が原因だと理解していただき。前に嫌われてしまったって零

していたしな」

「……あのヘタレめ」

今、ものすごく珍しい評価を聞いたぞ。お前、フィンの事をそう思ってたのか。

「そしてお前がフィンを嫌うきつかけになつた時期も予想ができる。15年前の襲撃の頃だろうか？ さすがにあの後からオラリオに来ていたとは思えないからな」

「まあね。あんなことを仕出かしてすぐオラリオにいるなんて、そんな気分じゃなかつたし。それで、貴女はその日に何があつたのか聞きたいのかしら、【九魔姫^{ナイン・ヘル}】」

カレンから不機嫌とわかる声で尋ねられる。どうやらこの話題はあまり触れてはいけない物か。ただ感情は抑えられている。話を止めるほどの事でもないが、真つ向からは聞かれたくない事か。

「いや、確認だけだ。女にとって過去を詮索されるのはいい気分ではないからな」

「ならいいわ。それなら女同士のよしみで1つ。聞くな^{プレイヤー}ら【勇者】に聞きなさい。ヘタレな彼の尻でも蹴つてくれると私としても気が楽だからね」

「隠さないのか？」

「男が1人で女性との問題を解決しようとするのが馬鹿なのよ」

本当にすごい言い様だな。間違いなくフィンをここまで言うのはカレンしかいないだろうな。でも言い分は共感できるところもあるから否定もできないな。

「その言葉、しかと聞いた。その件についてはフィンに尋ねよう」

「そうしてちょうだい」

「この話題はここままでだな。それでさっきのあの子、お前はあの子を義理の甥だと言ったな。それはつまり——」

「あー、そこは言葉通りだから。わかっているなら言わないでちょうだい。昔の肩書でもまだ結構な力があるからね」

ん？ ……ああ、確かにそうだな。

カレンの義理の甥という事は「ゼウス・ファミリア」の眷属だった誰かの子供という事だ。そしてあの子の後ろにカレンがいるという事になる。しかしそう言った噂は聞いていない。これは流していないのが正解だろう。

追放されたとはいえ前・二大ファミリアの一翼の「ゼウス・ファミリア」の眷属の子供だ。素質の可能性は大いにある。神々からの引き抜きが行われるのは目に見えてるな。ロキはカレン目的で引き抜くだろう。

しかし、つくづく私たちは「ゼウス・ファミリア」の関係者と接触している。カレンとあの子、面白い関係だな。

「と、話しは()までね」

カレンが唐突にそんな事を言ったが、正面を見ればすでに地上へ通じる大穴が見える

距離だった。確かに話は終わりだな。

「そうだな。また機会があるなら話をしよう」

「今みたいなのはそうないと思うけど？」

「アイズがあの子と縁を結んだならその機会は出ると思うぞ」

「縁、ねえ。フフツ」

笑った？ 何かおかしな事でも言っただろうか？

「ならその日を楽しみにしましょうか」

「ああ、そうしてくれ」

「それじゃお先に」

カレンは翼を羽ばたかせて浮かぶと先に地上へ向かって飛んで行った。早いな。私はゆっくり拠点ホームに帰るか。

そしてアイズが帰って来た時、この時のカレンがなぜ笑ったのか知って私も思わず笑ってしまった。

【酒守】が遭遇したモノ

私はファミリアの主神としては最も酷いのだろう。

初めは酒を造るための資金を集めるためにファミリアを立ち上げた。だがそう簡単には集まる訳でもない。だから酒の完成品をより集めた子に与えるようにした。そして子らはより完成品を求めるになった。そうするとこれを求めて外から多くの子らが集まってくる。

しかし私にそれだけの子らを管理する程の時間を割くことはしたくなかった。その分だけ酒造りの時間が無くなるからだ。そこに当時一番に頭角を現していたザニスが団長を名乗り出た事で全てを任せる事にした。ザニスの方針により酒造りに必要以上のノルマが定められ、酒を与えられる上位者も限られていった。そして虐げる子、虐げられる子が出てきた。それでも私は何もしなかった。

酒を求め、集まり、競争となり、蹴落とすようになった。あまりにも醜く、愚かな姿だった。いつしか酒は神酒ソーマと呼ばれるようになった。私の名が使われたのは皮肉だろう。ソーマ私ではなくソーマ酒のファミリア。確かに、その通りだ。

『最低だよアンタ!!』

確かにそうだろう。私は流されるままに今の現状にした。酒に溺れる子供たちに絶望し、しかし私は傍観し続けた。何をすることもなく、どうするべきなのかもわからず、ただただ時間だけが過ぎ去った。それが今の拠点^{ホーム}、私のファミリアの形。

それでも私は趣味を続けた。言い訳に聞こえるだろうが私にはこれしかない。下界の私が出るのはこれだけなのだ。これでしか子供たちと関われない。そしてこれ以外に興味もない。だから私は、これだけは失いたくない。酒を造れなくなってしまうば私はどうなるだろうか？ 想像は出来ない、いや想像したくない。唯一のこれだけは失いたくない。

その想いだけがカレンの賭けに乗る理由だった。

「——悩み事ですか？」

「なに？」

「手、止まっていますよ」

手元を見れば道具を握り、今まさに酒を造っている最中だった。しかし時間を置き過ぎたのか変色を起こしている。これでは失敗作より劣る。これ以上の作業は無意味だな。

「考え事ですか？」

「これまでの事を、思い出していた」

「何か感じますか？」

「……恐れがある。酒を造れなくなる恐怖だけがある」

「そうですか」

問われ、答えた返事はあつけなかった。いつもの私には聞き流すほどの物だったが、現状が現状。そしてカレンの関係者にしてはあまりにも無関心――。

いや、無関心だったのは私だったな。

「聞きたい事がある」

「なんででしょう？」

「お前は、なんだ？ 下界の子なのか？」

「？ そうですか」

その答えは嘘、と思いたかったが嘘についてはいない。カレンと同じ、嘘が見抜けなかった。そもそも人なのか？ ヒューマンの外見しているがヒューマンの気配がない。他の種族と言う訳でもなく、魔法や魔道具マジックアイテムを使つてる様子もない。そもそも、人なのか？

「しかし、カレンから貴方は趣味神と聞いてましたのに私の事を聞いてくるとは。心境に変化でもありましたか？」

「……わからない。そんな気はない。だが先も言ったように恐れがある。それが今までに見えていなかった物が気になるのだろう」

「不安から警戒心が上がってるという事ですね」

その通りかもしれないな。

「ところで用があつたのではないのか？」

「はい。そろそろこの場所が見つかりそうです。ただギルド経由でこちらの建物を、貴方の名義で借りてますから襲撃でもされましたら間違いなく問題行為ですね、とカレンから聞きました」

「そうか、それが狙いか。もしザニスが強引にでも押し込めばギルドから処分が下るだろう。私は狙われた側として情状酌量の肩書を貰える、という事か。ただ、

「ザニスはL.V. 2だ。そして数人の部下も来るだろう。もしカレンが戻って来ない内に来たなら、お前は大丈夫なのか？」

「その程度なら問題ありません。今はL.V. 2程度のモノですが」

「……ああ、そうか。今の言葉でこやつ^のの正体がわかった。まさかの話だが、それなら今までの気配にも説明がつく。」

「もう一度、言葉を変えて聞くがいいか？」

「はい」

せた方がいいだろうしね。

「貴方、ウラノス神の使いでいいのかしら？」

「私は彼の友だ。もっとも動けない彼に代わって動いている。使いとしては間違っていない」

「そう。それなら素性は聞かないわ。本題を聞かせて」

「ダンジョン24階層でモンスターの大量発生が確認された。自然に起きた現象ではない。何者かの関与がある」

「異常事態？^{イレギュラー}」

「ああ。すでに冒険者の多くが犠牲になってる」

その言葉に食事の手が止まった。

「気になるか？」

「まあね。冒険者として生き死には自己責任だけど、いい気はしないわね。そんな私に頼むのはその解決かしら？」

「いや、他にあるファミリアに頼む。問題の解決はその者たちと行ってもらいたい。その合流までお前にはモンスターの進行を食い止め、これ以上の被害を止めてほしい」

「それはいつまでやればいい？」

「数日、3日前後ぐらいだ。そのくらいは容易いだろう」

確かに中層のモンスター程度の大群なら足止めぐらいできるわね。そして本命はそのフアミリアの冒険者たちみたいだし、私の役割は露払いね。

「そのフアミリアの冒険者たちだけじゃ戦力が足りないの？」

「戦力は足りる。だが間違いなく多くの犠牲が出る」

「……へえ」

「勘違いしなくても構わない。だからこそお前の力を借りたいのだ」

「私が帰ってきてなかったら？」

「……」

だんまり、か。私がいなくても調査はするつもりだったか。それだけ危ない事態になってるか、はたまたその影にいるのが危険な存在がいるのか。

……よし。

「その緊急^{ミッシェン}依頼、やらせてもらうわ」

「感謝する」

「ただわざわざ依頼に来たなら私が今している事は把握してる筈よね」

「【ソーマ・フアミリア】の件だな。手を貸してもいいが、表立って手助けは出来ないぞ」

「わかってるわ。ただそろそろ仕掛けてきそいな感じだったから影で根回しがしたかったんだけど、こうなったらあの子一人に任せるしかないしね」

「アレか。私も初めて見たときは驚いたよ。あのような存在がいるのだと」

「あら、華の事がわかるの」

「これでも専門だからな。久々に興味が湧いたが、お前のモノと思ひ接触はしなかつたよ」

気を遣つてるのか専門家としての遠慮か。どっちなんでしょうね。でもあの子がそういう風に言われて少シイラついてる。ただ自分で思うより小さな動きだ。私は彼がアレと呼ぶことを否定してない。もしベルが華の正体を知り、私がどんな目で見ていいのか知ったら軽蔑するかしら？

「不快にさせたか？　なら謝罪する。すまなかつた」

「ああ、そう言う訳じゃないのよ。ただ自分でも不思議なくらいあの子の事を貴方と近い目で見ているなつて」

「そうだったか。だがそうかもな。お前が【ゼウス・ファミリア】であつた過去を顧みるなら、アレも一人人として扱はずだな」

「そうよね」

「ふむ。その原因は何かは聞かないでおこう」

「そうしてちょうだい。——まあ【ソーマ・ファミリア】の件があるから寄り道していくけど行くのはその後でもいい？」

「問題ない。元々、準備を勤めるつもりだった」

「ならいいわ。朝食が終わったら万全を期して向かうわ」

「感謝する」

その後、黒ローブは煙の様に消えた。これは魔法じゃなくて魔道具マジックアイテムによる隠遁のようね。おそらく『神秘』のアビリティを、しかも高ランクで獲得した人物。そんな人物と言えば、1人しかないけど。

……考える事でもないか。

.....

.....

.....

「ここだな」

「はい。ソーマ様の特徴に一致する者が出入りした場所はここです」

「よくやった。報酬は弾む」

「ありがとうございます！」

「静かにしろ」

「はっ、はい」

ソーマ
神酒を貰えると興奮した部下を諫めると目の前の建物を睨みつける。

ここにソーマが隠れている。部下や酒に溺れた団員たちを使い、その成果はこの数日で実を結んだ。いやそれでも遅い。この数日で酒が抜けてきた連中が出始めている。酔わせ続けなければ私の命令を聞かない連中が出てくる事だ。Lv. 1の連中など赤子の手をひねるようなものだが、いかんせん我がファミリアはその数が多い。逃げるにせよ向かってくるにせよ対処には時間も金もかかる。それは私の望むところではない。

「なら乗り込むぞ。これ以上時間をかける訳にはいかない」

「あの、ザニス様……」

「なんだ？」

「ここはギルド所有の建物です。乱暴な真似はギルドに罰則どころの話じゃ……」

「問題ない」

「ですが……」

「問題ないと言ってる。二度も言わせるな」

「ここは人気のない場所の上に管理するギルド職員もいない。それに襲撃するにしても騒ぐだけとは限らないだろう。警戒すれば問題ない話だ。確かにそうだ。警戒しなければならぬ。」

「詳細を伝える。襲撃と言ったが出来る限り破壊活動は避け、ソーマ様の姿を確認次第、確保。速やかに拠点ホームに戻る。もし持ち物があればそれも回収。ギルドとの借用契約書もだ。いいか、我らはソーマ様を『迎え』に来た。そういう形にしろ」

『『はっ』』』

「よし、入るぞ」

これで部下も落ち着いて動いてくれるだろう。私も冷静さを欠いていたようだ。これまでの様に行かないと思う焦りがあったのだろう。ここで釘をしておかねばこそ自滅だったろう。

私の命令を受けた部下の内2人が先行して建物に入っていく。ここまでは問題なく

「ゴブツ！」

「ガツ！」

そう思った途端、建物内から苦悶の叫びが聞こえた。中に誰かがいたのか？ そう思ったが先ほどの声は私の部下の物だと気づいた。つまり、振り返りにあつたという事だ。

「全員、外で待機！」

すぐに命令を出し建物に入る事を止める。闇討ちの可能性がある以上、こちらから狩場に入る義理はない。向こうが出てくればいいのだ。このまま籠るなら今日は出直さない。

向こうの出た行動は、前者だ。

「こちらはソーマ様がおられます。いかなる理由で合図もなく侵入し、そして私と顔を合わせた途端に攻撃したのでしょうか？」

出てきたのは女性、なのだと思う。口元から足元まで届くローブで性別を判断する物が声でしかなかったからだ。声は高いが声変わりをしていない男性と言う可能性もある。だが今は女性と判断しよう。そしてその女は両手に手甲が輝いていた。

「ちなみに先ほどのお二人は動きを止めさせてもらいました。こちらの〈蜘蛛牙〉は麻痺属性を持ってまして、『耐異常』を持っていない方は一撃で痺れて口すら動けなくな

ります。そうなってしまえば明日の夕日までそのままです」

静かに、しかし恐ろしく語る。麻痺^{ジヨ}属性は初めて聞く属性だがもしヤツの言う通りならこちらが不利だ。私はランクアップに『耐異常』を獲得しておらず、Lv. 1の部下たちは発展アビリティすらない。

「しかし、遭遇するなり短剣を突き刺す人たちに遠慮はいりません。という事になるのでしょーね」

「は？」

思わずそんな声が出てしまった。不利だと悟り、撤退も考慮しようとしたところだった。

それでようやく、女の体に刺さった短剣に気付いた。ローブの装飾だと思っていたそれは間違いなく、凶刃の柄だった。

絶句した。私を含め、ここにいる全員が。そんな私達など関せずには女は刺さった短剣を体から引き抜き、投げ捨てる。私の足元に転がったそれは血は付いてなく、むしろ剣先が欠けていた。

「ですが一つ、贖辞を贈ります。欠けたとはいえ、私の体に突き刺さる切れ味でしたのでいい短剣だったでしょう。カラクリ仕掛けのこの自動人形の身としては、素直に称賛しますよ」

その言葉に私は自覚した。

これは未知に遭遇した冒険者の、未知への不安と恐怖がこの胸に宿っていたことを。

形にもなれるなら、この身の宿命としても望むところだ。

「……モンスターか」

耳が拾う足音がその存在を捉えていた。今の場所を確認して見ればこの階層一番の大通りだ。モンスターなら間違いないくここを通るはずだ。話に聞いていた大群であるなら尚更ね。ならこの辺りで足止めしようかしら。

「グニタヘイズより贈り物を」

詠唱を紡ぎ、周囲の空気が変わる。私が手の届く全てに穴がある感覚を覚える。その1つに手を伸ばせば何もないはずのそこに何かを掴む感触だ。慣れた物の筈なのに、今是不快なせいかより一層それが強く感じる。そして解除式であるこの詠唱に魔法名はいらず、この直後に収めていた武器をこの手に握る。

「——華、ちゃんとやってるかしら？」

でも地上に残した件を気にするくらいは余裕だった。

|| || || || || || || ||

ギルド所有倉庫前

|||||

間合い0 M^{メド}。目標、敵対者の顎。反撃の可能性0%。攻撃成功率86%。

「——ッ!？」

攻撃、成功。麻痺属性を確認。状態、麻痺を確認

と、やはり戦闘中はどうも思考が単調になりますね。平静を保つのは利点でしょうが私が望むのはもつと複雑で曖昧で、確かな思考です。まだまだ経験が足りないのでしょう。

「残り、5人」

「クソツ、取り囲め!」

残った5人の内、4人が四方を囲む。残り1人——【酒守】^{ガンダルクヴァ}は遠目から眺めている。ただそれは私ではなく、私が意識して行かせないようにしている倉庫の入り口です。隙を見てソーマ様を連れ出す事を捨てきれないと見えます。逃げたらこちらも場所を変えると考えているのでしょうか？

「やれッ!!」

その【酒守】が突撃命令を下し、四方の4人が同時に襲い掛かる。

行動、反撃。行動開始まで5、4、3、2、1。

「——フツ」

第1順成功、続いて第2順へ。4時方向の敵対者の背後へ移動。目標、敵対者の背面。攻撃成功率100%。

「——ハツ」

「おわっ!?!」

「あつ、バハアツ!!」

攻撃、成功。しかし鎧への攻撃の為、麻痺効果は無効。副次効果で反対側の敵対者に衝突。更に左右2名の動揺を確認。

目標を左右の2名に変更。即行動、2名の懐へ。軽度の跳躍、続けて胴体回転。両拳間合い内確認。攻撃成功率74%。

「ぐぼっ!!」

攻撃、成功。麻痺属性を確認。麻痺を確認。

残り2名。現時点でも転倒に至らず。このまま継続するが早期と判断する。

回転しつつ体勢を空中変更、両足を敵対者2名の方向へ。このまま飛び蹴として利用。攻撃成功率100%。

「「ぶっ!!」」

攻撃、成功。当時に着地成功。敵対者2名、気絶を確認。〈蜘蛛牙〉の使用は不要。

さて、これで残りは一人。

「貴方だけですわね、【酒守】」

「ぐ……っ」

流石に孤立は堪えるみたいですね。なんだかんだで表面上は冷静を取り繕ってましたけど今は足が下がるほど余裕がなくなってます。それでも一目散に逃げないのは称賛しますが。

このまま彼を制圧するのは簡単ですがそれではカレンの計画がズレますし、私も興味がありません。

「なぜそこまで執着するのですか？」

「なんだと？」

「貴方も一人の冒険者。ならば自分の手で望む物を手にするべきではありませんか？」

そういうものが清く輝かしい冒険者と聞きました。逆に、欲望に染まる冒険者もいるとも聞きました。彼は間違いなく後者の部類でしょうが、私個人から見ればタチが悪いがやる事は小さい。そんな感想を抱きます。

そして私がこんな事を聞くのは意外と思ったのか、呆けた顔をする。しかしすぐに先ほどまでの険しさを取り戻す。

「自動人形と言ったな。それならあの酒の魔力は知らないだろう」

「確かに、私の燃料は飲食ではありません。酒に酔うなら尚更ですね」

「だったら教えてやる。神酒ソーマは人を心から酔わす。そして酔った人は酔い続けたいと願う。そこに神酒をチラつかせれば人を意のままに操れる」

「そこまでは知っています。まさに『ソーマ・ファミリア』の状態ですから」

「そう、その通りだ。人を操れるなら、私が動く必要が減っていく。それはどういうことか？ 冒険アドベンチャーをせずに望みが叶う事だ」

……これも人の願い、なんでしょうね。彼は知ってしまったのでしよう。人の心を操る術を、そしてそれによる甘く美しい富を。知らず冒険者すら止めてしまうほどに。

しかし個人的に聞きたい部分は聞けました。あとは、最後の決め手ですね。対応は素早く出来ますので余裕として見せびらかすように腕を組む。

「それで同ファミリアの団員たちの横暴と苦悩を見逃す、のは今更でしょうね。しかしそれでもリスクはある。この事実がギルドに漏れてしまえば間違ペナルティいなく罰則ペナルティでしょう。」

「それはありえない。ギルドは不干渉と傍観が原則だ。いちファミリアの内情を探るなどそれぞれ中立としては越権行為だ」

それはカレンから聞きました。しかし同時に、自分が動かなくてもこの問題はギルドに流れていただろうとも。心配をするアドバイザーがいるから、と。しかしそれはカレ

ンが止めたので起こり得ない事です。それに、それでは根本的には変わらないと。

「そう言えば換金では貴方の所の冒険者がよく揉めていましたね。その程度であれば特に取り調べる訳にはいかないからですか？」

「よくわかつてるじゃないか」

「ですが冒険者から巻き上げのお金だけではないでしょう？　心まで酔わす酒です。犯

罪行為に手を染めてまで金策に走るのではないですか？」

「その事か」

はい、その事です。

「もちろん黙認している。どんな経緯で稼いだ金だろうが、持ってきた上納金には変わらないからな」

『もちろん黙認している。どんな経緯で稼いだ金だろうが、持ってきた上納金には変わらないからな』

「は？」

今、私と同じ言葉が聞こえた。誰が言った？　しかし周囲には目の前の自動人形しかおらず、地面に転がっている部下たちも喋れる状態でもない。誰だ？

「貴方の声ですよ」

「なに？」

自動人形はコートのポケット——ちょうど先ほど組んだ腕の片手にある場所から箱のようなものを取り出した。見るからに魔石を使った道具のようだが……。

『そう言えば換金では貴方の所の冒険者がよく揉めていましたね。その程度であれば特に取り調べる訳にはいかないからですか？』

『よくわかってるじゃないか』

『ですが冒険者から巻き上げのお金だけではないでしょう？　心まで酔わす酒です。犯罪行為に手を染めてまで金策に走るのではないですか？』

『その事か。——もちろん黙認している。どんな経緯で稼いだ金だろうが、持ってきた上納金には変わらないからな』

私の……？

「貴方がソーマ様がなくなつた事に焦つてここに現れ、そして逃げて立て直しをすれば良いのに未練がましくここに残つた御陰で証拠を掴んだのですから」

「ああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」
「ありがとうございます。では、ご退場を」

バコッ!

敵対集団、沈黙。戦闘完全終了。

さて、手足を縛りますか。特に重要である「酒守」を最初に。それにしても結構精神面では未熟でしたね。追いつめられたとはいえたった一言の侮辱で我を失うとは。私から録音装置を奪う事だつて出来た筈でしょうに。

「終わったか」

すると倉庫の方から、ソーマ様の声が聞こえた。作業の手を止めないで顔を向けるとほんにん本神がいた。出てきたのですね。

「はい、終わりました。あとは彼らをギルドに連行します。その際はソーマ様もご同行をお願いします」

「わかった。感謝する」

そう言つてソーマ様はまた倉庫の奥へ引つ込んでしまった。相変わらずですがこちらが終わつてからも問題は……。

「あれ？ 先ほど、お礼を言いました？」

竜の居ぬ間に

ザニスが捕縛された後、私は動き始めた。

カレンから指示された内容に従い、ファミリア内でも今回の件からは遠かった団員を集め、その中心にチャンドラを据えた。最初は渋ったが完成品の神酒ソーマを先に渡すことで承諾してもらった。確かに私の酒は人を操る。そして絶望した私がこうして利用するとは、滑稽な話だ。

その直後、チャンドラはこう言った。

「主神様よ、なんか変わったか？」

「ん？」

「だからよお、変わったかかって聞いたんだよ」

私が、変わったか。そうか、そう見えるのか。

「チャンドラ」

「なんだい？」

「お前は私の所に来るまで多くの酒を飲んできたらしいな」

「ああ。最高の酒が飲みたくてな。今じゃ神酒以上の最高な酒はないと思ってるけど

な」

「最高の酒、か。確かに私は最高の酒を作ったと思ってる」

これは譲れない自負だ。私は最高の酒を作ったと。そう、最高の酒は。

「……おい、それだけか？」

「何がだ？」

「ああ、主神様はそんな奴だったな。今の流れなら俺の質問に答えるところだろうよ」

「そうか」

「はあ……。もういいぜ。さっさとザニスの野郎たちを連れていくぜ」

「ああ」

ぶつきらぼうにチャンドラは行ってしまった。答え方を間違えただろうか？ もしくはコレを見せればよかったか？

今、手に持ったのはカレンが去る時に置いて行つた瓶。今は空になっている。そして満たしていたのは酒だった。私の酒には及ばなかった。だが、どこか心が満ちた。下界の者が神の心を満たすものを作り上げる。それはどれだけの偉業なのだろう。

「見放すにはまだ早い。そういう事なのだろう」

それを暗に伝え、そしてこうして私を動かした。可能性を知り、今一度向き合おうと思えた。

『何やら騒がしいようですが?』

「まあね。殺してないから数は減らないしね」

『はい?』

両手の武器を8本の投げナイフに換え、これらを空中で投げる。狙ったのは体躯が大きなモンスター。の足。狙った先すべてにこれらが命中する。当たったモンスターはその痛みと、足場を崩された事で派手に転倒した。しかも周囲のモンスターを巻き込んで。

『ガヒャツ!!』

『ギャブツ!』

『ハギャア!?!』

潰されたモンスターの悲痛な叫びがいたる所に聞こえた。それを気にせず倒れたモンスター達は立ち上がる。その真下には潰され、瀕死になっているモンスターが動けずにいた。

『カレン、まさか遊んでいるのですか?』

「そんな訳ないでしょ。モンスターなんて減っても生まれ続けてくるでしょ? それに私は足止めにここにいるの。なら動きにくい程に密集させた方が向こうの進軍も遅くなるのよ」

それは人間の軍隊も一緒ね。人が多ければ多いほどに足は遅くなる。そして戦時に

おいては密集するほどに身動きも取れない。それがモンスターなら顕著に出る。最初こそ同じ目的に沿っていたけどいざ戦いになれば私を狙うだけ混戦となつていく。だからこそ、動きが止まる。何より動けないモンスターは障害物になつてさらに足止めをする。つまり消すより利点は多いわけね。おっと、上から進出しようとしてるモンスター発見。

「折角だから奮発」

取り出した自慢の弓を引き、抜けようとするモンスターの数を確認する。

ファイブ
ショット
「五射、必中」

宣言と同時に弦を離し、5本の矢が飛び立つ。一矢必殺。流石にここまでこだわる必要はないから遠慮なく倒した。

それはともなく地上の件は、そうね。

「華、今からベルの所に向かいなさい」

『サポーターの件ですか？ もう必要ないと思いますが』

「そうね。でも見に行つて損はないはずよ。特に貴女には」

『わかりました。それでは早速向かいます』

いや、少しは渋りなさい。まだ機械的よ。カラクリだけど。

通信はここでおしまい。こつちもモンスターに集中する。しかし……。

「眠……」

眠らずの長期戦はやっぱり答える。休憩が必要なわけじゃないし、集中が散漫してても片手間で相手取れる相手、完徹も覚悟していたけど。あのフードの人が言うなら後で本命が来るはず。その時、頭がぼんやりしてたらうっかり加減を間違えるかもね。

うん、スペースと時間を確保して休憩を挟むか。

|| || || || || || || || || ||

ダンジョン・第7階層

|| || || || || || || || || ||

ここまで来てようやく手がかりが見つかりました。逃げる様に地上に向かっていた冒険者の三人組。彼らはリリルカ・アーデから持ち金を巻き上げていた三人組でした。必死そうな表情とは裏腹に何か実入りがあつたかのように満足気。かすかに『ノームの金庫』と呟いていましたから覚えておきましょう。

そして更に奥へ。近づくとつれて聞こえてくるのは昆虫の鳴き声と炎の爆音、そして斬撃の音。見えてくるのは広間に通じる通路の終わり。

私は静かに、そこに出てきました。

「セイツ!!」

聞こえた声はベル・クラネルの声でした。同じくこの場にはおびただしい程にうごめく『新人殺し』のキラアートの群れ。そして座り込むのはローブを失くしたりリカル・アーデ。

彼は絶望の状況と言えるこの場所で二刀のナイフを両手に握りしめて戦っていた。

「あああああああああああツツツ!!」

ただこの場には彼の声しか聞こえなかった。先ほどまで聞こえてた鳴き声も斬撃も忘れ去れたかのように。いや、ちゃんと聞こえている。自動人形たる私が差異がある音質を拾い逃すはずはなかった。でも今はその音よりも彼の声が強く聞こえていました。

私はそのまま眺め、ただ時間が流れるのに身を任せていました。時間間隔が狂わない私にはそれが終わりに近づくのもいつもの感覚でした。これが人ならば短い時間だと錯覚したかもしれません。そう思い、すべてのキラアートを切り伏せたベル・クラネル。

「……………して」

そして声を出したのは、彼ではなくリルカ・アーデでした。ただ向こうは小さい声で発したので少々拾いづらいですね。聞こえない事はありませんが。

「何でリリを助けたんですか？ どうしてベル様はリリを見捨てようとしなかった。まさかご自分が騙されていたことに気付いていないんですかっ？」

リリルカ・アーデの声が荒げてきましたね。対してベル・クラネルは挙動から戸惑っている感じですね。もう少し集音を上げますか。

「ベル様って何なんですか！ 馬鹿なんですか!? 間抜けなんですか!? 救いようのないお花畑の頭な持ち主なんですか!?!」

「おはなっ……!?! リリ、少し落ち着いて——」

「無理ですっ！ そもそもリリは換金の際にお金をちよろまかしていました!! 分け前などは半々などではなく4対6、調子に乗って3対7にした時だってありました！ お使いの時だって定価の倍以上を吹っ掛けました！ 合計12品もですよ!! 盗む食指もわからない装備品やアイテムのシヨボさに失望した事なんて数え切れません!!」

いや、それは筋違いなのでは？

「リリは悪いやつです！ 盗人で嘘ばかりついていた、サポーターの風上にも置けない最低の小人族バルウムです！ そんなリリを……そんなリリをベル様は助けるんですかっ!?!」

「うっ、うん」

「どうしてっ!?!」

「お、女の子だから?」

.....はい？

「ばかああ!! 信じられませんか!! またそんな事を言つて、ベル様は女性の方だったら誰でも助けるんですか!?! 最低ですつ! ベル様のすけこまし、スケベっ、女つたらしつ、この女の敵いいいいいい!!」

.....。

「じゃあ、リリだからだよ」

.....ふむ。

「僕、リリだから助けたかったんだ。リリだからいなくなつてほしくなかつたんだ。だからうまい理由なんて、見つけられないよ」

「ふ、えつ.....」

場の空気が一変しました。私が言うのもアレですが、ベル・クラネルの一言がリリルカ・アーデの奥底に届いたのでしよう。彼女はこれまでの何かが崩れたかのようにその両目から大粒の涙を流し、大声で泣き始めました。

「うっ、うええええええええええええ.....!」

「リリ。困ったことがあつたら相談してよ。僕つて馬鹿だから、言つてもらわなきゃわからないんだ。——ちゃんと、助けるから」

リリルカ・アーデはベル・クラネルに抱き着き、ただただ泣き続けた。

私はこれ以上、この場で覗くのを止めて立ち去る事にした。

「彼は、不思議な少年です」

それがベル・クラネルの印象でした。

才能がある訳でも運命に愛されている訳でもない。未熟で甘くて英雄など夢のまた夢と思います。ですが、その姿に希望を持つてみたいと思いました。

弱くとも動く心があつた。嵌められても許す心があつた。まだ私が望んでも得る事が出来ない心の在り方。

私はカレンに見つけられてからの年数と私が起動し続けた時間は、年数の方が長く時間は短い。でもその短い時間でも私は人を観察し続けました。それも私の最初の命、オーダー成れ。何に成れ、とはわかりません。現状、この機体が人の形をしているから人に成るのだと。現時点ではその為の行動をしているだけです。これまでもそれがあり、これからもそうだと思っていました。

ベル・クラネル。カレンの義甥で「ゼウス・ファミリア」が残した子。ハーレム願望も持ちながら純粹に、才能もないのに英雄を夢見る少年。そんな彼は少しずつ、自分の

夢に近づいていく。

「英雄、ですか」

英雄とは、我知らずとも人々の心にその雄姿を残すとも言われます。それが今、印象深く思えます。

あの未熟な姿に、どうしてかそれが当てはまります。例えるなら、惹かれたひかれたと言うのかもかもしれません。

カレンはこの事を予想したのでしょうか？ いえ、彼女はベル・クラネルの可能性を信じているだけ。彼なら私にも影響を与えると考えただけでしよう。

「カレン、貴女が彼を見守りたいと言うのが少しわかった気がします」

私も彼の成長を見届けたいと思うようになりました。願わくは、彼が私が成るべきものを教えてくれる事を。

第3章 「異常事態」

【万能者】と【劍姫】、そして【財宝竜】

さいしよはくろ。まつくろくろのせかい。

まえもくろ。みぎもくろ。ひだりもくろ。うえもくろ。したもくろ。うしろもくろ。まんなかもくろ。

くろくろくろ。それがいまのせかい。わたしのせかい。わたしはここにいます。

くろくろのせかい。それはいつしかいろいろに。

まえはみどり。みぎはみどり。ひだりはみどり。うえはあお。したはみどりとちやいろ。うしろはみどり。まんなかはひとのいろ。

あかあおみどりきいろ。あたらしいいろいろのせかい。それがいまのせかい、ほんとうのいろ。わたしのせかい。わたしはここにいた。

いろいろのせかい。わたしはあるく。あるく、あるく。わたしのせかい。せまいせかい、ひろくする。

ざつ、ざつ。せかいがひろくなるおと。ぴー、ぴー、ちちつ、ちちつ。せかいがひろくなるおと。

さんさん。ひかるたまがあおのなかに。とんでもとどかないせかい。きらきら。ひかるたまとつぶがくろのなかに。とんでもとどかないせかい。

きゆうきゆう。おなかのおと。たりないきもち。しやりしやり。かじるおと。いっぱいなきもち。

せかいはすこしづつ、ひろくなる。

こわいこわい。ひろいせかい。いろいろなせかい。でもこわいせかい。

ぎやつぎやつ、ぐるる。こわいがちかくにいるおと。ぎーぎー、ぴゆうぴゆう。こわいがちかくにあるおと。

ぶるぶる、ぐずぐず。こわいこわいきもち。わたしはうごけなくなる。せかいはすこづつ、こわいものがみつかる。

そんな、まいにち――。

「ねえ、あなたはだれ？」

あかいほうせきふたつ。わたしをみつけた。

……

……

……

ダンジョン・24階層

「もう一人の協力者？」

「はい。『黄金の穴蔵亭』で合流する貴女とは別に問題となつている24階層で合流する者がいます」

黒ローブの男からの冒険者依頼を受けてパーティーを組んだ「ヘルメス・ファミアア」、その団長のアスフィ・アンドロメダさん。その彼女が24階層に到着してその事実を私に教えた。

「その人は私と同じ他のファミアリアの人？」

「おそらくそうでしょうが、かなりの実力者になる筈です。しかし二大ファミアリアの一方である「ロキ・ファミアリア」からは貴女が。対する「フレイヤ・ファミアリア」はこの手の事に協力するとは思えない。ここで「ガネーシャ・ファミアリア」の可能性が出てきますけどハシャーナを失った事で再び受けるとも思えません。しかし、そうなると協力者はほぼ確定できます」

「？ アスファイさんは誰かわかるの？」

「ええ。色々と手助けを頂いた人でもありますから」

個人的な付き合いをしている相手、と言うこと何だろうか？ ただ私の所や「フレイ

ヤ・ファミリア」以外に強いファミリアの人は聞いた事がない。他に強い冒険者なんて

……。

「……あ」

「どうかしましたか？」

「アスファイさん、その人って——」

「おーい！ アスファイッ！」

私が自分で思い浮かべた人が協力者かどうか聞こうとしたところで斥候に出ているルルネの声に止められた。ちよつと残念だけど何かあったのだと思い、先に向かったアスファイさんの後を追う。

他の仲間達^{パーティ}は先に集まって、みんな崖の下を見下ろしていた。そこは大量発生したモンスターの群れが目一杯にいた。しかも、それだけじゃない。

「モンスター達が殺気立ってる」

「そうなんだ。まるで戦ってる感じなんだよ」

ルルネの言う通りだ。まるで追い詰められたかのようにモンスターが雄叫びをあげ

て上層に通じる先へ向かつてる。その先に敵がいるかのようにな。

でも、このくらいなら問題ないかな。

「……モンスターは駆除する予定でしたが、このままではこちらでも被害が出ます。一旦、場所を確保して」

「待って。私が行く」

「は？」

「おっ、おい!？」

呼び止められたけどそれを無視——と言うよりももう飛び降りた後だから聞く前に、だね。

モンスターたちと同じ場に立つ瞬間は着地の音1つ。この音でモンスター達は私の存在を認識し、一斉にこちらへ襲い掛かる。殺気立ってるせいかな通常より反応がいい。でもそれよりも鋭敏化されたLv. 6の五感がそれ以上の情報を教えてくれる。

向かってくるモンスターは周囲を塞ぐように8体。Lv. 5なら5体が限界だった。でも今なら。

「
軽く鋭く、そしてなにより疾く。^{はや}瞬きの間に周囲のモンスターより多い剣閃を放つ。

結果は撃破。回避をする必要もなく、まだ余裕だ。

ズレの修正、その一部を確認した直後にそれが足元に放り投げられた。

「……冒険者の」

死体、とまでは口にしなかった。この異常事態イレギュラーに逃げ遅れて命を落とした冒険者。

この一瞬、意識を戦闘から離してしまった。その隙を棍棒型の天然武器ネイチャーウェポンを持ったモンスターの一振りが迫っていた。でも、片手一本を伸ばすくらいは遅かった。

『……ッ!?!』

「腕力の上昇も確認」

片手で受け止めた天然武器を握り、それだけで破損を与えた。そして再び劍閃を放ち、またモンスターを切り捨てる。

ここまでで大まかな感覚は把握した。でもまだ確認が要る。場数たたかいが必要。もっともつと——。

「なんだ。【劍姫】ちゃんじゃない」

気を張り詰めた時に聞こえたそんな声。でもこんな状態だったから理解するよりも剣が動いてしまった。

「はいストップ」

でも剣は何も斬らず、強い力で止められた。いつもならすぐにでも振り払った所だけどここでようやく理解が追いつく。声を持ち主、私の剣を止めた相手、アスフィさんが言っていた人物。

「……カレンさん」

「貴女に名前で呼ばれるのは初めてね。それで任せていいかしら？」

その言葉がどんな意味があったのか、こっちは理解が先に来て私は黙って頷いた。

「そう。じゃあ終わった頃に降りてくるから、あとはよろしくね」

それだけを言い残して他の皆がいる場所へ飛ばした。あつけないけど、モンスターに囲まれている状況なら仕方がない。でもすぐにまた話がしたい。そう思うとデスクレートを握る力を強くしていた。

「——行く」

モンスターたちはこの言葉に呼ばれたように襲い掛かった。

上へ飛び崖の上にした面々は知った顔がいるから「ヘルメス・ファミリア」の冒険者たちね。彼女らと【劍姫】ちゃんがこの冒険者依頼を受けたパーティーか。でも唐突に出てきた事で警戒してるわね。でも私が何かする必要はないわね。

「待ちなさい。彼女も【劍姫】と同じ協力者です」

「え？」

「彼女も協力者だって？」

「そうです。——そして久しぶりですね、カレン」

「ええ、久しぶり」

アスファイが私を協力者と言ってくれたおかげで警戒はなくなり、安心して翼を休める。

「モンスター達が殺気立っていたのは貴女の仕業ですか？」

「ん？ ええ、目立ってた方が上に進出しようなんて考えないでしょ。数日前から籠ってたわ」

「それは、お疲れさまです」

「大丈夫、大丈夫。徹夜は慣れてるから。それよりも貴女の方が苦勞してるんじゃない？」

「……察してくれてるだけでありがたいです」

「じゃあ聞かないわ」

ちよつと同情。「ゼウス・ファミリア」も主神には苦勞したから苦勞がわかる。ただ彼女は真面目だから主神に仕返しとかできないから余計に、ね。

それにしても【劍姫】ちゃんに団長を含む【ヘルメス・ファミリア】の主力メンバー。あのローブの男が言つてたファミリアは【ヘルメス・ファミリア】なのは間違いない。ギルドの資料じゃやそう高い実力じゃないけど、ヘスメス神が誤魔化してるって聞いた事がある。実力はある。ただそれを隠しているファミリア。隠密に解決するには都合がいいファミリアって事か。でも繋がってる感じはないし、目を付けられた感じでもあるか。

ただ【劍姫】ちゃんが同行している部分は引つかかる。彼女が同行する理由がわからない。さすがにこんな怪しい事態を軽く引き受けたわけじゃないし、眷属こと大好きな口キ神が遠征でもないのにこんな危険は事に行かせるのはよりありえない。……もしかして、原因に心当たりがあるのかしら。

……考えても仕方がないか。そんな彼女は今はどんな感じかなと目を向けると息を乱さず、モンスター達を蹂躪してた。ここにいる全員が、それを見下ろしていた。

「なあ、これ言っちゃいけないだろうけど……」

「そうだな……」

『『オレたちいらなくね？』』

そんな声が聞こえたけど、わからないでもない。私も経験あるし。

でもやっぱりランクアップしたみたいね。圧倒的な戦いの中で所々に集中に緩みがある。それでも冷静だから流石としか言いようがない。あのおうな嫗おきなだったらなんて言うかしらね。

「カレン。貴女から見て【劍姫】はどうですか？」

「彼女の實力は疑ってないわ。逆にアスフィ、彼女がいてこの後のイレギュラー異常事態は楽に終わると思う？」

「思いませんね」

アスフィの言葉に何人かがビクリと反応した。ちよつと『帰ってもいいかな？』とか思ったでしょ。

「あ、少し相談をしましょうか。カレンがいてくれるならパーティーの動きも効率化で

きるはずですから」

「そうね。じゃあ少し私から提供もしましょう。開封しやすい上に大型モンスターが踏んでも割れない器に入ったエリクサーとか」

「是非に」

眼鏡がキラんと光った。かつて『眼鏡キャラは眼光と同時に眼鏡が光るんだぞ』と言ったゼウス様の言葉を思い出した。

食糧庫へ

「これでよし」

「ええ。これで強化種は生まれませんでしょう」

「ヘルメス・ファミリア」と協力して倒したモンスター^{魔石回収はたった今終了した}の魔石回収はたつた今終了した。殆どは私がやったけど。こう、ガリアを振り回して素早く。そんな魔石の山が私の後ろに積み上がってるから魔法でしまう。

「ルルネ、地図を」

「あいよー」

そしてアスフィの指示で犬^{シアンスロープ} 人の【泥犬】^{マドル}ちゃんがこの24階層のマップを広げる。覗けは結構詳細な地図だ。この子が作ったならかなりの才能ね。ウチの所じや大まかに把握できればいいからって雑だったからね。これは見やすい。

「カレン、貴女は何処に向かうべきだと考えてますか？」

「北の食糧庫^{バントリ}ね。そっちの方からのモンスターが多かったから原因はそこだと思うわ。アスフィもそう思ってるでしょ？」

「はい。ですが私たちよりもここにいた貴女の意見が聞きたかったので」

「真つ当ね。とりあえずここ以外に怪しいと思つた所はないわ。南西と南東からモンスターが来なかつたわけじゃないけど北より切羽詰まつた様子はなかつたわ。だからこつちの二つは関係ないはずよ。でもそれは原因が何か所に集中してる可能性、つまりはヤバイ物が分散してない可能性があるわ」

「マジですか……」

返事をしたのは【泥犬】ちゃんだった。敵が未知数な分、その戦力が集まつてる事實は歓迎したくないんでしょうね。私だつて嫌だけど。

「私が前衛に立とうか？」

「いいんですか？ あなたはどちらかと言うと中・後衛向きでしょう？」

「いいのよ。手数は多いから先制・防衛は得意だし、何よりここの誰よりもLvが高いし」

「切り札は【劍姫】だと？」

「それはここにある一枚。私と【劍姫】ちゃん、そして【ヘルメス・ファミア】の計三枚。アスファイ、切り札つてのは使つて消費するんじゃないやなくて連鎖して最後まで残るのが最高よ。ま、だからと言って大事に取つておく事もないんだけど」

「……それは忠告として受け取りましょう」

「そうして頂戴。さすがに真に受けて死んじゃつたじゃ笑えないしね。でもこつちは高

ランチとして頼ってくれていいわよ」

切り札を捨てるなんてのは主義主張尊敬を抱えるところだけでいい。でもいかなる時でも切れる札は多く、そして失わない事が重要だ。特に未知ともいえる今回に関してはよく考え上手く動く事が出来なければ、被害は大きくなるでしょう。

「……あの」

「ん？」

振り返ると【剣姫】ちゃんがいた。でもただたどしいし声も遠慮がちだし、言いづらい事でもあるのかしら。

「何？」

「ちよつと話、いい？」

「話ね。わかった。アスファイ、ちよつと外すね」

「わかりました。ではこっちは方針を再考します。出発はこちらから知らせますので」

「ええ。じゃあこっちよ」

聞かれたくない話かもしれないから少し離れた場所に移動する。

「とりあえず、まずはランチアップおめでと」

「？ 知ってたの？」

「さつきモンスター相手に今の実力を確かめていたでしょ。じっくりしてたしね。そし

てランクアップしたならまた試したでしょ」

「うん。あの剣、【選定属性】の剣が抜けたよ」

へえ、カリヌスが抜けたのね。Lv. 6になったなら不思議でもない。でも彼女の顔にその歓喜の色は薄い。これはやっぱり抜けただけなんでしょうね。

「抜いた剣、重かった訳ね」

「うん、そう」

「それはまだ貴方の技量が足りないからよ。ランクアップしてアビリティも上がったでしょうけどそれだけで振るえるほど私の至高は素直じゃないの」

「そう、なんだ……」

シユンとしちやった。きっと抜けた時は喜びそうになったんでしょくに、結果はまだだつて評価だったから落ち込んだんでしょかね。そこに私が更に追い打ちをかけたんだから同情しちやいけないでしょうけど。でも重くてもカリヌスは抜けたんだから、この子の器は資格まで漕ぎ付けた事になる。でも重いのは彼女の願いがそれだけ重たいという事。【選定属性】はそう言った心理すら読み取るからね。

うーん、このままカリヌスが自在に振れるまでまだ時間はかかりそうねえ。なら少し慣らしが必要か。

「でも頑張ったからこれを貴方にあげるわ」

「え？」

【劍姫】ちゃんが呆然とした瞬間、私は彼女の髪に触れる。その場所にコレを付けてあげる。

「ヘウスキアス」。私が作り上げた作品の中でもいい品だから大事にしてね」

「アクセサリー？」

「ちゃんと戦闘用よ。でも十全に使えるかは貴女次第よ」

「……………うん、わかった」

白い剣のデザインを持つウスキアスを大事そうに撫でる【劍姫】ちゃん。でも投げ使うなんてことはしないでよね。

あとはこの子がウスキアスを発動させるまでどれくらいかかるか。年か、はたまた今回か。できる事なら今回で発動してもらいたくないけど。

「カレン、【劍姫】。話が終わったなら隊列に戻ってください。こちらは終わったのですぐにでも出発が出来ます」

「ええ、わかったわ。じゃあ【劍姫】ちゃん、行きましょうか」

「うん」

私も彼女も臆してもいない返しだったけど、私はこれから起こる事がどうか困難であつてもウスキアスが発動しない事を祈り続けた。

ダンジョン18階層・リヴィラの街

気に入らねえ上にイライラする。

アイズが心配だから追いかけるとロキに命令された事はいいとして、パーティーに
 危険^{危険}な^エイルヴイス^ルがいる事も、酒場にいた冒険者共も、ボールス^デから聞いた『死妖精^{バン}』の話
 は無性に気に入らねえ。でもそんな事よりも俺は、アイズがいるだろう24階層に
 カレン^ト・デユラス^カがいるかもしれない事実だ。

「……クソが」

あの女の事を思い出す度に顔が疼く。治って痕も残ってねえのにまだ生傷から治つ
 た気がしねえ。

それから俺はあの日からあの女の事を調べた。冒険者として15年前の空白^ブがある
 が今でも二つ名【財宝^フ宝^ア竜^ニル】で呼ばれている。【ロキ・ファミリア】、【フレイヤ・ファミリ

ア」の襲撃、多種多様のアイテムを製作する腕前、そして前・最強ファミリア「ゼウス・ファミリア」の眷属。聞けば聞くほど最強と呼ばれても問題ない実力者。だが調べていくそんな噂とは真逆な物も聞いた。

【財宝竜】の前は【助演者】の二つ名。Lv. 3の冒険者兼サポーター。実力は中より下。戦闘より補助として役割が多く、そして本人もその立場に満足していた。俺なら『ハンパ者』と呼ぶような噂だった。

相反する噂。突然の急成長。最後の三大冒険者依頼、隻眼の黒竜討伐失敗を境にあの女は強くなった。まるでここで特別なモンがあったと考えさせられる。だから気に入らねえ。

何があった。何がトカゲ女を強くした。「ステイタス」の上昇やレベルアップがそう簡単に行くはずがねえ。なにより15年前とは言え、それでフィンたちや【猛者】オツタルをブツ倒す力が手に入るとは思えねえ。

「俺は認めねえ」

だから俺はこう考えた。高みに目指せる何かを、最初っから持っていた。だがあの女はそれを隠し続けていた。そのきっかけが15年前にある。ただそれがあつたにも関わらず【助演者】なんて二つ名で呼ばれるような振舞いをしていたトカゲ女を認めねえ。

翼を羽ばたかせすぐに私は他二つの経路へ飛んだ。そして先に向かった方へ近づいていくとそこもあの壁に覆われて塞がれており、それを確認して次の場所へすぐに飛んでいくとそこもまた壁があった。これで北の食糧庫は完全に封鎖されている状態だ。

この情報を持ってすぐにアスファイ達の所へ戻り、彼女の横で着陸する。

「ただいま」

「どうでしたか？」

「他の2つも同じ状態だったわ。そうになるとモンスターは大量発生じゃないわね」

「ええ、そうですね」

「ど、どういふことだ？」

隣にいた【泥犬】^{マドル}ちゃんが呟くとアスファイは眼鏡を押し上げた。

「食糧庫には腹を空かせたモンスター達が階層中から集まってきました。そんなモンス

ター達が食糧庫に入れなかったならどんな行動に移ると思いますか？」

「あつ……………」

「…………別の食糧庫^{バントリ}に向かおうとする」

「正解。ここに来て空腹を満たせなかったモンスター達は他の食糧庫^{バントリ}に向かった。つまり

りモンスターの大幅移動。冒険者たちはそれに苦しめられたわけよ」

「カレンの言う通りです」

「それで、やっぱり……」

「ええ、先に行くしかないでしようね」

尻込みしてる感じね。でも行くしかないから『だよな』と答えて意識を変えたわね。さて。私もこの状況は想定外だし、万が一にこれ以上の事は想像したくないけど考慮しないのもね。この場で一番痛いのは、戦力の分散。考えるに【剣姫】ちゃんがここにいるのは何らかの因縁があるから。そうなるとこの先、彼女は真つ先に分断される。でもそれを防ぐのに動いていると乱戦になって【ヘルメス・ファミリア】に犠牲が出る可能性が出てくる。

なら、ここは乗った方がいい。でも危険性は高い。全員に私特製の回復アイテム、そして【剣姫】ちゃんにはウスキアスをあげてるけど足りないわね。

「アスファイ」

「はい、なんですか?」

「これを【ヘルメス・ファミリア】の皆に配ってちょうだい。——【グニタヘイズより贈り物を】」

【ミュニアストレジャー】の中から両手で抱える籠を出し、続けて人数分のアイテムを雨降りの様に取り出す。

「これは……人形ですか?」

「これを全員に配って。ちよつとしたお守り。持つているだけで生存率が上がるから」
「効果は？」

「秘密」

「……効果を秘密にするほどの品を渡してくれると言う事はそれだけの危険があるんですね」

「ええ。言っておくけど避けるのはやめた方がいいわよ。そうすると、袋小路になると思うから」

「わかりました。では私たちの方でいただきます」

チラリと一瞬、【剣姫】ちゃんを見たわね。彼女ならただ善意や軽い気持ちでここに来てくれたとは考えてはいないはず。そもそも私が『切り札』の話をした時点で、彼女が一番手元に残らない可能性を考慮してるでしょうし。

「……？」

当の本人はキョトンとしてるわね。彼女には悪いけど頑張つて頂戴ね。

「カレン、そろそろ中へ侵入します。魔法で穴を開けますが万が一に備えて待機してもらえませんか？」

「ええ、わかつたわ」

さーて、何が起こるかな。ウスキアス然り、分断然り。まあ最低、今の私で済む話な

敵は誰か？

壁の先は周囲一帯全てが同じモノで覆われていた。天井・壁・床に至るまで。【剣姫】ちゃんも壁を切り付けたらダンジョン本来の壁が顔を見せたけど入り口の様に塞がった。これらが生きているモノなのは最初に把握したし、一度見たもので驚くことはしない。

「なあ、怖い想像していいか？ このブヨブヨして気持ち悪い壁がもしモンスターだとしたら……私達、化け物の胃袋はらの中を進んでるってことだよな」

「おいよせ」

「やめてくださいっ」

「想像でも口に出すなよ……」

【泥犬マドル】ちゃんの物騒な独り言でメンバーから非難の嵐だったけど、さつきと比べて緊迫した空気が薄れた。凶らずともいい空気に戻った訳だ。それに本当にモンスターの体内ってわけじゃないだろうし。本物はもつと気持ち悪いから。

そんな光景に思わず笑みが溢れそうになったけど先が分かれ道になり、ここで足を止

める。

「アスファイ」

「はい。どうやら既存の地図は役に立ちそうにありませんね」

地図をチラリと見たけどこの場所にこんな分かれ道はなかったはず。もつともこの広大さからダンジョンの壁を押し広げるか貫通とかしてるかもしれない。

「ルルネ、地図を作りなさい」

「あいよ」

それでも冷静なアスファイが指示を飛ばし、それに「泥犬」^{マドル}ちゃんが素早く修正を始めた。既存の地図にあの壁があつた場所からの道筋、それも正確に書き足している。なかなかの地図製作ね。見習いたいぐらいだわ。

「すごい……。地図、作れるんだね」

「んー、そうか？ 【剣姫】に褒められるなら光栄だけど、私は一応盗賊だからな」^{シーフ}

「いや、【剣姫】ちゃんの言う通りよ。私だつてまだ手間と調査を積み重ねないと作れないしね」

「アンタにまで言われると小恥ずかしいなあ。これはただの慣れだよ。主神様の付き添いで怪しい遺跡やらなんやら潜つたりしてたから身についただけなんだからな」^{ヘルメス}

なるほど、経験は積んできたのね。旅好きのヘルメス神の眷属、と言つたところかし

らね。スラスラと道を描いていく。素直に称賛したい能力ね。

そんな一息を過ぎて先に進む。何度も分かれ道を選び、その先へ進んでいく。ふと振り返れば【泥犬^{マドル}】ちゃんが目印の水晶の欠片を落としている。

そうしてしばらく、何も起こらずかなりの奥までやって来た辺りでそれがあつた。

「おい、これってモンスター^{マドル}の死骸か？」

「ええ、間違いなさそうです」

所々に積みあがつた灰の山——モンスターの死骸はここに来て変化をもたらしした。恐らくはこの壁を抜け、食糧庫^{バンクトリー}に向かつていたモンスターでしょう。でもここで灰になつたという事は、ここからが牙を見せる場所。

皆の空気が張り詰め、察しのいいのはすでに武器を装備してた。私もすぐに蛇複剣^{ガリア}を装備する。

殆どが枝分かれになつている通路の奥を警戒しているけど、散らばつている死骸の位置は広範囲だから敵はそれだけの範囲に届く場所にいます。

「——上ね」

「——うん」

声を出し見上げると【劍姫】が応じた。その後に残りの皆も上へ警戒を向け、すぐに戦闘態勢に移る。

そして、天井から敵は現れた。薄闇の中に何本もの長軀。ウゾウゾと嫌悪感をまき散らし、極彩色の花弁から粘液を流す、牙の大口を持つ植物モンスター。食人花の群れが落下する。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

響く叫び。それと同時に私は飛ぶ。同時に草木専用伐採戦斧《ビーンスターク・ブレイク》を取り出し、そのまま真正面の一体を両断。食人花は真つ二つになったけど私は同時に感触を確かめる。

今回も前と同じでこのビーンスタークを使ったけど、改めてこのモンスターは堅い。植物系モンスター専用のもので、これも容易くはなかった。最初からただのモンスターじゃないのはわかっていたけど、これは異常ね。これだけ堅いならガリアの切れ味じゃ両断できない。効果がありそうなものは思いつくけど、試す前にやる事が一つ。

「カレン！ 敵は散らしつつ纏めて下さい!!」
「了解!!」

真下から聞こえたアスフィの指示。それに応えるよう「ミニニアストレジャー」から私特性の爆薬を取り出し投げる。ただし空中で投げても当たる場所もなければ火気なく起爆も出来ないそれを、ガリアで破壊する。これが爆薬の起爆になった。

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

運悪く近くにいた食人花は火と衝撃で叫びを上げ、痛みで乱暴な動きになる。それが仲間たちを巻き込み、絡み、アスファイ達がいる場所とは明後日の場所に激突する。

まずは奇襲を回避、続けて二回目がないか周囲の気配を探し、いない事を確認する。その直後に背後から食人花の大口が迫っていた。が、丁度いいからガリアで倒せるかもしれない方法を試した。

うねるガリアを巧みに操り、刀身全てを食人花の口へ持つてかせ、そして広げる。食人花は大花を咲かせるように体液と肉を散らした。

「おっと」

その中にこの食人花の魔石を見つけたので回収しておく。とりあえずガリアでも倒せるから武器を交換する必要はなし。その後には皆の所に降りる。

「……相変わらずの武器とその扱いは凄まじいですね」

「ありがとう」

その時の称賛は素直に受け取り、続けて食人花に立ち向かった。

.....

.....

.....

手間こそかかったけど誰一人ケガもなく食人花を全滅させた。その後で回収した魔石を観察してみれば普通の物にはない、極彩色の輝き……。

「カレン。魔石を熱心に見ていますが、何かわかった事でも？」

「んー、残念だけど見ただけじゃわからないわね」

「ここじゃ調べようがないから地上に戻ってからね。」

「それにしても話に聞いていましたが、思っていた以上に厄介なモンスターのようですね」

「固くて速くて……、その上数が多いなんて嫌になるよなー」

「【劍姫】、貴女はあのモンスターを熟知しているようでしたが、知っている事があれば今のうちに教えてもらっていいですか？」

「私も聞きたいわね」

「わかりました」

アスフィに便乗して【劍姫】ちゃんから食人花の情報を聞く。

食人花は打撃が効きにくく、斬撃には弱い。魔力に過敏に反応し、特に魔法の発生源に押し寄せる。そして、他のモンスターを率先して襲う習性を持つ。

「モンスター食いのモンスター、ねえ」

「モンスターがそのような行動をするには、大きく二つの可能性があります。一つは偶然、あるいは何らかの事故でモンスター同士が逆上し、互いが互いと争いあう。群れ規模になる場合もあります。もう一つは、モンスターが魔石の味を覚えてしまった場合。そうなる場合モンスターは大量の魔石を摂取し、そしてその能力には変動が起こります。

【ステイタス】を更新される我々の様に」

「……『強化種』」

「ええ、そうね。過剰に摂取したモンスターは本来の能力を超えて、そう呼ばれるようになるわ」

本来、モンスターの同士討ちは例外を除いてないと言っている。そして魔石の味を覚えたモンスターはより魔石を食らい、持て余すほどの力を持つ。それが『強化種』と呼ばれるモンスター。

「有名なのは『血濡れのトロール』ですね。多くの同業者を手にかけて、討伐に向かった精

鋭パーティーを何組も返り討ちにしました。最後には『フレイヤ・ファミリア』が討伐したのは記憶に新しいですね」

「私も『強化種』は何度か見たことがあるわ。『炎纏のヘルハウンド』、『暴食のブラッドサウルス』とか。『バーバリアン三獣士』なんてバーバリアン三体が揃った『強化種』なんてのもいたわね」

「……皆、カレン程の遭遇は稀ですから参考にはしないように」

「この一言に【剣姫】ちゃん以外が頷く。

「まあそれはともかく、あの新種も魔石を目的に他のモンスターを襲ってるって事か?」
「私はそう考えます。しかし共食いに走るなら何らかの理由があってしかるべきです。それに先ほどの戦闘でも個体それぞれの強さがバラバラでした」

「そういや、あのモンスターの強さはまるつきりバラバラだったな。楽に倒せたやつもいれば相手手こずるやつもいた。群れで魔石を狙うってアリなのか? 最初から魔石の味を占めてるなんて冗談じゃないぞ」

「そうね。異種とは言え同じモンスターを捕食する事はダンジョンのルールから外れてる。でもアスファイが言った例外に当てはめるにはあまりにも不自然過ぎる。あのモンスターを操る存在があるのは間違いない、か。」

「……………」

耳に妙な音が聞こえて目を向けると「劍姫」ちゃんが拳を力強く握りしめていた。

どうやらこの子、モンスターを操る存在に心当たりがあるか会った事のかしら。もしかしたらそれでここに来たのかももしれないわね。

「先に進みます。警戒は今以上に」

「おう」

「了解」

それを確かにする為にもこの先に進むしかない。

再び奥へと向かう。またあの食人花の襲撃を警戒して周囲に気を配ってるけど、もしあれが群で動くなら大元に私たちの事は伝わったでしょうね。どうなっても対処できるようにしないと。

「また分かれ道かよ……」

誰かが愚痴を零したのが聞こえた。マツピングをしていた「泥犬」ちゃんが分かれ道を前にしてアスファイへ顔を向ける。

「なあアスファイ、どつちに行けば——」

指示を仰ごうとしたその時、彼女の声を遮るように体軀を引き摺る音。そして左右の道、いや来た後方の道から毒々しい花頭を持ったモンスター達が現れた。

「……カレン、後方からの敵をお願いします。左右の道は私たちと「劍姫」で受け持ちま

す」

「ええ、承知したわ」

三方向を私と【劍姫】ちゃん、そして「ヘルメス・ファミリア」メンバーで当てる作戦か。寧ろバランスが外れてそれぞれの長所が生かせるわね。私と【劍姫】ちゃんは単独で問題ないのは信頼の証かしら。

その直後にアスフィの号令が飛び、冒険者たちが左右の分かれ道に飛び。私も後方からの食人花たちの中へ飛び込む。さっきの戦いで大体のパターンは把握したからさつきよりも手間はかからない。実際、数秒で5体を切り伏せる。

その次の瞬間。ドンツ、と重い物が落ちて来た音が聞こえた。

振り返ればそこは壁だった。いや、左右の道が塞がれていた。

「ああ、そっか!!」

ここで自分の不甲斐無さに気付いた。この場所は異^{イレギュラー}常で出来た迷宮。本来の迷宮の様に地形が変わらないルールはなかったはずだ。でも同時に、この先にいるのは間違はなくダンジョンの外にいる存在。

「とりあえず今は」

そこまで考えてまだ残る食人花の殲滅に戻す。つて、なんだかさつきより数が増える。足止めか、本気でこつちを食らうつもりか。

さすがに時間をかける訳にはいかない。そう思つて取り出したのは一張りの弓。そして矢も番えず弦を引いた。

「——魔弓カーマンギール、降り注げ」

命じるような言葉。しかしこの言葉に答える様に番えていなかった弓に一閃の輝き。そして弦を離すと一閃は万の軌跡となり放たれる。それは戦場に振るような矢の大雨。

『——ッ?!?!?』

迫っていた食人花はこの矢を一身に受け、苦痛の叫びをあげる暇もなく原型を留められないほどに貫かれる。運悪く——いや運よく魔石を貫かれた個体はこの苦しみから早期に解放されたが貫かれない個体は体軀に穴を開けられる。しかしそれも時間の問題。最終的にはすべて魔石を貫かれ、全滅した。

そして他にモンスターが来ないか気配を探る。

「……………いない、わね」

モンスターはいない。さっきので全部だったみたい。でもものんびりしていたら次が襲ってくる可能性がある。早くみんなと合流しないと。

【劍姫】ちゃんと【ヘルメス・ファミリア】メンバー。どちらと合流すべきかと考えれば【ヘルメス・ファミリア】メンバーね。【劍姫】ちゃんなら万が一でも勝つ事は出来る。でも【ヘルメス・ファミリア】の方は万が一でも1人2人が死ぬ可能性がある。保険は

あるけど、万全じゃない。

「ならさつさとこの壁に——」

穴を開ける。そうする場面でそれが出来ない状況になった。それもたつた今。

体突き刺さるのは鬨気、怒気、そして殺気。静かに、しかし重く大きく。剣や槍のような鋭い切っ先を突かれる感覚が体を貫くほど凶悪になる様に。

近づいている。いや、ここに來ていた。

「私を分断させたのは自分たちが対処する必要がない、からか。だとしてもこの状況じゃ迷惑にしかならないんだけど」

だからと言って放っておける相手でもない。全く、なんでまた——。

「貴方が来る訳、【わうじゃ猛者】？」

背を向けたままの質問の返事は膨れ上がった気配と刃の気配。

素早く盾を取り出し、更にそれを両手で構えて後ろに振り返る。それとほぼ同時に大

劍の刃を受け止めた。

「——っ！」

両手で構えたのは正解だったわ。なかなか重い。

「……私は言葉の返事が欲しかったんだけど？」

「貴様ならこのぐらい防げるだろう」

「言ってくれるわね」

【猛者】の声は淡々としていた。淡々と、こつちに殺気を向けている。やつぱり心の内じゃ猛る程に燃えているわね。わかってはいたけど、この場じやなきやダメだったのかしら？

「でも私はちよつと取り込み中なの。今度にしてくれない？」

「それは出来ぬ」

「でしょうね。でも貴方がここまで強引になるなんて、そんなに私が許せない？」

私がかかりきつた事を聞いて、言って後悔した。

「……………ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

【猛者】の淡白な顔が消え、獣が現れた。

更に力強く押し込まれる大劍。でも私は盾の球面を利用して上手く動かし、流す。この隙に空へ上がり、降りずに飛行を続ける。

そんな私を、【猛者】は見上げた。

「許せるものかああ!! 貴様はあの方の物を奪い取った存在! そして何よりそれを許した自身がそれ以上に許せんのだあ!! 故に俺はあ、お前を倒しすべてを取り返す!

あの方の物を、俺自身の誇りを!! 【財宝竜^{ファツニル}】カレン・デュラス、俺は貴様を地へと引き摺り降ろおおす!!」

この場所すべてを振るわせるような音量、何より強い感情。【猛者】がここまで感情的になるなんてないでしょうね。

ならこつちも覚悟するか。

「なら来なさい。この竜が、相手してあげる」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

オラリオ最強。その名声を持つ英雄が、挑んでくる。

竜の隠された力

「こつちだよ」

ひっぱられてひっぱられて、みどりのせかいからさよなら。

かわるいろいろ。ぐるぐるかわる。あかいほうせきにひっぱられて、がたがたゆれるものなのって、ここにきた。

おらりお。めいきゆう、とし。オラリオ。そのぼしよにわたしは、きた。

いろがちがう。においがちがう。かんしよくがちがう。なにより、わたしとおなじかたちをしているものがおおい。それは『ひと』といった。

そのなかをひっぱられてすすむ。ひっぱられながらあかいほうせき、わたしとおなじかたち。ほうせき。しょうたいはめ、ひとみ。そんななまえ。

「ただいまー」

「ん？ つておまつ!?!」

そしておつきくてかくかくなおおきななにか。あとできくと『ほーむ』つていうばしよだった。

あかいほうせき、ひとにかこまれる。わたしもひとにかこまれる。なにかあるけどつ

かめないもの。これは『くだもののじゅーす』。それがはいつたちやいろいろものは『こつぷ』。ここにきてからいろいろものがあるんだつてしてる。

そうして、ひとのかたちでひとじやないそのひとがでてきた。

「嬢ちゃんがそうか。私はこの『ゼウス・ファミリア』の主神ゼウスだ」

「私は『ヘラ・ファミリア』の主神ヘラだ」

そのひとは、かみさま。それが、ちかいとおもえた。

それからそれから。

かみさまふたはしら、わたしのことをきく。これまでのこと。かんじたこと。

かみさま。ぜうす、ゼウス。ヘラ、ヘラ。ふたはしらにわたしはきく。ここまでできたこと。はじめてみたものこと。

つたえて、しつて。おしえられて、まなんで。わたしは、私になっていく。知つていくことで自分の中が大きくなっていくのがわかる。

そうして時間が経っていくと、部屋の扉から乱入者が現れた。その子は私を連れて来

た紅い宝石、宝石の様に紅い^{ルビー}に似た瞳をした、女の子。

「これこれ。騒がしいぞネラ」

「ごめんね神様。ヘラ様、こんにちわ」

「私は構わないぞ。してネラ、用件はなんだ？」

「うんっ！ その子にあげるものができたの」

私にあげるもの？ とはなんだろう？ この女の子に聞かれたのはゼウスとヘラと

同じような事。同じような……。同じ……。う？

一つだけ、同じことを聞いて違う返事があつた。

「あなたの名前はカレン・デユラス、だから改めて自己紹介！ わたしはカンパネラ・デユラス。今日からあなたは私の妹よ！」

かれんでゆらす、かれん・でゆらす。カレン・デユラス。それが私の名前。目の前の女の子はかんぱねら、カンパネラ。

私の義姉となる女の子。カンパネラ^{小さな鐘}の名前を持つ女の子。それが私にとって大事な

ダンジョン・24階層

|||||

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

ダンジョンに響く【おっじゃ猛者】の雄叫びは鳴り止まない。しかも叫び続けたただけ勢いがついている。勢いはともかく雄叫びには耳を塞ぎたい気分だけど自分から五感の一つを潰すほど愚かなじゃない。

周囲には【ミユニアストレジャー】から取り出して、でも力負けして散らばった武器の数々。中には大破されたものだ。はあ、我ながら舐めてるわね。

「——【グニタヘイズより贈り物を】」

ここまで耐えきってくれた盾を放り投げ、新しく装備を取り出す。右手には長剣、左手には盾だ。勢いで攻めてくる【猛者】に対するには同じだけの力強さかそれに耐え切る我慢強さ。私は後者を取った。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

「ハアアアアアアアアッ!!」

さらに勢いをつけて突進する【猛者】を、真正面から迎え撃つ。

まるで巨木が倒れてきているかのような大剣の一振り。不思議と臆する心はなく、前へ。そしてその一步を軸に体を回転。一振りを躲し、懐へ——なんて許さない。

懐に入った私が見たのは膝。2撃目に膝蹴りが迫っていた。すぐに盾を間に挟み、受け止める。

「…ッ！」

さすがはオラリオ最強の一撃は全身に響いた。でも痺れるほどじゃない。長剣を強く握り、一瞬の合間に守りの隙間を探し、見つける。

躊躇いも罪悪感も抱かず、剣先を「猛者」に突き刺した。手応えはあった。でも違和感もあった。

(これ、筋肉で抑え込んでいる!?)

脳筋レベルの防御技だった。下手に抜くとまた武器を手放す事になる。なんて考えている最中に、私の角を掴んできた。

「いつ！ ちよ——」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

角を掴まれたまま私の体は宙を浮いて投げ飛ばされる。その膂力は周囲に広がる肉壁でさえも岩壁のような衝突を体に与えられた。

「バハッ！」

取り出した盾から悲痛な叫びが轟く。その声量は空気を振るわせている。そしてそれは、何も無い場所に壁を作り出している。音撃と音壁によるクルフーアの防御。音撃は耳に響き、音壁は刃を通さない。

「又ウウツ!!」

【猛者】もこれで勢いを止められ宙で留まった。

「続いて魔棍ダイエンセイ大猿聖!」

そしてその隙をつく武器を取り出した。

取り出したのは長い棍。勢いをつけて回転をかけ、【猛者】の鳩尾を突いた。

「伸びろ!!」

私の言葉に大猿聖はそのままに伸びた。【猛者】の体は押されてまた離れていく途中で私は一度武器を引き――、

「そいやっ!!」

振り上げ叩き付けた。棍の長さ、私の筋力、そして遠心力の三つが合わさった一撃は大きな破壊力を編み上げた。

大猿聖は元の長さへと戻り、一回転させて地面に立てる。私は変わらず自分からは攻めない。ただ【猛者】の様子に目を向けて、私は告げた。

「相手にはなつてあげる。でも今度にしなさい」

そう、私は【劍姫】ちゃんたちと合流しなきゃならない。まだ冒険者依頼の最中なんだからそつちを優先したいしね。でも聞き分けてくれるとは思えない。またさつきのように突進してくると思ひ、迎撃・反撃が出来るようにしておく。

「——手抜きか」

その考えは、【猛者】がようやく言葉を発したことで無駄になった。ここで理性的になったことじゃない。見抜かれた事に、だ。

「………なんでわかつたの？」

誤魔化さず、正直に。これを見抜いた冒険者に敬意を持って。その彼は静かに立ち上がって返す。

「何故、本気を出さぬ」

「そうね。貴方から先に聞いてきたのよね。答えはイエス。理由は、その必要がないから」

「必要がない。だと」

「私の立ち位置は貴方が思う以上に特殊でね。外で色々とあつたの。それは世界の中で潜む、下界の可能性なんて言うべきものだった。そして私もその枠になっている。そして出来る限り私も本気を出さないようにしているの。——と、言っても貴方

は納得しないでしよう?」

こんな意味不明な事で納得するとも思ってははいない。ただし私は「劍姫」ちゃんたちの所に急ぎたい。本気を出すわけにはいかないけど、少しは解放してもいいか。

「【グニタヘイズより贈り物を】」

私の周囲に再びありとあらゆる武具が出現する。短剣から大剣、大斧から長槍、弓、鎧、盾——なんでもありだ。そして何より、これらは私の特許。

「【猛者】、さつき私が使った盾と棍、マジックアイテムのようだったでしょう。実はあれ、本来の魔剣の応用なのよ」

「何?」

「実は皆が認識している魔剣はね、急拵えの半端物なのよ。本当の魔剣は使用者の魔力を喰らってその能力を発揮する、まさに魔法発動媒体だったの」

そしてそんな魔剣が消耗品として留まったのは神々が降臨する以前、モンスターが地上へ出てきていた時代が原因。モンスターは数で攻めてくるのに対し、人類はそれを押しとどめる火力が足りていなかった。魔剣は当時から対モンスターの兵器として作られていたけど完成するには時間がかかりすぎた。だから耐久・供給を二の次にし、その威力だけが出せるまでにした状態で戦場へ送られた。それが数年だったら完成品の名残が残っていたでしょうけどその時代は長すぎた。だから人々の記憶から失われ、完成

品の伝承は途絶えた。私がこの製法を見つけたのは、本当に奇跡ね。

「一撃としての威力なら貴方のよく知る魔剣が上でしょう。でも腕の立つ冒険者が、確かな武器として魔剣を使えるとしたら？」

「……その力は大きく跳ね上がる」

「その通り。一流の技と、最高の魔法の力。私はそれを復活させた。貴方が来る直前に使った魔弓は魔力の矢を生成、さつき使った盾は魔力を音に変える攻防一体の技、棍は伸縮自在で間合いの支配権を手に入れる。今は私しか作れないから、これらは竜具と呼ぶべき魔法の武具ね」

「それが、お前の周りにある武器たちか」

「その通り。そしてこれら全てで、貴方に膝をつけさせる。言葉通り、全てで」

そしてここからは、真骨頂。

「【この意に従え——キネシス・ハンズ】

それは魔法の言葉。詠唱と魔法名。その言葉に、周囲の武器たちが宙に浮かん

「……っ！」

「驚いてくれてるわね。でも残念なお知らせを一つ」

これを聞いたら【猛者】は何を思うかしらね。怒り？ 屈辱？ それとも驚嘆？ どれにしたって彼は私に挑むのを止めないでしょう。それにここまで見せたんだ。あと

も感じた。

「……………ん」

見に行くぐらいなら、と私は上を見上げた。

|||||

ダンジョン・24階層

|||||

「我が敵に血塗れの裁きを！ 魔槍カズイクル・ドラクレア!!」

カレンの持つ禍々しい槍が床に突き刺さした直後、同じ槍が幾本も出現した。それはカレンを中心に現れ、続けて俺に向かって現れ始める。

「又ウン!!」

俺はソレが自分の足下に来るよりも早く現れた槍を全て切り裂く。だがそれでも槍は現れ続く。切るは無意味。ならば、

「オアウ！」

出現する床を叩く。生き物の肉に似たそれは飛び散るが槍は出現してこなかった。どうやらこれが正解か。

「感心する時間はないわよ！ 魔銃ジ・キッド！」

カレンの言葉、そして何十回もの雷音。耳を塞ぎたくなくなるような音で、音が聞こえなくなつた。同時に受けた体の痛みには比べるなら、痛みが楽だ。

「——！——！——！」

何を言っているのかも聞こえないが、悪態をつく動きに見えたからそういうことだろう。奴は手ぶらだが、その周りを浮遊する筒状の武器がこちらを向いて煙を出している。さっきの『がとりんぐ』の一種だろう。

そうしている内にカレンは刀と斧、そして周りにいくつもの武器を身につけて迫つてきた。

「——！——！——！！」

俺の間合いへ入れる直前、カレンは斧を地面に叩き付けた。地面が砕け、そして雷が昇る。

「——イ！——キ——アけ！——セツキライバ雪鬼雷刃！！」

ようやく耳が聞こえるようになり、しかし聞こえたのはカレンが技を放つた後だ。斧から昇つた雷を切り裂いた。ただ切り裂いただけではなく、切り裂いた雷が刃のように放たれた。拡散しているそれはほとんどが当たる事はないが、当たる分もそれなりの数が俺に向かつてくる。1つ1つ払うのはすでに不可能。かといって耐えきるにはは攻め手を押さえられる。ならば、一度に全てを防ぐ！

「フンッ!!」

俺が行ったのは剣を手放す事だった。そして剣は投げた勢いで回転し、力の方向で飛び回らぬように。結果、剣は盾のようになった。

回転した剣はその範囲のみ雷を防いだ。幸いか、もしくは狙っていたのか俺は雷からは無傷だった。

「器用ね!」

「お前ほどではない!!」

お互いに言葉を交わしてカレンは距離を取り、俺は再び剣を取る。

「魔琴トリス! 奏でなさい!!」

カレンがそう言う中に浮く豎琴の弦が音色を立てる。その直後、体に重い衝撃が走った。

「ッ!!」

口から全てを押し出そうな程だったが、なんとか耐える。

「下層のモンスターでもしばらく動けないのによくやるわね! だったら――」

「させるかあ!!」

これ以上カレンの流れを続けさせる訳にはいかなかった俺は琴に向かって大剣を投げた。唯一の武器をこの時点で手放したのだ。だが代わりは、いくらでもある。いや、

目を奪われた一振りがあつた。

その形が浮かぶよりも俺は大剣を投げた瞬間に駆けていた。

「ん？ って貴方!?!」

俺の狙いにカレンも気づいたが俺の足は止まらない。カレンの武器が襲いかかろうとも、周りに至高と言える武器があろうとも俺が求めるのはただ一つ。

ソレを、この手に握った。その瞬間、手に馴染む感触を得た。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!」

この手に取った武器——黄金と宝石の柄を持ちながら刀身は飾り気のない大剣を横一文字に振う。

この一撃でダンジョンを覆う肉の壁、そして元々のダンジョンの壁が破壊された。その中でカレンは自分を覆うほどの巨大な盾の影でこの一撃を防ぎきった。

「……この盗人」

「貴様はかつて、俺の武器を持っていったのだ。これはその先払いだ」

「へえ、それは私に勝って取り戻すってこと？」

「そうだな。まあ、今ここにあるわけだが」

「……見事ね。その感覚は流石ね」

「そうか。手に馴染むはずだ。そして目を奪われ、懐かしい感じは正しかった。」

この手に握った大剣。かつてカレンに敗北し、そして奪われたあの太剣だと。当時の俺はLv. 5でその時に愛用していた太剣は第一級等級武装の中でもトップクラスにあつた大業物だつた。

それが奪われ、しかしこうして再びこの手に戻ってきている。しかも大きな力を得て。

「――暴走されると厄介だから教えておくわ。その剣の銘は〈魔剣テオドリツク〉。デュランダルデュランダル、ナーゲリングナーゲリング、デュアルデュアルの不壊属性、巨殺属性の二重属性に加えて炎属性の魔剣の特性を持つてるけど、それは竜具だから碎ける事もない。あと、素材は最硬金属オリハルコンを使った特殊合金だから鋼鉄製なんて紙みたいに切れるわよ」

「あり得ないだろう」

「一度振つても実感はないのかしら？」

「そうだな」

荒唐無稽なカレンの言葉だったが、それが嘘と断じる事は出来なかつた。奴の言うと

おり、先ほどの一振りでのこの剣の真価を感じた。その言葉の通りに俺の力に耐えた上に刃こぼれもなく、わずかながら炎も発していた。偽りのない、この剣の能力だ。

「まあ盗られたならしょうがないわね。終わった後に回収させて貰うわ」

「悪いがそれは叶わぬだろう」

「言つてなさい」

カレンは目の前の盾を下げた武器を構え、さらに多くの武器を周囲に集めさせた。奴にとつてこの大剣はそれだけ警戒に値する武器と言うことだ。

しかしそれで勝てる相手ではない。これ以上の力を振わなければ奴には――

その時、カレンの体から腕が突き出た。

「ガッ、アアッ……!!?」

懐かしい気配は目の前の少女からだった。そしてその中で一番力を発していた部分を取り出した。それは人で言う、心臓と言う場所だ。それを少女の後ろから覗く。

「んん………?」

見た感じ、変わった所はない。もしかして精神的な部分だったかもしれない。心臓と
言うなら心——。

「アッアッ!!」

考えていると腕を切られた。斬られてとつきに引いた。斬られたのは突き抜けた部
分だったみたいだ。

「ハア………、ハア………」

少女は呼吸を乱しながらもこつちへ振り返る。斬られた腕はすでに心臓から手を離
し、素材へ変わっていく。そして抜き取った心臓は少女自身が体に押し込んだ。

「アナ、タは………。んっ、ガア………」

少女は苦しうに胸を押さえる。でも私は感じる。少女の奥底からわき上がるその
気配。それは確かに——。

「やっぱり、同類なのね」

確証を持つてそう言った。すると少女は私を睨み付けてこう言った。

「私を、同類と呼ぶな！ ダンジョンマスターツ!!」

2色を瞳に宿した両目。外見はヒューマンだけど先の特徴がそれを疑わしくしている。現実離れた美しきさを持つこともだが、何よりこのダンジョンで貫頭衣のような格好は流石にあり得ない。それはここが彼女にとってこの階層——いやダンジョンはそれだけ気楽にいられる場所の証、メイ——。

「アアクソツ!!」

考へるほどに意識が薄くナル。自ブンを見つめたままジヤナないとすぐに持つてカレル。ナラ、ヤレる事をする。

「グニタヘイズの穴蔵、その奥底に宝物を置きましょう——ミュニアストレジャー!!」
「グニタヘイズより贈り物を」!

先に出現させた竜具を回収。そして新たに鎖を出した。三大クエスト、隻眼の黒竜の動きすら封じる竜具を、

「アアツ!!」

ジブンに装備シタ。
こうそく

【猛者】オツタルウ!!
おうじや

ヒさ々に誰力を名マエで呼ブ。タダ、一言。

「トメられタならトめて頂ダイよオ!!」

イシキはココデ、沈ンダ——。

第24階層・食料庫

バントリ

魔石を辿り、ようやく食料庫まで到着した私たち。そこは数多くの食人花のモンスター、そして冒険者たちと彼らと敵対している白装束の集団。でもその中にアイズさんの姿はなかった。

「おい、時間を稼いでやる。食人花を全部吹っ飛ばせ」

ベートさんのまっすぐな言葉にアイズさんの姿を探していた私には少し理解が遅れたけどすぐに杖を構える。

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ。」

集中、ただ集中。この空間にいる食人花を全て撃ち払うだけの威力を、魔力を練る。

「帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢。雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え」

詠唱を終え、杖を掲げた。

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」

魔法名を宣言。精神力マインドの消費を感じると共に発動する。幾多の魔法の矢が雨の如く食人花へ降り注ぐ。

「はあ……、はあ……」

「おーい！ お前、レファイヤじゃないか!？」

「え……、ルルネさん!」

さつきは魔法に集中していたせいで気づかなかつたけど囲まれていたパーティーの中にルルネさんがいた。

「どうして貴女が——」

「おいつアイズはどうしたっ!!」

あ、あのベートさん。ちよつと強引——。

「と、途中で分断されたんだ！ 私たちと【剣姫】、それに【財宝竜ファヴニル】の三つに!」

……えつ、あの人もここに？

シアンスロープ

犬人の女から聞いた限りじやアイズは別の場所にいて、そしてあのトカゲ女も来ている。そしてこの犬人の女は事情を話す代わりに助けて欲しいらしい。その中で元凶

らしい仮面の野郎を教えられた。

余計な手間で面倒くせえが、あの野郎の目付きは気に入らねえ。だったらブツ倒して吐かせてやる。仮面の野郎に向かいながらそう決めた。

踏み込む毎に加速して近づいていくと前から食人花のモンスターが襲いかかる。

「チツ、つまらねえ真似すんじゃねえ!! 邪魔だあ!!」

双剣で斬り刻み、さらに近づく。

「クツ、冒険者風情がツ！」

仮面野郎の悪態が聞こえた所でお互いが間合いに入った。だが突撃だった俺よりも仮面野郎の迎撃が一步早い。だが遅え。

紙一重。その差で迎撃の一撃を躲し、こつちの反撃の体勢を整える。視界の隅で仮面野郎の二撃目の構えが見えたが、それも遅え。顔面に向けて蹴りを放った。

「……ちツ！」

が、腕へ防がれた。だが今の感触、かなり頑丈な身体をしてやがる。防いだ腕もダメージを与えられた感じもしねえ。

「貴様はツアルカンド【凶狼】……! そうか【劍姫】を追ってきたのだな【ロキ・ファミリア】！」

【劍姫】——ここにいねえアイズがここに向かっていた事を知ってる口ぶり。あの犬人が言ってた分断はこいつ等の仕業……!!

「おいてめえ、アイズをどこにやった!？」

「【劍姫】なら私の同志が相手をしているだろう。今頃は片腕をもがれて可愛がれている頃だろう」

——その言葉の直後、俺はいったい何を思ったか。ただ仮面野郎に技を打ち、そして一度離れて言った。

「殺すぞ!!」

どつちみち、こいつに手加減する気は失せた。遠慮なく行かせて貰う!!

|| || || || || || || || || ||

食料庫・別視点

|| || || || || || || || || ||

「……………ツ！」

鋭い痛みが目が覚めた。ぼやける視界が捉えたのは肉の床。遠い耳が拾うのは戦いの音。それらが眠る前の事を思い出し、現状を理解させる。

硬え。しかもこの馬鹿力。速さで勝つてても押し切れねえ。

「はあ！」

「チィ!!」

いや、向こうが俺の動きに慣れ始めてきやがった。擦った所から僅かに血が流れる。だが、こちとらオラリオ『最速』なんて呼ばれてんだ。速度勝負じゃ負けるつもりはねえ!

「ツラ!!」

「ぬう!」

さらに速く、遠慮なしの蹴りを打ち込む。手応えはある。だが堪えた様子は相変わらずない。おかげで反撃をする位だが速度を上げた俺に掠りもしなかった。

「チツ、食人花!!」
ヴィオラス

ペースが俺に戻ろうとしたとき、奴は大声で叫びやがった。仲間でも呼んだのかと周囲を警戒するが近くには誰もいなかった。だがそこに頭上——天井から僅かな音が聞こえた。見上げれば蕾だった食人花のモンスターどもがその花を開いていた。

「馬鹿めツ！」

だが俺はミスをした。モンスターに一瞬目を向けたせいで一撃を貰った。反射的に

ガードが出来たが足を浮かされて後ろに飛ばされた。着いていりや踏ん張りも効いたが浮いた以上は野郎の力分だけ体が後ろに追いやられる。

「行けっ!!」

しかもさつき俺が見たモンスター共が追いかけてくる。

「チッ!!」

悪態と同時にようやく足が着く。地下水路と違って双剣を持つてた今回は手こずる事はねえが数が多い。野郎の所まで戻るには時間がかかる。

「鬱陶しいんだよッ!!」

その苛立ちは目の前のモンスター共にぶつける。剣を振り下ろせればその茎くびが落ちた。続けて1つ、今度は2つ、3つでモンスターを斬り捨てる。倒す毎に近くなる距離だがそれでも鬱陶しさは変わらなかった。

「———破邪の聖杖いかにすち!!」

そこにその声が聞こえた。初めて聞く言葉だったが内容から詠唱の言葉。それにこの声は、あのエルフの声———!

「バ———」

「『ディオ・テュルス』!!」

やりやがった! あの頑丈さを見ていなかったのかよ!

血が足りず霞む視界の中で【凶狼】が仮面の男を吹き飛ばす光景を見て僅かに安堵し、その気の緩みが抑えつけていた痛みが暴れ出した。

「っ……」

「大丈夫ですかアスファイさんっ！」

その時キークスが駆け寄ってくる。本当にダメージなどなかったかのような動きだ。でも私は確かに見た。彼が食人花のモンスターによって殺される瞬間を。

「それをすんません！ あのクソ野郎を殴る事出来ませんでした！」

「構いませんよ……。ただ失礼な事を聞きますが、本当にキークスなんですすよね？」

「もちろんです！ ……と聞いた所ですが俺も不思議なんです。自分でもあのモンスターに殺されたって自覚はあるんですけど気づけば痛みもなければ寧ろ万全の状態だったんです」

キークスも自分が殺された自覚はあった。事実、体は回復しても破けた服や壊れた装備はそのままだった。まるで蘇生か、誰かが身代わりになったあの――。

「キークス、人形はどうなっていますか？」

「人形？」

「フェアワニル【財宝竜】、カレンから渡されたアイテムです」

則正しく。その後でどの場所に出たのかを確認した。

ドーム状に広がる空間。その中心には巨大な植物に巻き付けられた石英クォーツを見てここが食料庫だとわかった。

「アイズさんっ!!」

すると下から聞こえる筈のない声が聞こえ、顔を下ろす。そこには分断された皆や何故かレフィーヤやベートさん。それに知らないエルフの女の人がいた。そして、誰も死んでいない事を知って安堵した。

そう思っていたときに心配を感じた。気を引き締めれば巨大な食人花のモンスターが襲い掛かろうとしていた。

「!!」

「!!」

誰かが叫んでいたみたいだけどモンスターが起こす騒音にかき消されて聞こえなかった。でもちようど良いかもしれない。このモンスターに「風エアリアル」を使ってみよう。ここで今の私を確認する。

襲い掛かるモンスター。でもその動きから見て充分に間に合う。

「行く——」

そして渾身の一刀を振る。

そこで背筋が凍るような電撃が走り、その場から飛び降りた。その直後、反対側の壁から火柱が伸びた。

——ドオンツ!!

続けて落下音、いや衝突音だった。さつき見た火柱が私に襲い掛かっていたモンスターにダメージを与えていた。食人花と同じ植物系モンスターだからその効果は抜群だった。

そこまできを考えて着地し、その直後に私より響く着地音が聞こえた。

「【おうじや猛者】!?!」

誰かの声か？ でもその二つ名に思わず注目した。確かに「フレイア・ファミリア」団長の【おうじや猛者】オツタルがいた。ただ見慣れない大剣と、彼自身が激戦を抜けてきたような姿に一瞬の動揺が生まれる。

その中でオツタルが上を見上げ、その視線の先を追えたのは偶然だった。視線の先、視界の中に移ったのは熱で溶けた大穴と、宙にいる少女。

「……女の」

子。と最後まで言えなかった。その少女がおもむろに両手を叩いたと思つたら大穴が同じ動きをして塞がった。

驚き以外はなく、見ていた全員も同じ事を抱いた筈だった。そんな中で少女の指を鳴らす音が鮮明に聞こえ、それに併せて足場のような石柱が伸びた。少女はちよつとしたジャンプを終えたようにその上に乗った。

でもまだ終わらなかつた。塞がれた大穴があつた所から大きな音が鳴り響き始めた。

「今度はなんだあ!?!」

声が聞こえ、それがベートさんの声だつてわかつた。この大きな音が響く中でハツキリ聞こえたのはそれ以外が静かにいたから。だからこの音が塞がれた大穴を再び開けようとする音だつて事も理解できた。つまり、まだ何かがある。

そしてその何かは見事塞がれた大穴に穴を再び開けた。さつきより小さいけど十分に大きな穴の向こうは闇で何も見えない。その中で、一本の赤い尾が顔を出していた。

それで誰なのか、わかつてしまった。

二度目の。

今でもカン義姉パネラさんが初めて義姉の家族になったあの日を覚えている。そしてこの思い出は生涯忘れる事はないだろう。

それからの日々は初めてで楽しく、辛くも笑い合えた。私は確かに幸せだった。

だから、全てが失われたあの日も忘れられなかった。

黒竜との戦いで多くの仲間たちが亡くなった。

勢力を削られたファミリアはゼウス神様と生き残った皆が追放された。

そして、覚悟を受け止めてもらえなかった。

一度の喪失が大きすぎた。怒りはもう込み上げず、恨みは最初からなく、悲しみだけが溢れ上がる。でも悲しみだけなのがより辛かった。

枯れるほどの涙は源泉の如く流れ続け、泣き続けた声は風のように漏れ続ける。それでも自分自身、その実感はなかった。悲しみが深すぎて涙と声はまだ出ていると言う認

識しかない。火傷しそうな熱がどうにかつなぎ止めていた。

何がいけなかったのだろうか？

私が弱かったせいなのか？ 黒竜に挑んだのが早計だったのか？ オラリオの立ち回りが失敗したのか？

違う、違う違う違う。そんな事じゃない。何かがいけなかったかじゃない。どこにもいけなかった事なんてなかった。ただこうなっただけ。どうしようもない宿命と言えるほかに。

でもその事を認めるだけの強さがない。

心が拒絶している。——認めるなど。

記憶が否定している。——間違いだと。

魂が目を背けている。——夢だと。

そうだったらどれだけ救われただろう。どれだけ幸福の中にいただろう。でも違うんだ。

認める強さがなくても認めてはいけない。弱くて苦しく辛くても、認めてはいけな

い。

だつて――。

それは冒険者である皆の生き様を汚すから――。

「泣いているのか？　だが今は顔をあげろ。でないと小僧の限界がくるからな」

誰かが、そう言った。

その上で動けたのは食人花とその巨大化したモンスターたちだった。さっきの炎で若干動きが鈍い個体も反応していたけど従えられる状態じゃなく、動きも鈍い。そしてモンスターたちに命令を出しているのは同じあの男の人。

「行け！ アレを仕留めろ!!」

その腕の先にカレンを捉え、短く命じた。モンスター達は迷いなく襲い掛かる。対するカレンはモンスター達を認識し、

——頁を切り取ったように姿が消え、

——そしてすぐに嵐がこの食料庫の中で嘖き暴れた。

一瞬の出来事で何が起こったのかわからなかった。その中で最初にカレンに襲い掛かっていたモンスター達が細切れになって、その次にあの女の子はいつの間にか半球体の壁に覆われて守られて、そして消えたカレンが反対側の壁に張り付いている姿を見た。ここまで見た光景から単純に、カレンが目止まらない速さで反対側へ跳び、その間にモンスター達を切り刻んだと思えた。

女の元に辿り着く。

「みんな、大丈夫だった？」

「は、はい。大丈夫です」

「合流できて幸いです。ところで【劍姫】、カレンはどこにいますか？」

「え？ あそこで【猛者】と……」

「貴女も彼女が彼女と認識出来るんですね。あそこまで変わった彼女を」

質問されたときは何を聞いてるんだろうと思っただけですがすぐに返事を聞くと納得した。自分もあの姿のカレンをカレンだと認識した。そう言えばそう認識出来たことには少し違和感があった。あれだけ姿が変わってもカレンと認識出来た。よく考えるとそれに似た感覚に覚えがある。

それはまるで――。

「おいアスファイ！ ヴエンデッタ【白髪鬼】がつ！！」

その答えが出るよりも先にルルネの声が聞こえて消えてしまった。ただ慌てている感じがあつたから思わず彼女に目を向け、その彼女が指さす先を見た。

「えっ……！！」

そこには白髪の男の人の胸元にあの調教師の女の手が埋め込められていた。何か会話しているみたいだったけどここからは聞こえず、そしてそれも長く続かずすぐに手を

引き抜いた。その手には魔石が握られ、男性はモンスターののように灰となった。そして彼女は私を見た。魔石を咀嚼しながら。

私が無意識に剣を盾に出来たのは経験だった。

さつきまでとは違う速さで距離を詰めた調教師の女は力も違った。

「まさか、魔石で……!?」

「しゃべる余裕がまだあるか。まだ足りないようだな」

そつちこそと言いたいけど迫る凶手で言葉に出来きずに吹き飛ばされる。

「エニユオ！ 不完全だがそれで十分だろう！ 持つて行けっ!!」

その時、仲間が他にもいたのかと目を凝らすけど首筋に嫌な感じが生まれた。この感覚には覚えがある。それは、怪物モンスターパーテイの宴の予感。

「巨大花ツ!! 全ての力を持って産み続けるツ!!」

そして聞こえたのは1つの鼓動と鳴動。見上げると植物の芽のような物から食人花のモンスターが産まれ落ちていた。

「どこを見ているっ?」

「っ!?!」

思わず見上げていたせいで一瞬、意識を逸れていたけど咄嗟に反応できた。今度は目を離さず意識を集中させ――

「待った」

その時、彼女が檻に囚われた。

「っ!?! なんだコレは!?!」

「檻、だよ」

私と彼女の間に入り込むようにあの少女が現れた。そうだった。カレンやこの調教師の彼女ばかり目立っててこの子の事を忘れていた。

いまさらだけどこの少女は誰? ダンジョンにいるには武器も防具もない。魔法使いだとしても詠唱も魔法名も口にしていない。

「……やはり地形を操る能力ちから。初めて見たが思ってたよりみずぼらしいな、ダンジョン」

「――え?」

この子が、ダンジョン?

足りない。足りない。まだ足りないっ!!

人類の頂点たるLv. 7になった。鍛錬も欠かさず、慢心もなく。加えてこのオラリオですらない一級の魔剣を手にした。

だが、それでもカレンに傷1つ付けられない!!

「ウオオオオオオオッ!!」

力強く技で攻め手を休みなく、だがカレンはそれを全ていなす。獣のような姿勢で両手と尾を匠に使って捌く。炎も翼で跳ね返すか防ぐ。それがカレンだと言わんばかりに。

いや、気付く——思い知らされるのはそれだけではない。カレンは落ちてきてきている。先ほどまでダンジョンマスターと呼んでいた者に襲い掛かっていたのが今はその逆。襲い掛かる相手だけに対応している。

カレンが暴走する直前に言った意味は『時間が経てば正気を取り戻す』と言うことだったのだろう。それを俺に言ったのは第三者として止められる可能性があるから——

「いふげいけるな!!」

声が出た。第三者という屈辱に。

あいつは俺を敵とも、強者とも見ない。どれだけの殺意と敵意を向けても受け流す。ああ、屈辱だ。これほどの屈辱があるものかつ！

そう俺らしからぬ激情に技も荒れ、しかしこれまで以上の炎を放つ。だがそれもカレンの羽ばたきで横に逸れた。だがその一撃があの日を思い出させた。

.....

.....

.....

『何者だ、貴様？！』

『【ゼウス・ファミリア】、パティエイスタツフ【助演者】カレン・デュラス。ファミリアの名誉のため、そして私自身の感情のため、敗北を与えに来た』

俺以外の団員を乗り越えて現れた竜の娘。モンスターではなく、真正正銘のヒト。何

故の疑問はなく、ここに乗り込んできた敵を排除するのみ。なんて事のない処理だと、思いついた。

勝敗は俺の惨敗。攻撃は届かず、力は押し負け、二撃で足が崩れた。圧倒的すぎた。名も知らない相手にこの俺が為す術がなかった。

『その大剣がアナタの愛剣ね。敗北の対価に貰っていくわ』

その声が聞こえたのは、俺の意識が残っていた理由はわからない。この状態は幸運であり、そして屈辱なる物になった。

『はじめましてになるわね。名前はさつき聞こえたけど改めて名乗ってくれないかしら？』

『……直接お顔を合わせるのは初めてになります、フレイヤ神。私はカレン・デュラスと申します。貴女の宝物に値する品を奪いに来ました』

穏やかな会話に、聞き捨てならない言葉を聞いた。この言葉を捨ててしまつては俺の中に何かが崩れる。だが体が動かない。真上に大岩があるような重圧、もしくは根が生えたような束縛。いや違う。

俺はこの娘——カレンを強者として畏れてしまつている。意志や体よりも心が完全に敗北を受け入れていたのだ。

『実を言うと貴女の事はゼウスやヘラと一緒にいた時に何度か見たことがあるわ。でも

平凡な輝きだったから興味がなかったの。ごめんなさいね』

『いえ。でしたら今はどうでしょうか？』

『綺麗ね。紅く荒々しい色に変わったのに輝きは人を優しく包み込むように穏やか。欲しいほどに』

『そうですか。ですが——』

フレイヤ様の賞賛に喜びも怒りも感じさせないカレンの声を耳が拾う。だがそんな言葉よりも俺の目は。

無造作にフレイヤ様の首飾りを奪う光景を映し出した。

『この場は私が貰います。貴女からはこの首飾りを。作り手を除いて誰も触らせたことのないコレを』

『そう』

フレイヤ様の返事はそれだけだったが、その顔が高揚としているのは理解できた。だがそれよりも俺の中には燃えたぎる怒りが生まれていた。動かなかつた体がようやく動き出す。それは微々たるものだったが、俺はこれ以上に力を絞り出す。

だがそれでも間に合わない。フレイヤ様の首飾りを奪ったカレンはこの場から立ち

去ろうとしていた。

『——カレエン・デユラアアスウ!!』

故に吠えた。目の前にいる強者^{てき}に。今の俺では足下にも届かない敵^{きようしや}に。この声に足を止めたのは気まぐれか哀れみか。今はどちらでもいい。

『許さぬウ!! この敗北、決して忘れぬ!! 何より我等が女神に無礼を働いたお前を決して許さぬウ!! 必ずお前を我等が女神の前に跪かせるぞオ!!』

これは俺の願いだ。俺の不忠だ。全てをフレイヤ様に捧げると誓った俺自身の反故だ。

フレイヤ様と、カレン・デユラス。俺の魂が求める物が1^ふ柱と1^り人となった。これが敗者^{おれ}の始^ねまりだ。

.....

.....

.....

進み、近づくと。こうしてカレンと俺の差を縮める事が実力差を埋めるかのように。そうして近づき、初めてその懐近くまで迫った。
ここで一撃。その一念で魔剣を振り上げた。

その瞬間、カレンの目を見えた。何かに気付いたかのように俺から目を逸らした事実を。

それを認識した直後、振り下ろそうとした魔剣の軌跡が大きくずれた。それに気付いた時はカレンが片腕で弾いたのだと理解した。そしてその腕に傷や火傷どころか、焦げ跡すらない。

「ああ……」

——まだ、届かないか。

その現実を理解して次に見たのはカレンの尾が迫る光景だった。

あつけないほどの終わり方

倒シタ。タシカ、おつたる。〔オウジャ猛者〕。ウン、オモイ出セル。熱カツタ胸ノオク。大分穩ヤカダ。抑エテタものモ暴レテナイ。

私、次ハ何をスレバイイ？ 周りハもんすたーデイツパイダ。デモ私ナラ一発デ倒セル。おつたるハ、大丈夫。アノ武器ハ持チ主ガ意識ヲ失ウト炎デ守ル。ソレニ、彼ナラスグ目覚メルハズ。

……ナカマ、仲間。ソウダ、仲間タチ。向カワナイト。今度ハ絶対ニ、一人ニナラナイ。ミンナハ、アソコ。もんすたーニ囲マレテル。デモ誰モイナクナツテナイ。確力、人形ヲ渡シテタ覚エガアル。アノ子ノ創ツタ物ダカラ大丈夫、トハ言イキレナイ。

状況ハ、皆アノ子ヲ守ツテル。えるふノ、〔ろき・ふあみりあ〕ノ子。魔導士。怪物祭もんすたーふいりあデ、魔法ハ見タ。彼女ナラコノ一帯ヲ殲滅デキルダロウ。

『……加勢、シナイト』

誰モ、死ンデホシクナイ。何も、失イタクナイ。

セメテ、コノ世界ヲ去ル日マデハ――。

ダンジョン。そう呼ばれた少女に反応はなかった。動揺も嘲りもなく、ただその名を受け入れていた。

「ここで、何をしている？」

そして口にした言葉はそれだけ。調教師テイマーの女に尋ねた。

「……お前こそ何をしている？」

「??」

「神への恨みはどうした？ 過去のように、なぜモンスター共を地上に送り出さない？」
思わず愛剣を握る力を強めてしまった。ダンジョンのモンスターはギルドにいる神が祈りで封じ込めているってロキから聞いたけど、今調教師の女の質問にそれが『可能』と返されれば。

「できない」

「何？」

「あの人、がない、から、できない。ここは、感情の土壌。産まれる、の、は、思いの、具現。行けて、言える、あの人、いない」

それは『可能』よりも混乱する返答だった。それはまるでもう一人いるかのようだった。

「答え、ないなら。もう、いい。でも、痛かつ、たら、痛、く、する」

「過ぎれば襲う、そういう事だな。来るなら来い」

「そ、う。んー」

疑問を残すばかりの少女がふとこちらに目を向けた。今までの会話でもう行つてしまふと思つてただけに警戒する。

「……気の、せい、か。起きて、る、訳、ないか」

「え？」

起きてる訳ない、そう言つた？ 私はこのダンジョンと呼ばれた少女とは初めて会つたのに。でも調教師の女と出会つたせいか頭に思いかべる人がいた。

「それつて——」

「さよ、なら」

言葉の意味を聞こうとしたが少女は霧のように消えた。私に多くの疑問を残して。

私が呆然としていると崩れる音が聞こえて現実に戻される。

「チツ、そのまま呆けていれば楽だつたものを」

そう言つたのは調教師の女だつた。彼女は檻を壊して出てこようとしていた。それは幸運だつた。呆然としたままだつたら殺されていた。

再び剣に力を込める。さつきまでとは強さが違う。思えばこの仕切り直しは本当に

幸運だったんだろう。ここで終わる訳には行かない。私はまだ、死ぬわけにはいかないんだ。

【千の妖精】
サウザンド・エルフ

【千の妖精】を守り切る戦い。決して不可能とは言えない時間であつても犠牲が出ない訳ではない。ホセを救助しようとし、それを彼から拒絶された瞬間に思い知つた。

だからこそあの救援は思いがけない事であり、期待していた事でもあつた。

「カレンっ!!」

彼女はホセの救出と同時にその周囲のモンスターたちを屠つた。その一瞬に静寂が感じられ、仲間達も呆気にと取られていると。

「まだモンスターはいます! 陣形を保ちなさい!!」

檄を飛ばし、皆はこの声に再び動き始めた。その間にカレンはホセを抱えて私の側に現れた。

「ううっ……」

「ホセ!」

弱々しい呻き声がホセの命がまだ繋がっている現実に安堵が芽生える。しかし怪我は深くこのままでは――。

そんな最悪の結果を想像するもそれも覆る。瀕死だったホセの体が輝き、収まればダ
ンジョンに潜る前のように万全の姿になっていた。そうか、これはキークスと同じ。

「――発動、ジヨウケン」

「え？」

「からだ、残ッテルガ前提。サツキノハ、発動シナイ。最悪、欠損シテモ再生スル」

いつものカレンの喋り方ではなかったが伝える言葉はあのアイテムの情報だ。あの
アイテムについてどこまでが効果の範囲かわからなかったのでありがたい。ただだか
らといって決死を指示したくはないが。

その上で、私が言うべき言葉は――。

「私たちを、守ってください」

カレンは静かに頷いた。

「――間もなく、焔は放たれる。」

ようやく本命の魔法の詠唱に入った。今までにない魔力を高めた詠唱は集中も極限
で内から暴れている感覚が強い。軽く叩かれるだけで乱れ崩れそう。そう、安心して
もそれは同じだ。

思えばあの人を見たのは「豊穡の女主人」の時だった。突然現れて、竜人と言う種族を初めて見て。そして初めて食人花のモンスターに出会ったあの日には助けて貰った。

リヴェリア様はあの人のことをこう言った。

『カレンはある意味、ファミリアに所属しない冒険者だったんだ』

『所属しない？ でもあの方は「ゼウス・ファミリア」にいたと』

『その通りだ。だが彼女は別のファミリア所属の眷属とパーティを組むことが多い。それも私たち「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」の者たちとも。だから彼女には「助演者」パーティスタッフの二つ名が与えられた』

不思議とその光景が簡単に浮かんだ。食人花のモンスターから助けしてくれた時、私の事も見てくれた。私の事を呼んでくれたあの瞬間があったからこそだろう。

「「忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む。」」

でもリヴェリア様はこうも言った。

『そして私たちはカレンのいたファミリアを壊滅させ、逆に私たちは竜人となったカレン一人に敗北した。この事実にお前はどうか考える？』

『えっと、彼女は「ロキ・ファミリア」を恨んでいる？』

『そう考えるのは自然だな。でもそれはない。カレンは「ロキ・ファミリア」も「フレイ

ヤ・ファミリア」も恨んでいないだろう。それがカレン・デユラスと言う冒険者だ」

自分のファミリアを壊滅させたファミリアを恨まない。それがあの人と言う冒険者だと言った。思わず何故と聞き返すとそれを教えてくれた。

『誰よりも冒険者という挑戦者だったのさ。前に進むと言う事は、どこかで失う事もあるのだと。ファミリアも眷属も、果ては自分の命さえも。裏方であつても強い覚悟を持ち、そして一番に輝き続けていたからだ』

それを聞いて私は、そんな人がいたんだと素直に驚いた。それは何故か？

私を知る強い冒険者はアイズさんやリヴェリア様達のような「ロキ・ファミリア」の幹部たちと「フレイヤ・ファミリア」の「猛者」たち。その内の一人のリヴェリア様が輝いていたと言った。出会うまで影すら知らなかったカレンあ・デユラス人をオラリオの頂点が認めていた。

「至れ、紅蓮の炎、無慈悲な猛火。汝は業火の化身なり。ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを。」

実は聞いたその時には評価される人なのかと疑っていた。だって本当に会うまで聞かなかつた人だ。せいぜい過去の人、そんな認識だった。でもそれは、間違いだった。今ここにあの人がいることでこうして集中できている。皆さんと勝つ為の切り札を使える。

そして詠唱ももう少し。それで魔法は完成し、全てをひっくり返す。

でもモンスターも黙って見過ごす訳なく、私を射貫かんと鳶が地面から生えて囲む。

でも私に、不安はなかった。

「!!」

獣のような咆哮はあの人の叫び。そう聞こえたのは同時に空気が悲鳴を上げたかのような音があったから。目を下に向けて見れば私を避けるかのような爪痕があり、そしてモンスターの鳶は根元から切れたようで力なく萎びていった。

「焼きつくせスルトの剣。——我が名はアールヴ」

——ありがとうございます。感謝は怪物祭の時と一緒に必ずお返しします、カレン・デュラスさん。

「【レア・ラーヴァテイン】!!」

「ハア…、ハア……」

剣を拾い、レファイアとベートさんが隙を作ってくれた所の一太刀。ナイチャーウエボン天然武器を裂き、刃を敵に届かせた。ただ相手が人ではないこと。それを失念して深い傷を与えたことに安心していたのかもしれない。敵は大支柱を破壊し、食料庫パントリーの崩壊を引き起こした。

「呆けている場合か？ お前には捨てられない仲間がいるのだろう」

悔しいがその通りだ。聞きたいことはいっぱいあるけど、もうその余裕はなかった。

「……お前に2つ、伝えておこう」

でもそこに、その言葉が鮮明に聞こえて足を止めた。

「59階層へ行けアリア。今あそこは面白い事になっている。それにお前が自分からそこへ向かうなら私の手間も省ける」

「……そこには何があるの？」

「それはお前の血が教えてくれるだろう。——そしてもう一つ。もしお前がダンジョ

ン、ひいてはアレの同類に関わるようなら警戒しておけ。殺されるのは別にいいが、死体がないのは困るのぞな」

ダンジョン。あの少女の事だろう。

あの子も気になる事を言っていたけど、調教師の女が忠告する事の方が不思議だった。そして反芻して、気付く。

「……同類？」

「それは自分で確認しろ。ではな」

「っ、ま——」

言葉に囚われた隙に彼女とは天井の瓦礫に挟まれ、そして姿は見えなくなった。

「急いで下さい【劍姫】！ もう長くは持ちません!!」

その声で状況を思いだし、脱出に向けて走り始めた。

.....

.....

.....

脱出、と言えるまでの場所はあの肉壁を見付けた入り口の所だった。自分でさえ息が切れた程の緊張で走ったものだから、他のみんなはそれ以上の疲労に襲われていた。でも、誰一人として死んではいなかった。

「あつはつはつはつはつ。生きてる！ 死んだはずなのに生きてるぞ——!!」
「キークスうるさい！」

「やだー！ お下げの片方が切れてるー！」

「ああ、人形が壊れてる。間違いなく1回は死んでたな……」

「魔剣、壊れちゃったなあ」

「今日の事は必ず詩にしよう……」

【ヘルメス・ファミリア】の皆はあれだけの戦いの後でもよく喋る。ただ今はその姿が、生きて返ってきた実感を与えてくれた。

「大丈夫でしたかアイズさん」

「レフィーヤ。うん、大丈夫。ベートさんは？」

「片足が折れてましたがルルネさんが運んでくれたので一緒です。それでデュラスさんを知りませんか？」

「え？」

あまりにも必死で、そして当たり前のように感じていた言われるまで気付かなかつた。周りをもう一度見渡して、あの人の姿がないことに気付いた。

まさか、と。

そんな不穏な可能性が頭によぎった直後、ドオオン、とまたダンジョンが崩れた音が轟いた。

「なっ、なんだ!？」

「まさかまだダンジョンが!!」

「待ってください!！」

みんなが慌てだす中、アスフィさんの声が響くと警戒しつつも落ち着きを取り戻す。そして彼女の視線の先はさっきの音が出た場所。そこはさっきまで私たちが逃げた方面。さっきまで瓦礫の山だったところが何もなくなり、粉塵が舞う。

その中から1人——カレンが現れた。

彼女は【猛者】わうじゃを肩に担いでいた。体格が倍以上ある彼を、軽い荷物を運んでいるかのように歩きは穏やかだった。そんな姿に誰も声を掛けられずにいた。

その理由はわかる。私もそうだ。彼女の力は底が見えない。私が戦ったときは全力とは思っていなかったが想像を超えている。さっきの戦いは味方で助けてくれた事実だけど、その時は獣のような振る舞いだった。なぜそうなったかわからない。でも、まだその状態だとしたら――。

「くちゅ。あ、ごめん」

コケる音が耳に聞こえながら思わず呆気に取られた。

波紋は広がる

「ごめんなさい、迷惑を掛けたわ」

くしやみなんて予想外に思わず転んでしまい、そんな状況に追い込んだにかかわらずカレンは謝罪した。彼女までこうボケに回られると調子が狂うが正気に戻っている事で良しとしましょう。

「お気になさらず。結果的にはあなたは私たちを傷つけることはなく、加えて預けて頂いたアイテムのおかげで誰一人と欠ける事はありませんでした。カレンが謝罪する事はなく、むしろ私たちがお礼を言うべきです。——ありがとうございますカレン。貴女がいてくれて私たちは生き残れました」

「……その言葉、受け取ります」

こちらの感謝の言葉をカレンは受け取ったが、彼女の過去を顧みるとこちらが思う以上に深く受け止めているのでしよう。

「と、この件が終わるなら私はここで離脱したいんだけどいい？　ちゃんと回復アイテムは分けるから」

「え、どうしてですか？」

「二応、目覚めて襲ってこない保証がないのよ」

カレンは肩に担いだ、【猛者】^{おっしや}を持ち上げる。確かに因縁と、さつきまでの戦いを見る限りは起きて暴れない保証がありませんね。

「わかりました。ではお気を付けて」

「ありがとうございます」

カレンはすぐに魔法からポーションを出現させる。相変わらず羨ましい魔法ですね。ここの言った魔道具が作れないか挑戦してみましようか。

「それじゃあ——」

「待って下さいっ」

カレンが立ち去ろうとしたが止められた。【千の妖精】^{サウザンド・エルフ}だ。

「あら、どうしたの？」

「ありがとうございます！ 怪物祭^{モンスター・フェア}からお礼が言いたかったんです。今回でも助けて

頂きましたし、どうしても言いたかったんです」

「そう。なら【九魔姫】^{ナイン・ヘル}に伝えて欲しい事があるの」

「はっ、はい。なんでしよう？」

「『事情が変わった。ごめんなさい』。そう伝えて」

「事情……?」

「聞くなら彼女に聞いて。私から許可は出してると言えばあとはそっちの判断で」

事情? 彼女の事情と言えばこのオラリオに来た理由、ベル・クラネルのこの筈ですが、その変更をなぜ【九魔姫】に? ……いや、これは恐らくカレンと【九魔姫】の間に限る事情でしょう。

「それじゃあ失礼するわ。しばらくは起きない、なんて都合がいい事はないからね」

「はっ、はい」

カレンから話を終わらせ、そして飛んで行ってしまった。あんなバランスが悪そうな状態でも飛べるんですね。彼女は。

「——起きなさい」

目覚めと共にその声が聞こえ、続けて気付いたのは頭から滴る液体だった。

「目は覚めたわね【猛者】。まだ夢心地? とりあえず今は襲って来てほしくはないから」

視界が鮮明になり、見えたカレンはいつものカレンだった。変貌した姿は変わらないが戦かっていたときの圧はなく、その直前に取り付けていた拘束もない。

「……俺は、お前を止められたか？」

そんなカレンの姿を見てそう言ったのは、俺にとって重要だったからだ。屈辱の憤怒は鎮まり、これ以上なく穏やかだった。

「夢心地のようだったけど貴方との戦った事は覚えているわ。そして貴方は私の生存本能が落ち着くまで足掻いた。私が望んだギリギリの所まで耐えきったのは間違いのないわよ」

カレンは異形と化した片腕の拳を握り解くを繰り返しながらそう答えた。ギリギリの及第点と思いながら、意識をハッキリして理解した。

カレンは暴走していた状態の力のままだ。「ステイタス」を制限するスキルがあると saying していたが、あの状態になった事で更に解放されたと言う事か。しかしきっかけがアレと思うとそれも聞きたくなくなってしまう。

「それで、お前は大丈夫なのか？」

「なにが？」

「心臓を引き抜かれていただろう」

聞くとカレンが咎めるように睨み、すぐにため息を吐く。

「話題は選んで欲しかったけど、迷惑をかけたし答えるわ。引き抜かれた身体には問題はない。ただし、私自身としてはあまり望ましくない結果になったわ」

意外にもカレンは答えると動かしていた拳を一気に握る。その瞬間、鈍い音を鳴らしながらカレンの片腕——異形と化していた身体が縮んでいく。四肢は細く、双翼は縮み、尾は短くなっていく。長く銀に輝く髪だけを残して見慣れた竜人の姿に戻った。

「問題はこれから」

そう言つて拳の力を弛め、目に見えぬ速さで横に振る。するとほぼ同時と言える程の直後、振つた先が爆発したかのように音を立てて破壊された。凄まじい力——そう考えた瞬間、それがカレンに合わないと感じ付く。

「カレン。今のお前はどこまで抑えた？」

「貴方と戦いで解放した程度まで。ただし、これ以上の制限は出来なくなつたわけ。——オツタル。私はね、十五年前に使つた魔法はまだ完了していないの」

魔法。それはカレンが竜人になつた魔法。

「……答えるのか？」

「そのくらいの迷惑を掛けたと思つているからよ。【オヴィ・ディウズ】。それが私を変えた魔法。そして、私を羽化させる魔法」

「羽化、だと？」

聞き慣れない魔法の効果に聞き返すとカレンは笑つた。それは、とても寂しさを隠さない笑顔で。

「オツタル、私はね——」

その真実は、カレンにとっては全てを失ったにも等しいものだった。

.....

.....

.....

|| || || ||

地上

|| || || ||

ここに縁ある相手に初めて真実を伝えた後のオラリオはいつも以上に望郷の念を抱かせた。十五年。それは人の生においては長い時間でしょう。でも私は昨日の事のよ

うに思う。その理由は思いか、それとも。

「おかえりなさいカレン」

思いつける私の後ろでその声は唐突に聞こえた。ただ彼女に対しては慣れたものだ。

「あなたもお疲れさま、華。ベルの方は大丈夫だった？」

「はい。加えてあのサポーターの少女も無事です。お節介ながら彼女の罪は彼女を搾取していた者たちに押しつけました」

「そう、貴女も成長しているわね」

「学習と言つて下さい。私は学ぶモノ。顔も知らない創造者の理想の為に」

「………やっぱり貴女は昔の私に似ているわね。親の為に高みを目指す所は」

思えば彼女の見付けたときは驚いたものだ。まさか遺跡に華のような人形が保管されていた事は。確実に今の誰よりも制作者の腕メイカーを超えていた。いや、だからこそ遺跡なんて場所にあつたのでしょうか。

親の為。かつての私も「ゼウス・ファミリア」の為に生きたものだ。皆の為に、義姉さんの為に。

「それで、その髪は？」

「ああ、これで。ちよつとダンジョンマスターから不意をもらつてね。この身に押さえ込んでいた力の一部が解放された」

「それは」

「ええ、残念だけど刻限が縮んだわ。心残りは、出来るでしょうね」

私は今、とても情けない顔でしょうね。ああ、それにしても。

「これが私の、最後の章エピソードに続く物語か」

＝＝＝＝＝＝

黄昏の館

＝＝＝＝＝＝

ダンジョンを出てフィルヴィスさんと「ヘルメス・ファミリア」の皆さんと別れて、ベートさんを「ディアンケヒト・ファミリア」に預け、拠点ホームに戻ったらアイズさんは大目玉を食らって。

戻っても慌ただしかった後始末が終わってようやくリヴェリア様にあの人の言葉を伝えた。

「そうか」

リヴェリア様は伝言を聞くと残念そうに表情を曇らせた。

「リヴェリア様。あの人が言っていた事情とはなんですか？

許可は出しているからリ

ヴェリア様に聞くようにと言われました」

「ああ。実はあいつに入団の意志があるかないかを聞いたんだ。その時は悪感情がなかったのを確認した」

「それって」

「ただし、そうしない理由もあるからハッキリと返答はもらったがな」

あの人が「ロキ・ファミリア」に入ってもいいと考えていたなんて。でもなんで？

「リヴェリア様。彼女は元「ゼウス・ファミリア」の眷属の筈ですよ。どうして、その……」

思わず聞いてしまったが言つて後悔した。ほかでもない。彼女のいたファミリアを消滅させたのは他でもない。「フレイヤ・ファミリア」と、この「ロキ・ファミリア」だからだ。

それを察してか、リヴェリア様は答えた。

「ゼウス・ファミリア」の冒険者は大馬鹿者たちだ」

「え？」

「カレンや同じ眷属の冒険者たちを表した言葉だ。まとめるなら「ゼウス・ファミリア」は愚直であり、そして輝いていた。危険は大きくとも見返りも少なくとも、彼らは苦難に立ち向かっていた。ダンジョン初の58階層到達に「陸の王者」ベヒーモスと「海の霸王」リヴァリアサンの討伐。今では過去の話だが当時は頭のおかしい連中だと言われていたんだぞ」

「はあ……」

つまりそれはあの人も同じように？ 確かオラリオのファミアはほぼ全部とも交流していたって聞いたし、別視点で見ると何考えてるんですかって思うような？

「だからあいつにとつて【黒竜】の討伐失敗や主神の追放も自分達が選んだ道の結末だと受け入れているだろう。もつともあいつはそのケジメの為に単独でのファミア襲撃を二度したわけがな」

あ、今の話を聞いた後だと頭がおかしいって事に反論が出来ない。

「つまりあの人は未練や遺恨はないんですね。じゃあ『そうしない理由』とはなんなのですか？」

【ロキ・ファミア】に悪感情がないことは理解したのでその部分を尋ねた。尋ねたけど、ここでリヴェリア様の表情が苦いものになってしまった。

「す、すみません！ 聞いてはいけない事だったとは」

「そうじゃない。……いや、ある意味ではあまり広まって欲しくない話だが」
否定してすぐに訂正するリヴェリア様。すぐに思案し始め、そしてため息をした。

「その理由はフィンが関わっている」

「団長が？ いや、私が聞いてもいいんですか？」

「この際だから教えておく。ただし無闇に喋ったりするなよ。特にティオネには」

「ティオネさんを出す辺り、ちよつと怖いんですが」

「だからこの際だと言っただろう」

一呼吸して、リヴェリア様はその理由を口にした。

「あの2人はな、お互いに恋心を抱いていたんだ」

「……………へ？」

間抜けな声と共に頭が空っぽになった。

|| || || || || || || || || ||

フォールクヴァンク

戦いの野

|| || || || || || || || || ||

「ふふっ、ふふふふふふっ、ふふふふふふふふっ」

帰還し、全てを報告するとフレイヤ様は笑った。まるで子供のような無邪気さ。しかしこれでも抑えているようだ。つまり本当は大声で笑ってしまうと言う事だ。

「ふふふふつ、ふう、ふう……。ごめんなさい、オツタル。流石に私でもその話は予想外で笑ってしまつたわ」

「謝る事はありません」

「そう。でもあの子がそんな存在になつてゐるなんてね。それでいてあの魂の輝き。健気で可愛いわ」

落ち着き、伝えたカレンの眞実を思いながら外の景色へ身を返す。

「でも、それなら貴方も焦るんじゃないかしら。貴方の報告どおりなら彼女に残された時間はそう長くはない。いずれその身を羽化させ、遙か高く飛んでいく。貴方の大剣が届かない場所へ」

そう、まさにその通りだ。迷惑を掛けた対価——いや暴走する引き金を見られたからこそ語つた眞実の告白。俺がフレイヤ様以外に話すことはないだろうと判断してあいつは語つたのだ。そして、リミットを伝える事で俺自身に選択をさせる事も。

「……不敬ながらお答えします」

「ええ、いいわよ」

「私は勝ちたいのです。十五年前の屈辱以上に、唯一の敗北を与え続けたカレンに。その勝利は貴女様に捧げたいと願うではなく、ただ私自身が手に我欲の為。——故に諦めません。カレン・デュラスを、天へと昇る竜を墜とすことを」

まるでお伽話の英雄のようだと自分でも思う。巨大な存在を超えるなどと、まるで子供のような夢だと。

「ふふっ。可愛い事を思うようになったわね、オツタル。でも私は好きよ。そしてその思いは貴方に更なる高みへと導く筈。その姿、私に見せて頂戴ね」

……流石に可愛いは私に似合わないと思います。

間幕

そして波紋は届く

|| || || || || || || ||

極東・近海の小島

|| || || || || || || ||

「あははは、ははは、はーっはははははは!! やったぜ——!!」

住人もいない無人島の砂浜で歓喜に打ち震える。長く耐続けた結果、一瞬の隙を突いて目的の物を強奪した。そして『鬼』の追撃もこうして振り切り、砂浜で転がるのは気持ちよかった。

「ザマア——ミロオ——!! あ——っはははははははは——……。あー、笑った」

満足するまで笑い切ると起きて手に入れたそれに目を向ける。

それは石棺。風化の跡と苔を纏いながら変わらず蓋を閉じた、忌々しくも安堵するもの。長かった。コレを奪うまで本当に長かった。

「落ち着け」

心荒れる私の身体が、優しく包まれた。普段なら温もりを感じるその毛並みは今だけ心地よい冷たさを与え、そして嗅ぎ慣れた匂いが心を鎮めていく。

「旦那、様……」

それは私の愛しいお方。長く恋い焦がれ、ようやく伴侶として側に置いてくれた旦那様。この方の存在が心の乱れを、角の熱を冷ましていく。

「落ち着いたか？」

「……はい」

正直に答えると身体を包む優しい冷たさが離れる。少し残念だったが今は甘えてる場合じゃない。

「ならどうする？」

「……取り戻します」

「アイツは頭がいい。何重にも念を入れ、そして辛抱強く、臨機応変に動ける。間違いな

く目覚めさせるだろう」

確かに。あのクソガキは道化のようなながら賢者と表せる程の知恵者。既に次の手を打ちに動いている筈だ。取り戻すと答えたが私もそれは間に合わないと思つてゐる。それでも。

「私は旦那様と共にある為にこの身を昇華させました。故に旦那様の周囲を掻き乱す事は許せません。私は追います。報復を、与えに行きます」

それに行き先はだいたいわかる。棺を手に入れたなら次は桶。そしてそれを管理するあのひとに接触するには、

「オラリオに向かいます。あそこには今、竜の姫がいます」

カレン・デュラスの存在が不可欠だ。

|| || || || || || || || || ||

とある山・頂上付近

|| || || || || || || || || ||

「——コレが壊れたから間違ひなく力が解放されたつて事よ」

見せつけるように摘まむアクセサリー。丁寧な装飾で作り上げたコレは今、目玉の宝

石が割れて芸術的価値が下がっているけど、ただ壊れる物として作ったから問題は無い。

「残念」

「そうね。でも私たちは覚悟していた筈よ。こんな事も起きるだろうって」

「無理をしているのは姉さんだろ？ 動揺、顔に浮かんでるよ」

「……ありがとう」

妹は一言だけ呟き、弟は私を氣遣ってくれた。

そう、コレが壊れたと言う事は時間が縮んだと言う事だ。ただでさえ数年だったのが更に縮んだ。本当、ままならないね。

「だから世界を巡るのはここままでにしてすぐにオラリオに向かうけど、いいわね？」

「俺は問題ない。研鑽はどこでも出来る」

「お姉とお兄についてく。オラリオには行ってみたいと思ってた」

「でも姉さん。反応が出たって事は師匠たちも氣付いている筈だ。集まってくると思うか？」

「確実だろうだから行くのよ。もしかしたら棺の方が奪われてる可能性があるしね」

幸い、ここはオラリオから近い。ひとりを除けば早めに到着が出来るはず。

「……お姉」

「何?」

「終わりは近い?」

妹の問いに私はすぐには答えられなかった。ああ、そうよね。二人以上に私が望んでいなかった事だから、本心では認めたくないから。弟からにも動揺が顔に浮かんでいたらしいからね。

「……近いね。その時が来たら、私は泣くでしょうね」

でも、だからこと私の本心を答えた。すると妹が近づき、優しく私を抱きしめた。

「泣いても私とお兄がいる。だから、一緒に乗り越えよう」

「……うん、そうね」

そう、終わりが来てもまだ私には弟妹が残る。それに私たちはこの地に残される後継。最後には前に進むと決めたんだから。

「なら明日から出発よ。迷宮都市オラリオ。その地で一つの物語が終わる、その瞬間を見届ける為に」

第4章 「成長の証明」

ただの、平凡な日

|| || || ||

隠れ家

|| || || ||

—— チョキン。

「終わりました」

「ありがとう」

鋭いハサミの音が心地よさを与えてくれてスッキリした気分になった。目の前に立って鏡を見れば元の長さまで切りそろえられた私の髪が目に入る。ただ、やっぱり色だけは戻ることとはなかった。だからこそこの魔道具を用意しておいた。

「色は……このくらいだったかしら」

ダイヤルを回すと色が変わり、自分の前の色と同じにすると髪に装着する。すぐに手鏡を取ると輝かしい白から元の赤い髪に変わっていく。魔道具〈千紫万紅の一輪〉。変装用で髪の色を変える装備だ。見た目は華の髪飾りだけど意外にもこのサイズにする

のは苦勞したけど。

「見事です。特に色が無限に変わる特性が」

「無限に変わるから苦勞したけどね」

と言つてもコレは私の拘りでやった部分だ。変装用だから色が変われば同化して目立たなくなるのは飾りとしてはダメダメだけど。そう言つてくれたのは、誰だったかしら。

「哀しいですか？」

「懐かしいだけよ」

「人形の身の言葉ではありませんが、時には素直に吐いた方がいいですよ。その身の果ては——」

「華」

華の言葉を、強い声色で止めた。

咄嗟に、思わず、聞きたくなかったから。

「……失礼しました。以後は発言に気をつけます」

「うん。許す」

今はその言葉を信じて今回は許しておく。

さて、これから……、厄介事は来るでしょう。誰も彼も私の解放を察知しない訳がな

いしね。

「華。先に誰が来ると思う?」

「来て欲しくない方でしたらいますが、聞きます?」

「貴女が言う通り一人しかいないでしょ。でも私だって来て欲しくないわね。来るって事は極東での目的を達成した事になるから、追っ手も付いてくる」

華が気にする人物から浮かぶ顔は三つ。最年長のあの方はともかく、他の2人は煽り煽られてぶつかるのが目に浮かぶ。そうになると、大災害の結果しかならない。

「オラリオは大丈夫でしょうか?」

「怖いことを言わないで。想像したくない」

力を抑え込んでいる私じゃ止められないし、だからといって解放するのは望まない。力以外で止めるとすれば。

「やっぱりあの人を連れていた方がいいわね」

「あの方をですか? それは向こうの目的に乗ると言う事ですか?」

「ええ、そうよ。もつともあの人がある隙を見せる可能性は低い。逆に隙を見せたならそれは時代の流れよ。私のようにね」

ダンジョンが閉じられて1000年。その遙か昔に開かれたその穴。止められた時間が動くと言う事なんでしょう。私と一緒に。いや、私のせいで動くのでしょうか。

「——ちよつと教会に会いに行つてくるわ」

「わかりました」

ふとあの子の顔が浮かんだ。やっぱり私はあの子の未来が最後になりそうだわ、義姉さん。

身だしなみを整えてローブを纏う。ここで初めて装備が半壊したし、抑えたとは言え力も一部が開放されたから今までの装備はもう使えない。今は真正正銘、私の戦闘服だ。まあローブもそれに合わせて布面積を増やして見えないようにしたけど。

「それじゃあ行つて——」

「カレン」

準備が終わつて出掛けようとした所で華に呼び止められた。まだ何かあるのかと面と向かつたが、華が身体のある場所に手を当てており、そしてその場所に何かあるのか私はよく知つていた。

「封印を——」

「外す気はないわ」

だからまた先んじて言葉を遮つた。

「華。貴女は名もない誰かが遺した人形。それ以上でもそれ以下でもない。産まれて、そして朽ちていく。人のように、ね」

言うだけ言つて足を動かす。そして外に出る間際、華の表情を盗み覗くと何も変わらない。何も、変わっていないかった。

訪れた廃教会は相変わらず人気がないからここでは堂々と顔を晒せる。廃墟とは言葉堂々と歩けるのは気持ちになる。見上げた空は変わらず青い。昔と変わらないまま。

「——おっと」

思わず感傷に浸っていた。コレも時間がなくなつたせいね。さて、そろそろ廃教会が見えてきたけど、何だか言い争う声が聞こえる。片方はヘステイア神で、もう片方は……。

「失礼。取り込み中でしたら出直しますが」

でも今回はさつきと対面することにした。廃墟故に至る所に穴が開いた教会の一つから入つてヘステイア神と彼女と言ひ争ひをしていた彼女のそばで現れた。

「え？ え、えっ!？」

「おわつ、竜人くん。急に現れるなんてビックリしたじゃないか」

「つてヘステイア様はこの方とお知り合ひなんですか!？」

「え？ サポーターくんはなんでそこまで慌ててるんだい？」

「だってこの方、【財宝竜】^{ファウズニル}様ですよ！ 事実上最強って言われてる元・冒険者の！」

「ええっ!？」

「はいはい。まずは落ち着いてね」

サポーターと呼ばれたこの子は狼^{ウニエウルフ}人、いや例の小人^{バルウム}の女の子ね。目立ったつもりは

ないけど竜人なんて他にいないから隠れるのは無理だし。それでもここまで情報を把握しているのは見事ね。どれだけ慎重にいたかわかるわね。

「貴女ははじめましてね。でも私の事は知ってるみたいだから自己紹介はいらさないわね」

「はいはい！ リリはリリルカ・アーデと言いますっ！」

優しく挨拶したつもりなのに距離を取られた上に土下座をする。そんな震える姿は心に刺さる。

「そんなに怯えなくていいですよ。流石にヘコむわ」

「君、何をしたんだい？」

「今の二大ファミリアを単身で襲撃したぐらい」

「へえ、へっ!？」

流石にこれは驚くような話だけどよく今日まで知らなかったわね。ベル以外に私の

話を聞かなかったのかしら？

「アーデちゃん、怖くないから戻っておいで。ゆっくりでいいから」

「は、はいい〜……」

怯えながらも本当にゆっくりと戻ってくる。最初にいた場所よりはまだ離れているけどしようがないか。

「改めて聞くけど新しいファミリアの子？」

「い、いえ。リリは『ソーマ・ファミリア』所属です。今日はベル様のサポーターとしてヘステイア様にご挨拶をと」

「ああ、なるほど。『ソーマ・ファミリア』はゴタゴタしたから距離を取ったわけね」

「はい？」

「ん？」

知っていたらあえて誤魔化したけどこの反応、アーデちゃんは知らないわね。確か『ソーマ・ファミリア』の眷属にはギルドが通達をしたって華が言ってたけど、この子は漏れたのでしょうかね。

「じゃあ代わりに伝えておくわ。今、『ソーマ・ファミリア』は2件の不祥事が告発されてね。実行犯および協力者は恩恵剥奪とペナルティが与えられたそうよ」

「不祥事、ですか？」

「ええ。1件は団長【酒守】ガンダルウアことザニス・ルストラによるファミリアの私物化。中には輸入禁止品の所有もあってオラリオを追放。ただソーマ神はこの監督不行き届きを自ら告白した上で捕縛の協力をしたから罰金としばらくの税金増額に収まるそうよ。もう1件は最近、パルムウを利用して窃盗をしていた3人組の逮捕ね」

「え？」

2件目を教えるとアーデちゃんがワケわからない顔をしたが気付かないふりをして続ける。

「実はとある人物が探索帰りにしては不自然な三人組をこっそり目撃してね。その3人の会話から盗難の主犯だつて事に気付いて、ダンジョンから出たところで盗難事件の犯人だつて叫んだそうよ。取り押さえられて持っていたノームの金庫の鍵を調べると盗品と幾つか売つただろうお金が見つかったらしいから犯人と断定。本人たちはパルムウが犯人だつて言つてたそうだけど状況からダンジョンで始末されたそうよ。ああ、ごめん。最後のは後味悪い話だったわね」

「い、いえ。じゃあその3人は捕まつたと言うことですか？」

「そうね。こつちの処罰はどうなるかさすがに知らないわね」

まあ【酒守】による上納金に関わつてから重い罰にならない可能性もある。冒険者の評価は下がるだろうけど。

「そうですか……」

この話を聞いたアーデちゃんの声は控えめ、と言うより困惑していた。まあ自分を搾取していた相手が自分の罪を被って捕まったなら複雑になるわね。

「もしかしてその3人組に心当たりが？」

「はい。ただいい関係ではありませんでした」

「……意図せず不快にさせたわね。ごめんなさい」

「お気になさらず。内心、ざまあみろって思うリリがいますから」

あら正直者。

「とにかく、今の「ソーマ・ファミリア」には近づかない方がいいわ。発表はまだだけどしばらく針のムシロになるでしょう。ただ細々したトラブルもあったから長くなる可能性もあるから」

「はい。元々、拠点ホームからは遠ざかるつもりでした。ですが教えて下さりありがとうございます【財宝竜】様」

ファミリアの情報を伝えたおかげがアーデちゃんの怯えが消えていたがそれでも距離を感じる。でもこのくらいがいいのかもしれないわね。

「ところでヘスティア神。私の用ですが、ベルはいますか？」

「おお、ベル君かい。ベル君ならついさつきギルドに行ったよ」

「ギルドか……。今はちよつと行きたくはないですね」

「二度もビツクリさせたんだから三度目はなしにしてくれよ」

「いえ、私はダンジョンの出入りは許可されてますが立場上は無所属。ファミリアこと冒険者を管理するギルドから見れば惜しい身なので」

「?？」

「誰でも知る実力者を遊ばせておくのは勿体ないと言う事ですよ、ヘスティア様。ファミリアに所属していない以上、ギルドが抱え込む事だつてあり得ますから」

「ああ、なるほど」

「やっぱりヘスティア神は駆け引きとか無理な神様ね。自分たちの危機に対する警戒が薄い。まだ駆け出しのファミリアつて事もあるだろうけど情報収集ぐらい……」

「と思つたら彼女には2億ヴァリスの借金があることを思い出した。そりやあ他に目を向ける余裕も減るわ。」

「じゃあしばらく待たせてもらいます。——ところで地下室の掃除はしていますか？」

「ああ、しばらくジャガ丸君が主食だったでしょうから買い出しにも行った方がいいですね。あと洗濯物とかため込んでませんか？」

「(キミ・貴女)はお母さんですか？」

「ちよつと気になつただけなのにそんなことを言われた。」

「グフツ!？」

遠征からの生還を祈っていると首根っこを引つ張られる感触。いきなり首が絞められて変な声が出た。ただその締め付けは一瞬だったからすぐに解放された。

「ゲホツ、ゲホ……。だ、誰っすか!？」

まさかファミリアの誰かが、と思つて振り返るとそこにいたのは知らない誰かだった。頭のとつぺんから足先までローブで覆われて顔も服装は見えない姿だけど僅かに見える靴が土で汚れている上に剣の鞘先もはみ出ているから冒険者か旅人か。

「その先、危ない」

「へ?」

観察しているとその人物、声から自分より年下の少女だと知れたがその少女が自分の後ろを指さし、その先を追つて振り返るとそこは人の増えてきた露店の通り。

「あ、止めてくれたんすね」

多少強引だったが理由を知つて文句を言う考えはなくなった。むしろファミリアに迷惑が掛かつていたと思うと逆に感謝したいほどだ。

「考え事?」

「えっ? ま、まあそうっすね。でも自分のような冒険者なら誰でも悩む事っすから大丈夫っすよ」

なんて言ったが大丈夫なわけない。平凡な自分は恐怖を克服できる実力が無い。必死になって足掻いて、命を拾って安堵する。その繰り返し。繰り返ししてもどうしようもなかった。見ず知らない相手に教える事でもなかったが、こうして愚痴ると言う事は思っていた以上に不安を抱えていたと認識出来た。

「誰でも同じだけど、誰も同じじゃない」

「へ？」

「冒険者の悩みなら大体わかる。でもどんな悩みでもその答えは誰も一緒じゃない。ただ行き着くのは、自分にとっての苦楽の分岐。楽を取る？ 苦を取る？」

「……………」

助言のような事を口にしたかと思えば選択を突きつけられた。苦楽のどっちを取るのか。でもそんなのは決まってる。

「自分は苦を選ぶっす」

「それはなんで？」

「もちろん、そこでしか見れない、得られないものがあるからっす」

今でも怖い。でもそれはいつものこと。怖くて怖くて、それでもあの地獄へついで行く。あの団長の姿を間近で見るために。

「ならもう大丈夫？」

「そうっすね。大丈夫、なんて言うにはまだ怖いっすけど背中を押された気分になれたっす」

「わかった。じゃあ——」

「さっそくお友達かしら、妹」

後ろから目の前の少女の声が聞こえた。いや、突然だったがトーンに違いあった。似ているが別の少女の声だ。振り返れば同じロープで姿を隠していた。しかもまた同じようなロープを纏った人物がもう一人。見るからに少女の身内か仲間だろう。

「どうも。妹と楽しく話をしてくれてありがとうね」

「え、いや。そんな楽しい話をしてたわけじゃないっすけど」

「いやね、冗談よジョーダン」

「姉さん。からかいすぎだ」

「少しはノつてもいいのよ、弟よ」

弟、と呼んでいると言う事は姉弟なのだと思った。なんて事を考えているとすぐ横を少女が通りすぎで目の前の2人の所へ行く。

「お姉、お兄。巡りは終わった？」

「ああ、うん。終わった終わった。やっぱオラリオは色々あったわ」

「その割には難癖が多かったけどな」

「そりやあ明らかに質が悪いのを売ってる所もあつたもん。一つや二つ言うわよ」

「明らかに冒険者の露店だつただろ？」

「ははつ。冒険者怖くて財布の管理が出来るかあ!!」

お姉さん、結構命知らずの事言ってるよ。弟さん妹さん、そこ止めなきや駄目な所だよ。ただこの3人が仲良しなのはよく伝わる。ダンジョンの恐怖が和らぐようだった。

「じゃあ行くわよ。——と言うわけで、時間ありがとうねお兄さん」

「あ、ああ。大丈夫です。こつちも肩の力が抜けたつすからお礼を言いたくらいですよ」

「そつか。じゃあまた会うになつたならよろしくね」

「わかつたつす」

「それじゃあね」

「じゃ」

「妹が世話になつた」

三人それぞれから挨拶を言われ、そのまま通りの人込みへ消えて——。

「あれ？」

その姿が消える瞬間、どこか別の場所で見たとような錯覚を感じた。でももう行つてしまつたからあの子らから確かめる事は出来ない。気持ちは今でも軽くなっているが、なんととも言えない違和感だけが残つた。

「で、どうするんだ姉さん。もうどこにいるかわかってるんだろ？」

また通りに戻って喧騒が聞こえる中で弟がそんなことを聞いてきた。

「まあ昔、こつそり隠し部屋を作ってた話を聞いてたからね。居場所はだいたい把握してるわ」

「じゃあすぐに？」

「焦らないの二人とも。どうせなら邪魔がないようにしたいでしょ」

さつき露店を周りながら聞いたオラリオの配置だどこを選んででも邪魔が入る可能性は出るからね。ダイダロス通りや廃墟の区画もあるそうだけど前者は確実に人はいるし、後者もないとは限らない。

「わかった。待つ」

「姉さんに任せた。なら俺と妹は別の情報を集めておく。出来る限り漏れがないようにする」

「ええ、そうして頂戴。間違いなくいくつもの思惑が混じり合ってるはずだからね。そんなのに邪魔されたくないからね」

「わかった」

さて、始めましょうか。一番乗りしたこのチャンス。逃さないように頑張ろう。

この旅で得た私たちの成長、存分に見て貰わないとね。

『なるほど』

その場合、どこかで被害が出ないことを祈る。祈る事しか出来ないからね。

でもこの数日を乗り越えたとしてもそれは確実の予想が出来なくなる事だ。むしろ最初の時点で来てくれた方が楽になる。その最初であるこの数日でどうにか現れて欲しい。

『——カレン』

「何か変わったことがあった？」

『ベル・クラネルとアイズ・ヴァレンシユタインが模擬戦をしています』

いったいどんな状況？

本当に模擬戦、と言うよりカベルが【剣姫】ちゃんにボッコボコにされてる状況だった。

「あらー……」

「一方的ですね。模擬戦とお伝えしましたがアレは成長に繋がるのでしょうか？」

「ダンジョンで活動するなら良い方よ。相手を見る。先を読む。危険を察知する。強い冒険者って言うのは目と判断が求められるの。まあ【剣姫】ちゃんはあの様子を見る限

りそこまで考えてないでしょう」

「何故ですか？」

「あの子、天然だから戦うのが一番と思ったんでしょう」

なんて説明している間にまたベルの顔面に蹴りが入った。容赦がない、訳じゃなくただ手加減が出来てないわね。でも殺しにかかるモンスターを相手に考えるならむしろそっちの方が良いのかしら？

「ふむ……」

「動きを記録してるの？ 別に良いけど華には合わないスタイルだから真似しない方がいいわよ」

「ええ、わかっています」

……なるほど、諦めてはいないわね。

「監視は私がやっておくわ。中心部の上空で全体を見てるわ」

「よろしいので？」

「必要なんでしょう？」

ジツと見つめ、黙って見つめ返す華。本物と変わらない作られた貌だけど、長い付き合いいと積み重ねた時間が表情の色を映してくる。だから、この子は資格を得ている。だからベルと【剣姫】ちゃんの戦いに興味がある。

「……じゃあ行くわ」

「わかりました」

返事は待たなかった。その意図は、考えなくてもわかっていた。

飛び去って小さくなっていくカレンを黙って見送り、再びベル・クラネルとアイズ・ヴァレンシユタインの模擬戦へ視界を戻す。相変わらず一方的だ。一方的だがベル・クラネルは決して同じ手は使っていない。すぐに打ち負かされてはいるが攻める手順は変わっていく。

「それにしても、折れませんか」

普通、確かな実力者から一方的に叩きのめされるのは心が折れるものの筈。カレンが言うにはベル・クラネルはアイズ・ヴァレンシユタインに恋慕と憧れを抱いていると言っていた。そんな相手だから折れないのでしょうか？

しかし、この絡繰りの身では決して味わえない物が生き物にはある。それは疲労である。

「さすがに続けていれば立つこともままならなくなりますね」

私が見付けた時はすでに模擬戦をしていましたのでそれより前に始まっていたので

しよう。そして体力も限界に来ていたのでしよう。もう足取りも怪しいです。あ、アイズ・ヴァレンシユタインに一撃を貰う前に倒れた。心配したアイズ・ヴァレンシユタインが近づいて何か話してる。すると肩を貸しましたね。どうやら模擬戦はここまでのようですね。

……どうせなのでもう少し様子を見てみましょう。こういうのは男女の関係が進展するシユチュエーションだとかつて読んだ本に書いていましたからね。尾行には慣れていますがさすがに今回は第一級冒険者が相手ですから最大の注意を持って追跡しましょう。

それにしても密着しすぎですね。アレは見る人が見れば誤解、誤解……。

「誤解している方がいますね」

路地の影から力尽きたように崩れ落ちる少女がいた。見過ごそうかと考えたがあの人を見て崩れたので「ロキ・ファミリア」の者と思いとすぐに駆け寄った。

「すみませーん。大丈夫ですかー?」

しゃがみ、つつくのが様式美だと本にあった。だから私もしゃがんで少女の頭をつつく。長い耳を見るにエルフの少女。栗色の髪となると、確か【千の妖精】サウザンド・エルフのレフィーヤ・ウイリデイス。

「……………きゆう」

ただの呼吸音。うん、大丈夫そうです。倒れた際に頭をぶつけた等、肉体的には問題ありませんね。精神は撃沈でしょうけど。

「立てますかー？ 出来ないなら送り届けてもよろしいですがー？」

「……………お願います」

おや、意識はちゃんとしていましたね。しかし自力で戻る気力すらない上に初対面の善意を素直に甘えるとは。ところでこの方、ベル・クラネルとアイズ・ヴァレンシユタイン。どちらに対してシヨックを受けたのでしょうか？

とりあえず送ってあげましょう。

送り届けたと思ったらロキに捕まりました。

|| || || || || || || ||

とある裏路地

＝ ＝ ＝ ＝

「なにやつてるのよ貴女は」

「申し訳ございません」

華に連絡が来たと思つたらまさかロキ神に捕まったなんて、思わず落下しそうだったわよ。まあすぐに持ち直して、ロキ神のみの対面と場所の指定を伝えてそれは承諾して貰った。さすがに黄昏の館には堂々と行けないし。

「まあいいわ。——ロキ神もこちらの要望を守つて下さりありがとうございます」

「かまへんかまへん。こつちから頼んだことやしな。それにアイズたん達が世話になつたみたいやつたから礼を言いたかつたんや。ありがとなカレンちゃん」

「いえ、むしろ私が迷惑を掛けてしまいましたから。それで、今回はその件について質問が？」

「それも考えたけど教えてくれるとは思つておらん。だから答えて貰えそうな事を聞くで。その子はなんや？」

ロキ神が見ていたのは自分ではなく、華の方だった。彼女が黄昏の館に行ったのは放心した「千の妖精」サウザンド・エルフちゃんを送り届ける為で、その帰りにロキ神に見付かったのが事の経緯だ。華も飛び込んでくるロキを避けるとは考えなかつたからあつさり捕まった訳だけど。……ん？

「華。貴女が捕まった時、ロキ神に何かされた？」

「いえ何も。両手両足でがっしり体を抱きしめられただけです」

セクハラ案件だった。ロキ神を睨むときつき軽々と質問したとは思えない、わざとらしくも顔を背けて冷や汗を流してる。言いたいことはあるけど、先に質問に答えましよう。

「彼女、ラクジヨウノ・華はヒューマンはおろか人類ではありません。私が旅の最中に訪れた遺跡に眠っていた機械仕掛けの人形です。とは言え、そうは思えない作りですがね」

正直に華の正体を告げた。彼女の頬をつつくと普通の皮膚と変わらない弾力で跳ね返るけど私の爪でも傷つかない。と、ロキ神もまずはセクハラについてはすぐに追求されないとかわかったのか顔をこちらに戻してくれた。

「機械仕掛け、か。まさか地上にこんなもんを作り上げる子がおったなんてな。作った子の名前はわかるんか？」

「残念ながら。どうやら名声などには興味がなかったようで名はありませんでした。ただ華の名前から推測するに極東の出身かと」

「そっか……。生きとつたらカラクリメイドのハーレムを頼みたかったのに……っ!!」
「本気で悔しそうですか？」

「本気だからよ」

ゼウス神も同じ事を言うでしょうね。

「カレンちゃんはその子みたいなの作れないか？」

「残念ですが出来ません。材料が手に入らないんです」

「ほお、材料かあ」

ロキ神がジロジロと華を見始める。さすがに言葉を遠回しすぎて当たりを付けられたかもしれないけど、ロキ神相手ならこのくらいがお互いの線引きが出来るわね。

「一応、彼女の事は広めないで下さいますか？ 私と言うのもなんですが目立ちますから」

「せえへんよ。こんなオモロいもん言いふらしたら勿体ないやん。それにいまウチのファミリアは遠征の準備中や。遅れるような騒ぎは起こしたくはない」

「遠征ですか……」

確か前の遠征はだいたい一ヶ月前。その間に資金が集まるなんて……ああ、この間のクエストの報酬か。でもそれでもここまで速く実行に移すのも急すぎる。

「……その遠征、幾つかの目的がありますね」

「まあな。さすがに教えられんで」

「当たり前じゃないですか。ここで教えるなら逆に説教ですよ」

「なんやオカンぼいなあ」

「こんな外見ですが歳は重ねてますから」

「ああ、そやな。しかしなあー。んー」

なんだか悩み始めたわね。ただ年齢の話題になっただけのはずだけど――。

「――なあカレンちゃん。自分はホントに竜人なんか？」

首を掴まれた感覚だった。この前心臓を言葉通りに掴まれたけど、今はこの悪寒の方が凍り付くようだった。

「なんでですかその質問は？」

こうして取り繕うことが出来たのは予想していたせいか。でも失策だった。今回は相手が悪かった。

「いま、取り繕うたな？」

天界きつてのトリックスター。狡知に長けた神口キ。思わずの誤魔化しなんて見破れるに決まってる。これは間違いないく私のミスだった。

「……お答えできません。と言えば十分でしょう？」

「ああ、やっぱ自分はかなり特異な存在って訳やな。神は下界の子らの嘘を見抜ける。」

でもカレンちゃんはそれが無い。つまり神にとって未知なる存在。しかも独立した唯一。それがカレンちゃんの「正体」

これだと言う名には至ってないけど、当たりは付けた回答だった。むしろこれはわからないから、これだと思える答えを入れないで未記入にした状態だ。それにしても、この間【おかし猛者】に伝えてそのままフレイヤ神に伝わった後にこうしてロキ神に不完全に知られた。

思わず華の様子を確認した。最近の彼女はこの件に積極的だから彼女からボロが出ないかと思ってしまったからだ。でも見る限り沈黙を貫いてる。さすがにここで明かすほど積極的じゃなかったみたいだ。

「で、や。その上で聞きたいことがある」

「なんででしょう？ 答えられるものでお願いしますよ」

「自分、何が目的や？」

そう来たか、と思った。

目的と言えばベルを見守る事だけ言葉通りには受け取らないだろう。正しいが正しくない。それを見破られたくはない。

でも、ロキ神は彼の主神だ。それなら、それなら——。

「15年前に選んだ覚悟に対する、心残りの清算です」

そう答えると華がこつちを見たのには気付いた。天秤に掛けた事でこんな言葉が出たが、捉え方によってはその本心を見抜かれないと思つたかもしれない。でも、これ以上の言葉がなかったのも事実だ。

「……そうか」

何かを察したのか、ロキ神は物思い気に呟いた。

「聞きたいことは聞けたからウチはもう帰るわ。そろそろ腹も減ってきたしな」
「ではお気を付けて」

「おう、華たんもまたな」

「また抱きつきますか？」

「そつりやもちろんっ!! めっさ抱き付き具合がええからな!」

思わず尻尾でロキ神の顔ギリギリで伸ばしてしまった。傷つける事はなかったけどロキ神は悲鳴を漏らして脱兎の如く行ってしまった。

「まったく……。気を使うにもやり方あるでしょうに」

「気を使われたのですか？」

「ロキ神のやり方、だね。でもアレは間違いなくセクハラだから真似しないように」

色々な情報を集めて宿で一人留守番をしてたお姉の所に戻る。お兄はまだみたい。

「おかえりー。どうだった？」

「うん。あまりなかった」

「つまり目立った行動はないのね」

「うん」

情報はそんなになかった。オラリオに帰ってきたとか、酒場で姿を隠してる所を見かけたとかそんな所。

「じゃあベル・クラネルとか「ヘステイア・ファミリア」については？」

「ない」

「そりゃあ零細ファミリアの情報なんてないだろう」

調べた事を伝えてるとお兄の声と一緒に頭を撫でられた。気持ちいい。

「またおかえりー。そっちはどう？」

「両方とも情報は1つずつだけだったよ。ベル・クラネルが怪物祭モンスターファイリアの際、逃げ出したモンスターの一匹を倒したって話だけだ。中層直前に出現するシルバーバックをだ」

「へー、確かベル・クラネルは冒険者になったのが一ヶ月半ぐらいだからなかなかやったほうね」

「お兄、どこで知ったの？」

「ダイダロス通りだ。お前に行かせられないから俺が行った場所。だから見付けられなかったって気にするな」

「うん」

また頭を撫でられてお兄の手が離れる。ちよつとさみしい。

「で、もう一つは直接的じゃないが関わってると思う情報。「ソーマ・ファミリア」の不祥事の件だ。元々、ソーマはファミリアの運営には消極的だったのが今回は珍しいほどに思い切ったって話だ。元々、神と眷属に隔たりがあつたなら間違いない。確実に関わってる」

「なるほどねー。確かに関わってるわー。でも耳が届かない所には何があつたかしらねー」

お姉はまだ何かがあつたと思ってる。お兄も頷いているし、私も同じ事を考えてる。だつて何かがあつたから私たちはここに来た。時間がないから。

「よし、それじゃあ一週間後にしましょうか」

「ん？ お姉決断早い」

「いやいや妹よ。万全な準備には時間がかかるものよ。下調べに作戦会議。と言つても私の消耗品を作る時間が多いんだけどね」

「いや、それは仕方がないだろ？ それで、こつちで手に入る物はどうだった？」

「十分十分。さすがはオラリオ。物が入ってくるしダンジョンの素材も中々よ。検証も満足いったしね」

そう言ってお姉はさつきから手の中で弄り廻していたタマを真上に弾いて、またキャッチする。

「それじゃあご飯にしましょうか」

「おー」

「おー」

「ごはんは大事だ。食べれる時はちゃんと食べるのは基本。食べて、また食べる時まで頑張るため。」

一週間の4日目

「ここ数日、いやベルが特訓を考えるなら4日目ね。オラリオへ来訪する影は未だ来ない。ただ『来ない』と考えないのは確信か、はたまた信頼かしらね。」

『カレン。未だ目標は現れません。あとベル・クラネルの特訓は目に見えて成長してますね』

「そう。ちなみに気絶の回数は何？」

『減っています。あと同じ数だけアイズ・ヴァレンシユタインが膝枕をしています』

「あの子は何がしたいの？」

天然だとは思ったけど膝枕をする理由はわからない。いや、天然だから何か吹き込まれて変な方向に転がってる可能性ね。もしかして膝枕をさせるために気絶させてる？

ありえそう。

「今日も来訪なし、ね」

『そうですね。その上でお尋ねしますが』

「何？」

『すでに来訪している可能性は？』

「うん、あるわよ」

考えてないわけじゃないじゃない。

『ならオラリオを探さない理由は？』

「見付かると思っていないもの。私から隠れるだけなら誰だつて出来るしね。だつたら来る方を見張つてる方がいいの。最初、一週間つて言ったのもそれもあるからね。それだけ間があるなら向こうから出て来て来るだろうし」

『仕掛けてきますか』

「私に会うのが目的でしょうから間違いなく。願うなら派手にして欲しくないわね」

『それこそ無理なのでは？』

「ま、希望を言ってるだけだから。それじゃあ撤回しましょうか」

『わかりました』

さて、今日の朝食はどこですませようかしらね。

|| || || || || || || || || ||

オラリオ・城壁

|| || || || || || || || || ||

『だから姉さんは止めなさいベル』

『ベル、お爺ちゃんが探してたわよ』

『冒険者の話？ うーん、少しだけでいいかしら？』

『ほら休みなさい。竜の鱗が所々あるから少し硬いかもしれないけど』

懐かしい光景を見たと思ったら、目の前にアイズさんの顔が――。

「はぶあばあっ!」

思わず起き上がる。あつ、また気絶させられて膝枕させられている……。アイズさんは天然アイズさんは天然アイズさんは天然……。天然……。

「ねえ」

「はっ、はいっ! 何でしょうかつ!」

気持ちを着かせているとアイズさんが声をかけてきた。……はっ、もしかして僕、何かしちやった……?」

「あの人の知り合いなの?」

「えっ、あの人って誰のことですか?」

「……【財宝竜^{ファウニル}】、カレン・デュラス。カレン姉さんって寝言で言ってた」

「うわっ……」

「寝言でも姉さんって呼んでたんだ僕……。顔が赤くなってるかも知れないけどまずはアイズさんに答えないと。」

「はい。よく僕の家を訪れて来てくれた人なんです」

「……もしかして親戚？」

「お爺ちゃんの養子だって聞いています。僕のお母さんの義理の妹らしいです」

「そう」

軽く関係を伝えるとアイズさんは自分の頭、いや頭に付けた飾りに触れた。そう言えばあの髪飾り、前はなかったな。新しい装備なのかな？

「あの人が冒険者だったのは知ってる？」

「はい。でも詳しくは教えてもらってません。所属していたファミリアとか、二つ名とか。どういった生活をしていたぐらいしか知りません」

ただここに来てから色んな事を知った。カレン姉さんが所属していたのは【ゼウス・ファミリア】だったとか。主神ゼウス様を追放した【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】を単身襲撃したとか。あれ、そうなるアイズさんと関わっていると更にマズい事になるんじゃない？

「そっか……」

「えっと、アイズさんはカレンね……おばさんに会ったことがあるんですか？」
「うん。強いし、色々な物を持つてるよね」

「カレンおばさんの魔法ですね。あそこからお土産とが出してくれてたんですね」

最初は何もない所から牛が三頭も現れてビックリしたなあ。その後、村のみんなで肉祭りしたは楽しかったなあ。今だからわかるけどカレン姉さんのあの魔法、ダンジョンだとスゴく便利だったんだろうな。サポーターより荷物に制限はないだろうし、モンスターと戦う時だって荷物がなから身軽に戦ってたんだろう。あれ、何だから一緒にダンジョンに潜ってくれたらいいなって思えてきた。

それにこのやり取り、アイズさん自身は特に問題なさそうだ。他の「ロキ・ファミリア」の人達はわからないけど。

「そう、でも秘密が多い人」

「秘密、ですか？」

「うん。ベルはそう思わない？」

「それは……、そうですね。カレンおばさんは自分の事はあまり話しませんから秘密は多いと僕も思います」

お爺ちゃんなら知っていたかもしれないけどカレン姉さんは自分の事を話そうとはしなかった。オラリオの事を含めても、ここから去った後の事も。何も教えてくれな

かった。

「……少し話しすぎたね。続き、しようか」

「はっ、はいっ！」

つい話し込んでしまった。強くなるために時間はどれだけあっても足りないくらいだ。貴女に追いつくにはどれだけあっても。

「続き、お願いします」

「うん」

気持ちを切り替え、鞆を構えたアイズさんに飛び込んだ。

|| || || || || || || || || ||

黄昏の館・訓練場

|| || || || || || || || || ||

「ウラアツ!!」

力と敏捷のアビリティ、筋力に速度を加えた蹴りは、一步も動かせなかった。この前の戦いで折れた足だが今は十分に回復して戻ったのに。

「チイツ！」

不発、いや単純に足りねえから動かさなかつただけ。だがやつぱり不満から舌打ちをして離れる。

「なんじやい。何が不満なんじや?」

するとガレスから文句を言われた。蹴りを防いだ腕を振り回しているがそれほど痛がつてる様子がねえ。つたく相変わらず硬え体だ。

「なんでもねえよ」

「そんなわけ無かろう。何年の付き合いだと思つとる、ベート。遠征の事もあるだろうが、あやつの事が頭にあるだろう」

「ああ、誰の事を言つてんだよ?」

「言わねば認めぬか? この前の食料庫でカレンがいたのだろうか?」

「……チツ」

その名前を聞くとまた舌打ちをしちまった。

確かにあの姿はいまでも鮮明に思い出せる。巨大なあのモンスターを軽々と倒した光景。【猛者】すら届かない高みにいると証明した戦い。あんなのを知つちまったら情けなくなる。まだ自分は弱いと。

「何があつたのかは聞いておる。まあ儂が思ったのは15年前と同じ、と言う事じゃな」

15年前? そういやあのトカゲ女は自分とこの主神を追放したこと「フレイヤ・

ファミリア」を襲撃したって話だったな。

「おいジジイ。15年前の事を教える」

「いきなりじゃな。じゃがいいぞ。たまには老骨を休めたいと思つとつたかなの」

そう言つてその場で座り込んで手招きをするジジイ。聞きたきや自分から来いって事かよ、メンドクせえ。でも俺は黙つて応じてジジイの前で座り込んだ。

「まず、お前は15年前のカレンをどのくらい知つとる?」

「【黒竜】と二大ファミリア襲撃以外なら元【ゼウス・ファミリア】、オラリオ一のサポートで【助演者】^{パティスタック}つて二つ名があつた位だ」

「ふむ、なら今の印象は?」

「あれだけの実力ある奴がサポートばかりだったつてのは信じられねえ。本気じゃなかつたつて俺は考えている」

「なるほど。ならまず訂正じゃ。【ゼウス・ファミリア】があつた頃のカレンは二つ名にある程度の実力じゃつた。つまりベートが思う程の実力は無かつたぞ」

「はあ?」

実力が無かつた? 今はアレだけの力があるつてのに? いや、ジジイの口ぶりからだと15年前のトカゲ女は本当にサポートだけの女だった訳か? つまりは。

「……【黒竜】討伐がキツカケか?」

「そうじゃろうな。カレンが竜人になったのはクエスト失敗してからじゃ。襲撃の後で知った事じゃがアレは魔法による変貌だそうだ。効果は知らないが、食料庫パントリーの話聞いたとき、儂はまだ魔法が発動中の可能性を考えた」

「なんだと？」

「15年前の魔法がまだ効果を発揮したままだと？ そんな事、あり得るわけ……。」

「……おいジジイ。そんな事を言うんだつたら、心当たりがあるんだな？」

「ああ、あるぞ。それこそ15年前の襲撃の時じゃ。あの時、先に儂らの所へカレンは来た。そしてフィン、リヴェリアよりも儂が先に迎撃に出た。その時のカレンは角と鱗しかなかつた」

角と鱗だけ。言葉通りに捉えるなら今みたいな尻尾と翼がなかつたって事か？

「つまり何か？ ジジイはそのなりかけの状態を知ってるからあのトカゲ女はまだ魔法が発動中って考えてる訳か？」

「まさか。それとはまた別の理由じゃ」

「なんだよ、勿体ぶってねえでさっさと言えよ」

焦れたい態度にイラついているとジジイは片腕を出して、反対の手で線をなぞる。

「儂は渾身の一撃を斧で放ち、カレンは両腕で受け止めた。その後、傷を治すように皮が鱗に変化した。ダメージを与えた所が竜人として変化した」

「はあ？」

「そうして時間を稼いでいる内にフィンとリヴェリアが合流。そのまま相対となろうした直前、カレンは尻尾を生やした。その結果、儂ら3人を相手取る手数を得た」

「……おい、そりやあつまり」

「そうじゃ。カレンは竜人となつて強くなつた訳ではない。戦う度に竜人となり、強くなつたと儂は考えとる」

……確かに、あのトカゲ女は俺たちの所に出る前にオツタルと変な匂いをしてる女と戦つてた感じだ。戦いは見てねえが最後、気絶したオツタルを運んでた事から間違いない。Lv. 7以上の力を証明してる。つまりあの直前であの女は強くなつて事に――。

「ベート、戦つて強くなつたと考えてそうじゃが正しくは違うぞ」

「はああ？ 何だよ、それっぽい説明だつたらうが」

「いや、戦う度に強くなつてるのは恐らく間違つておらん。じゃがそれが、漏れ出た力だとしたらどうじゃ？」

「なんだそりや？」

「お前さんだつて聞いておるじゃろう。カレンが襲撃する直前、何をしていたのか」

「【黒竜】の討伐だろ？ それが何だつて――」

「聞いた話では主力だった眷属は撤退する時点で死亡だったそうじゃ。その殿にカレン

は残ったそうじゃ。それが生存メンバーの証言じゃった」

……おい待て。あのトカゲ女は生きてる。それは事実だ。だが相手は【黒竜】。見たことはねえがこの世界で頂点のモンスター。【ゼウス、ヘラ・ファミリア】の第一級以上の冒険者が束になっても討伐できなかった世界の脅威。それに生き延びた。つまりそれは――。

「あのトカゲ女は、自分の力を制限してる……っ！」

「そうじゃ。【黒竜】を足止め、もしかすれば撤退させるだけの実力を手に入れながらも。しかし戦い傷つく度にそれが解放されている。魔法の力によって手に入れた物ならば、制限しとるとするならまだ魔法の効果は終わっておらんのだじやろう。まるで変わることを拒むかのようにじゃ」

正直、俺はイラついている。オラリオ、いや世界の頂点に立てるだけの実力があいながらそれを抑えて隠してる。元々から実力を隠していたと疑ってたが、それが確信になるとますます気に入らねえ。

「……言っておくがお前とカレンは違うぞ」

「ああ？」

「お主がカレンに憤りを感じる理由はわかっとなる。じゃがそれをカレンにぶつけるのは的違いじゃ。あやつは誇り高いからの」

ジジイの言葉でイラつきが疑問に変わった。いや、イラつきはまだ残ってるが違うと言われて話を聞く為に黙り込む。それを察したジジイは空を見上げて、どこか懐かしむように語る。

「あやつは後悔をせん。手遅れでも、失敗しても、次を見ている。それが『ゼウス・ファミリア』の冒険者カレン・デュラスの信念。決して立ち止まらないその姿に誰もが励まされた。だからこそあやつに同情も嫉妬を決して向けん。それをしてしまえば冒険者として恥であるからだ。——じゃからベートよ」

見上げた顔をこつちに向けるとジジイは真つ直ぐに俺を見た。それは厳格で、さつきまでのイラつきを一瞬忘れ去る程の真剣さだった。

「お前も冒険者である以上、カレンに嫌悪を抱くことは冒険者の未熟とも言える。それが嫌ならば前を向け。歩みを止めるな。あやつに言いたいことがあるならばその姿を捉えるまでの高みに至れ。儂が言えるのはそれだけじゃ」

……つまり文句が言いたいなら強くなれって事かよ。

ハッ、上等だよ。だつたら強くなってやるぜ。

「予想通り彼女でしょうね。夫婦で来られないのが残念ですね」

そりゃあそうでしょう。あの方はあの人との双壁だし、同時に傍観者を選んだ立場だ。まあだから押しかけ嫁になった彼女が動くでしょうけど、怒り心頭でしょうね。何せ棺を奪ってるわけだし。

「あー、でもそうなると私がダンジョンで力を解放しちやつたのが原因だし。責められるかしら？」

「文句を言われたなら謝罪しましょう。追求しないなら流しましょう。気にしては仕事は出来ないそうですから」

「同じファミリアに所属しているわけじゃないけどね」

「ですが、彼ら彼女らはカレンの盟友です。願わくば、私も末席に加わりたいです」
「だーめ」

華の考えは理解しているけど、それはダメ。私に付き合う必要はない。出来る事なら人類以上に稼働する寿命でここに生きていて欲しいのよ。それを、断ろうとしているのも貴女の成長の一つでしょうけどね。

「とにかくもう少しだけ様子を見ましょう。それで何もなければ事が起きるまでオラリオに留まるわ」

「ダンジョンには潜るのですか？」

「そりゃあね。彼女だって私の事は気になってるだろうし」

彼女——ダンジョンマスターも私の事は気になってるでしょうしね。あの時は元・冒険者として思う所があつたから無意識に荒っぽく対応しちゃったし、今後を考えてもう一度会わないといけない。

「でも1年も経たずにこうも進むなんてね。もう数年先かと思つてたのに」

「今が時代の転換期、ではないですか？」

「その理由は？」

「むしろカレンがよくわかっているのでは？」

「まあ、ね」

私にとつてはわかっているじゃない。身に染みてる。15年前が正に転換期だった。二大ファミアリアの入れ替わり。オラリオ暗黒期、闇派閥イツイルス。そして抗争によるファミアリアの壊滅。その場にいなかったけど、ここに来て様変わりしたのぐらい実感している。神々が降りてきて1000年の間にも色々あつただろうけど15年前と今を顧みるなら多くの事が起きている。まさに時代が変わろうとしているんでしよう。

「あ」

「ん？」

更に思い更けようとした所で華が何かに気付いたように声を漏らした。何かとその

視線の先を追うと見知った顔が3人。なんだか騒いでるけど、あの面子なら仕方ないか。

しゅしゅ、ではなく珍しい組み合わせだからちよつと面白そうだなと思いつながら3人、ベル達の所に近づいていく。

「何やってるの?」

「あ」

「お?」

「ふお?」

「とりあえずヘステイア神はベルから降りて下さい」

話す前にまずベルにへばり付いているヘステイア神を剥がして——抵抗されたのでちよつと強めに——まともに話せるようにした。

「で、ベル。【劍姫】ちゃんと一緒にいることがバレた訳ね」

「えっ?!」 なんて知ってるの!?!」

「私、飛べます。つまり上空から目に入るの」

「なるほど……」

バレないように城壁で特訓していたんでしようけど翼がある私、特に監視している今じゃ見付けるわよ。

「とりあえずベル。まずは話よ。ヘステイア神もどういう事か知りたいでしょう?」

「もちろんだ! ベル君、誤魔化したって神には効かないから正直に話すように」

「はっ、はい!」

そうして私たち5人、裏路地でベルの話聞いた。私も特訓をしていたのは知っていたけど事情は知らなかったから同席させてもらった。

事の始まりはベルと【剣姫】ちゃんがギルドで邂逅した時。この前の緊急依頼の直前で【剣姫】ちゃんがベルのプロテクターを拾ってみたいで、それを返却する為にギルドにいたみたい。ちょうど私が教会に行った日ね。そこでベルの強くなりたい気持ちに【剣姫】ちゃんが手助けした訳、か。

「カレン、こういうのはよろしいのですか?」

「普通はよろしくないわよ。他派閥に自分達の財産を渡すわけだもの。私だってファミリアにいたときは取引交渉をした上だったし。ただ利益がある以上は表向き敵同士のファミリアでもやり取りは出来ていたの。ま、それでも秘密裏に手助けもあったけど」

「つまりバレなきや問題ない、と言う事ですね」

「そうそう」

「問題ありだよっ！ 特にヴァレン某が相手なんて……」

貴女のそれは嫉妬でしょうに。

「よし！ ベル君、午後も特訓をするんだろ？ どんな様子なのか見に行かせて貰う！」

「ええっ!？」

「ヘステイア神、バイトは大丈夫なんですか？」

「おばちゃんに土下座して頼み込む!!」

あまり情けないことを言わないで下さい。

いや、考えよう。もしヘステイア神がここで無理を通して評価が下がったらクビになつてファミリアの負担に。

「仕方がないですね。華、貴女が代理で店番してくれない？」

「私ですか?」

「本当かい!? あっ、でも言っちゃなんだけどそう愛想がいい子って感じじゃ」

「華」

「わかりました」

初見なら華をそう評価するのは無理もない。だから、その不安を取り除く。

「どうもはじめましてっ♪ 今日、お手伝いをさせて頂くことになった華です。未熟者

ですがどうかよろしくお願いしますっ♡」

人当たりのいい満面の笑顔に腰の低い立ち振る舞い。店員代理としては満点でしょう。

ただあまりにも突然な変わりようにベル達は絶句していた。うん、わかる。とりあえずこの後、華は問題なくヘステイア神の代わりとして採用された。

|| || || || || || || || || ||

オラリオ・城壁

|| || || || || || || || || ||

屋台を華に任せた後、私たちはベルの特訓の見学だ。監視あるけどここなら半分は気を配れるし、後でもう半分を華と確認れば問題無い。それに実はじっくり見るのは初めだから、細かく見てみる、つもりだったけど。

「グブツ！」

速い鞆先が顔面に当たる。

「ゴブツ!!」

フエイントの蹴りが鳩尾に当たる。

「ブッ！」

受け流し損ねて頭上に一撃が当たる。

「【剣姫】ちゃん。基本的に1人で活動する事が多い……いや遠回しに確認するのはやめましょう。貴女、人に物を教えるのは苦手でしょうか？」

私が尋ねると【剣姫】ちゃんは凍ったように動きを止めた。ボコボコにされているのは知ってたけど、これはヒドい。あとヘステイア神、その笑顔は2人に失礼ですよ。

「ああ、でもそれで問題無いわよ」

でもこれ以上の方法はないとも思うからフォローは入れておく。すると【剣姫】ちゃんに動きが戻った。とは言え、このまま続けるのも惜しいか。

「ベル、意識はある？」

「うん、なんとか……」

「じゃあそのまま聞いてね。冒険者は神フェアルナの恩恵でダンジョンに潜る力を手に入れる。それが【ステイタス】で5つの基礎アビリティ。これは誰でもわかってるよね？」

手の平を見せる、5つの指を立てている状態をベルに見せる。【剣姫】ちゃんも見てるけどまあ気にしない。

「うん」

「ならこの5つが戦闘にどう直結するかわかる？」

「それは……、筋力が攻撃で魔力が魔法？」

「そう思うわよね。でもそれは結果的に、が正しいの。あくまで「ステイタス」は神々の補助、基礎アビリティは補正よ。——「グニタヘイズより贈り物を」

【「ミニニアストレジャー」から剣を取り出し、これを片手で振り回す。手の平で回し、手首を這わせ、上に投げてはそれをキャッチする。

「おお、見事」

「ありがとうございます。それでベル、これは基礎アビリティが上げれば貴方でも出来る？」

「え？ いや、練習しないと無理だよ……」

「そう、練習してなきやできない。つまりは技。そして知識。ベル、貴方は【剣姫】ちゃんと相対しているとき、剣筋や立ち回りを見て防御をしている筈よ」

「うっ、うん」

「じゃあその防衛が関係している基礎アビリティは？ それはわかる？」

「えつと……、耐久と敏捷のアビリティが関係している？」

「残念。魔力以外よ。相手の力に耐える耐久、それを支えに押し返す筋力、盾にする武器や防具を前に出す敏捷、受け流す繊細さを求める器用」

「そこまで関係しているの?」

「じゃあベル。耐久が高いからって無抵抗で剣を受けたらスリ傷すら付かないって思う?」

ベルの疑問に極端な例を出したけど、さすがにそれはあり得ないと思ったみたいね。あ、自分の事は棚に上げてるわ、この例え。

「【剣姫】ちゃんのやり方に問題無いのは、結果として最善の動きがベルの体に染み
るからよ」

「なるほど……」

「ただそれを自覚している冒険者は少ないの。実際、経験値を積み強くなって相手を倒せるからね。第一級冒険者の【剣姫】ちゃんならわかる話でしょうけど」

「うん。でも貴女ほど細かくは考えてなかった」

「そう。まあ【ロキ・ファミリア】なら洗練されたサポートがあるでしょうね。それなら
まとめて言う事は1つね。『今ここある物は何?』」

「【?】」

ヘスティア神も含めて最後の言葉に首を傾げる3人。でもこの言葉の意味だけは自分で理解しなやかや意味がない。

そう伝えて納得させて特訓を再開させた。変わらず、ベルはボコボコにされた。

.....

.....

.....

日が沈み街並みには魔石灯がつき始めた頃になると特訓は終わった。

「いや、見事にポッコポコにされたね。アレ絶対にサンドバック代わりにされてるよ。つまりヴァレン某はベル君の事をなんとも想ってないわけだよ！」

ポロポロのベル（※治療済み）に対して疲れが見えない【剣姫】の2人に比べてヘステイア神の喜びが大きい。ヘステイア神、その気持ちは理解してますがその態度は止め

て下さい、みつともないですよ。

「気分が良さそうですねへスティア神。それならウチの華を代理に立てた報酬を——」
「いやでもヴァレン某君も特訓で疲れただろう！ 遠征も近いんだから休める時は休む
といいよ、うん！」

「は、はい」

私が取る気もなかった報酬の話を見ると手の平を返したように【劍姫】ちゃんを気遣うへスティア神だった。まあ意図を察するだけそう頭が悪い訳じゃなさそうだけど。

さて、私もそろそろ——、なんて考えていたけど妙は気配を感じ取った。

「あれ、灯りが無い？」

ベルの言葉によろやく当たりが普段より暗いことに気付いた。ここ最近、真つ暗な場所
所で監視をしていたせいか気にしていなかったけど、これは異常だ。

【劍姫】ちゃん

「うん」

彼女もこの状況に気付いて剣を抜き、私も槍を出す。

「え？ え？」

「2人とも、どうしたんだい？」

「ベル、しっかりへスティア神を守りなさいよ」

「え?」

私が一方的に告げると前の角から黒い衣装を着た猫キャットビープル人の男性。得物は槍。……あ、なるほど。

相手の正体が誰なのかわかった直後、私は上へ飛び、奇襲を防いだ。

「つて上もお!?!」

後ろ、と言うより真下からのヘスティア神の驚きの声は鮮明に聞こえた。それは私にとつて余裕のある証であり、その合間に周囲を確認する。「劍姫」ちゃんは最速の彼の攻撃からベルを守り切り、そのまま離れる。他にいくつかの気配を見付け、その上で奇襲してきた相手を弾き、私もベルから離れる。

「ヤッ」

地に足をつき、いつでも追撃・迎撃が出来る体勢で相手を見据える。同じ黒装束にバイザー。ただ違うのは褐色の肌に長い耳のダークエルフ。それを確認していると別の場所からもう1人が私を標的とする。今度はエルフだ。

「悪いけど正体はわかってるわ。目的を教えて貰えると——」

「黙れ」

話しかければエルフの方に殺気と一緒に罵倒された。まあ嫌われてるわよね。

「貴様など、本当ならすぐにも殺してやりたいほどだ」

「そう。そつちの貴方も?」

「……ッ!」

ダークエルフの彼からも殺気を向けられた。さすがに軽口が過ぎたか。猫人の彼が【女神の戦車】だと気付いた時点で「フレイヤ・ファミリア」なのは気付いた。つまり、その眷属全員には嫌われている。とは言え【猛者】おっしやを退いたから感情に任せてないし、何よりフレイヤ神に言い含められていそうだから私とは戦おうとしてないでしょう。もつとも、それも我慢が続く限りか。

「なら聞き手になりましょう。言いたいことがあるなら聞くわ」

「なら一字一句聞け。あの方が行う事に対して介入はするな」

短く、しかし嫌悪の色を隠さず伝えてきた。あの女神様、ベルに何かする気なのかしら? 私に忠告するくらいだから無茶な事を――。

そんな風に考えてしまったせいで隙だと思われ、ダークエルフの方が襲い掛かってきた。その迂闊さに呆れつつ、改めて自分が恨まれている自覚をしつつも迎え撃つため相手を見据え、

キーン、と。相手の剣が金属同士が当たる音と共に不自然な方向に振られた。

「!？」

相手も私も不可解な出来事に目を丸くしたが、私が先に動いて相手を掴み、エルフの方へ投げ飛ばす。

「……チツ」

ただ仲が悪かったのか受け止めず避け、対するダークエルフの彼もわかってたのか受け身で体勢を整えた。

「惜しいが時間切れだ。撤退するぞ」

「……わかった」

2人から鋭い視線を向けられながら聞こえたやり取りを拾いつつ影に隠れていくのを見送った。ベル達の方を見れば向こうの3人だけになっていて無事に乗り切ったみたいだ。

ただ、それよりも。この辺りの地面を見渡し、その中から光る物を見付ける。それを拾い上げるとキノコ状の鉄の塊だった。

「そう、あの子達が一番乗りだったのね」

運命とは都合がよく、そして残酷なんだと思った。

|| || || || || || || || || ||

とある高見台

|||||

「メッセージ、送信と」

自信はあったけど上手く命中したとなるといつも気持ちいいわね。後はここに手紙を置いておけば会いに来てくれるでしょう。

「お姉、大胆」

「それでもないわよお。準備が出来たし、それに一週間の宣言はピッタリよ」

「でも本当は隠し部屋に置くつもりだったんだろ？ そっちの方が確実に伝わるんじゃないのか？」

「そうね。でもこうして機会があったなら乗っておこうと思ってね。予定調和は崩してナンボでしょ？」

弟妹達の言葉を軽い感じに返しながら武器をしまう。

「それとも何？ 2人は心の準備が必要だった？」

「まさか」

「ううん」

「じゃあ問題なし。それじゃあ3日後の再会は頑張りましょう」

だから楽しみにしててね、カレン・デユラス。

「正直、そうして欲しい。でもフレイヤ神の事だからベルに与えるのはおそらく試練の類いよ。身内としての心配と同時に元「ゼウス・ファミリア」としてはベル自身で乗り越えて欲しいって思ってるの」

それに本当に試練なら露払いの1つや2つはあるでしょう。昨日、「フレイヤ・ファミリア」の面子を顧みるに「**猛者**」が仕込みをしている可能性が高い。華でも彼との対峙は実力差がありすぎる。現状では、だけどね。

「……ああ、ダメね」

「？」

「何でもないわよ」

私の事もあって華の封印が中々頭の奥へ隠れてくれない。私以外に解除できないようにしているとは言え、この考えは早い内に忘れないと。私以外に解除できないよ

「華、監視は終了。ベルの件まで自由にしていいわ」

「よろしいので？」

「私とあの子達の再会は誰も邪魔は絶対にしないでしょう。一番の候補だったあの人は来てたとしても自粛するでしょうしね」

性格はアレだけど身内には甘いからなあ。身内以外、いや特定の種族には無慈悲だけど。いけない、暇つぶしに悪行する可能性が出てきた。でも未然に防ぐのは難しいし、

ここは祈るしかないのかあ。

「カレン、エルフに関する事件があった場合は？」

「ああ、華もそう考えるのね。思うところはああるけどあの人なら防ぎようがないわ。残念だけど関係性だけを調べるだけにして」

「わかりました」

「ええ。それじゃあ私も二日後に備えて色々と準備をするわ。これに関して不足だった、なんて恥ずかしい事は出来ないしね」

「頑張ってください。では私もメンテナンスが必要になる以外は自由にします」

「……ちやんと隠れ家には帰ってくるのよ？」

「……わかりました」

その間は何？ 何をするつもりだったの？

.....

.....

.....

「ありがとうございます」

店を巡って数軒目。とは言え求めてる品数そのものは少なかつた。ただ特殊なものだから必要な物と数が中々揃わないのが店を巡っている訳だけど。

「でもほとんどが観賞用か置物の材料なのよねえ」

これを素材として再利用すると知ったらお店の人は何を思うのかしら？ いや、私の事を知っている人はどこか納得した顔をしてたから察しているのでしょう。

「でもそう言う品だから量は確保できる。あとは——」

「ミニニアストレジャー」が収納魔法だった結果、収納物が頭に記憶するようになってから買物にメモを用意する事がなくなつた。その代わり周囲の気配に対して鈍感になる。とは言え高レベルの自分は警戒心が強い方だ。

でも、例外はある。それを証明するように手を握られた。

「ん？——んん？」

手を握られた事に気付いて、それが私にはあり得ないとすぐに気付く。つまり手を取ったのは私の無意識、本能で警戒しない相手と言う事。そんな相手はゼウス、ヘラ、ファミリアのみんな。ベル。そして——。

仮宿の一室

|| || || || || || || ||

【ロキ・ファミリア】はもうすぐ遠征にダンジョンに潜る事になる。物資の目処も立つたし団員たちも鍛錬も十二分。

団長の僕もそれに追われていたが、今日はどこか親指が疼いたから息抜きがてら散策に出たらカレンを見付け、しかも今なら近づけるほど警戒が緩んでいた。

逃がさないように手を握り、それでも往生際悪く逃げようとするカレンに引き摺られながらなんとか話し合いに応じさせることが出来た。こつちも疲れたけど。

「何してんのよ、私……」

「そこまで落ち込まないでくれ。それにさっきの態度で確信したよ。やっぱり酒場の時やホームに来てた時は僕から逃げてただけなんだね」

「悪い？　と言うか貴方こそ大丈夫なの？　特に【怒蛇】の子」

「……………今回は覚悟して来たつもりだよ」

「その間は絶対に気にしてるでしょ」

相変わらず察しがいいね。間違いなくあの場で噂が広がる筈だからテイオネにも伝わるだろう。なんとか説き伏せよう。そう誓う。

改めて、いや15年ぶりに面と向かったカレンは変わっているようで変わっていない。皮肉を口にするのもいつも通りだった。何を目的にオラリオに戻ってきたのか知らない。でもそれがわかるとどこか嬉しかった。

「で、話つて？ 15年前の件？ 食料庫？^{パントリー} それとも私たちの関係について？」

「まずはキミが落ち着いてくれ。捲し立てるときは気持ちが宙に浮いてるときだろう？」

「むっ……」

饒舌だけどその場合、キミは本心を誤魔化すからね。

指摘するとカレンは悩ましい様子で思案し、すぐに立ち上がる。

「貴方、好みは変わった？」

「いや。まあ会食の機会が増えたから舌は肥えたかもね」

「そう。こっちは旅をして珍味も味わったわね。——【グニタヘイズより贈り物を】」

収納魔法からテーブルと茶器が出現したけど僕は寧ろカレンから話題を振られた事が嬉しかった。なにせこの十五年の空白を埋めるようだったからだ。

「それは羨ましい。ここじゃアイディアがないと新しい美食は生まれないからね」

「それでもないわよ、当たり前外れもあるし。でもその土地の人達と友好を築くにはゲテモノでも口にしなきゃいけないかったわよ」

「逆に興味が湧くよ」

「お茶が出来るまでなら話して良いわよ」

「そうか、ありがとう」

「礼を言われる事じゃないわよ」

カレンは手を動かしながらも会話を続けているけど手順は丁寧で流れるように動かしている。懐かしい。この姿を見るのは息抜きの1つだったな。

食事の話以外にも寝泊まりや季節の話で時間を使うとカレンの用意が終わった。

「どうぞ」

「うん、いただくよ」

目の前に出されたお茶を口につければ懐かしい味が舌の上に広がった。

「……この味は変わらないんだね」

「好みなんでそう変わらないわよ。貴方が懐かしいと思うならそういう事でしよう」

……そうか、そうなんだね。やっぱり15年前から変わらないんだね。キミの事だ。味くらい変えることだって出来ただろうに。全く、僕は相変わらず彼女から先手は取れないな。

「話をしてくれるんだね」

「一ヶ月も足踏みしてようやく勇気が出たみたいだからね。それに報いただけよ」

「その割には逃げようとしたみたいだけど」

「……貴方の本気を見てただけよ」

嘘だ。だって本気で逃げようとしていたし、動揺していたのを認めて自己嫌悪してたじゃないか。と、言えたら良いけどへそを曲げられて逃げられたくないからここは黙ってしよう。

「失礼な事、考えてる？」

「いや、考えてないよ」

本当に察しが良いね。

「まあいいわ。実を言えば私、事の次第でしばらくオラリオを空けるの。良いタイミングに捕まえたわね」

「え？」

「言っておくけど一時的よ。ちよつと私関係で騒がしくなりそうだからそれを止められる人をどうにかして連れてくるだけ」

「それは、ゼウスかヘラの元眷属かい？」

カレンの言葉で想像したのは彼女の仲間だった【ゼウス、ヘラ・ファミリア】の眷属だった。彼女で止められない事を仄めかしていたからそれも高レベルの冒険者——。

「違うわ」

と、カレンによってその可能性はあっさり否定された。

「私がオラリオから飛び出して、しばらくお世話になった人よ。今は世捨て人のように引きこもってるから時間が掛かるのよ」

「そうか。それは会ってみたいね」

「言葉を失うと思うわよ?」

「そこまでスゴい人物なのかい?」

「まあ、ね」

ん? どこか歯切れが悪いし、遠い目をしてるな。この反応は僕も知っている相手だった場合だけど、心当たりがないな。

……おっと。これはカレンの誘導だな。彼女から話題を振って僕からの質問を回避してる。

「——安心しなさい。ちゃんと質問には答えるわよ」

「え?」

「貴方つてば普段が普段でしょう? いつももの理知的な姿勢から外れると読める相手には読めるくらい思考がわかりやすいのよ。そこは気をつけなさいって言ってたでしょ?」

……ああ、そうだ。15年前のキミもそう言うってくれた。自分から遠ざけてるのに

言ってくれてるのか。

なら覚悟を決めよう。

「ならみつともなく聞かせて貰うよ。キミは恨んでいるかい？　15年前、僕がキミにわざと負けたことを」

恥の欠片もなく、この胸の奥でしまい込んでいた後悔をここで告げた。

「……………」

カレンは静かに僕を見ていた。反応がない、なんて筈がない。

わかってる。この沈黙こそ彼女の返答だ。そして彼女が恨むなんて、しないと。

「黒竜討伐の生き残りからキミが殿として残って聞いた時は腹の底が熱くなつた事を今でも覚えている。死んだと思つたからね。だから僕は、僕らは頂点に立つたために「フレイヤ・ファミリア」と共に神ゼウスと神ヘラを追放し、オラリオの二大ファミリアになつた」

「でも、私は生き残つてオラリオに戻ってきた」

カレンが言葉を挟んだ。これは話を最後まで続けるように言ってる。

「ああ、生きていてくれた。そしてキミは「ゼウス・ファミリア」として、最後の眷属と

して、神ゼウスを追放した僕ら「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」を襲撃した。その時の僕は、覚悟を決めきれなかった」

キミの変わり果てながらも生きていてくれた姿を見た時、僕の気持ちは乱れた。困惑、歓喜、焦り……。あらゆる感情が渦巻いていた僕は恐らく、自分の心がむき出しになつていったんだろう。

「……そう。そしてそんな貴方を倒した私は失望した」

「そんなキミに僕は『嘘つき』と言われた。返す言葉がないよ。僕とキミは別所属の「ファミリア」だった。けれども「ファミリア」の眷属として相対するときは決して情に流されず、お互いが衝突する時には全力で戦う事を誓っていたのに」

「つまり、女との約束を貴方は破ったのよ」

そんな言葉でまとまる事じゃないと思うけど、僕に非がある上に彼女の口から突きつけられると改めて胸の奥に突き刺さる。

でも僕はその上で踏み込まなくてはならない。僕にとっても、恐らくカレンにとつてもだ。

「改めて教えて欲しい。キミは僕を恨んでいるかい？」

「ううん、全然」

ガシャンッ！

思つてもない返事に思わず頭をテーブルに叩き付けて食器を鳴らした。

え？　ちよつと待つてくれ。

「でも根には持つてるから」

「ああ、そうなんだ……」

でもすぐにそう聞かされて完全に許している訳じゃないと知つて、変だけど安心した。ただそれでもダメージは大きい。

「そもそも私が恨んでようがなかるうが、貴方はその頭脳と理性で宿願を果たす方へ進むでしょ？　だったら私が面倒な感情を抱えても無駄でしょ？」

「まあそうなんだけど、確かにそうだけどっ」

まさにカレンの言うとおりこの15年間でもダンジョンに潜り、実力と実績を積み上げてきた。でもそれでもキミの事を忘れた事はなかった。なかったからこの返しは本当に予想外——。

「でも、ないかあ……」

忘れていた。いや罪悪感で目を逸らし続けていたのか。

カレンは後悔しない、そんな女性だ。自分の選択、運命ですら受け入れて顔をあげて

前へ進み続けられるほどの強かだった。そんな前向きなのに、責任感は一人に強く無茶もやっってしまう。

そんなカレンに、僕は使命も忘れて恋をした。そしてカレンはそんな僕を理解してくれた。

「……昔に戻ってきたわね。貴方はそのくらいの方が前進するでしょう」

「お陰で心のしこりが取れた気分だよ。僕は贖罪に来たはずなのにどうしてキミに背中を押される事になるなんて」

「貴方は追っかけてる方が良いのよ。ま、だから避けてた訳だけど」

「避けてたのは嘘だろう？ キミだって距離を取らないと思っていた筈だ」

「……そう言う察しの良さは女に嫌われるわよ？」

「じゃあキミは僕の事は嫌いかい？」

「それを聞く？」

呆れた顔で紅茶を口にしたカレンはその返事を口にする。

「好きのままに決まってるじゃない。この15年、私は貴方の大願を想わなかった事なんて、一度たりともないわ」

「……………」
その返しは卑怯だよ、カレン。

……………

……………

……………

「あ」

カレンの告白から少し、この15年の空白と後悔が嘘のように会話が弾んでいると何かを思い出したように声を上げた。

「どうしたんだい?」

「うーん、まあ隠してもしなくても問題か」

「なにが?」

「ほら、私が黒竜討伐の前に最後、貴方に会った件」

「討伐前——」

その時期を聞いて、心当たりが一つ。そして自慢の頭脳と回転の速さがその可能性を否応でも導き出された。

「……………それは、そういう事かい？」

「うん」

……………そうなのかああ。

い。でもわかる。アイズさんがどう攻めてくるのかわかる。目が慣れた訳じゃない。アイズさんの手がわかつているわけじゃない。ただどう来るって事がわかるだけ。

なからは僕自身が、それに食らいつくだけ——！

「ふっ、くっ!!」

一撃は重く速く、でも対処は出来ている。あとはこのまま1つ1つ流し、防ぎ。そして、攻め手を見付ける。慌てず、でも逃さずにそれを——狙う。

「——フツ!!」

「……っ」

渾身の一振りをアイズさんの鞆に当て、彼女を少し後ろに移動させる事が出来た。

「はじめて反撃ができたね」

「はっ、はいっ！ つ、ゴホッ」

思わず返事をしたら集中が切れて咽せた。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫です……」

しまらないなあ……。なんて思いつつも呼吸を整える。3度深呼吸すれば苦しさもなくなった。そして改めて本当にはじめて反撃が出来たんだとうれしさが湧く。

「アイズさん」

「ん?」

「この一週間、本当にありがとうございました!」

そんな嬉しさのあまり、アイズさんに向かつて頭を下げてお礼を伝える。と、さすがに唐突すぎたかなと羞恥心が湧く。

「ううん、私も楽しかったからお礼を言われるほどじゃないよ」

「そ、そうですか……」

僕の考えすぎだったかも。いや、アイズさんは天然だから気にしないだけなのかもしれない。

「でも、この一週間だけでも色々あったね」

「確かに特訓以外にも色々ありましたね」

神様に見付かったのは可能性としてあったけどカレンおばさんが立ち会ったり「ロキ・ファミリア」のアイズさんを狙った闇討ちがあつたのは色々あつたと言える。

あ、カレンおばさんと言えよ。

「そう言えばアイズさん、カレンおばさんが言ったこと覚えてますか?」

「あの人の……? うん、覚えてる」

カレンおばさんがアドバイスしてくれた『今ここにある物は何?』って言葉。言葉通りなら手元にある物は把握しろって事なのかもしれないけど、冒険者として心得だとした

らそのまま受け取るのは違う気もする。エイナさんがいつも言っていた『冒険者は冒険をしてはダメ』みたいな矛盾を抱えているような、そんな気がする。

「僕はその言葉に何かが含まれていると思うんです。なんかこう、大事な時に思い出すといい様な」

「うーん……」

アイズさんが唸り始めた。アイズさんも違和感はあるけどその正体まではわからないみたいだ。かわいい、とは思うけど一級冒険者でもわからないカレンお婆さんの言葉の意味、何なんだろう？

「……………あ、そう言えば」

「どうかしました？」

アイズさんが何か思い出したようで、そのままポケットから何かを取り出す。思わず覗いてみるとアクセサリーの用だった。でもこのデザインは確か……………。

「あの人から貰った物なんだけど、どんな物か聞いてないしどんな効果なのかわからないの。だからしばらく外してただけ……………」

「これ、『フロスの解放』に出てくる紋章に似てますね」

「え？」

確かカレンお婆さんが持ってきた短編集の一つにあった筈だ。確かあの話は……………。

「えっと、フロスって言う男が風の精霊の力を借りて自分を嵌めた兄弟に復讐する話なんですけど最後は罪を悔い改めさせる事で許す事で終わります。これはフロスが風の精霊の力を借りる場面でこの紋章が一緒にありました」

「……どうして『フロスの解放』って名前なの？」

「『フロスの解放』はフロス自身が復讐を含むあらゆる過去から解放されて前へ進む意味だそうです」

「復讐から……」

題名について教えるとアイズさんはどこか複雑そうな顔をしていた。何か変な事、いやカレンお婆さんが渡した事に何か思うことがあったのかも。

記憶ももう少し思い出してきた。確かこの紋章には。

「……風の加護」

「え？」

「実は出てくる風の精霊は嵐しか起こしていません。だからこの紋章は嵐を表す意味があるって聞いた事があります。ただフロスの復讐相手に対して発動した内容でしたから規模は小さいのかもしれませんが」

「嵐……」

今度は意味深にアクセサリーを眺め始める。でもすぐに握りしめて視線を外した。

「ありがとう、ベル。なんとなくどうすればいいかわかった」

「いや、そんな」

「だからキミも、頑張つて」

「……はいっ！」

お礼を言われて照れそうになったけどすぐ応援をされた僕は力強く返事をした。

これからまた、この人を目指して行こう。改めて心に誓った。

====

黄昏の館

====

「ラウル、最終確認表は？」

「あとは数の多い備蓄関係すね。見積もった分は間違はなく確保は出来てる筈です」

「そうか。だが回復・解毒関係はしっかり確認してくれ。大所帯のウチがその二つを切らせば瓦解しかねないからね」

「了解です」

遠征がもう明日になっても机の書類はまだ多い。とは言え不備がないかの最終チェックだからこれが終われば完了だ。

「それにしても急にどうしたんすか？」

「ん？ 急つてなにがだい？」

「だって俺に管理を任せた団長が昨日から手伝うつて言つたんすよ。しかもこんなギリギリで。何かあつたんすか？」

「……自分で言うのも何だけど遠征が近いと思つたら興奮してきてね。落ち着かないから来ただけさ」

「へえ、前回は緊張もしてなかつたのに」

嘘だよ。本当は昨日、カレンにあんな事を言われたから落ち着かなくなつたんだよ。

……いけない、ちよつと口が悪くなつてるな。

「すまないね。キミに任せた仕事だったのに」

「構わないつすよ。俺も個人的な準備も出来たつすから」

「そうかい。それじゃあ確認を頼む」

「はいつす」

自然に急がせてラウルを行かせる。そして僕一人になるとペンを置く。

「……………う……………ん」

やつぱり落ち着かない。話す事の出来た貴重な機会だったけど、この場面で伝えたのは嫌がらせなんじゃないかつて思えてきた。でもこの程度と考えるなら優しい方かも

「ロキにも話を通したが儂らが二人がいいだろうと。と言うかお前さんがロキの探りを躲したと聞いたぞ」

「ああ、そう言えばそうだったね」

確かにロキは何か感づいていたな。でもロキ相手に漏らすと変な方向に転がされると思っていなしていた。じゃあロキの差し金もあるな。

「それで、カレンと何を話したんだ？」

そしてリヴェリアは直球にそう尋ねてきた。

「……なんでカレンの事だっと思うんだい？」

「いや、この時期で今の状況なら儂でも察するぞ。と言うかお前とカレンを知っている者なら余程の鈍感でなければ同じ事を考えるぞ」

「そこまで単純かな？」

「カレンの事に関しては」

それは、ちよつと恥ずかしい。今はちよつと表情がコントロール出来ないから顔は背ける。ただここにこの二人以外がいたらなんとしても表情を変えなかつただろう。

「凶星か」

「長い付き合いのキミ達に隠しても仕方がないからね。確かに昨日、カレンと会ってきたよ」

「やっとか。これまで機会があったと言うのにまさか遠征前になってようやくか」

「それって呆れているのかい？」

「どうの本人がヘタレだと言ってたよ」

「ははっ、フィンが女にそう言われてる日が来るとはな」

ガレスに笑われるけど、反論も言い訳も出来ない。むしろ言えばよりからかわれるとわかつているからね。

「で、だ。お前はカレンに許されたのか？」

「それ以前に恨んでなかったよ。根には持つてはいるらしいけど」

「なんだ、お前一人の杞憂だったのか。なら別の事で悩んでいるのか？」

「そうなんだけど……」

二人との会話で外堀が埋まって行く中、これ以上の誤魔化しは難しくなってくるだろう。しょうがない、ここは巻き込まれて貰おう。

「わかった。僕が何に悩んでいるのか答えるよ。ただし遠征が終わる、いや遠征の帰りまでは他言無用。ロキにも言わないでくれ」

「ほお、そうかい」

「ただし小声で話すから近づいてくれ。あと聞いても声を上げないでくれ」

「おい、なんでそこまで念入りにする？ まさかお前個人に収まらない事なのか？」

……

……

……

|| || || || || || || || || ||

オラリオ・東の城壁

|| || || || || || || || || ||

「……………」

朝日が昇り、人々の喧噪も賑わいだした頃。それを背にオラリオ城壁の外を眺めていた。この先にあるのがセオ口密林。会うのを約束した場所だ。

「……………時代は進む、か」

15年前に飛び立ったこのオラリオも変わった。変わらないものもあつたけど私がいた時と違って様変わりした。そして15年も経てば次世代の頭角も現れる。ベル然り、【劍姫】ちゃん然り。そして、

「あの子たち然り……」

恐らく食料庫パントリーの戦いで私の力が使われたのを察してここに来た。速かったのは運良くオラリオに近い場所にいたからでしょうね。そしてそれは私の残された時間が短縮された事を察して。

その察知の速さを褒めるべきか呆れるべきか、悩むところね。

「なんて、考えるまでもない。家族のために動くのが私だし」

一歩目は跳んで、二歩目で翼を広げて空へ飛ぶ。地上から見れば人影が見える高さだけれどこんな時間に外にいる人間もいないでしょう。そもそも鳴き声や突風、影の真下でもない限りは誰も上なんて見ないのが現実だ。旅をしていたときも飛行で移動していたし、オラリオに来て以来の長い飛行になるわね。

東に広がる草原は城壁に囲まれたオラリオと違い遮るものや聳えるものないから開放感があった。でも待ち合わせのセオロ密林は木々の密集地帯。竜人が戦い辛い地形であり、戦うなら個人の技量が求められる。だから実力がよくわかる。

これからの事を考えているともうセオロ密林が見えてきた。そろそろ警戒しなかな。あの子達、いやあの子の事だし——。

「ねっ!!」

声を上げ、体もクルリと回って制止する。でも他に人が、いや耳のいい人がいたなら

遠くからの甲高い音に気付いただろう。そして私は撃たれてきた弾を受け止めた手の中で遊ばせながらその方向を真つ直ぐに見る。密林の中で特に背の高い木。まるで草原の陸のように盛り上がっているあそこなら、上空の周囲がよく見える。

そこにあの子達がいる。

「……フッ！」

翼を強く大きく羽ばたかせて一気に高く昇る。そして勢いが弱まった当たりで再び止まり、目的地目がけて急降下する。降りるにつれてセオロ密林が近づき、ひいて生い茂る木々もまた迫ってくる。でも私にそれは問題ではなく、通れるだけの隙間を見極めては軌道を曲げ、回避し、時々は枝や幹を掴んで大胆にすり抜けていく。

そうして怪我也汚れもなく地面に着陸した。上を見上げれば目星を付けた木がギリギリで見えた。

「挨拶にしては物騒ね」

そんな見上げた状態から声を上げ、手の中で遊ばせていた弾丸を指で打ち上げる。回転しながら真つ直ぐ上へ登り、そして落ちてくるとまたキャッチする。

「あはっ、居場所を伝えるのにはいいと思っただけどね」

返事があつた。その声は見上げた木の方から聞こえた。そして同時に葉音が鳴り始めるのと影が一つ、静かに降りてきた。

暗色のコートライフルを纏つてこの森の色に溶け込んだ姿。隠密に向いた格好に反してその方に背負うのは小銃。しかも長距離狙撃に向いた銃身の長いタイプだ。

「だから行つただらう姉さん。合図なら俺がやるつて」

「ん」

更に置くから二人、同じロープを纏つて現れた。その二人を見て私は感心した。なぜなら姿を見せるまで私が気付いていなかったからだ。

「成長したわね、嬉しいわ」

「してなかったら情けなくなるよ」

「頑張った」

「もつと褒めて！」

素直に褒めると三者三様に答えてくれた。元気そうで何より、と言えたら良かったけど。

「あなた達が一番乗りよ。もつとも、私の対面した意味だよ」

「じゃあ極東の方は確実だと思ってる？」

「ええ。だからあなた達は来た。実力を見せる為に」

私は自分のコートに触れ、魔法で収納する。そしてその下の衣装が露わになる。

「……正装」

「ええ、十全にする機会が来るでしょうからね」

これまでコロコロと衣装を変えてたけどこれからの事を考えるとそうもやってられない。だから衣装——戦闘服バトルクロスはしっかりと整えた。純白の布地にかつてのファミリアを彷彿とさせる刺繍を施し、その上は動きやすさを考慮して革製の防具が所々にある。今までと比べて飾り気や目立つような所はない。でも鍛冶師のような職人や商人が見ればこれがどれだけの価値ある者なのか理解するでしょう。

十五年前とはいえ当時は到達階層トップだった「ゼウス・ファミリア」、「ヘラ・ファミリア」。その遺産は保管していたドロップアイテムも多く、それを受け継いだ私はそれらを使った最高レベルと言える。頑丈で軽いモンスターの皮や甲殻。魔力耐性の高い糸で編んだ布。

それらは私の力にも耐えられ、故に目立たず動いていた頃は纏わなかった。

「とは言え、あなた達も私が持ちうる全てを出すとはおもってないでしょ？」

「うん、私たちが旅をして3年。「ステイタス」も上がって経験も積んでいた。でも目指す場所まではまだ足りない」

「でも、俺たちはそこにだけ目を向けている訳じゃない。だから会いに来た」

「今の私たちが、どこまで迫れるか。それをここで証明します」

三人からそれぞれの思いを告げると同時にローブを脱いで放り投げた。そして露わになる顔と服装。でもそんな誰にでもある個性の特徴よりも、私と同じ特徴に目が行ってしまふのは仕方がないでほう。

「だから三人同時に相手して頂戴、

お母さん」

久々にそう呼ばれると胸の奥が暖かくなるというか、なんか笑ってしまう。でも今回は我慢しましょう。

魔法で収納した武器を二つ取り出し、両手でそれぞれしっかりと握る。

「遠慮はいらないから掛かってらっしゃい」

私が構えると三人もそれに習った。

「第一子長女、エルシユウ。お母さんの様に家族を守る力を求めて」

「第二子長男、アーシン。聞かせてくれた母さんの仲間のような強さを目指して」

「第三子次女、イベルグ。お姉とお兄の傍にいたいから」

「二「これまでの成長、見て（頂戴ッ！・貰う！・下さい）」三

「ええ、来なさい子供達」

やっぱり嬉しくて笑ってしまいそうだわ。

強敵への挑戦①

|| || || || || || || ||

セオロ密林

|| || || || || || || ||

竜人は力強い種族と言える。強固な鱗、空を飛ぶ翼と器用な尻尾。加えて体力もある。戦闘における万能性はすでにトップでしょう。そんな中で弱点と言えるのは閉所での戦闘だ。

他の種族と比べて多くの部位がある分、狭い場所ではそれが邪魔になる。行動・動きに枷が生まれ、それに障害物が加わればより重くのし掛かる。だからこそ、そんな場所での戦いは技量が求められる。

パアン！ パアン！

二発の銃声に足を止めて体を曲げる。その直後に傍の幹に二つの穴が空いた。すぐにその射線上の先——、ではなくその背後。

「ふっー」

「……んっ」

武器で背後の奇襲を防ぐ。声からしてイベルグ——。

「——つとー！」

なんて考えている内に武器と動きを上手く扱って私の正面に移動してきた。そして真っ直ぐに私を見つめ、遠慮なしの拳を放つ。

でもすぐに上体を曲げて避け、イベルグ同じように動いて距離を取る。でもこれはつまり——

「追い込みっ！」

「正解だよっ!!」

振り返れば木の陰に隠れていたアーシンを視認できた。そして、あの子の周囲を囲むように水の玉が出現していた。

「【水の章、豪雨の節。潤沢な雨粒、此度は貫く矢となり降り注げ。バーストレイン】っ——」

光る本を片手に詠唱を終えると周囲の水の弾が弾け、まさに雨粒までの小ささになった。ただし、詠唱通りならこれはちよつとマズい——なんて思っている間に雨粒は一斉に私に向かって降り注いだ。本当に詠唱通りなら貫通力は高い魔法。まさに針の壁。

「バニアンアックスっ!!」

先に「ミュニアストレジャー」から取り出した竜具の一つの能力をここで使った。

片手に握った片刃の斧。その名前を叫ぶと私が目に留めた木に届くまで柄が伸び、その幹に負けない程に刃が巨大化する。アンバランスな形状だったがこれは私が鍛えた竜具。特殊で最高の武器。斧の刃は派手な音を立てて木を一振りで伐採した。

伐採した木は狙い通りの方向へ傾き、私とアーシンの間へ割り込む。盾ではなく武器として。

「姜呂鞭!!」
きょうりよべん

もう片方で握っていた硬鞭を振ると距離のあつた木に衝撃音。まるで私が殴つたように伐採した木はアーシンに向かって飛ぶ。でもアーシンの魔法とぶつかり破壊される。木は粉碎され、逆に魔法は健在。ただし粉碎されただけで粉微塵になつたわけじゃなく、破片となつても私が叩き付けた衝撃は殺し切れていなかった。

「っ!? ったく!」

木の破片でも勢いづいていれば鋭利な刃になる。これを私からの反撃でさっきの魔法に対処した物と察して今の場所から跳ぶ。ただし移動したことで放つた魔法の軌道にズレが生じた。そのズレから隙間を見極め、十分に私でも躲せる空間を見付けた。

「だからごめんねエルシュウ!!」

その隙間に入る前に姜呂鞭を使い、僅かの気配から潜むエルシュウに衝撃を当てた。相手を認識し場所も把握していないと発動できない竜具だけど、音が響いた事で命中し

た事を確認した。その後、魔法の隙間に入り込む。その間に姜呂鞭を口に咥えてバニアンアックスを両手で握り直す。

「——フツ」

今からする事をイメージしてバニアンアックスを巨大化させる。さつきより柄が短いが刃は逆に数倍にも大きくなる。さつきよりも重量は増えたがなんとか振るうだけの力は私にはある。だから遠慮はしない。

「フホホホホホホホホオオオ——！！」

咥えているせいでなんとも間抜けた声が出るけどやっつてる事は大胆だった。巨大化した刃は木々を断ち、同時に吹き飛ばして更に遠くの木々を薙ぎ倒す。それを二回転した所でバニアンアックスを巨大化したまま上空に投げた。その間に咥えていた姜呂鞭を手に戻す。

「……よしっ」

そんな呟きと共に巨大化したバニアンアックスが背後に落下。と同時に火の攻撃から私を守ってくれた。

「もうっ、本当に周囲への警戒がハンパないね私たちのママはっ!!」

「姉さんに同意だ」

「暴れちゃ落としちゃうよお姉」

バニアンアックスの影から背後を覗けば三人が固まっていた。ただしイベルグがエルシユウを背負っているけど。私がエルシユウを吹っ飛ばした時にイベルグが回収したわけか。そしてアーシンと一緒に攻撃したって流れね。

それにしてもエルシユウが持っている銃は私でも初めて見るわね。

「また新しいのを作ったのねエルシユウ」

「ん？ まあね、旅をしていると色々あった方が対策の幅が広がるからね」

「それで爆弾を撃つ銃？」

「こそ、グレネードランチャー。地面に固定出来るタイプだったらもつとたくさん撃てただけぞ。あと爆弾じゃなくて擲弾。そのこの区別よろしくね」

「はいはい」

まったくこの子は。華がいた遺跡で下地があったとは言え、そこまで発展させるとは感心するわ。でも流石に広めることはしてないでしょうから目を瞑りましょう。

「さて、私がこうして視界を広げた。その瞬間にあなた達は火を使った。判断力とコンピネーションを見事と褒めるわ」

「ありがと♪」

「でもこれだけ拓けた場所が出来たって事は理解してるわね」

「もちろん」

「まったくくだ。母さんは何事にも巧い」

「ん」

私の言葉を理解して三人はより気を引き締めた。特にエルシユウはここで銃器を両手持ちの物から片手持ちの物に変えている。この先から火力を変えるのは愚策と見ての判断ね。

「【グニタヘイズより贈り物を】」

なら私も他の竜具を出現させる。とは言えこのセオ口密林を完全に消失させるような物は出していない。

「【この意志に従え。キネシス・ハンズ】」

更に魔法でそれら全てを浮かび上がらせ、私の意に従うようにする。

さて、第二ラウンドといきましょう。

全く、私たちのお母さんは本当にスゴいな。実力差があり、お互いに不利だった環境であっても私たちの成長を確かめていた。暗くて木々が密集して視界が悪かったのに私たちの位置を把握しているし、そう時間は経ってないのに私たちの連携の練度も理解してそのアドバンテージを取り払ってきたし。

「弟妹たち、今の状況はどう思う？」

「拓けて戦いやすい」

「そうだな。でも俺たちが不利だ。盾であり目隠しだった密林がなくなったからな」

二人の言う通りだ。特にアーシンの意見は私が考えていたことと一緒だ。

私たち竜人は地上戦より空中戦。より拓けた場所でこそ最大限の力を発揮できる。

なら同じ竜人だったら？ 答えは「どれだけの制空権を得られるか」。

密林の木々が伐採されたこの場所はまさにそれが可能になってる。でもお母さんは魔法でいくつの武器を宙に浮かして操る。誰よりも広く空間を支配する。

「お互いの位置を気にして、なんて感じだったらお母さんには届かないでしょうね」

「母さんの索敵能力を超えて先読みが出来ればな。それも俺たち三人が、だ」

「無理。ぜったい」

そして密林がなくなった事でお母さんはより私たちの位置を把握できる。数多くの武器を操りながら全ての武器の特性を活かせるだけ器用だ。まあアレだけの武器を扱える技量を器用って言葉ですまされるのにかけて感じただけど。

つまりお互いを意識してはお母さんに動きを先読みされるのは目に見えていた。だったらここからは信頼が鍵か。

「ならここから先に連携はナシ。自分の事だけ考えて行きましょう」

「怖いな。姉さんを気にしないで背中を見せると鉛玉が当たりそうだ」

「ヒドいわね。それともアーシンは自信がない?」

「……やってやるよ。ただし念は入れる。〔風の章。矢避けの節。殺意の眼、まなこ飛来するわざわい凶。しかしその視線は逸れ、接近は遠ざかる。エアリアル・ボール〕」

やると決めて、しかし慢心や強がりはいらない弟が魔術を唱えると弟と妹に薄緑色の魔力が輝き、それを包む。つて。

「私にはないの?」

「必要ないだろ」

「してあげないのお兄?」

「残念。時間切れ」

仲間はそれを問い詰めていたらそれを遮るようなお母さんの一言。でもすぐに理解してその場から離れた。その後私たちがいた場所に槍が何本も生えてきた。誰の仕業か一目でわかり、すぐにお母さんの方へ振り向く。すると満面の笑みで。

「話し合いもいいけど戦いの最中って忘れないでね」

「()もつともつ!」

「気を付ける」

でもその笑顔での不意打ちは怖かったから次は止めて欲しいかなあ!? イベルグ

だって無表情だけど冷や汗流してるよ！

「作戦！ 自分の戦い方で望む！ それ以外しようがないんだけどねえっ！

「了解っ！ お互い巻き込むなよっ！」

「痛くても我慢する」

「絶対に当てないからっ！」

「仲がいいわね、お母さん嬉しいわ」

よく言うよっ!! なんて悪態がつけたら良かったけどそんな余裕さえない。とにかく、こっからも全力で行かせて貰うからねっ!!

|||||

ダンジョン・第9階層

|||||

全身全霊で臨む、とは今のような場面を言うのでしょうか。

用事の出来たカレンに変わり、女神フレイヤの試練という物に対して私がベル達を追跡していたのは問題無い。

『そこで止まれ』

しかしこの声で私は追跡を断念せざるを得ない。

声は知っている。だから足を止めた。

カラクリの体に感覚はない。それでもこれが殺気を当てられる物なのだろう。

心臓なんて物はない。ただカレンにすら解析できなかった核が鼓動している気がした。

初めての感覚に興奮しているのか、それとも恐怖しているのか。『まさか』な事実を抱えながらも私は声の持ち主に対する返事をする事にした。

「はじめましてと、まずは挨拶します。改めまして、どうやって私に気付きました？」

挨拶と疑問。なんとなく初対面の相手には礼儀を示したい。そして疑問は当然だった。ベル達の追跡にはカレンの言いつけで第一級冒険者でも察知されないほど細心の注意を払っていた。それなのに気付くとは、頂点とは察知能力も頂点なのでしようか？

「勘だ。だが何かある程度の物だ。お前の気配は俺の知る限りでは一番に希薄だった」

「そうですか」

「が、隠れたままはやめろ」

「わかりました」

軽く脅されたので素直に姿を現す。そして改めて対峙する、**【猛者】**オツタルの風格は

二つ名に恥じぬ所か更なる上を表わす二つ名でも問題無いと思うほどだった。

「何者だ？」

「ラクジョウノ・華。わかりやすく身分を示すのでしたらカレン・デュラスの仲間、とお答えします」

「……カレンのか」

一瞬、空気が圧迫された。この前、カレンと一戦交えたと聞いていましたし、周囲に当たるといふ人物ではないと思つて正直に答えましたが結構な綱渡りだったようです。

「カレンが気に掛けていている事はあの方から聞いていた。それ故にあいつが介入するとおもつていたのでがな」

「申し訳ございません。カレンは別件でこちらには来れません」

「別件、か。あいつの事だ。あの方の思惑は察していただろう？」

「はい。しかしあちらはカレンでなければなりません。力不足かも知れませんが私がこちらに来たわけです。——なのでその先へ行かせて貰つてもよろしいですか？」

道を譲つて欲しい。そんな意図を示すために戦闘態勢は取らない。戦つて勝てる相手ではないので出来る限り警戒はさせない。

しかし彼が態度を変えることはなかった。

「ダメですか？」

「カレンの仲間だ。ならば身内の危機には介入するだろう」

「はい」

「なら通すわけにはいかん」

彼の答えは拒否。私を通さないために大剣をこちらに向けてきた。

諦めて去る、は論外。戦って押し通るには相手は強大すぎる。しかし論外で去ることがない以上は戦うしかない。

カレンから受け取った竜具、見た目は皮の手袋の〈テオペリオ〉を両手に嵌める。

「……フツ」

バンツ!!

拳と拳をぶつけると鈍器を叩き付けなければ鳴らない音が響いた。そして腕に損傷はない。自分に衝撃が来る可能性があつたが問題はないようだ。

「竜具か」

「はい。打撃特化、拳で接触した物は重い衝撃を与えます。恐らく、Lv. 7の貴方でも痛みは感じるでしょう」

「どの程度か知らないが、慢心が過ぎるな」

「そうですね。英雄たる傑物に挑む、作り物は滑稽と言えるでしょう」

「なに？」

私の言葉に疑問を抱いたが流石に今回は答える気にはなれなかった。並行思考をしながら戦える相手とは思いませんし、逆に手加減無用で来る可能性もありますからね。

さて、へテオペリオは拳による打撃特化の竜具。投げ技、組み技は排除。下半身は移動のみ。リーチ差を配慮し、ステップのタイミングに集中。最悪、両腕の破損は覚悟の上。

「押し通るため、相対をお願いします」

「……来い」

大剣を向けたまま誘うオツタル^頂へ一歩、力強く踏み込んで跳んだ。

強敵への挑戦②

ダンジョン・第9階層

足が動かない。いや動かす事が頭から抜けていた。

「ファイアボルト」ツ！ 「ファイアボルト」ツ!!」

動けない僕はただ闇雲に魔法を目の前——かつて僕を殺そうとしたミノタウロスに撃つ。魔法は命中してその姿が煙で見えなくなる。でも、まだいる。

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

出てきたと同時に咆哮。体が強張っても大剣を振るう姿を見ると両腕が勝手に動いた。でもミノタウロスの一振りには軽々と僕を吹き飛ばした。

「ガハッ!!」

全身に痛みが走った時、自分が壁に叩き付けられたのだと理解した。防具が剥がれ、倒れ込みそうな痛みを耐え、ミノタウロスの姿を探すところちに向かつて——見た瞬

間には攻撃が当たらないように体が動いた。間合いに入らないように距離を取っているけどまだ近い。ミノタウロスが踏み込めば余裕で届く距離感。そんな中で動きを見ては避け、躲しきれない攻撃はエイナさんがくれたプロテクターでなんとか流す。

これでなんとか――。

『キミは臆病だね』

「……………ッ！」

アイズさんに言われた事が頭をよぎった。それに気を取られて足が止まる。でもミノタウロスが近づいた瞬間に転げるように離れる。

「ハア……………ッ！　ハア……………ッ！」

窮地にいる事を思い出すと心臓が激しく鼓動する。死の恐怖を改めて突きつけられた事を実感する。

でも、そんな状況の中、僕はミノタウロスの姿を目に納めると、武器を抜いた。まるでさっきの言葉を否定しようと、あの時の様に。ただ今は、あの時よりもどうするのか鮮明だった。

ゴオオンッ!

出来の悪い鐘の音のようでした。【おうじゃ猛者】の大剣と私の拳が衝突した音としてはまず出ない。思わず先端を殴ったせいでしょうか？

まだお互いに一手しか打ち合わなかったにもかかわらず【猛者】は距離を取り、まだ震える大剣を抑え止めた。

「……貴様、見た目はヒューマンだが全く別物だな」

「勘がよろしいですね。何が切っ掛けでしょうか？」

「人の腕、肉と骨でさっきの音が鳴る物か」

「それもそうですね」

経験でしょうね、と思ったが口に出さず再び距離を詰める。しかし相手は油断していない。それでも隙のない中から最適の攻めを判断し、実行する。

「ヌウツッ!」

「フツ」

懐へ入ったつもりつもりでしたが【まう猛者】は巧みに躲すと、不安定な体勢にもかかわらず大剣を振るう。しかし冷静に、素早く判断をして拳を振るう。

拳と大剣が再び衝突する。先ほどとは違う場所で衝突したせいかな音は鳴らなかった。

いえ、まだ向こうは終わってない。

すぐに反対の拳を放つ。力の流れをずらす場所を的確に。

「ムウ……ッ！」

【猛者】の剣筋、攻勢の手に隙が出来た。とは言えこちらも決定打の両腕の拳は使った後であり、次に回すには体勢が整っていない。ただし、有効打にならない物はまだ使える。

足に力を込め、跳ぶ。威力を増すために回転しながら、その顔に蹴りを放つ。

「……ッ」

渾身の一撃であり、手応えも確かに感じ、【猛者】も僅かに動かした。しかしダメだ。ここからの攻勢を止めてすぐに距離を取る。その間、彼は何もせずに私の蹴りを受けた断面を撫でるように触っていた。

「……肉と骨の感触ではなく、どちらかと言えば鈍器の攻撃に近い。だがその足に武器を仕込んでる訳ではないな。——お前、人ではないな」

「……その通りです。自動人形オートマタ、はわかりづらいでしょう。自立して動く人形が私です」

誤魔化す事も出来たでしょうが、ここは正直に答えました。彼はカレンの正体を知っていますから逆に誤解されてしまう方が好ましくありませんから。

「……お前はカレンの作品か？」

「違います。カレンが極東の遺跡からの発掘し、修理した遺物が私です。そのカレンも私の全てを解析していませんので同じ物どころか、私の劣化品すら作れませんよ」

「そうか。しかしよく喋るな」

「誤解されたくはないので。特に、カレンの正体を知った貴方には」

「……なるほど。確かにカレンの仲間ならあいつと同じ存在と思うだろう」

「貴方こそ受け入れるのですね、カレンの正体を」

「神すらカレンの真偽を見抜けない事実。だが、そうなら納得がいくだけの話だ」

「そうですね」

寡黙な武人との印象でしたが、それを覆してよく話す方ですね。そんな相手を突破しなくてならないのは骨が――。

「だが人形と言うなら――」

そう言いながら大剣を構える姿を目撃する。悪寒、と言う物を感じたわけではありません。しかし経験からの予測から自動行動が作動する。

「――ここで砕ける」

それが聞こえたとき、視界は暗転した。

ム・ウォール」を解除する。もう叫びは聞こえなくなっていた。

「これで7つ……！」

それを確認して母さんとの距離を再確認しつつ、今の場所から離れる。立ち止まっていたら他の兇具の襲撃があるからだ。でもこれまで7つ、厄介と判断した物は魔盾と同じように封印した。時間制限はあるがそれでも近づきやすくなったし、準備時間もできた。今のうちに姉さん特製のマジックポーション飴玉（激甘）を口に入れる。

「で、俺が一番進んでいる訳か」

姉さんとイベルグは俺より苦戦している。姉さんは弾を数撃って真つ直ぐ進んでいるが速度は遅く、イベルグは剣で攻撃を捌いて俺より速く動いているが真つ直ぐじゃない。対照的、なのはいつものこと。

魔力は回復した。そして考える時間はもうない。

「よっ、と」

再び攻め始めた攻撃をかわす。とは言えこの猶予も母さんの余裕からだったよう。まだ届かない頂の一端が見えた気がした。

「土の章。鋼の節。操刃の頂。姿なき踊り手の舞踏、幾人が魅せる舞台。白く輝く刃の光は美しく、冷酷であれ。ブレイド・ダンサー！」

それでも挑む。周囲に多種多様の武器を魔法で出現される。剣・斧・槍。変わり種と

して鎌や戦輪が混ざる。魔術書と一緒に浮かぶが、操作を精密にするために魔術書は片手に持ち、片手は短槍を取る。

「——ッ！」

声も挙げず、ここからは姉さんと妹を信じて母さんに飛び込むだけに集中する。翼を強く羽ばたかせて急降下、まっすぐに進む。襲ってくる攻撃は出現した武器で捌く。母さんほどの技量はないから危うい軌道ではある。

でもそれを越えて母さんを、短槍の間合いが届く位置に来た。

「一番乗りね」

「ここからだよー」

母さんは落ち着いた様子だ。逆に俺は今以上に気が張っていて、判断力のこれまで以上に頭が回っていた。短槍だけじゃなく他の武器も母さんを囲むように配置させた。

「——ッ!!!」

一瞬、頭の中に一閃の光が見えた感覚だった。武器を配置させた直後は無心状態で、数秒は何をしたのか覚えてない。気付いたときには俺と母さんは移動し、その間には俺の武器がいくつかり残されていた。とりあえずこの距離の分だけ移動し、そして攻撃は外れたと言う事。

「まだまだあ!!」

届かない頂にそれでも手を伸ばそうして攻撃を続ける。短槍を振るい、武器を操るがまだ届かない。母さんは手が塞がっている所か両腕を組んでいる上に翼と尻尾が邪魔にならないように縮めている。それでも抵抗感があるのは「キネシス・ハンズ」の効果だけで回避と反らしを行ってるからだろう。手を使った方が精度と範囲が上がる事を知っていると手加減されると言われた気がする。

思わず頭に血が昇り——その一瞬で体勢を変えられた。母さんは俺の力を上手く流して誘導し、お互いが正面を向く状態に。その状態で母さんは、俺が嫌う顔を隠した仮面をコツン、と鳴らした。

「手加減してるなら貴方もよアーシン。気休め程度の、戦闘にはほとんど関係ない効果しかないこの仮面を被っている内は、ね」

——頭に昇っていた血が一気に沸騰した。

「^{Gnomme}土の章。地震の節。怒れ大地、驚天動地の叫び。隆起沈降を起こし事値に鉄槌の証明を刻め。これは我が怒り、我が叫び。世界に届く我が声なり。アース・クエイク!!」

怒りに思わず「ブレイド・ダンサー」を解除し、土属性で最大の範囲を持つ「アース・クエイク」を、比喻詠唱で圧縮した上で発動した。

ダンジョン・第9階層

——ズウン……！

『緊急事態と判断。停止状態から復帰します』

自分の意志ではない声が出ると停止していた意識が起動する。

「……状況、いえまずは私の状態ですね」

今がどこにいるか確認しようとしたが、停止する直前の記録をなんとか読み取れたのでまず自分の状態を確認する。

足の反応はある。両腕は、左腕が反応なく代わりに背中に圧迫感がある。自分は壁に背を預ける状態で座り込んでいたみたいで、少し動くとその間から折れて千切れた左腕があった。

「……そうでした」

左腕を見て自分が何をしたのか思いだした。

オツタルの攻撃を避けられないと見て右手で太刀筋を急所から外し、左手を壁に向けて衝突の威力を緩和したのだった。とは言え流石はオラリ才最強。壁に叩き付けられた衝撃で左腕は千切れ、私も強制停止に陥ったわけですが。この後は放置して下さったのは壊れたと判断されたのか、見逃されたのか。

……いえ、今は全壊されなかつた事に感謝しましょう。改めて胴体を見れば服越しに凹みがありますね。断ち斬るより叩き付けた方が来られると判断したのかも知れませんが。とにかく私はカレンを置いて逝くわけにいきませんから。

「動きは問題ないようですね。戦闘は難しいですが逃走は可能でしょう」

状態を確認し終えると立ち上がり、左腕も拾う。胴はともかく左腕はどっちも断面を隠しておかないと目立ちますね。とりあえずどちらも服の一部を破いて断面だけを隠す。これで一応、大怪我をした冒険者に見られるでしょう。それでは目的を果たしに行きましようか。そう――

「彼が英雄の一步を踏み出せるのか」

手も足も出ず、一方的な暴力を振るうミノタウロスに僕は倒れ伏し、意識も途切れて

しまいそうだった。その間際に見たのはあの人の背中。それが本物だと気付いた時には意識をなんとかつなぎ止め、

「頑張ったね」

ただその一言で何もかもを差し置いて、意識だけが鮮明になった。まるであの日、初めて出会ったときのように、

「今、助けるから」

あの時のようだったから、胸の奥が燃えるようで、頭が沸騰しそうだった。あの日からこの人に追いつくために走り続けた。強くなる度、この人もまた高みに登る事に絶望した。それでも強く願った。絶対に追いつくと。

だったら、ここで蹲るなっ！ こんな無様を晒すためにいたわけじゃない。遙か高みだと知っていて、遠い理想だと理解して、それでも諦めたくないと願ったんだっ！ 立ち上がれっ！ 立って、足掻けっ！

その想いねがいを体に灯った熱が応えてくれた。立ち上がるための力が湧き、痛みも遠くに行つたように消える。もちろんわかっている。これは意地でしかなくて、実際はこれまでのダメージが残っていることは。

——でも、

「……いかないんだ」

——ここで意地を見せないで、

「もう、アイズ・ヴァレンシユタインに助けられるわけには、いかないんだっ！」

——どうしてこの人に追いつくなんて出来る訳がないだろうっ！

無意識にアイズさんの肩を掴んで止めた手を離し、前に出る。第1級冒険者のアイズさんを前にしたミノタウロスは襲ってこなかったけど、僕が前に出たことで殺意が増した。正直、まだ怖い。でもそれ以上に僕はこのミノタウロスを、この強敵を倒したい。

——僕は、冒険者になる。

||
||
||
||
||
||

セオ口の密林

|| || || || || || || ||

「……まさかここまで拗らせいたなんてね」

確認と挑発でアーシンの仮面——その隠された素顔に触れてみたらご覧の通り。周囲が陥没と隆起を起こし、ここだけ大地震が起きたようだ。この規模なら地下のダンジョンに影響が出るかもね。予想外に怒らせたから飛び損ねてしまったけどなんか無事だけど、3人を見失っちゃった。見上げてあの子達はいないから私と同じ地上で回避したのね。

「……でも、この一瞬で竜具も見失っちゃったわね」

そしてこっちは一気に攻撃手段を失った。「キネシス・ハンズ」は対象を把握してないと効果がない。一度、認識してしまえばまた使えるけどこんな場所で探すのは骨が折れるし、向こうがそれを許してくれると思えないし。なら。

「【グニタヘイズより贈り物を】」

新しく竜具を取り出す。ただし今度は1つ。強力な奴を取り出した。

一見すれば槍だけど穂先は剣の様に長い。ただし刀身は黄金に輝き、柄はそれを際立たせる為に黒とかの暗い色で塗装している。効果は……、振り返るまでもないか。そし

てこの戦いに出そうと思うなんて、期待してるのかしら。

「少し本気で行くけど、これですぐに終わるなんて事はないわよね？」

「もちろん、頑張る」

尋ねた相手は背後の隆起した一本の上。人一人の広さに背丈ほどの長さを持つツヴァイヘンダーを担ぐ立つ、私の末の娘。

「お姉ちゃんとお兄ちゃんは？」

「お姉は魔力が枯渇寸前になったお兄の所に行ってる。私が足止め」

「ふうん。剣の腕はさつきまで見せてもらったけど、1人で出来るかしら？」

「わからない。難しいと思う。でも、困難だとわかってても挑む。その覚悟はもう出来る。だから立ち向かう」

「……相変わらずで、本当に立派になったわね」

表情豊かな子じゃないけど、3人で芯が一番しっかりしてるイベルグは変わらず、でも成長した一面を確かに見せた。

なら応えてあげるのが、母親でしょう。

強敵への挑戦③

|| || || || || || || ||

セオロの密林

|| || || || || || || ||

ムワア……

「?!?!?!

ゲホッ！ ゴホッ！」

「おはよう弟。これマジックポーション」

大地の隆起と陥没が起きたこの場所で不自然に平坦な地面を残したここ、魔法を発動した中心地で倒れていたアーシんに気付薬を嗅がせたあと、開封済みのマジックポーションを差し出す。精神疲労マインドダウンと気付薬の激臭で動きが遅くてもちやんと受け取って飲んでくれる。

「……ふはっ。スツキリする味で良かった」

「いきなり強力な奴をあげる訳ないでしょう。それよりもアーシン」

「……ごめん姉さん。母さんが相手でも顔を言われると抑えられなかった」
「はい受け入れます。ちゃんと妹にも謝るのよ」

「ああ。——そのイベルグが母さんを足止めしてるんだな？」

「そ。すぐに行く——と言いたいけどその前に即興で連携を決めるわよ」
「わかった」

返事は即答。この切り替えの速さにはありがたいけど、躊躇いが無いも取れる。これが悪い方向に向かわなきやいいけど。

なんて、これは後。急いで妹の加勢をしなきやね。

ダメかも知れない。

気合い入れて1人でお母さんに向かったけどやっぱり強い。身体、技術、武器。それらが私の上。幸いなのが私の実力を出して見るための戦い方している事。その境目が私の全力を出し続ける事がギリギリのライン。これ、追い詰められかも。ううん、岩陰に隠れてる時点で追い詰められてる。

「ん〜」

母さんは気楽そうだ。あの槍もきつとスゴい奴。多分、あの人の為に作った武器の筈

だ。私のツヴァイヘンダー・マルミアは頑丈さに定評があるけど打ち合う自信がない。壊れる自信があるから防御は避けて、でもやっぱり無理だから隠れた。

「でもいいで」

それでも前へ。辛くても一步を。遠くても食らいつく。お母さんとの時間が限られてるから自慢の子供になろうと頑張った。その為にお姉とお兄と旅してきた。そして色々な物を得てきた。まだ足りないモノはある。でも今が多分、成果を見せる最後のチャンスかもしれない。

「やるって決めて来た」

お姉やお兄がいれば「いまいち気迫がない」と返される声で隠れるのを止めた。岩陰から飛び出したから。

「おっ」

私に気付いたお母さんは槍を構え直す。でも両手でも扱う槍だろうに、片手しか使わってない。まあ両手で使ってるなら、私は絶対勝てないけど。

「改めて」

「ええ、来なさい」

真つ向勝負。一番分が悪くて一番の最善。

お互いの間合い。両手剣と槍は、槍が広い。その間合い内に一步、入り込んだと同時

に身を屈める。すると頭上に冷や汗が流れるような風を感じた。正体はわかりきっているから私は攻撃に転じる。

身を屈めてより振り回しが難しくなったマルミアの剣先を地面に突き刺して慣性の法則？で立ち上がる。その勢いのまま、マルミアを軸に回転して蹴りを放つ。

「おっと」

お母さんはそれを器用に、不安定な体勢になつて躲す。その体勢は槍を振った腕が体の内にあり、そしてさっきの私と逆で仰け反る体勢だった。

ほとんど感覚頼りだった。軸にしたマルミアを固定し、狙い曖昧のままだけとこの距離なら当たると蹴りを落とす。

当たった感触は、なんだかバネの様な感触だった。目を凝らすと私の足はお母さんの槍の石突辺りで受け止められていた。お母さんは仰け反った体勢で、槍を持った手も片手のままで。

「うそん」

「マジよん」

思わず本音が漏れるとお母さんが笑顔と一緒に返事をしてくれた。と思つたら蹴りを落とした足が絡まり、関節が曲がらない方向に引っ張られて思わず剣から手を離れた。

「武器は離しても体勢は崩しちやダメよ。出ないと、——命を危機にさらす」

教えるような声が鋭く冷たい物になると体が真上に浮く。私が空を飛ぶ竜人だけどころまで体勢が不格好だとすぐに整えられない。それでもお母さんの方に顔を向けると、良い笑顔で槍を構えて――。

「下っ!!」

お姉の声が聞こえた。だから強引にも下へ移動……。今の体勢からの下で良かったよね？

「天然素直でよろしい!!」

「寧ろ心配だけどな!!」

お兄の声と一緒に聞こえたと同時にお母さんの周りから白い煙が立ち上がり、手放したマルミアが飛んでくる。きつと白い煙はお姉で剣はお兄の仕業だ。

「そしてソコは重くなるっ! これで意味はわかるなイベルグ!!」

重くなる。お兄が重くなるって言っているから、うん、わかった。飛んでくる剣を、逆さまで受け取る。お姉特性の籠手は防刃仕様で問題なし。

「【地の章。重力の節。回りに引く力、回りに斥ける力。この地の法則を我が意のままに狂わせ、見えぬ触れぬ力をここに閉めさん。グラヴィティ・コア】!!」

お兄の魔法が私とお母さんを覆う。体に数倍の重さを感じると力の限り柄をお母さ

私に気付いて何人かはこつちを見ましたが、この指摘でベル・クラネルの戦いに戻す。しかし、放置する訳でもないようですね。

「どうしてここに？ カレンは一緒？」

「残念ですがカレンは別件でいません。故にこちらは私に任せて下さいましたが、その件であるオツタルと遭遇しましてね。先ほどまで眠ってました」

「……戦ったの？」

「話でしたら後がよろしいかと。聞けば目の前の戦いに集中できませんでしょうから」

「……………わかった」

目の前の戦いに注目しながらの会話。しかし目の前の戦いに比べれば細やかにも思えた。それだけの存在感がある。それだけの熱がある。この体でもそう感じる。

ああ、懐かしいことを思い出しました。

『カレン、貴女は冒険者をどのような存在と思っていますか？』

かつて私はカレンにそう問いました。まだ起動したばかりの私には情報が必要でした。そんな記録と、目の前の戦いは一致するものではありません。しかし『冒険者』が共通にあります。

そしてカレンはあの問いにこう答えました。

『私の意見だけど、『持たざる者』かしらね』

聞いた時は初めて『首を傾げる』という動作の思考を得たと改めて思います。そんな私の、私すら理解出来なかった思考を察してかカレンはその理由を語ってくれました。

冒険者の街、オラリオには全てがある。富も名声も強さも、手に入らないものなんてない夢が詰まった場所だと。故にその場所に集まる者たちは、冒険者になる者たちはオラリオでなければ得られない物を求めてくる。言い方を変えれば、冒険者にならなければ手に入らない物を求めている、と。

——弱さに絶望して強さを求める者。アイズ・ヴァレンシユタインとベート・ローガを見た。

——輝かん光を見てここにきた者。ヒリュテ姉妹、ティオネとティオナを見た。

——夢を見て実現させようとする者。リヴェリア・リヨス・アールヴと、フィン・ディナムを見た。

——その全てを抱く者。ベル・クラネルを見た。

彼は冒険者となり、彼女らは冒険者。かつてのカレンの肩書きであり、今もなお彼女

の根底にある存在。彼女が選んだ、彼女の偶像。

「……本当に、素晴らしい光景ですね」

もし彼がこの試練を越えたなら、私も始めましょう。さあ、ミノタウロスは渾身の一撃を放つ体勢へ。ベルも迎え撃つために大剣を構えます。ああ、ここまでの成長を見せる彼は本当に輝いています。

さてカレン、貴女の方は子供達の成長を実感していますか？

|| || || || || || || ||

セオロの密林

|| || || || || || || ||

「——っはは」

ピシリ、と。

三人が即興で組み合わせたこの一撃は体に確かな重さを与えた。地に着けた両足は沈み、体は痺れ、骨が僅かに軋んだ。とは言え、私だから五体が残っている訳だけど。Lv. 3までだったら確実に両足の骨が折れてたでしょう。

「……お母さん、嬉しい？」

「ええ、あなた達の成長が嬉しくてね」

真上からよく知るイベルグの声に返事をした。それにしてもこっちは数倍の重さを感じてるのにこの子は平気だ。なるほど、ここまで把握したからこの魔法か。

「じゃ、行くよ」

そう言つてイベルグは刃を握つたまま振り上げ、もう一撃振り落とした。

「んんっ」

流石に一撃目と違い、落下した分がない事でさつきより弱かった。それでも重い一撃で両足は再び沈む。

「十分！」

「下がれイベルグ！」

エルシユウとアーシンの声が聞こえる。たださつきとは違い、別々の場所だ。すぐ視界に捉えようとして見付け、気付く。視界の死角じゃなかったけど、対応できる範囲外に二人がいた事を。

【空の章。歪曲の節。進めば右往左往に。進めば上昇下降到。進行法則は乱れ、曲がり曲がる道筋に迷え。ストレイ・プリズン】！

「毎分1200発！ MG42の二丁お待ち!!」

アーシンの魔法詠唱の直後、エルシユウの銃声が鳴り響く。魔法らしき囲いが私を捕

まえ、連射する銃弾はそれをすり抜けて入ってくる。でも銃が重いのか足場は固定している。だから何かあると考える。とは言え、本気で相手にする以上はこの槍以外は使わない。普通の話だけど、武器一つでシンプルな機能の方が戦術は広がる。私もそっちの方が思考がスツキリするし。

魔法の壁をすり抜けた銃弾は変わった様子はなく、でもすぐに射線上から体を離す。エルシユウは外れたにも関わらず撃ち続けながら射線を変えていく。無関係の方向へ。

「おっ」

思わずその射線上を目で追い、銃弾が頬を擦れていった。さっきの射線じゃない。でもこの一発が私の警戒心が上がり、そしてそれらが四方八方から向かって放たれている事を察した。

「——っ！」

銃弾の速度は矢より速い上に、弓以上の連射をする。それが四方八方から放たれるのは恐らくこの魔法の効果。

ここまでの分析を回避と防御で出来た。その間に擦った傷と、命中したのが数発。ステイタスの高さで竜人の種族特性の鱗でいくつかの命中は外れたからまだ窮地には陥っていない。とは言え流石にこのままじゃ私でも危険だ。

怪我を最小限に受けつつ対処を瞬時に判断する。その材料はアーシンの魔法。いま

だ銃を撃ち続けるエルシユウ。その二人の意識の外にイベルグが控えている。逃げたとしても二手、三手は間違ひなく用意してる。なら、やる事は一つ。

「せい……っ、やあっ!!」

その場か動かず、槍を地面に叩き付けた。

——ドオオオンツ!!

槍で叩いたとは思えない程の音と衝撃が地面に広がる。その震動が魔法を砕き、風圧が銃弾を押しつける。そして——。

「空の章。縛の節。連鎖の項。ここに我の行いを打ち破りし者あり。しかして逃がすな。逃亡者を許すな。残骸よ、今再び彼のを捕えよ。アン・ブレイク・チェイン!!」
アーシンの魔法と同時に、イベルグの大剣が私の足下に突き刺さった。次の判断を考え、実行するよりも先に、読みを外した事を理解した。

砕いた魔法が再構築されて鎖のようになり、私と武器、そしてイベルグの大剣を捕える。鎖はパズルのように複雑に絡み合い、力業では時間は掛かる。いや、大剣をも捕えている時点でそれは無理だ。解くには魔法が解除されるか、まさにパズルのように解くか。

強敵との決着

セオロの密林

＝
＝
＝
＝
＝
＝

爆破と同時に昇る火柱と広がる衝撃波。イベルグに引つ張られて離れてすぐに発動させた魔法の防御壁も震え破られそうな威力だった。

「……何を使つたんだよ姉さん」

「ナパーム弾を狭域特化にしたヤツ。森を広く焼く威力を集中したからかなり熱いわよ」

「どのくらい？」

「計つた訳じゃないけど色が黄色寄りだし、瞬間上昇温度は間違いなく4000度以上になるはずよ。わかりやすく言えばその温度ならほぼ全ての無機物は解けるわ」

「死ぬわ。いや母さんならまだ大丈夫か？」

「私も大丈夫だと思っ」

「だよね」

俺が魔法を使う以上、2人を庇う体勢でありかなり密着しているが、姉はブカブカの服に色々な武器を隠して妹は鎧だからどっちも硬い。まあ姉妹にドキドキする年頃でもないから問題ない。

なんて、余裕に考えられたのは不安からの現実逃避だったかもしれない。火柱が上がったのはホンの数秒だが威力が威力だけに炎の大魔法をぶつけたようにこの場は荒れていた。その中心には雷が発生する黒煙が昇って母さんの姿は見えない。

「で、これで終わると思うか？」

「この戦いの焦点は私たちの成長、つまりどんな戦いをするか。倒す必要がないから私たちは切り札を使わないでいる」

「そしてお母さんも察している」

「正解。良い子よイベルグ」

「とは言え、母さんがここで終わってくれるか。『アン・ブレイク・チェイン』は直前の魔法を利用して寄り強靱な拘束をかける魔法だが破壊された時の察知は出来ない。状況がわからないのは——」

最後まで言葉は言えず、遮るように俺たちのすぐ傍に何か飛んできた。舞い上がった砂と土が消えるとそれはイベルグの両手剣・マルミルだった。と言うか投げたのかこれ。

「弟、防御はもういいわ」

「了解。イベルグ、剣は回収だ」

「ん」

ボロボロの防御壁を消滅させ、いくつかの予測を頭に魔術書を握る。姉さんは銃を手に取り、イベルグはマルミルを拾う。

俺たち3人の視線は黒煙の発生源——爆発の中心にいた母さんに向けてる。姿は見えすプレッシャーも感じない。逆にそれが怖く冷や汗が流れているが、引く気もないから気持ちで堪える。

風と雷の音がやけに鮮明に聞こえる。が、音よりも目に映る煙に集中する。長い時間見続けているような感覚で、まだかまだかと焦りが生まれた頃に黒煙の一方所が不自然に膨らんだ。

その中から、煤だけを纏った母さんが出てきた。

「……うつそ、燃えてないよ」

姉さんの驚愕が聞こえる。確かに大半の物質を溶かす高温の炎を受けたはずなのに火傷どころか服も焦げていない。煤は恐らく舞い上がった黒煙から付着したヤツだな。もしあの炎を回避したなら俺たちは母さんの力を使わせた。それが確かなら俺たちは

この度で成長を示せた事になる。問題は続けるか、否か。

母さんが俺たちの間合いに入る。3人それぞれの間合いが重なる場所だ。見えない手の魔法を使う母さんには視界の入る場所は間合いだけだな。

「……………」

「———」

母さんは沈黙しているが俺たちは息を飲むような緊張感があった。そして——。

「お見事♪」

その一言と共に槍を地面に突き刺して手を離す母さん。しばらくの静寂の後、それが戦いの終わりであることを理解し、

「……………はあ~~~~~」

3人一緒に気が抜けた。

うです。

「——おっと」

すぐに立て直して転倒だけは回避する。しかしどうやら足にもダメージが……あつ。

「あ、足い!!」

「いえ、大丈夫です。とは言えこれでは運べませんね」

「なぜそんなに落ち着いている。早く傷、を……」

テイオナ・ヒュリテが驚くのを制しましたがリヴェリア・リヨス・アールヴがかけ寄つて、私の損傷箇所を見て固まった。

「ああ、すみません。治療魔法でしたら必要ありません。見ての通り、使う必要のない存在なもので」

「どうしたんだリヴェリア？ 何を驚いている？」

私の説明と同時にフィン・ディナムが彼女に声を掛ける。私も彼女の視線の先を確認すると損傷箇所を凝視していますね。

「……なぜ血が流れていない。これは間違いなく足が外れかかっている筈なのに」

そういう事ですか。口で伝えてもいいですが、信じられるかは不安ですね。

「リヴェリア・リヨス・アールヴさんでしたね。理由なら私の顔をよく見て下さい」

「顔？」

「はい。全ての部分をよく、見て下さい」

そう言つて私の顔を見せる。リヴェリア・リヨス・アールヴは難しい顔で凝視し、そして気付いて私の顔を掴む。

「その両目、ガラスか宝石……。いや待て、この顔、作り物か!」

「顔だけじゃなく、全身もですよ。私は自律で動く人形ですから」

「人、形」

「ああ、言つておきますがカレンが私を作った訳ではありません。遺跡で眠っていた私をカレンが回収、そして目覚めさせた」

驚愕に顔を歪めるリヴェリア・リヨス・アールヴに事実を伝え、取れた片腕を差し出す。一目でギョツとし、恐る恐る受け取った彼女はその断面図、鉄で出来た内部を覗く。好奇心でティオナ・ヒュリテが寄つてきて覗き、「おお……」と感嘆を漏らしていますね。

「……本当なのだな」

「はい」

「何これ、めっちゃわからない」

「歯車などの部品ですよ。筋肉の代わりになります」

そう言つて折れた足で立とうとしますが完全に内部の連結が外れているようで不可能だった。

「……すみません。恥を忍んで前言を撤回します。私も地上へ送って下さいませんか？」

「じゃあ私がおんぶするよ」

「お願いします。あ、腕は返していただいても」

「ああ」

私のお願いにテイオナ・ヒュリテが即答とも言える速さで応えて貰い、さっさと私を背負う。その後にはリヴェリア・リヨス・アールヴから腕を返して貰い、再び隠す。

「おっ、ウルガより軽いけど重い方だね」

「すみません、金属の塊ですから。リヴェリアさんもご心配をかけて申し訳ありません」
「気にするな。だかこれなら彼らは私たちが運ぶしかないな」

「ベルは私が運ぶ」

「わかったアイズ。小人族バルウムのキミも現界だろう。私が運んであげよう」

「えっ、ですが……」

「遠慮はしなくていい。どの道、アイズとテイオナだけは心配だからな」

遠慮と言っていますが有無言わせる気がない気配がしてますよ。ほら、リリルカ・アーデが若干断りづらそうにしますよ。

「……わかりました。お願いします」

しかしベル・クラネルの状態を見て自分が地上へ送ることは難しいと考えたようである。直に領いた。その体の小ささから彼女は私と一緒に背負われる形になった。

「よし。アイズ、ティオナ。急いで地上に戻るぞ。フィン達は皆と合流して事情を伝えてくれ」

「わかった。頼んだリヴェリア」

意見のやり取りは最低限に。信頼の現れですね。しかし、そうですね。

「フィン・ダイナムさん」

声をかけて皆さんの足が止まる。

「なんだい？」

「このような機会が二度あるかわからないので今のうちに貴方へ伝えておきます。最善・最良を選ぶなら、欲しい物はなりふり構わず求めてください」

「どういう意味だいそれは？」

「お節介ですよ。間違いなくためになる言葉です。貴方のことですから忘れはしないでしようしね」

「まあね。カレンからそう聞いたのかい？」

「『待ち合わせに遅れて文句を言う」と私が同じような事を言った時の事だからかってくるのよ。覚えの良さをこんな時に披露するなつてのよ』、と言っていました」

昔の愚痴を伝えると彼は顔を覆ってそっぽを向き、あとテイオネ・ヒュリテが殺気立ちました。答える言葉を間違えましたか？

|| || || || || || || ||

セオロの密林

|| || || || || || || ||

ん？　なんか面白いことが起きた気がしたわね。

「どうしたのお母さん」

「いやね、なんか女の勘がビビツとしてね」

「ああ、うん。なるほど」

「何がなるほどなのか言つてご覧なさいイベルグ」

「じゃあまず二人を離しなよ母さん」

アーシンが呆れたような声で私と、両脇で頭を撫でてあげている娘たちにそう言ってきた。と言うか貴方も抱きしめたいんだけど。

「羨ましい？」

「見えて恥ずかしいんだよ姉さん」

「お兄、思春期?」

「違う」

「あははは」

相変わらず仲がいい事。実力については心配してなかったけど自分の信念をそれぞれに持つてるから変に拗れてないか不安だった。でもこの様子なら何も問題はなかったようね。

「で、お母さんの服が燃えなかった理由はなんなの?」

「あら、気になる?」

「うん」

「あれだけの爆発と燃焼で煤一つないんだ。素材以上にそれはもうマジックアイテムの類だろ」

「もうっ、水を差すんじゃないわよマイブラザー」

「別にいいわよ。でも説明するなら離れて見せたほうがいいわね」

抱きしめる腕を開放し、二人も聞くために距離を取る。そして三人の視線が私の服に集まったところで説明をした。

「この服に名前はないわ。ただ私の未来から必要だって作ったもの。ファミリアの遺産にあつた素材を使い、持てる技術と見つけた知識の粹を集めて制作した、私専用。どん

なものか簡単に言っていると、私の魔力で出来た服のようなものよ」

「魔法で作ったの？」

「違うわよ。多分だけど自己修復にお母さんの魔力を使うのよ。モンスターにも自己再生能力を持ったのがあるしね」

「正解。でも素材が少なかったから失敗はあまり出来なかったわ。念には念を重ねて検証はやったし、何とか足りた形だったわ」

「母さん、その生地は余ってる？」

「残ってないわよ。あとさっきも言ったように私専用だからこの服から切れ端をとつても使えないわよ」

「じゃあレシピ頂戴♪」

「それも無いわよ。使った技術は私だからこそ出来たことだし、流用できる部分はないこともないけど問題しかないから」

「どんな問題？」

「人類の歴史が、しばらく赤く染まるかしらね」

私の経験と、失われた遺産はこの時代にはまだ早いし大きすぎる。いずれ至るとしても今じゃない。例外は華のいた所だけ。それ以外はこの世界の人類と歴史がたどり着く財産だ。

「……そういえば一つ気になることがある」

さっきの話で何を思ったのか、それとも別のことに思い立ったのかイベルグが話題を変えてきた。

「なに？」

「ここ、派手に壊しちゃったけど大丈夫？」

「ああ、そのこと。大丈夫じゃないわよ」

「「えっ」」

「ここオラリオの領地って訳じゃないけど近隣だからその目は届きやすい。一応、ここ
で採れる物だつてあるしね。植物は仕方がなかったけど動物はエルシユウかアーシン
が避けてくれたから見える範囲にその被害はなし。あるのは大規模な戦闘の跡。」

「今のオラリオってなんかイツイルス闇派閥の陰謀が潜んでいるみたいだね。こっそり警戒してる
状態だから一層ね」

「うわつ、情報収集が甘かったかあ……」

「いや、この情報を掴めたならオラリオの防諜が心配になるわ」

「そこは別にいいのよ。つまりはこの騒ぎがその陰謀の一部って思われちゃう可能性が
高いわ」

「高いわよつて、母さんなんでそう余裕なの」

「後の祭りだしね。『ガネーシャ・ファミリア』とは面識があるから事情を伝えやすいってのも——」

「ねー、母さん。ここの植物って成長が早いのか？」

説明の途中でイベルグの無邪気な質問が、あまりにも意味不明だったから理解が遅れた。その中でアーシンが真つ先にイベルグの視線の先にあるものを確認し、そのまま周囲を見渡す。

「……マズいっ！ 全員すぐ飛べ!!」

その言葉に迷うことなく翼を広げて真上へ飛んだ。声を上げたアーシンを含め三人も同時に飛んでいる。そして私たちが見ているのは真下の地面。緑芽吹く光景が、植物が急激な速度で成長する現象だった。

この超常現象、私には心当たりがあった。

「アーシン、魔法の気配は？」

「ビシビシあるよ。というか今の今まで気づかなかった。ここ一帯に結界魔法が張つてある」

そう言つて羽音で消えるほどの声で詠唱し、魔力で出来た球をいくつか出現させる。それを四方に放つと、何も無いはずの空で壁のようなものに衝突して霧散した。

「……音が聞こえなかったわ」

「防音付きの魔法壁だったわけだ。これなら外に戦闘音は聞こえない。おそらく視覚を誤魔化す幻惑もあるかもしれない」

「そして、真下は元通りって訳ね」

エルシユウとアーシンの分析を聞きながら私は成長しきった自然を見届けた。あの派手な戦闘がなかったかのように元通り、セオロの密林が広がっていた。奇跡の実現。神の御業とも言える光景を実現できる存在を、私は知っている。

「……オラリオ到着はあなた達だけじゃなくてあの人もだったようね」
見つめる先のオラリオ。きつとのぞき見してるあの人を幻視した。

|| || || || || || || ||

オラリオ・城壁

|| || || || || || || ||

「そつちじゃないんだけどなあ」

木々の再生を始めたことで俺の存在は気づいてもらったはいいが、遠すぎて視線がズレてるんだよなあ。

それにしてもあの人形ちゃんを見張りしてるところは可愛かったなあ。三姉兄妹きょうだいた

ちはその前に来てたけど姫さんに気づかれるだろうから見てないだろうし。しっかしあいつらも成長したねえ。というか旅の中何があったのか、明らかにヤバいモンの気配があるぞ。

……んまあいいか、別に。

「さて。俺は時と待ち人が車でひっそり隠れるとするか。確かダイダロス通りつてのがあつたな。兄さんの嫁さんに挨拶をしたいけど、行ったら言ったで大騒ぎになるしなあ」

真後ろに置かれた石棺。苔やら何やらで汚れていた外観はすっかり綺麗にしてピカピカだが、やっぱ数百年の年季による風化は解消できなかった。しかしなあ、やっぱ悔しいよなあ。

「この棺が閉じる時、俺は見てるしかなかったよなあ。今でも悔しいよなあ」

あの日は忘れない。兄さんと出会って、過去すべてに決別と報復をしたあの後の光景。無力だった。姐さんとおつさんを前に何もできなかった。

「悔しい、悔しかったなあ。——だから必ず解放してみせるよ、兄さん」

そしてその時はきつと、もうすぐだ。

くくお・ま・けく

「ところで子供たち、オラリオに入るときはどうしたの？」

「ああ、俺が魔術で外見を誤魔化した」

「そう、私も魔道具を使って誤魔化したわ」

「だよね」

「目立つ私たち」